連載専門誌

対人援助学マガジン



vol. 16 No. 4

第64号

March 2026

対人援助学会

No.64　M O K U J I

目次		2 - 3
ハチドリの器	見野　大介	4 4
執筆者@短信	執筆者全員	5 - 16
付け加えることができる価値は何か？（10）	千葉　晃央	17 - 20
臨床社会学の方法（52）	中村　正	21 - 31
アソブロックの実践から考える会社の倫理学(1)	団　遊	32 - 34
カウンセリングのお作法（46）	中島　弘美	35 - 37
晩年DAN通信	団　士郎	38 - 54
幼稚園の現場から（64）	鶴谷　主一	55 - 58
福祉系対人援助職養成の現場から（64）	西川　友理	59 - 66
ああ、相談業務（24）	河岸　由里子	67 - 70
帰ってきた対人援助学の縦横無尽（4）	サトウタツヤ	71 - 76
路上生活者の個人史（18）	竹中　尚文	77 - 78
スポーツおじいさんになりたい！（8）	國友　万裕	79 - 87
役場の対人援助論（54）	岡崎　正明	88 - 93
臨床のきれはし（32）	浅田　英輔	94 - 95
発達検査と対人援助学（23）	大谷　多加志	96 - 98
講演会＆ライブな日々（46）	古川　秀明	99 - 101
療育手帳の向こう側（6）	坂口　伊都	102 - 106
周辺からの記憶－東日本大震災家族応援プロジェクト－（50）	村本　邦子	107 - 133
精神科医の思うこと（40）	松村　奈奈子	134 - 136
馬渡の眼(19)	馬渡　徳子	137
如来の祭り(1)	柳　たかを	138 - 146
心理コーディネーターになるために（21）	山下　桂永子	147 - 150
先人の知恵から（51）	河岸　由里子	151 - 157
うたとかたりの対人援助学（35）	鵜野　祐介	158 - 161
ああ結婚（37）	黒田　長宏	162
PBLの風と土（36）	山口　洋典	163 - 168
接骨院に心理学を入れてみた（35）	寺田　弘志	169 - 179
現代社会を『関係性』という観点から考える（36）	三浦　恵子	180 - 185
保育と社会福祉を漫画で学ぶ（30）	迫　共	186 - 188
「余地」―相談業務を楽しむ方法―（33）	杉江　太朗	189 - 191
統合失調症を患う母とともに生きる子ども（14）	松岡　園子	192 - 193
私の頭の中のまだエンピツ（6）	川畑　隆	194 - 198

応援、母ちゃん（24）	玉村　文	199 - 204
HITOKOMART（23）	篠原ユキオ	205 - 208
川下の風景（21）	米津　達也	209 - 210
こころ日記『ぼちぼち』	脇野　千恵	211 - 212
一語一絵（20）	畑中　美穂	213 - 215
対人援助をリブートするこの一冊（35）	渡辺　修宏	216 - 222
対人援助をリブートするこの一冊（36）	二階堂　哲	223 - 224
対人援助をリブートするこの一冊（37）	小幡　知史	225 - 226
新・島根の中山間地からWork as Life（7）	野中　浩一	227 - 234
理事長のひとりごと（4）	鳴海　明敏	235 - 237
現象学としての書道(14)	櫻井　育子	238 - 239
コソダテノシンリ（12）	中谷　陽輔	240 - 249
社会科の授業を対人援助学の視点から（12）	内田　一樹	250 - 260
ある看護科教員のアタマの中（11）	山岸　若菜	261 - 264
人生は対応のバリエーション（12）	宮井　研治	265 - 269
けふばあちゃんからの手紙（7）	乾　京子	270 - 273
心理臨床における多重関係を考える(6)	本林　友梨	274 - 279
森で出会えば（5）	田中　千晶	280 - 281
地球と宇宙の文化心理学（4）	土元　哲平	282 - 285
新連載　思考の補助線(1)	八木　明恵	286 - 288
編集後記	編集長＆編集員	289 - 290



ハチドリの器　47

見野 大介

Mino Daisuke

見野大介 展
銭屋ベース ソソラソウ（大阪）





第 64 号

執筆者@短信

八木　明恵　新連載

私が初めて KISWEC に足を運んだのは 1999 年、社会福祉士養成課程の学生だった頃。家族療法のワークショップで団先生の実践に触れました。あれから四半世紀。滋賀で約 20 年、福祉現場と子育てにまみれる日々を過ごしてきました。

数年前、団先生の Facebook をきっかけにぽむ漫画展へ通うようになり、そこで将来の迷いをぽつぽつと相談するようになりました。定年を待つのか、それとも今動くのか。正解がわからないまま揺れていた時期でした。背中を強く押されたというより、さりげなく「やってみたら」と言っていただいた感覚が残っています。

2025 年 3 月に退職し、1 年。屋号を掲げ、ようやく歩き始めました。何ができるのかはまだ手探りです。ただ、自分の人生の舵を自分で握っている感覚だけは確かです。かつて憧れていた本誌で執筆の機会をいただき、心より感謝しています。

思考の補助線
P286～

田中　千晶

令和 8 年、ずっとやってみたいと思っていたかぎ針編みに手を出しました。何かを始めると没頭してしまうタイプなので、とりあえず、「修論を提出してから！」と決めていたのです。

最近は SNS で編み図だけでなく編み方動画もあるので、やってみたい！これならできそう！と見ているだけでワクワク。しかし、自分は左利き…！世に出ている動画はほとんど右利き用…。初手から詰みました。

しかし、さすが現代。検索すれば左利きの編み方動画や左利き用の教本が出てくる出てくる。夜な夜な動画を見ながら毛糸と格闘しております。

森で出会えば･･･
P２８０～

本林　友梨

対人援助マガジンの執筆がいつもぎりぎりにならないと取り掛かることができず･･･そのたびに「次は早めにやろう！」と強く思うのに実行できず。次回こそは早めにやりたい･･･！！

心理臨床における多重関係を考える
P274～

土元　哲平

地球の絵を描き始めました。絵は下手なのですが、作品のコンセプトや詩と並置される表現として完成度を上げていければと思いながら、色々な芸術家に学びつつ、子どもと一緒に描いています。宇宙×芸術についてもこれから少しずつ書いていければと思っています。

地球と宇宙の文化心理学
P282～

馬渡　徳子

石川県の今年の冬は、一月中旬から二か月間、近年にない豪雪となりました。被災地である奥能登地区も三度の 30～60 センチの積雪となりました。更地が増えたので日頃動かしている車の下に、居場所を失っていった猫ちゃんが隠れていることもあり、発車するときには留意が必要だそうです。県内全域では、例年になく交通事故も多発しました。我が町内は一日で 60 センチを超える積雪のために、公助としての除雪車は間に合わず、町会で契約した除雪車も一日中走ってくださいましたが、夕方になってもなかなか順番が来ません。高齢化が進んでいる班の除雪作業は、私たち青壮年世代が進めることとなりました。

こんな嬉しいことがありました。連れ合いが当直明けで不在の日曜日、早朝から除雪作業をしていると、直ぐ近所の中学生になった子どもたちが、「おばちゃん、〇〇さんは去年家族が亡くなられて一人でおいでるし、▽▽さんはおじちゃんが病気みたいで車を運転していないみたい。このあたりの五軒分、一緒に雪かき手伝わせてね。」と声をかけてくれました。

「よく、ご近所のこと知ってるね。」

「うん。単身赴任している父が防災士やろ。ほやし、雪のニュースを観て、『馬渡さんとご近所の雪かきをしてあげてね』とメールしてきたよ。」

「そうかあ。それはありがとうね。助かるわ。じゃあ、お母さんと一緒に四人で頑張ろう。」

それから二時間以上かけて五軒分の雪かきが終わり、緊急車両も通れる状況になりました。

中学生になった彼らのたくましい姿を観て、乳幼児の時から交流があったので、その成長ぶりに胸が熱くなりました。

「おばちゃん、また雪で遊ぼうね」

「うまいこと言うね。確かに雪と戯れていると思うと、なかなかおもしろいね。」

やれやれと、当直明け後に睡眠をとっていた連れ合いと夕飯を食べ終わったところに町内契約の除雪車が来て、ゴーと雪の塊を置いていき、がっくり。このままでは翌朝に車は出せないし、体の不自由な方は玄関先から出られません。緊急車両も搬送に手間取ります。もう一度 30 分あまり、中学生たちと雪の重い塊を避ける作業をしていました。そんなところに、ふるさとの山口県からみかん箱が到着し、お手柄の彼らにお裾分けができました。ニュースを観て案じてくれた弟の心遣いにも感謝。



さて、我が家の庭には、亡義父が好きだ

った寒椿があります。三番目の子どもが生まれたときに同居し、その記念にと植えてくださいました。成長した寒椿が、しんしんと無音で降り続く積雪の重みに耐えている姿を観ていて、「ああ、自然の厳しさに向き合い、春を待つ辛抱強い北陸の方々のお人柄のようだな」と思い、俳句を詠みました。

しんしんと
頭を垂れし
寒椿

馬渡の眼
P137

山岸　若菜

前職場を 12 月末で退職しましたが、その後も非常勤で実習だけ手伝いに行っていました。

非常勤になると責任が軽くなるからいいかなと思っていましたが、実習となると教員は 1 人しかいないので責任感にあまり変わりなく‥ やっぱりやめとけばよかったと後悔しながらも、始まってしまえば必ず終わりがあると言い聞かせ、何とか大きな事件事故もなく終われました。

あーよかった。

さてこれから 1 ヶ月はゆっくりしようと思うのですが、「ゆっくり」ってどうやってするんでしょう？？ダラダラしたらいいねんと言われますが、ダラダラってけっこう難しい。お散歩に行ったりすればよいのでしょうか？

ともかく何時にどこかへ行かなくてはいけないというのがないだけでも十分ダラダラだと思うので、あまり深く考えず毎日過ごしてみようと思います。

ある訪問看護師のあたまの中
P261～

乾　京子

2026年の年明けから、「いったいこれ、どういうこと！！なんでこんなことになるの？」という事が続出。頭が付いていかない。ゆっくり考えて…と思っているうちに次々といろんなことが、かなりのスピードで起こっては流れて行く。他所のことと思っていたら、わが国でも自分の都合で通常国会初日に解散したり、あれよあれよという間に、景色が変わっていく。私の頭が固くなった。そうそう身体も固くなってきて、あちこち痛い！！疲れがとれない。集中力が切れる･･･あぁぁ、なんだかなぁ。気分転換の湖岸散歩に行く日が増えてきた。変わらないようでいて、日々同じことはない。けれど、いつものように琵琶湖の奥にはいつもの比叡山が、比良山が、そして真っ白の伊吹の山、鈴鹿の山々がデンと腰を据えて，そこにある。それらを眺めながら、ナンキンハゼの上にとまるﾄﾝﾋﾞや群れて飛ぶスズメやムクドリ、チョンチョンと目の前を跳んでいくセグロセキレイなどを見て、ほっとしている。しばし、心のざわざわを沈めては夕日を見ながら、家路へと急ぐ。そんな日々を過ごしている。

じゃりんこ文庫
P２７０～

中谷　陽輔

年が明け、あれよあれよと年度末。

･･･この間、小2の息子の自転車が2年ぶりに新しくなったり。そんな息子がこの冬初めてスキー教室にチャレンジしてみたり。かたや小3になると学校附設の学童からいられなくなって遠い学童になり、その送迎をどうするか夫婦で考えたり。そして年少の娘が、兄も通っているスイミングを羨ましがり通い始めてみたり。なぜかすでに鉄棒で10回連続後ろ回りができる運動神経よさげな娘は、年長から始めた兄を追いつく勢いだったり。いろんなことがあったりしました。

昨年末から我が家で恒例になっている就寝前のプチゲーム大会。息子はモノポリー（ジュニア版）にはまって毎日のようにやりたがるけど、20～30分ほどかかってしまうのが悩みどころ。いつもより早く就寝の準備ができるかどうか。子どもも大人も、みんなで楽しむための「余裕」をいかに日々もてるか。その重要性と難しさを考えているように感じます。

私自身、この年度替わりにおいて、職場の立場は変わらないながら、周囲の職員や体制に結構いろいろと変化があり、それらに対応する自分がどれだけ･どこまで「変化」する必要があるのか、そしてその中でどれだけ「余裕」や自分のやりたいことをやれる状況を作れるか考え、動く日々です。

子どもは確実に成長している中、大人側が「余裕」をなくし、忙殺されているとうっかり貴重な「変化」を見逃してしまいそうになります。私自身、原稿に書いたような方法で、なんとかバランスを取りながら、引き続きコソダテにおける「変化」と「余裕」に向き合っていきたいと思っている今日この頃です。

コソダテノシンリ
Ｐ２４０～

団　士郎

まずは半年！と決めて、11月から久々に舞台を観に出かけている。日常の行動選択がどうしてもパターン化してしまうことに変化をと考えたのが理由。そこで大昔足繁く通った観劇を復活させたのだ。



きっかけはこのサブスク。安くはない会費を毎月納め、チケット情報が月に二回届く。その中から興味のあるものを月一本ペースで選択して出かける。

映画と比べ日時が限定されるし、劇場も大阪が多い。それでも足を運ぶのは、非日常感が今のところ確保されているからだ。

あれこれ沢山のことをしてきたせいだろうか近年、何をやっても新鮮味がない。実は舞台もそうなのだが、今の客席と自分の違和感がちょっと面白い。この作品の何が面白いのか？とジェネレーションギャップも楽しんでいるのかもしれない。『推し』のある人たちの拍手しどころも違和感だ。だからといって、自分の方が正しいなどと思っているわけではない。

時々魅力的な舞台にも会うので、まぁそれでいいかと思いながら、せっせと大阪の劇場に通っている。

晩年D･A･N通信
P38～

内田　一樹

ここ最近「物語」の持つ力の大きさに畏怖を感じています。大きな力、可能性を持っているからこそ「物語」に希望を感じていたけれど、だからこそ自分自身もまた大きな「物語」の一部として回収されていきかねない。そんなことを感じながら、それでも「物語」が好きな自分でいられますように、と思っています。

社会科の授業を
対人援助学の視点から
P250～

宮井　研治

「そろそろ、やらねば」と、男はつぶやいて、やおら重い腰をあげた……なんて、小説の書き出しのようでしょ。つぶやいたのは私で、小説ではなく、どちらかと言えばノンフィクションです。第54号の対人援助学マガジン、私にとっては2回目の号の執筆者短信に、「焚き火、孫、ときどきサーフィン」というテーマで書かせてもらいました。覚えておられる読者の方は、おられないでしょう。それでよいのです。このテーマは、自分の今後のやってみたいこと、大袈裟に言えば、人生終盤のメインテーマとして、書き記させていただいたものです。などと、大上段に構えるほどのテーマではありませんが、何処かの政党のように選挙前の公約を、すっかり反故にするような行いは断じてしない（選挙演説みたいになってしまいました）。チカラが入ってしまいましたが、その後の進捗状況を書いております。



「焚き火」、これについては、コロナ禍からスタートしたソロキャンプ、それ以前からの仲間とのおっさんキャンプを年 2、3 回は続けております。また、「孫」ですが、これは関わる努力ではなく、向こう（孫ではなく、孫の母親、つまり私の娘）からの要請を受け、出かけたり、私の家に来たりしております。今では、彼の下に彼女（妹）が誕生し、賑やかさを通り越して、カオス化する場面もありますが、楽しんで過ごしております。以上の短信にてチラホラ報告もさせてもらってきました。

そして、残る「ときどきサーフィン」ですが、実態は「ちっともサーフィン」です。しかし、ついにこれについても着手しようと、つぶやいたのが滑り出しの「そろそろ、やらねば」の私の言葉です。持つべき者は、友の友、つまり知り合い。キャンプ仲間の友人に、「サーファー、ときどき公務員」怒られますね、訂正「サーファー、いつもは公務員」という方がおられて、この人の馴染みのスポットへのサマーサーフトリップを計画しているというところです。そして、そのための体力向上、身体作り、安全の担保のためにジム通いを再開したのです。エクササイズのスタジオに入って、追い込みをかけた後には、死にそうになりながらも続けています。そう、海で死なないためにね。「海をなめちゃいけません」これは、公務員サーファーのお言葉です。続報は、またの機会に！

人生は対応のヴァリエーション
P265～

櫻井　育子

いつの間にか 2026 年になっていたという感じ。年明けはフランス視察で、帰ってきてからも個展のためにずっと頭の中はフランス三昧。クロワッサンが美味しすぎたので、帰ってきてからも美味しいクロワッサンを求めてしまう。人生の中で、それくらい何かに「かぶれる」ということも少なかったので、自分がちょっと面白い。そして、フランスに行くのと引き換えに、長年乗っていた愛車のカングーが壊れ、廃車になった。愛していただけに、心が痛んだ。今は車なし生活を楽しむことに決めた。不便さはあるが、わたしの周辺環境（家族環境）にもまた変化があり、なんとかなるようにできている。しばらくは、運転手付きの生活ができる喜びを享受しようと思う。

生涯発達支援塾 TANE 代表
shukou0122@gmail.com
https://ikuko-sakurai.com

現象学としての書道
P238～

鳴海　明敏

県庁職員を定年退職した翌月、2010年平成22年4月に新規開設された児童心理治療施設青森おおぞら学園の園長を引き受けて、15年間勤めました。

2024年令和6年秋に軽い脳梗塞で入院し、それを機に翌2025年令和7年3月で園長職を退き、現在は法人の理事長として、週に3日職場に顔を出すという生活をしています。だから、週のうち 4 日は、家に居て家事見習い中です。メモを持っての買い物も、だんだん板についてきたような気がしています。商品によっては、「底値」も分かるようになりました。

そんな生活をしばらく続けてみると、こどもたちに関わることがほとんどありません。つまり、児童心理治療施設の方からも児童発達センターの方からもさっぱりお呼びがかかりません。それは、どちらもそれなりに順調に運営されているからなのですが、私としてはいかにも手持無沙汰で、独り言のネタも見つかりません。

ということで方向を少し変えて、学生時代に始まり現在もなお関り続けている『カウンセリング』ということに関連して、父親のことや青森カウンセリング研究会のこと、「ロジャーズと友田不二男」や「ジェンドリンと友田不二男」、「カウンセリングとフォーカシング」などのテーマで、思いつくままに書き残していこうかと思います。

月一のペースで開催している「フォーカシングの会」と、同じくらいのペースでウエブで開催している「（カウンセリング関係の）文献を読む会」への参加が楽しみです。

もしかした、また学園のこどもたちのことを紹介することもあるかと思いますが、その時はそれなりのカモフラージュを施しています。

理事長の独り言
P235～

畑中　美穂

誘われて久しぶりに知人に会い、20 年ほどご無沙汰だった友人と電話で話し、近々オンラインの研修で知り合った数人と初めてリアルで会う。日ごろの人間関係以外で立て続けにこのようなことがあると、何か「動いているなぁ」と感じる。
この春にはひとつ区切りになるコトもあっ

て、その「終わり」と「はじまり」の境目の今。大切な人たちと話し、新鮮な想いで空気を吸い込むように、英気を養う、というのか。「ふさわしいなぁ」という気がする。ありがたいことだなぁと思う。

一語一絵
P２１３～

渡辺　修宏

ちょっと体調不良になって、しばらく気の抜けた生活をしていたら、あっという間に史上最大体重になってしまった。そしたらなかなか痩せない。そのうち、子どもと妻が、デブ 3 号と名付けてくれた。3 号ってなんだ？と思ったら、子どもも妻も、最近太ったらしい。さて、誰が最初にこのニックネームを返上するのやら･･･

対人援助実践をリブートする
この一冊
P２１６～

玉村　文

今年度は、未就学児3人を保育園に送り迎えする一年でした。月曜日と金曜日はお昼寝用布団を3人分抱えての登園。両手いっぱいの大荷物で歩く姿は、我ながら少し同情を誘っていたかもしれません。

そんな日々も、いよいよ終わりが見えてきました。4 月からは長男が小学校に入学します。体験入学に一緒に出かけたり、学校指定の用品をそろえたりと、少しずつ準備を進めているところです。小学生になれば登校班で自分の足で通うことになります。今年のように3人そろって送迎する日々を、ふと懐かしく思う日が来るのかもしれない――そんな気持ちも芽生えています。



ところで、小学校は 4 月 1 日から通えるわけではないのですね。入学式までの期間や給食が始まるまでの約 20 日間はお弁当持参とのこと。さっそく「小1の壁」の気配を感じつつ、4 月をどう乗り切るか、今から作戦を練り始めています。

応援　母ちゃん！
P１９９～

杉江　太朗

家庭福祉領域で働く杉江と言います。この前、AI で「対人援助学マガジン、杉江、評判」と質問をしてみたら、誰が行っているのか！？と思えるくらい肯定的な返答をして頂きました。とは言え、まぁそんなに読者がいるわけでもなく、AI が肯定的な文章を考えただけだなと腑に落ちなかったので、今度は逆に「対人援助学マガジン、杉江、悪い評判」と聞いてみました。すると、AI からは、「エビデンスに欠け、楽観的だと批判が多い」との返答があり、どちらかと言えばこちらの方が、自分の感覚にもしっくりくるなと思った次第です。そもそもエビデンスに関心がありませんので、それに欠けていることは自覚をしていますし、楽観的という評価はむしろ褒め言葉だと思っている自分がいます。最近は、面接の中で、「AI に聞いたら･･･と言っていました」と聞くことがあります。AI の返答に一喜一憂せず、適度な距離を持ちながら付き合っていきたいと思っています。

「余地」−相談業務を楽しむ方法−
P１８９～

米津　達也

原稿を仕上げた日は、1 年に 1 回の健康診断の日だった。ここ数年、メタボ云々といわれてきたが、体重、腹囲共に大幅減少。日々の結果だと思うが、あまりそこに興味もない。ただ、最近、写真を撮ると目に見えて痩せてきて、ややみすぼらしい。中年痩せも考えものだ。

川下の風景
P２０９～

川畑　隆

自分の専門を、これまで「児童福祉や教育分野等における対人援助」としてきましたが、いまは「子ども家庭支援に向けた事例検討」とするほうがピタッとくるほど、検討の場に参加させてもらっています。その事例に接する時に、私の頭の中によく動員される着眼点をできるだけ書き出した本を、出版する予定です。

そしてその本に付章として、ここまで連載した『私の頭の中のまだエンピツ①～⑥』と実は『⑦～⑩』もすでに書いていて、それも含めて収録しました。ですから、このマガジンへの掲載は今回で終了とします。

出版する予定の本は、『(仮題)子ども家庭支援のマトを探す～事例理解の目のつけどころ』で、「出版予定。出版社未定」として機会あるごとに宣伝しています。

出版が決まらないのです。仲間と一緒に書いた本は結構買っていただいているんですが、私が一人で書いた本は売れません。馴染みの社の担当者からは売る努力を問われているところがあるのですが、売れない人の本は「はい、出しますよ」と簡単にいかないのは当然でしょう。「出せません」との結論が出れば、他の一社に打診してそこでもダメなら、アマゾンからの自費出版の手で行こうと目論んでいます。これは『児童相談所から教わった』で成功体験がありますからね(成功体験というのは「売れた」ということではなく「出せた」という経験です)。本の内容からして、そういう本をよく出している出版社から出したいのですが、アマゾンの準備が要るかもしれません。

いずれにしろ、きれいな服を着た我が子を早く目にしたいものです。

連載を読んでいただいたみなさん、ありがとうございました。

私の頭の中のまだエンピツ
P１９４～

浅田　英輔

今年は雪がすごかった。津軽衆も途方にくれるレベル。夏は1時間ちょっとで行ける通勤が、朝6時に出発したのについたのが10時過ぎだったりしました。電車は1週

間くらい動かなかった。ちょっと遅刻しそうなら焦るのですが、そこまでいくともう逆に「さーて何時につくのかなー？」と楽しくなってきますよね。春になると絶対になくなるものに対して、みんなでお金も時間もかけてこっちからあっちに運んで、文句つけたりトラブルになったり。なんとかならないかなーーー。

臨床のきれはし

Ｐ９４～

松村　奈奈子

ここ数年、重要伝統的建造物群保存地区（よく伝健地区って言います）を訪ねるのが好きです。伝健地区は文化庁が、城下町や宿場町、門前町など歴史的な集落・街並みの保存のために選定しています。先日は徳島県の美馬市の脇町に。徳島名産の藍で金を成した豪商の並ぶ街並みは、立派な“うだつ”もあって、いい感じでした。



最近は伝健地区にオシャレなカフェや古民家宿泊施設もある所が増えて、今回も古民家に泊まりました。すだちジュースを飲みながら、小さな店先で地元のおばあちゃんが焼いていた田楽を食べました。いやぁ、お散歩、面白かったです。伝健地区はひとつひとつにその町の歴史があって、歴史や名物を感じながらの街歩きが、とっても楽しいです。

神科医の思うこと

Ｐ１３４～

村本　邦子

白内障の手術をした結果、近くも遠くもすごくよく眼が見えるようになった。眼鏡もコンタクトも不要だ。ただし不思議な現象がふたつ。ひとつは夜の光が同心円状に美しくロマンチックに拡がって見えること。これは悪くない。もうひとつは人の眼鏡のレンズが黄色がかって見えること。最初は、UV カットとか液晶とかから眼を保護するための特殊な加工が新たに開発されて、最近の流行りなのかなと思っていた。でも、よく見ると世の中の人（海外からの観光客含む）の眼鏡が全部そうで、さすがに世界中の人がいっぺんに眼鏡を新しくするなんてことあるはずがないと気づいたのは2週間経ってからだった。とくに生活に支障はないが、黄色信号による条件付けのためなのか、微かに不穏な気分になるので快適ではない。眼医者さんに聞くと、「そういう人は初めて聞いた。理由はわからないが、見え方は変わるから」とのこと。だいたい1ヶ月で視力安定というが、結局今もそのままである。色は移ろいやすいものだ。十メートルも海に潜ると、あっというまに魚の色はなくなっていく。もしかすると世の中の人はみな違う色の世界を見て生きているのかもしれない。シンボリックにもである。

周辺からの記憶
―東日本大震災家族応援プロジェクト―

Ｐ１０７～

國友　万裕

今日、立命館から春からの書類が届きました。もう一生、立命館で教えることはないと思っていたのに、半年間のピンチヒッターとはいえ、縁ができて教えることになったとは因果なものを感じます。

本当に大学の頃は辛かった。

今でも思い出すのは卒業して、他の大学の院に入った後、西院の駅の近くでうどんを食べた思い出。連載中にも書いたとおり、卒業の時に最悪の出来事が起きて、他の大学に移った僕は自分の運命を恨んでいました。当時田村泰次郎の『肉体の門』という小説を文庫本で読んで、娼婦たちが、何もかもを憎むことで自分を支えているという部分に痛く共感したのを覚えています。どん底で、自我をなくして、どうにかひたすら生きていました。

実は、大学時代 4 年間お世話になった下宿の大家さん、とても良心的ないい人だったのですが、大家さんたちには他の大学の院に移ることは言わず、九州に帰るんですと告げて右京区の大学に移ったんです。

大学時代を消化できない、これからの展望も見えない、まさにどん底。そんな時に自分とは全く関係のない小説のちょっとしたフレーズが心に突き刺さることってありますよね。あの時食べたうどんは美味しかった。暗黒の中での微かな幸せでした。

でも、少しずつ、暗黒から光が見えてきて、そしてその翌年にはアメリカ留学のチャンスを掴んだのでした。人間って、何が幸いするかわかったものじゃありません。

さあ、あれから約 40 年。今回は新たな気持ちで、半年間教えたいと思います。何か嬉しい出会いがありますように。

スポーツおじいさんになりたい！

Ｐ７９～

三浦　恵子

職場から公共交通機関を使って帰る際、駅構内で男性の大きな声が響き渡りました。

構内での行き来をめぐっての口論のようですが、このままヒートアップするのではないかという懸念もあり、改札を出る際、駅係員の方に手短に状況をお伝えすることにしました。

改札口ではすでに駅員さんに状況を伝えていた方もおられ、駅係員さんのとりなしにより、口論はほどなく収束し、世界に平和が訪れたのでした。

ただ、状況を見守りながら少しお話をしている際に、極私的問題が発生。

先に改札で報告された方「なんでこんなところで喧嘩なんてするのかしら（嘆）」

私「ほんまですわ。タイマン張るんやったら、放課後体育館の裏に来んかいワレ、やろ」

先に改札で報告された方「タイマンって・・・（なんかこの人も怖い）」

タイマンとかまず日常会話で使いませんし、体育館の裏も、いつの時代の漫画や、という感じです。次号の執筆者短信ではもっと穏やかな御報告ができるよう、精進いたします。

現代社会を「関係性」という観点から考える

P180

坂口　伊都

正月に娘が帰ってきた時、神社でおみくじをひきました。夫がひいたのは「半凶」。年の初めに「凶」が入っているのか。そして、半凶って何？初めて聞いた。

そのは「半分の凶」が、夫ではなく私に降りかかりました。本当に一瞬の出来事だったのですが、重たい折り畳み椅子に人差し指を挟んでしましました。血が滴りおちて止まらなくなりました。それも家族療法ワークショップの講師中をしている最中に。何重にも巻いた絆創膏で私の人差し指は曲がらず、心臓より上に置いておかないとドクドクします。その状態でワークをやり切りました。私、頑張った。

受診をすると、爪がつぶれて下の肉が盛り上がっていると言われました。3 週続けて通院しました。私のおみくじは「吉」だったのですが、半凶は私だったかも。爪は今も欠けています。爪には保湿がいいそうなので、ハンドクリームをせっせと塗っています。利き手の人差し指が欠けていると不便です。早く伸びないかなぁ。

療育手帳の向こう側
Ｐ１０２～

河岸　由里子

【いよいよ！】この3月で19年勤めた某市の心理士兼アドバイザーを退職する。非常勤で週2回、往復130kmあまりを雨だろうが吹雪だろうが、道が凍っていようが通っていた。その間にメンバーは次々入れ替わり、化石的存在になっている。60で辞めようと思ったがならず、65で辞めようと思ったがこれも引き止められ、結局71まで働くことになってしまった。今回システムが変わる事になり、ちょうどよい機会だからと延長をお断りした。また、幾つかの市でやっていた母子保健のアドバイザーの仕事や子ども子育て会議の委員、スクールカウンセラーの仕事も殆ど辞める。まだいくつか残っている仕事はあるが、おそらく大きく収入は減ることになるとは思う。それでも、人生72年と思ってやってきたので72になる今年で終止符を打つのは想定内だし、特に心残りもない。これからの人生は私にとっておまけである。それが数年なのか数十年なのかわからない。幸い健康である。冬の運転を考えて、車になるべく乗らない生活をしながら、東京と千歳を行ったり来たりしようと思っている。まだ「かかし」の患者さんがいるので、「かかし」の対面を終了するのは来年と思っている。「かかし」をオープンして今年で22年になる。正規の料金で受けている方が多くないので、全く儲からない。それでも1100人ほどの方の相談を受けてきた。その他の場所でのカウンセリングも含めると、最近は月平均60件くらいの相談を受けている。となると年間720件か。述べだが随分沢山相談を受けて来たなと改めて思う。来年以降オンラインだけでやっていこうと思っているがどうなることか・・・。そして主に東京で、歩くことを主体にして、体調を維持しつつ、好きなことをしながら、でもまだ少しだけ働いて、のんびり過ごしたいと思う。

公認心理師・臨床心理士・北海道

ああ、相談業務
Ｐ６７～

先人の知恵から
Ｐ１５１～

中村　正

毎年 3 月、長く学校にいる者としては卒業と入学の季節なので感慨深い。といっても大学生や大学院生なのでその感慨は冷静である。冷静になった理由の今年の理由は生成 AI との格闘だった。卒論や最終レポートと生成 AI の関係は教育関係者がかなり頭を痛めている問題のひとつだ。なかでも卒業論文の指導が難儀だ。使うなと禁止できるものではないし、またすべきではない。どう付き合うか。これを指導しなければならない。2年間かけて付き合ってきた学部演習の学生たち。こんな工夫をした。まずは卒論として書き上げた第一草稿がある。これを AI チェックにかける。チェッカーも AI だ。無料で質のよいものがある。学生自身にさせる。AI 的な表現の出現率が瞬時にでてくる。それをスクショで提出させる。この時点で 50%を下回っていた場合は盗作ではないと判断する。90%の学生がいた。最終的には、この数字を 30%程度に下げていくことを目標にする。できれば同じ AI チェッカーを使う。数字を下げていくことに指導力がでる。何度か繰り返し独自な考えを書き込むことでうまくいくと学生も嬉しくなり、筆が進む。独自な考えは難しくない。社会病理学ゼミなので、どうしてこの主題に取り組むことにしたのかという動機を書くと比率は下がる。考察の結果についても自分の言葉で結論を書き、これからの生活に生かしていく事項を書くと比率はさがる。調査した過程でインタビューした相手の言葉をデータとして書くと比率は下がる。こうしたことをしなければならないことになるのだが、これはこれで双方が楽しい。つきあい方次第だということか。恋文を AI に書かせている学生がいたが・・・、これはさてどうしたものか。そもそもラブレターとかは死語だし、恋文は古文のなかの言葉になっているのだが。

臨床社会学の方法
Ｐ２１～

中島　弘美

京都の伏見にある城南宮の「しだれ梅と椿まつり」に出かけてきた。

城南宮といえば、かなり昔の話、私が大学生の頃、その近くの特別養護老人ホームでアルバイトをさせていただいた。当時、高齢者福祉にも関心を持っていて、白紙状態から指導していただいた。職員さんや施設の雰囲気がとてもよかった。一階建てだった特養は四階建ての総合福祉施設になっていた。あのころ、経験すること、ひとつひとつが新鮮だったなぁと、感謝の思いと、懐かしい気持ちが湧いてきた。

学生のころは、梅よりも桜の方をよく観ていたような気がする。今は梅を見る機会の方が多い。城南宮の庭では、白色や淡いピンクの枝垂れ梅が咲き、薄い色や濃い紅色の椿は種類も豊富で、苔の色と合わせるととても春らしい美しい景色だった。



ただ、椿餅がすでに売り切れていたのがなんとも残念。最古の餅菓子のひとつと言われているらしい。つぎはぜひともいただきたい。

カウンセリングのお作法
Ｐ３５～

黒田　長宏

羽田空港のそばの商店街で、「マーサのウーパールーパーしあわせ計画」という、ポップアップストアの活動をはじめました。URL です。
https://note.com/konnankyuujyo/n/n8f236712bacd?sub_rt=share_sb

あぁ結婚
P162

脇野　千恵

昨年、師走に入ろうとしたときのある日、家族が病気になった。予想だにしなかったこと に、別に暮らす家族も含め驚きが隠せなかった。今も入院中で治療に専念している。NHK の「病院ラジオ」が好きだ。お笑いコンビのサンドイッチマンが、実際に病院に一日 だけの出張ラジオ局を開設する番組。病院に入院、通院している患者や家族をゲストとして 招き、話を聞き出していく。彼らのインタビューが実に自然で、ゲストは苦しい複雑な心の うちを赤裸々に語っていく。そこには家族との関り、家族への思い、感謝の言葉があふれ出す。話の中には、ドクターや看護師とのエピソードも出てくる。最後に、日ごろ伝えられな い家族への思いをリクエスト曲に託して、ゲストとともに聞く。 家族の日々は人それぞれ。様々な出来事の中には、病気も入ってくる。外から見れば「大変やね」と言われそうな出来事も、今落ち着いて構えていられるのは、家族理解のおかげかもしれない。

こころ日記「ぼちぼち」
Ｐ２１１～

岡崎　正明

最近、いろんなところで「問うこと」や「続けること」の大切さに出会う気がする。勝手にトレンドだと感じている。この2つは私の中ではつながっていて、「問う」ことを大切にすると、結論が簡単に出ないため継続審議状態、つまり「続ける」ことになる。答えを急がず、思索や対話や関係を続けていくこと。これがいろんなジャンルの潮流にある気がしている。

最近ハマったマンガ『チ。』では、常識を疑い問うこと、世間の空気や価値観からはタブーとされることでも、人は知りたい欲求を捨てられず、信じられる真理を見つけるために問い続けるという、人間の本質の一面を教えられた気がした。また、最近知った「哲学対話」という、身近なことに問いを立てて考えを深めていく手法も、すぐに答えを出さず、「なぜそうなのか？」「どうして私はそう思うのか？」と当たり前を解像度高く見つめ直すことで、本当に自分が何を大切にしたいのかを探し続けていく営みだ。

対人援助領域で話題のオープンダイアローグも、解決ではなく対話を続けること、関わりを続けることを目指すものだし、安全パートナリングもラップアラウンドも、行政や支援者の価値観だけで答えを決めず、相手と共に話し合いを深めながら探し、変化させていくことを良しとしている。私には、これらがどれもつながって見える。

これはきっと、一方的に善悪や正解を決め、「取引」と言いながら脅迫や強要で結論を急かす世界政治や、「決断」「責任」といった抽象的な言葉だけで権力が走り出そうとしているこの国の現在への揺り戻しなのではないだろうか？と勝手に思ったり。ついこのあいだまで「持続可能性」なんて言葉が叫ばれていたのに。

もちろん、批判ばかりやきれいごとに見える理想にも課題はある。けれど、そんなに簡単に切って捨てていいのか。消費税を下げるのか下げないのか、憲法を変えるのか変えないのか。「とにかく踏み出さないよりは、やる方が前向きな気がする」程度の理由で決めてしまうのだとしたら、それはずいぶん危うくて不遜な態度ではないか。

私たちは間違うし、仕組みは複雑で事情は個別的で、あちらを立てればこちらが立たない。自然はそんな人間の都合に関係なく動き、ときに災害ももたらす。だからこそ私たちは、知らないことがあることを前提に、謙虚に、自分たちにブレーキをかけたり、相手と慎重に話し合ったり、どうにもならないことは助け合ったりして、とにかく社会を続けてきた。生命もつまるところ、続くこと、つなげることが大目標だ。安易な結論でなんとなくスッキリした気になるなんて、幻想だと思う。

役場の対人援助論
Ｐ８８～

千葉　晃央

日本一短い私鉄、「紀州鉄道」に乗りました。和歌山県御坊市での研修を担当するため、京都から御坊市へ移動しました。特急料金が発生しないルートで行くと、JR 大阪駅からは大阪環状線を通る「紀州路快速」があり、環状線から和歌山駅まで運んでくれます。「紀州路快速」は、「こまち」と「はやぶさ」連結の東北新幹線同様、前半分は関西空港行き「関空快速」、後ろ半分は「紀州時快速」というややこしさ。JR 和歌山駅からは紀勢本線で JR 御坊駅までというルート。これで 4 時間半ぐらい。一気に行くなら「特急くろしお」。京都駅発は 1 日 1 本で夕方発にしかなく、他は JR 新大阪駅発。これで 3 時間強ぐらい。御坊駅到着後は、研修会場に一番近いお宿をキープということで「旅館」の一択。「紀州鉄道」の紀伊御坊駅が最寄り。



「紀州鉄道」は、前回来た時には乗車できず、初乗車。今回は移動ルートにあり、必然。「紀州鉄道」は全線で距離 2.7 キロ、8 分の路線。乗車時も数名の乗客で、住民の足。「紀州鉄道」で有名なのは、御坊駅の次の駅「学門駅」の切符。合格祈願のご利益に！とテレビのニュースによくなっていた。現在、この鉄道自体廃止が近い？というウワサも。使っている車両も信楽鉄道などのものを譲り受けて運用。何年か前に乗った阿蘇山ロープウェーも、小さいころに乗った能勢の妙見の森ケーブルとリフトもなくなった。こうした機関の維持の難しさは顕著。紀州鉄道も旅館もレトロな姿が味のある時間でした。古きよきものを使いながらの 2026 年。昭和レトロブームに万歳。

家族支援と対人援助　ちばっち

chibachi@f2.dion.ne.jp
090-9277-5049

障害者福祉援助論
Ｐ１７～

見野　大介

2月に開催した錵屋ベースソソラソウでの個展、最終日に出張料理をしてもらったフレンチのシェフが大学時代の後輩だった。近畿大学文化会陶芸部で彼と出会ってから25年、陶芸と料理という形で一緒に仕事をしたことが部活時代を思い出して感慨深い。

ハチドリの器
P４

柳　たかを

家庭菜園「おでん大根」と「辛味おろし大根」

数年前から、田舎の妻の実家で大根とかジャガイモなど育てようと鍬で土と戯れる時間を楽しんでいる。これまで育てたのは大根、ジャガイモ、さつまいも、ニンニク、ほうれん草など、繰り返し栽培したのは大根とジャガイモ、2～3 回ニンニクも試したが、ニンニクは栽培用のニンニクの実がシーズンになるとホームセンターで売られているものを手に入れて育てた、

結論、ニンニクはむずかしい、おそらく事前の土作り、植える時期が遅れたかあとのケアが下手だった、期待どおりの大きなニンニクにならなかった。

昨年 10 月初めに蒔いた 2 種類の大根、「おでん大根」と「辛味おろし大根」、両方とも初めて育てた品種でした、おでん大根は太くて短い、おでんの出汁で炊くとよく出汁がしみ実も溶けるような柔らかな歯ごたえで美味い、「辛味おろし大根」は小ちゃくて最初は「なんだこりゃ！」白く太く長い大根のイメージとは全然違う、「辛味おろし大根・からいね」という、緻密な肉質でおろしてお蕎麦の薬味として使う、自分は毎朝納豆におろし大根をからめていただく、おろし大根をからめると納豆の匂いが薄まっていくらでも食べれる。

今回、「辛味おろし大根」を育ててみようと思ったのは、毎朝の納豆にもっと辛味のきいた薬味大根は合うのではないかと期待したからでした。



結論、辛味は素晴らしい、ただおろすのに苦労する、腕力が必要、でもこの薬味でいただく納豆やざる蕎麦はいける、しかもスーパーで買ってきたものと違い自分で育てた大根なので無農薬、安心と満足に包まれてます。

如来の祭り
Ｐ１３８～

古川　秀明

島根に住む親戚の子が、自給自足の暮らしぶりを取材され、テレビで紹介されました。彼は現在 32 歳。幼稚園の頃から知っているので、画面の中で立派に働く姿を見ると、なんだか不思議な気持ちになります。
家の前の畑で野菜や米を育て、猟師の免許を取り、野生のシカやイノシシを狩ってその肉を食べ、鶏を飼って新鮮な卵を得て、さらに養蜂までしてはちみつを採る。お風呂は薪で焚く五右衛門風呂、ごはんは竈（かまど）。手作りのかき餅を作って現金収入にし、自分でピザ窯まで作って仲間を呼んでパーティーを開く。「こんな生き方もあるんだなぁ……」と、つい感嘆してしまいます。彼を見ていると、昔のNHK ドラマ『大草原の小さな家』に出てくるチャールズ父さんを思い出しました。
この年齢になると、さすがに彼の暮らしを“羨ましい”とは思いませんが、家に引きこもり、ゲームやスマホに依存し、自殺率が世界一高いこの国の若者たちには、彼の生き方のエッセンスが少しあってもいいのにな、と感じました。

講演＆ライヴな日々
Ｐ９９～

野中　浩一

来年度から 2 年間、ベトナムに行くことが決まりました。ということで、次回からは「ベトナム編」がはじまります！（たぶん）
coconollp@gmail.com

島根の中山間地から
Work as Life
Ｐ２２７～

西川　友理

大阪キリスト教短期大学で保育幼児教育者養成に、またそれ以外の場所でも福祉系対人援助職養成に携わっています。
昨年あたりからおやこ対話のファシリテーターとしていろんなところに顔を出させていただく機会がぼちぼちと出てきました。今年度は生まれて初めて「ゼミ」というものを担当し、ゼミ生といっしょにいろんな活動をさせていただきました。
自分と学びや興味の対象が似ている 18～19 才の人たちと、いっしょにわいわい話し合いながら、長い時間をかけて色んなものに皆で一緒に出会っていく。授業の距離感とも、実習指導の距離感とも違う、なんだか不思議な感じです。
今年は1年生だけのゼミでしたが、いよいよ後輩が入ってくる、ということで、ゼミ生たちはいろんな期待と不安を持って、鼻息荒く待ち構えています。先輩/後輩関係が出来る 2 年目、さぁどんなふうになるのかな。私も期待と不安を持ちつつ、新年度を迎えます。

福祉系対人援助職養成の
現場から
Ｐ５９～

松岡　園子

混雑を避け、今日は静かな場所でひと息ついてみました。温かいお茶に肩の力が抜け、「こういう日も、まあ悪くないです

ね」と小さく笑えました。
　環境を少し変えるだけで、心はふっと軽くなります。誰もが安心して力を抜ける場を支えることも、支援の大切な役割の一つだと感じています。

統合失調症を患う母と
ともに生きる子ども
Ｐ１９２～

寺田　弘志

心理療法に治療的ダブルバインドという考え方があって、症状を強めましょうという指示を出すことがあります。
接骨院で施術するときも、症状を強めたり、弱めたりを繰り返します。
症状を強めるのは怖いですが、症状を変化させることができなければ、改善させることもできません。
今回も本文では、パラドキシカルストレッチングの説明をしていきます。

接骨院に心理学を入れて
Ｐ１６９～

篠原　ユキオ

別れの日に
先日、本家の叔母が 103 歳の誕生日を前に老衰で亡くなった。
大病を患う事は無く穏やかな独居生活を甲子園のマンションで送っていた。
叔母には子どもは無く親戚も少なかったので私の世代だけの家族葬となった。
葬儀場は駅からバスで数分の場所だったがちょうどその道の中ほどに叔母のマンションがあるので 30 分ほどの道を歩くことにした。
この先そこを訪れる事も無くなるのだと思うとそこまでの風景をゆっくり見ておきたくなったのだ。
春の訪れを感じさせる暖かな日差しの中を歩いて行くと 15 分ほどで見慣れたレストランの後ろに叔母のマンションが見えてきた。
大きな道路を隔てて部屋が眺められる場所に立ち止まってカーテンが閉まったままの部屋のベランダを見ていると弟と部屋を訪れた帰りに横断歩道を渡りながら弟が言った言葉を思い出した。
「このへんでマンションを振り返って手を振るねん。いつも伯母さん、ベランダに出てこっち見てるからな」
振り返ってみるとその通りこちらを見ている叔母の姿があった。
二人で大きく手を振るとそれに応えて叔母も手を振っていた。
そんな事を思い出していると誰もいないベランダに叔母の姿が浮かんで見えた。



HITOKOMART
Ｐ２０５～

サトウ　タツヤ

　まあ、とにかく忙しい。時間の経過が遅い！（笑）
　大学入試は厳密な執行が命だし、研究は次世代研究大学を目指すケレン味も必要。学術情報は守りが必要だし、ダイバーシティは環境整備に精を出す。
これまでの蓄積やネットワークが活性化しているのがありがたい。

帰ってきた対人援助学の縦横無尽
P71～

団　遊

ここ数年、冬場は本気でスキーに取り組んでいる。シニアの大会に出たり、検定取得を目指したり、オフから身体づくりに取り組み、シーズンインを心待ちにしている。かといって、冬場に仕事が減るわけではないので、スキーシーズンは車中泊が当然で、猛烈な働き方とスポーツのコラボレーションとなる。
その行く末が、2 月中旬に私の身に降りかかった、鎖骨骨折だった。調子が良くて、調子に乗ってしまった。検定前日、師事しているコーチにビデオ撮影しながら指導を受けている最中に、大転倒してしまったのだ。
起きてしまったことは仕方がないので、手術を受け、チタン製のプレートを鎖骨の代わりに入れて、リハビリに励む日々だが、一方で、怪我や病気は何かを変えるタイミングだとも言う。そこで、早速自分の棚卸しをした。そして、20 代と 51 歳の今と、まったく変わらぬ仕事スタイルを貫いていることに気が付いた。
悔しい気持ちもあるけれど、ここに無理があると認定し、51 歳なりの、より精度の高いワークスタイルを身につけ、来年リベンジを果たす所存です。

アソブロックの実践から考える
会社の倫理学（1）
P32～

山口　洋典

このところ、2 月末に発表される結果に戦々恐々としています。科研費と呼ばれる研究助成の採択、不採択が公表されるのです。それまで年度明けに発表されていたものが、2022 年度分から前倒しで発表されるようになりました。そのため、年度が変わる前に、当面の研究デザインの有り様がわかるようになりました。
　2026 年度の概ねの種目の科研費については、2 月 28 日が土曜日ということで 2 月 27 日に採否が公表されました。今年度、私は代表者で 2 件、分担者で 3 件の応募があったのですが、分担者でのプロジェクトが 1 つ採択されたのみ、でした。これで科研費では 4 年連続で代表者でのプロジェクトが展開できておらず、研究者としての力量が足りないと烙印を押されているような気さえしてしまいます。とはいえ、2026 年度は立命館大学の学外研究制度を利用し、京都大学防災研究所の研究員（私学研修員）として七尾市田鶴浜地区で滞在型のフィールドワークを展開して参りますので、現場への貢献と共に諸々の力量の向上に努めて参ります！

ＰＢＬの風と土
Ｐ１６３～

鵜野　祐介

先月末、沖縄で子守唄やわらべうたの取材に行ってきました。ゆいレール（モノレール）の車内に、近づく駅毎に別の沖縄童謡が流れることに感心しました。「ジンジン」「てぃんさぐぬ花」「耳切り坊主」……。大

阪モノレールもぜひ採用してほしいものです。

うたとかたりの対人援助学
Ｐ１５８～

鶴谷　圭一

私事ですが、昨年 12 月に 65 歳になって定年の歳になりましたが、園舎建築の借金もまだまだあって、なかなか引退できそうにありませんし、冬の朝など、起きるのがキツいときもありますが、幼稚園に来ると元気が出るのでなんとかやっています。なんといっても、毎日楽しい刺激がある保育という仕事はやめられませんねー！園長なのでつまんない事務仕事はやんなくちゃいけないため粛々と消化していますが、好きなんでしょうねえ、保育という仕事が。40 年もやっていても飽きませんから。

来年度からは国が子育て支援の目玉と掲げた「誰でも通園制度」が始まり、ウチの園も 2 歳児対象にスタートすることになりました。

僕の穿った見かたでは、乳児の保育料を無償化する自治体が増えてきているけど、働く保護者だけに税金を投入するのはバランスが悪いと、専業主婦層にガス抜きのための施策？なんて思いもありますが、本当は家庭で育つ子どもたちの周りに同年代の友だちがいないことや、子育てのあれこれを相談する人もいないことから、保育施設につながっていない子育て世帯をコミュニティーに仲間入りさせて、子育ての喜びや、子どもの発達をサポートするという目的があるのでしょう。みんなで子育てをしていかなくちゃいけない時代になっているようです。

幼稚園の現場から
Ｐ５５～

竹中　尚文

長くこの対人援助学マガジンに掲載させていただいているが、締切を忘れていたのは初めてだ。私の中で当事者意識がなくなってきたのか、単に老齢による忘れっぽさか。急いで原稿をまとめて送った。ホームレスの聞き取りは、ずいぶんと続けているのでストックの原稿はある。聞き取ったのはいいが、公表の許可をもらえないものもそれなりにある。その話は、とっても興味深いのだが公表を拒まれている。それぞれの人生の思いがある。もし、そのような話を聞きたければ、現場に来て欲しい。支援活動を手伝っていただけるとありがたい。私たちの活動は慢性的な人手不足なので、来て下さればありがたい。

◆手伝ってもいいよと思われる方は X の「竹中尚文」@taketakefumi3、または senkoji@leaf.ocn.ne.jp にご連絡いただきたい。

路上生活者の個人史
Ｐ７７～

山下　桂永子

今年は年明けから 1 月にマレーシア、博多、軽井沢、草津温泉と旅行をしました。どこも楽しく美味しい旅でした。昨年末からこの 1 月の旅行に向けてあれこれ忙しくしていたものですから、よく考えたら今年の予定も目標もなんにも決まってないなと気が付いたら 2 月が終わろうとしています。さすがにしばらくおとなしくしようと思っているのですが、いろいろとやらなきゃいけないことで予定が埋め尽くされそうなのは嫌なので、やりたいことの予定も考えていきたい今日この頃です。というわけで今回は時間の使い方について、もっとちゃんと考えないといけないなということを書いてみました。読んで頂ければ幸いです。

心理コーディネーターに
なるために
Ｐ１４７～

迫　共

この 2 月に博士論文の公聴会を終え、ようやく学位取得の目途がたちました。「保育所保育とケースワークの統合に関する歴史的検討−吉見静江の先駆的貢献を中心として−」というタイトルのものです。副題にあげた吉見静江は、1920 年代に米国に留学し、東京の興望館セツルメントの館長職を経て、戦後の厚生省で初代保育課長を務めた人物です。児童福祉法の制定や「保育要領」の編纂に関わった人物ですが、1940 年代末に幼稚園とは違う保育所の独自性として、保育にケースワークを取り入れることを提言していました。幼児教育・保育史においても社会事業史においても十分に知られているとは言い難い吉見について、史料をもとに検討しました。まだまだ十分とは言えない内容ですので、更に追及していく必要性を痛感しているところです。

さて前号の短信でもお知らせした通り、今年の 3 月で広島での任期を終え、次の任地に向かうつもりです。実はこれを書いている時点ではまだ確定していません。ギリギリ…首の皮が繋がったらいいなぁ。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ
P186～

大谷　多加志

2月の7日から 16 日まで、フランスの児童福祉に関する視察・研修に参加してきました。研修のコーディネーターはマガジンで「フランスのソーシャルワーク」を執筆しておられる安發明子さん、研修に参加したきっかけは同じくマガジン執筆者で 1 月にフランス研修に参加された櫻井育子さんの Facebook の投稿を見かけたことでした。

フランスのさまざまな現場を見学し、そこで働くスタッフの方々のお話が聞けたことはとても貴重な機会でしたが、同じ研修に日本から参加しておられたたくさんのメンバーの方との出会いもとても刺激的で、帰国後も自分の仕事を全うし役割を果たそうという思いを新たにすることができました。



いずれ、今回のフランス研修を通して感じたことや体験したことを、マガジンにもまとめたいなと思っています。

発達検査と対人援助学
Ｐ９６～

高名　祐美

令和7年度が終わろうとしている。今年度を振り返ると、3年目となったスクールソ

ーシャルワーカー（以下、SSW）の業務が大幅に増大した。支援依頼ケース数が増えた。そして初めての支援依頼があった学校も増えた。依頼が初めての学校への初回訪問は今でもとても緊張する。SSWのことをどう理解し、どんな関わりを求めているのだろうかと不安になる。先生方との初回面談も同様である。

先日、依頼が初めての小学校を訪問した。学校長、対象児童の担任、教育相談担当、特別支援コーディネーター、指導主事、教頭が校長室に参集してきた。言葉を選びながら状況を説明する担任からは、これまでの頑張りが伝わってきた。いろいろやってきたが、事態が好転しないことで専門家の力を借りたいとSSWへ依頼を決めたということだった。依頼を決めてからも、保護者へSSW支援を説明し、同意をもらうことに労力を要したと聴く。説明するなかで担任の感情が表出され、その感情を反映し「つらかったですね」と伝えた。先生の硬かった表情がゆるみ、緊張の糸がとけたように感じた。ここからだなと思う瞬間だった。

（「SSWの仕事」：今号はお休みさせていただきます）

スクールソーシャルワーカーの仕事
休載

水野　スウ

今号はお休みするのですが、選挙の後で思ってること、短信で少し。

最後まで納得いかない突然の選挙でした。結果は言い出した人の圧勝。一両日は、なんでこうなった？？と目を白黒させてたけど、やがて、こういうことだったのかなあ、と。

「イメージ」が圧倒的に他を寄せ付けなかった。強くて明るくて前向きで未来に希望が持てるサナちゃんの姿、ひと目、生で見たいと思う人たちが駆けつけて、アイドル推し活さながらの選挙。ポジティブで勢いのある、聞いてると気持ちよくなる勇ましい言葉、かっこいい、女性でここまでできるなんて、とその努力に勇気がわく。それで選挙区違ってもサナちゃん推しで自民党に入れた人が多かったのかも。わかりやすくて短い言い切り言葉からは、そのぶん抜け落ちるものがたくさんあるのだけど、そこを突っ込むと、意地悪、と言われてしまいそう。

だけどね、勇ましい言葉にはうんと用心したい、と私は思うのです。選挙中あまり言わなかったけど、高市首相のしたい政策から見えてくるのは、防衛費をもっと増やす、スパイ防止法をつくる、これまで禁じられてきた殺傷能力のある武器を外国に売っていく、などなど。それは日本が戦争に参加できる国にどんどん近づいていくことのように思えます。

戦争はいや、願いは平和、今ある暮らしが明日も未来も続きますように。サナ活した人たちや自民党に入れた人たちの願いと私のそれは、根っこのとこでは多分そんなに違わない。でも、自分の国は自分で守る、という時、その守り方がおそらく違うのでしょう。軍備をふやして相手の脅威になることが国を守ることなのか、それとも話し合いで信頼を重ねていって、経済でも互いに大事にしあい、本物の争いを避けることで国民のいのちを守るのかーーーお花畑って言われてもね、武器つくって売って、相手を敵視して、軍備で競い合うことが平和につながるって私にはどうしても思えない。戦争を始めたらやめるのがいかに難しいか、この数年間、毎日見せつけられてるだけに、なんとかそれを回避したいと思うのです。

とても大事な数字を知りました。過去150年間の戦争を調べた研究者による分析。互いに対立する二つの国が軍拡競争した場合、戦争になったのは82%、競走しなかった場合で戦争に至ったのは4%だった、と。競わずとも戦争になる場合があると知った上で、競い合えば8割以上が、という事実を多くの人に知らせたいです。

（出典は「戦争を回避する『新しい外交』を切り拓く」の65ページ。（編著:猿田佐世、巖谷陽次郎　かもがわ出版）

Michael D.Wallace."Arms Race and Escalation,"Journal of Conflict Resolution,23(1),15.）

この選挙をどう受け止めたか、高市さん政治をどう思うか、黙ってないで世間話レベルでしゃべりあおうよ、それ続けようよ、と思います。選挙は結果が出たらそれで終わりじゃない、見続ける責任が私にはあるから。誰に入れた人にとってもそれは同じ、未来への責任という意味で。

きもちは言葉をさがしている
休載

原田　希

息をするたび鼻から肺までが一瞬にして凍るような真冬の厳しさにやられ、2月まるまる風邪が治りませんでした。仕事は休まずがんばりましたが体力の限界が近く、休載します。コロナでもインフルエンザでもなかったけど、悪寒のする高熱で、いちばん近い小さな診療所へ行きました。入口に電話番号の書いた貼り紙があって、熱のある人は電話で症状を伝えたのち、車で待機。防護服を着た看護師さんが車まで来てくれて、問診と簡易検査。結果が出てから病室へ。短時間で先生の診察。その後は処方箋が出るまで車で待機。処方箋は事務所から薬局へFAXしてくれて、薬局の駐車場にいれば、薬剤師さんが車まで薬を届けてくれる。少人数の診療所を守るための対策が万全でした。驚いたのは、医療費も薬代も今日はいいです。熱が下がって元気になってから支払い来てください。と言ってくれたこと。接触を最低限にするための感染予防策だとわかってはいても、弱った私の気持ちがなんだかほっこりしたのでした。早く元気になって支払いに行きたいです。

原田牧場Note
休載

高木　久美子

喘息と肺炎の治療で入院中のため、「ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！」の投稿をお休みします。

前号からのこの3ヶ月は、意識障害との診断を受けている当事者の方々との意思疎通の取り組みの中で際立って印象的な出来事がたくさんあり、「自分の体験をみんなに知ってほしい。それが誰かの役に立ったら」と、皆さんから預かっていたエピソードがたくさんありました。

また、当事者ご家族から「マガジンを毎回とても楽しみにしています」と言っていただく機会が増え、張り切っていた矢先のことだったので、本当に残念で申し訳なく、体の辛さも相まって泣きました。

そのように待っていてくださる方もいる中で、また、当事者の皆さんとの継続する取り組みの中で信頼関係が深まるごとに、皆さんの語る言葉はより幅広く、深く、軽々と世の中の思い込みや絶望を超えてゆき…。個別のエピソードは都度書き留めておくようにしているのですが、その中からどれを紹介するか、それらをまとめていく過程でそこから何に気づき、次に繋げていくかという検証や考察にたくさんの時間がかかるということを、これまで甘く見ていました。

今度こそ、次号に向け早めに執筆の準備をして、3 ヶ月かけて原稿を書きます。見捨てずに待っていてください。

ちなみに次号の予告になりますが、今号で使おうと思っていた見出しを一部ご紹介します:

テーマ「愛は勝つ」

・前号の A 子さんのお母さんとお嫁さん

・怖いからこそ。2024 年のあるご家族とのリハビリから始まった。誕生 ！「ご一緒リハ」

・ここだったのね(痰の巣窟)

・悲鳴を上げていた心臓が

・成長したなあ

・これは私たちの問題

・ヨミトリ君最前線

・生まれた壮大な夢

あー、早く皆さんに読んでいただきたかったなー。

というわけで、ここからは、入院中の私の学びについてお届けします。

なんとなく風邪気味だったのをこじらせてしまったらしく、起き上がれない日が二日続いた後、突然息ができなくなって急いで家族に車で送ってもらい救急外来にかかったところ喘息の大発作で即入院でした。

今まで経験してきた喘息の大きい発作と始まりの感じが違ったので、風邪の息苦しさなのか喘息の発作で息ができないのか判断に迷っていたのがまずだめでした。「救急車を呼んで 来てほしいレベルでしたよ。危なかった」と救急医の先生からお叱りを受けつつ、いろいろ検査をして病室へ。意識はありました。喘息と肺炎の診断でストレッチャーで運ばれる途中、病院の廊下の壁の大きな鏡に一瞬映った私の顔は真っ白でした。

ベッドに移り、酸素マスクと、右手にステロイドと抗生剤の点滴と、左手に酸素の取込み量を計る機器。チューブやケーブルが一杯です。

症状の一番ひどかった入院当日の、夜から翌日の朝にかけて計 3 回の痰の吸引をやりました。初めての体験でした。痰を取っていただいて楽になれるはずなのに、吸痰のチューブが挿入されている間は息ができず、すごく苦しくてグエーッと何度もうめきながら、嘔吐きながら、でも同時に、

「そうか、これか。当事者のみんなが言っていたの、こういうことか。チューブをここまで入れるのか。苦しい。いつまで続くの。苦しい」

そして粘膜にチューブの先のエッジが当たる感覚。うめきながら、体感に没頭している自分を認識しました。

当事者の人たちが「すごく苦しいけど吸引をしてもらうと一時楽になります」といつも言われているのはこのことだったのかと、みんなの顔が浮かびました。

施設での指筆談の対話支援中に、「苦しいので痰を取ってほしいから呼んで来てください」と言われて呼びに行ったらすぐ来てくれて吸引をしていただければよいけれど、「今すぐ行けないけど、あとどのぐらいで行きます」と説明してくれたり、「吸痰の間隔が短いとチューブが通る粘膜に負担があるからもう少し我慢できるかな」と回答をもらったり。

すぐ取ってもらえればベストですが、すぐに吸引がなされなくても、何かご本人が納得するそういう対応に繋がった時は、ちょっとは役に立ててよかったと思ったりはするのですが、「高木さん、ありがとう」と当事者の人がわざわざ言ってくださると、そんな些細なことでお礼なんて言わなくていいのにと思うのです。でも「伝えてくれてありがとう。高木さんがいてくれてよかった」と、やっぱり言ってくれる、そのことの意味が、今回確かにわかったような気がしました。

投薬にあたり説明のあったステロイドの副作用の下痢や不眠は私にも当てはまり、また肺の炎症により食事を取ると後はしばらく息が上がりボーッとしたり。

間でバイタルチェック、診察、検査、吸入薬の吸引や、栄養士さんが来たり、薬剤師さんが来てくれたり。栄養士さんは昼食時に来られて私が食べるのを見ながら、おかずをもう少し小さくカットして出しますとアイデアを。咀嚼時の呼吸の負担を減らすためだそうです。すごく手厚いです。

そして、理学療法士の先生が喘息の患者用の呼吸法を教えに来てくださいました。正に目から鱗。驚天動地。理学療法士の先生は神でした。

この続きを読みたい方は、6 月発行のマガジン 65 号で真っ先に「ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！」を開いてくださいね！

体調はおかげさまで順調に回復中です。早く良くなって、みんなとの意思疎通の取り組みを再開して、当事者・ご家族の笑顔が更に増えるように、一緒に進んでゆきたいと思います。

No Promises. Just Possibilities.

確約はないです。でも可能性は常にあります！あなたがわかっていること 伝えたい。情報を必要としている方、意思を表出しているのにそれがまだ伝わらないあなたの大切な方に、指筆談ヨミトリとヨミトリ君が届きますように。

ご一緒しましょ！

https://www.goisshoshimasho.com/

ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！
休載

付け加えることができる価値は何か？

～　記憶の湾、生命の湾、ハワイの戦争遺産と自然保護　～

9

千葉　晃央

真珠湾攻撃の跡がそのまま

　真珠湾航空博物館へ。ここも真珠湾では標的とされ、日本軍の攻撃の銃創が現在も残されている。当時はアメリカ軍の航空機の格納庫として利用されていた。現在、空軍基地に併設され、道を挟んだ向かいは軍の訓練施設。ここには現存する数少ない日本軍機が展示されている。また「ブッシュ父」が載った訓練機も展示されていた。敷地内には、ヘリコプターから戦闘機まで数多く、



駐機されており、この日はラジコン飛行機の愛好家の集まりも行われていた。



　子どもの頃にプラモデルで作った戦闘機が野ざらしで展示されている。F4 ファントム、F14 トムキャット、F15 イーグル、F16 ファイティング・ファルコン、F18 ホーネット…。特に F14 はアニメ作品にも多数描か





れ印象深い。F15 は私の子ども時代、最強とされ、今も名前を聞く。ホノルル滞在中は、戦闘機が空を飛んでいることが多かったが、その機影は明らかに日本で見るものよりも最新鋭で F22 ラプターとか F35 とかのものであった。



「価値」を伝える「自然保護区」

ハナウマ・ベイ自然保護区はホノルルの東南の島の突端に位置している。ここはパンデミック以前、誰でも自由に訪れることができたそうである。しかし、現在は入場料を払い、予約制での入場として、自然を保護している。ウミガメも生息し、サンゴ礁もある。シュノーケリングスポットとしても有名である。ここは「環境」を活かした、「自然教育」「環境教育」が行われおり、オーバーツーリズムで人がどこでも無制限にあふれる「京都」とは対照的である。



まずは入場料である。その資金でサステナビリティに必要な財源としている。また予約制で必要以上には受け入れない姿勢も徹底されている。また、入場前には自然環境の意義やハナウマ湾の希少性が講義と展示等で伝達され、最後には映像でも入場後のマナーが示される。

「生き物に触れてはいけない」、当然「サンゴ等を踏んではいけない」「給餌の禁止」もあった。シュノーケリングのアイテムも空気で膨らませるライフジャケットのレンタルなども行っていた。

到着時、駐車場は満杯。駐車まで何度もぐるぐる回り、最後は女性の保護区長にガイドの方が掛け合って、従業員用駐車場を開放してもらって駐車できた（「ハリーアップ！」と怒られる）。





ウミガメとの再会と保護活動

初めて、ウミガメに出会ったのは以前対人援助学マガジンで連載していた大野睦氏（大阪から屋久島に移住し、ネイチャーガイドの会社を経営しながらウミガメの保護活動を継続）の保護活動に同行したときである。今回、大野氏からの誘いもあり、「NPO法人日本ウミガメ協議会屋久島支部」の活動に協賛をすることにした。その活動は「Sea Turtle Association of Japan Yakushima（以後 STAY）」であり、ラムサール条約登録 20 周年を記念して、鹿児島令和ロータリークラブ特別協賛でウミガメ保護活動の継続を強化している。その活動拠点の調査基地を設置し、その外壁に協賛の広告が掲示される（「対人援助と家族支援ちばっち」のロゴを掲示させてもらいました）。



屋久島は北半球最大のアカウミガメの産卵地で、なおかつアオウミガメの日本の北限の産卵地。ボランティアが中心となって島内の産卵状況、産卵環境の調査を行っている。その調査の継続を可能にし、将来もこのウミガメが来る自然環境を子どもたちに見せるために保護活動が行われている。



戦争遺産と自然遺産のあいだで

振り返ると、これだけ大量の兵器を間近で見たのも初めて。展示という置きっぱなしの航空博物館。1機の値段は億単位。軍備というのは、超高額な航空機などの兵器がこうして消費される。まるで飛行機の墓場のよう。真珠湾にはこうした「戦争遺産」が各所にあり、世界各地から多くの人が足を運んでいる。

ハナウマ・ベイ。こちらの湾は自然遺産として、緑豊かで自然が本来持つ姿の価値を発信している。どちらも、安全な暮らし、充実した日々を目指すために存在しているといってもよい。

現在、大国であるロシアもアメリカも戦争をしているのが世界情勢である。兵器は長距離ミサイルとドローンが幅を利かせ、戦術に大きな変化がみられる。今後、戦争遺産や戦跡や兵器の博物館は増えなくていい。ハナウマ・ベイのように自然に関する価値は広がって欲しいと願う。

第１５回対人援助学会広島大会では、「被爆樹木を巡るフィールドワーク」が行われ、原爆投下を生きぬいた木・被爆樹木、長年市民によって守られてきた被爆樹木たちにスポットが当たった。自然は常に搾取され、反抗しない。それはおかしいのではないかと川に人格を持たせる、その代弁者を住民が組織しながら、企業や国の過剰な自然破壊を訴える裁判も世界ではある。これは「自然の権利」と呼ばれ、自然を単に人間のための資源として扱うのではなく、人間と自然との対等な立場での共存を試みる取り組みである。こうした活動にも注目し、支えていきたい。

臨床社会学の方法(52)

―男性・男性性の現在を把握する研究の動向―

中村 正

1．男らしさ、男性・男性性研究と男性の現在

男らしさ、男性・男性性研究が盛んになりつつある。もちろん、女らしさ、女性・女性性研究に比べるとまだまだ少ない。そして何よりも、思潮や思想としてのフェミニズムに対応するようなものはない。マスキュリニズムとはいわない。男性主義のようになるからだが、マジョリティ（多数派）集団は抑圧側なので言葉をつくりにくい。二項対立風にいえば、健常者と障がい者、白人と有色人種、男性と女性、資本家階級と労働者階級、異性者者と同性愛者などの社会的な対立軸があり、前者は集団として支配的な社会的地位となり、社会構造としても特権的なマジョリティという地位を占める。後者はマイノリティとして、受苦的でもあり、社会への批判的なポジションに立つ。構造的な劣位、何らかの脆弱性、差別を被るなどして社会の矛盾を映し出す。健常者中心主義、家父長制やジェンダー秩序、資本主義社会、ヘテロセクシズム（異性愛中心主義）、レイシズム・人種差別主義や民族抑圧などが批判的ポジションから社会構造として把握されていく。

少し前になるが『現代社会学辞典』（弘文堂、2012 年）で「男性問題」という項目を執筆した。次のように書いた。「ジェンダーは性において非対称な関係性があることを指摘し、集団としては支配的な地位にあるジェンダーとして男性をとらえた。人格形成、対人関係やコミュニケーションの仕方、感情規則、行動様式等の総体に男性性ジェンダー作用がみられる。また、男性に期待されるライフスタイルとライフコースが編成され、社会的諸属性（階級・階層、学歴、職業的地位等）や家族的構成（出生順位、家族履歴、親族関係等）と相関して、個人としての男性の有り様が形成されていく。社会的役割として、ライフサイクルにおいて少年、夫、息子、父親という諸相があり、ここに家族関係、性・セクシュアリティが関わり男性の多様な生活が構築される。男性役割は、弱くあることの否定、防衛機制としての虚勢（暴力）、逸脱行動と攻撃性の媒介、感情面での脆弱さ、ケアからの疎外等の動因となりやすく、全体としての人間性形成に困難をきたすように作用する。その結果、男性の生き辛さや行動上の諸問題が派生する。」と。

しばらく前の原稿なのでアップデートしなければと考えている。ジェンダー秩序として記せば記すほど、二項対立的な思考を強化することになるので、それを回避する

ためにポジショナリティという概念が登場し、多様な属性の交差を意識してジェンダー構造を把握するようになっている様子を追記する必要があるだろう。特に若い研究者たちが取り組む男らしさ、男性・男性性研究はポジショナリティ論からのものが多く、多様な男性の現実を把握するための視座、概念が豊富になりつつある。しかも社会構造との結びつきを視野に収めるような内容が多い。

しかしそうした追記をし、アップデートしたとしても、なお男性・男性性研究として括ることで研究を行うしかない面もあり、ジェンダー研究の半分足りていない領域を開拓していることに変わりはない。だからどうしても二項対立的な思考を強化することになる。

「男らしさ」という言い方は規範的な側面なので、批判的研究の対象として議論しやすいが、男性それ自体の把握は必要で、「男性の現在」として切り出す必要はある。それでもこの立論も難しく、ジェンダーギャップの甚だしい社会として名指しされている日本社会のなかでは、男性の現在や男性性の客観的把握を語る際であっても特殊な見方をされることが多い。たとえば、男性の困難を語ると、それは「男もつらいよ型男性研究」と名付けられ、たとえそれが社会構造的な視野を有した研究や言説であってもある種の渦のなかに巻き込まれていく。

また、「男性の現在」の研究は、加害と被害という二項対立のなかで位置付けられることも多く、男性＝加害者ポジションという固定観念があり、なかなか難儀な立論を迫られる。生理・生殖・身体に関わる男性それ自身の研究、育児、介護、家事などの再生産やケアにかかわる男性の研究、仕事、労働と男性、メンタルヘルスと男性、戦争と男性など、男性と男性性に関連するテーマは多い。こうした男性の生態を学問的に把握することが男性・男性性研究のコンテンツとなる。男性性として当該社会において観念される意識（男らしさ規範）もあり、それが体系化されていき文化となり、実践として習慣的日常のなかに定着している面がある。総じて言えば、男性・男性性の文化である。ジェンダー研究の裾野を拡大するためにも、社会意識、文化規範、習慣行動などをささえる人々の観念としての男性・男性性は正確に把握しておくべきだろう。わかりやすく言えば「男性白書」のようなものが必要だろう。次にこの点を強調した研究を検討しておこう。

２．報告書「アメリカ男性の実態 2023：危機と混乱から希望へ」の紹介

2-1 調査の概要

紹介するのは STATE OF AMERICAN MEN 2023 : FROM CRISIS AND CONFUSION TO HOPE（「アメリカ男性の実態 2023：危機と混乱から希望へ」）である。以下、重要だと思える箇所を部分翻訳しつつ紹介しておく。

この報告書で提示するデータは、2023 年に米国男性 2,022 名を対象に実施したオンライン調査に基づく。サンプルは米国人口の多様性に可能な限り近い構成で構築されたという。米国内の 18 歳から 45 歳の男性全員を対象とした。この年齢層を設定したことで、成人期を迎え、キャリアを築き、家族形成を試みる若い世代の男性に焦点を当

て、比較分析を深めることを目的としている。回答者に対しては、年齢、人種・民族、教育レベル、地域、性的指向に基づき、最低割当数と上限制限を適用し、米国実人口構成に可能な限り近似するよう配慮している。

社会生活の質、ストレスと幸福感の経験、オンライン生活、そして彼らがジェンダー平等を受け入れ健全な男性像を志向する程度について、その現状を捉えようとした。

この調査の主要テーマは以下の通り。①男性たちはどう過ごしているか。②彼らは自身の生活や将来、人間関係、恋愛生活、目的意識をどう感じているか。③ストレスや苦痛を処理するため、あるいは指針やインスピレーションを得るためにどこに頼るか。④男らしさについて誰の意見に耳を傾けているのか。彼らは健全な男性像を志向しているか、それともその反対か。⑤デート、ポルノグラフィー、インフルエンサー、社会的つながりに関するオンライン生活はどうか。⑥男女平等を支持するか反対するか。

2-2 調査の背景にある三つの問題意識

この報告書は、「エクイムンド」という団体が発行している。「男性性と社会正義センター」が正式名称である。2011 年より活動し、男性と少年をジェンダー平等の同盟者として巻き込み、健全な男性性を促進し、暴力を防止しようとする団体である。「エクイムンド」は世代を超えた有害性のパターンを変革し、少年と男性が生涯を通じてケア、共感、責任感のパターンを育むことで、ジェンダー平等と社会正義の実現に取り組むことを促進させようとしている。

調査は三つの主要な問題意識を背景に取り組まれたという。第一に、#MeToo 運動や女性の平等・フェミニズム運動を背景に、一部の男性(特に若年層)がジェンダー平等への支持を後退させていること。第二に、少年・男性が直面する雇用・健康・目的意識・教育意欲・精神的健康・孤独・人間関係の問題が不安定な状態を生み、反動的な運動の訴求に脆弱化していること。第三に、周縁化されたグループの男性における不安定性は特に深刻であること。

これは米国の男性は危機に瀕しているという問題意識でもある。多くの男性が将来に不安を感じ、自らのアイデンティティが脅かされていると認識している。

この不安は少年期から成人期にかけて常に内在してきたものだ。「男らしくしろ」「真の男たれ」と求められる少年や男性は、強靭さ、自立心、支配性、無感情さといった重なり合う不可能な基準を必然的に満たせず、自らのアイデンティティそのものを否定されているともいえる。

こうした男性的規範は、男性と少年たちの生活のあらゆる側面を支配し、家庭生活、学校、スポーツ、その他のコミュニティ空間に織り込まれている。これらの規範は、思いやりを持ち、感情的につながり、協力的な人間としてのアイデンティティを自信を持って確立する選択肢を若い男性たちから奪っている。多くは完全に孤立感を抱き、達成感の欠如、不完全雇用、ネット依存といった私生活へ退避し、「一人でやっていける」という偽りの姿勢へ逃げ込む。女性嫌悪や白人至上主義に慰めを見出す者もいる。確かに、あまりにも多くの男性が、女性の平等と人種的正義のために必要な行動を無視し、あるいは反対している。

一部の男性の怒りと有害な男らしさの概念への固執は、男性全員を傷つけている。

この研究が示すように、若年男性の 3 分の 2 が「誰も本当の自分を理解していない」と感じている事実は、彼らの繋がりや人間関係の脆さを露呈している。

2-3　男性の孤立がテーマ

多くの人々は完全に孤立感を抱き、達成感の欠如、不完全雇用、ネット依存といった私生活に逃げ込み、独力でやっていけるふりをしている。女性嫌悪や白人至上主義に慰めを見出す者もいる。確かに、あまりにも多くの男性が、女性の平等と人種的正義のために必要な行動を無視したり反対したりしている。

一部の男性の怒りや有害な男らしさの概念への固執は、私たち全員を傷つけている。若年男性の 3 分の 2 が「誰も本当の自分を理解していない」と感じている事実は、彼らのつながりや人間関係の脆さを露呈している。この結果は、より誠実で、より地に足がつき、より繋がりを感じ、より意味のある人生を求める呼びかけであると受け止めるべきだ。

本調査の結果が多くの人々を不安にさせるだろうという。保守派は、この調査が男性を非難し、責め立て、米国の男らしさを貶めていると主張するかもしれない。しかしこの調査は、男性への思いやりを示し、全ての人々の利益のために健全で繋がりのある男らしさの形を構築し支援するよう、男性全員への呼びかけなのである。

2-4　7 点にまとめられる男性の現在

調査から男性の現在を 7 点に要約している。

第 1 は、「不安定な男性たち」である。あまりにも多くの男性―特に若い男性―が社会から孤立し、将来に悲観的になり、ネット上の怒りに走っている。若い男性は分析の複数の領域で明確なグループを形成し、抑うつ症状、自殺念慮、孤立感の発生率が高い。「誰も本当の私を理解していない」という意見に 65%が同意したことからも明らかだ。全男性の 40%が抑うつ症状を示す。全男性の 44%が過去 2 週間以内に自殺念慮を抱いた。若年男性は抑うつ症状と自殺念慮が最も高い。全男性の 40%が「男性権利」「反フェミニズム」「暴力擁護」を唱える男性コミュニティの声を信頼すると回答。若年男性のほぼ半数がこうした声を信頼。18～23 歳の男性は将来への楽観度が最も低く、社会的支援も最低レベルである。18～23 歳の男性の 65%が「誰も本当の私を理解していない」と回答している。

第 2 は、フェミニストの同盟者か、それとも反対者かの選択に立たされている点がある。ジェンダー平等の進展が緩やかな中でも、多くの男性は同盟者となる用意がある一方、混乱を示す者もいる。男性の約半数は女性のエンパワーメント政策に反対または疑問を抱いている。半数以上が「現代アメリカでは男性の方が女性より厳しい立場にある」と認める一方で、大半は中絶の権利を支持し、職場や友人関係で同盟者としての行動を取る者も多い。男性が女性の権利運動にどう反応し、あるいは反対するかは一様ではない。つまり、男性を同盟者として巻き込む取り組みは、男性の見解や声の多様性を考慮し、精緻に研究された、ニュアンスのあるものでなければならないことを示唆している。

53%の男性が「今日の米国では、男性は女性よりも厳しい状況にある」と同意している。全男性の約 3 分の 1 が、性的関係後に

虐待の疑いをかけられることを懸念している。47%の男性が「フェミニズムは米国をより良い場所にした」という主張に反対している。男性の約 3 分の 2（65%）が、中絶はほとんどの場合または全ての場合で合法であるべきだと考えており、この意見は若い男性で最も高い割合を示している。16%の男性が、女性を傷つける冗談を言う友人を注意したことがあると回答している。

第 3 は、現実よりも充実したオンライン生活についてである。オンライン生活はつながりを提供するが、しばしばオフライン生活を置き換える。多くの男性はオンライン生活をオフライン生活よりも有意義だと認識しており、ほぼ半数が仮想的なつながりが「人生の他の部分よりも魅力的でやりがいがある」と回答している。

若い男性の約 3 人に 1 人は、前週に世帯外の人と直接会う時間が全くなかった。男性のほぼ半数（48%）が、オンライン生活はオフライン生活より魅力的でやりがいがあると回答した。身近な地域で親しく頼れる人が 3 人以上いる男性はわずか 22%である。若年男性の約 30%が、過去 1 週間で世帯外の人と時間を過ごさなかったという。男性の 6 割が少なくとも週 1 回はポルノサイトを閲覧している。

第 4 は、「愛を求めて」いる。男性は真剣な恋愛関係を望んでいるが、多くは見出せていない。調査結果は、若い男性ほど独身である可能性が高く、性的パートナーが少なく、あるいはセックスレスである可能性が高いという最近の報告を裏付けている。全体として、調査対象者の大多数は、満足できる安定した関係にあるとは言えなかった。22%の男性は「ほとんど交際相手を探していない」か「性的パートナーを見つけられない」状態にある。13%の男性は「一時的な関係はあるが、より真剣な関係を望んでいる」と回答。38%の男性は「安定した関係にあり、概ね満足している」と回答。46%の男性がデートアプリを利用した経験があり、そのうち真剣な関係を望む割合がカジュアルな関係を求める割合を上回った。

第 5 は格差が深刻である。低所得で大学教育を受けていない男性は、社会的支援と楽観性が最も低いと報告している。大学教育を受けていない男性は特に不安定な立場にあり、社会的支援や楽観性を含む幸福度測定において最下位に位置している。「近代化の文化的敗者」として、彼らは怨恨と反動の政治に特に影響を受けやすい。 最低学歴の男性は社会的支援・人生の目的・楽観性が最も低い。「誰も本当の私を理解していない」と答える割合も最高である。高卒以下の男性の約 6 人に 1 人が「全く社交活動がない」と回答している。学士号未満の男性は統計的に有意に高い割合で「スマホやネットに費やす時間を減らすべきだとよく考える」と回答しており、オンライン生活への依存を裏付けている。

第 6 は「誰も信用しない」点である。若い男性は、政治家、公人、公的機関に対して明確な忠誠心をほとんど持っていない。私たちのデータは、年齢や性別を問わず、公的機関に対する信頼度が低いことを示している。このデータは決して新しいものではない。このデータで注目すべきは、この信頼度が若い男性の間で最も低いことが多いという点である（ただし、公立学校は例外で、若い男性は年配の男性よりもわずかに信頼度が高い）。また、ジョー・バイデン大統領もド

ナルド・トランプ前大統領も、男性の過半数の信頼をほぼ得ていないことも注目に値する。これらの調査結果は、私たちがこの課題に立ち向かい、若い男性たちとの架け橋を築かなければならないことを示しています。若い男性の態度は、国の一般的な政治的二極化を反映しており、全年齢層の男性の 29% がバイデン氏を信頼すると回答しているのに対し、トランプ氏を信頼すると回答した全年齢層の男性は 24% に留まっている。最年少の男性の多くは、バイデン（15%）よりも、オンライン上で女性嫌悪的な発言を行うインフルエンサー、アンドルー・テイト（20%）を信頼している。連邦政府から警察、地元の学校に至るまで、公的機関や公共機関に対する信頼度は14%から31%の範囲である。

第7は「男性像の罠」である。男性中心主義コミュニティと怒りの声は、より多くの男性を「有害な男性像」へと駆り立て、多くの男性に人生の目的を提供している。現代の男性性に伴う圧力と不確実性の中で、女性蔑視的な見解や慣行は健在であり、近年ではむしろ人気を増しているケースもある。

このデータは、一部の男性に意味と目的を提供する男らしさの形態こそが、最大の社会的害悪を引き起こしていることを明確に示している。これは、より高尚で、繋がりを重視し、公平性を求め、社会を修復する男らしさの形態を育むという喫緊の課題を示唆している。同時に、変化する世界で自らの居場所を探る男性たちの現実に対して、批判と共にある思いやりを持つことの必要性も問いかけている。2023 年現在、若年男性の間では 2017 年よりも男性像に関する制限的な見解が広く浸透している。政治的見解、年齢、人種、教育水準は態度形成と統計的関連性を示すものの、いかなる男性集団においてもこうした制限的な考え方は根絶されていない。男性の 3 分の 2 は、男らしく振る舞うことでより称賛され受け入れられていると感じている。

2-5 男らしさ規範へのとらわれ

「マンボックス」（男性は女性パートナーを支配し、弱さを示さず、紛争解決に暴力を使うべきだという広く共有された価値観）を遵守する男性は人生の目的意識が最も高く、一方、男性性について最も進歩的な見解を持つ男性は人生の目的意識が最も低い。

最後に、こうした調査をもとに問うている。「私たちに何ができるのか」と。完全なジェンダー平等を実現するには、より繋がり、より共感し、より公正な男性像が必要だ。そうした男性像はすでに私たちの身の回りに存在する。私たちは、女性や少女、ノンバイナリーの人々のためのジェンダー平等を支持しつつ、男性や少年たち自身のためにより良い生活と健全な男性像を促進する対話を実現でき、また実現しなければならない。

要するに、少年や男性は「大丈夫」ではない。彼らの不快感や混乱は、ジェンダーや人種的公平性への支持が弱まっていることと関連している。しかし、希望の兆しも確かに存在する。多くの男性がジェンダー平等と健全な男性像に賛同している。これを基盤に、ジェンダー平等と人種的正義のためのアライシップ、そして健全で繋がりのある男性像がもたらす明白な（そして数多い）利益について、大規模な物語の転換が必要だという。そして男性がこうした対話の中に目的と志を見出せるよう支援しなければな

らない。

この調査から、深い確信と思いやりをもって対話に臨まねばならないという。特に「男らしさの枠組み」に強く惹かれる多くの男性が置かれた不安定な立場を考慮すべきだ。本調査は、完全なジェンダー平等と人種的正義のために男性がより良い同盟者となるべき方法について議論を推進する全国的取り組みの始まりに過ぎない。調査をもとにして、政策立案者、職場、メディア、スポーツ界、非営利組織を横断する連携を構築し、あらゆる性自認を持つ個人の利益のために健全な男性性を促進することを目指す。

本報告書と並行して、家庭内暴力・性暴力根絶に取り組む国内主要団体の一つである「Futures Without Violence」と「Center for Masculinities and Social Justice」は、健全で積極的な男性性のための全国プラットフォーム草案作成に向け、戦略的円卓会議を開催するという。この会議では、以下の 5 つの主要テーマにおける変革を実現する行動計画を策定する。テーマは、職場と経済的役割、ケア提供、メンタルヘルス、人間関係、そしてアライシップ（支援者としての役割）である。

3．男性性の文化の強い国の国際比較の研究から

また別の「男性性研究による社会研究」がある。G. ホフステード（マーストリヒト大学名誉教授），G. J. ホフステード（ヴァーヘニンゲン大学准教授），M. ミンコフ（ブルガリア国際大学准教授）らの共同研究である。岩井八郎（京都大学教授），岩井紀子（大阪商業大学教授）／訳の『多文化世界－違いを学び未来への道を探る』有斐閣、2013 年）である。

ホフステードの「男性性/女性性」は、社会が「達成や競争（男性性）」を重視するか、「生活の質や協調（女性性）」を重んじるかを示す指標を用いて国際比較を試みている。日本は 95 点と世界で最も男性性が高い国で、競争・仕事・地位を重視している。一方、北欧などは女性性が強く、ワークライフバランスや思いやりを重視する。これは文化次元モデルの一つである「男性性（Masculinity）と女性性（Femininity）」に焦点を当てている。

「男性性と女性性の定義」として生物学的な性別（Sex）ではなく、社会的な役割（Gender）の分化の度合いを意味するとする。男性的な社会（Masculine societies）では情緒的なジェンダー・役割が明確に分かれている。男性は「強さ、自己主張、物質的成功」が期待され、女性は「謙虚さ、優しさ、生活の質（クオリティ・オブ・ライフ）」に焦点を当てることが期待される社会だと操作的に定義をする。

女性的な社会（Feminine societies）は男女のジェンダー・役割が重なり合っている。男女ともに「謙虚、優しく、生活の質を重視する」ことが期待される社会だとされる。

日本は調査された国の中で最も男性性スコア（MAS）が高い国の一つ（約 95 点）とされ、イタリア、メキシコ、アメリカなども高い傾向にある。対照的に、スウェーデン、ノルウェー、オランダなどの北欧諸国は極めて女性的な社会に分類されている。男性性と女性性に紐づけて社会の特性を語ることがジェンダー研究からは批判され、その後、名称変更がなされた（2023 年末から

2024 年初頭にかけて、Hofstede Insights はこの指標の名称を「Motivation towards Achievement and Success（達成と成功への動機付け)」へと変更した。これはジェンダーをバイナリー（二分法的）に扱うことへの顧客の不快感を考慮したという。二分法的思考にならないようにという配慮だが、最近まではこの男性性－女性性の軸が達成と成功への動機に関わるものとして指標化されていたこともありそのまま紹介しておく。

ホフステードの達成志向と成功志向（旧称：男性性対女性性）は、競争・積極性・物質的報酬を重視する傾向（高 MAS）と、協調・謙虚さ・生活の質を重視する傾向（低 MAS）を測るものだ。高得点文化（例：日本、ドイツ）はキャリアの成功と野心を重視し、低得点文化（例：スウェーデン、ノルウェー）はワークライフバランスと調和を優先する。日本は、男性的志向社会であり（例：日本、米国、ドイツ)、競争、達成、自己主張、物質的成功に駆り立てられる傾向がある。職場文化としては「働くために生きる」という姿勢で、野心・権力・業績が重視されている。性別役割はより明確で、男性には積極性と競争心が求められると男性中心社会であることが指摘されている。他方、女性的社会（例：スカンジナビア諸国、オランダ）では、協調性、謙虚さ、弱者への配慮、生活の質を重視されている。労働文化としては「生きるために働く」というワークライフバランス志向が強く、人間関係・合意形成を優先されるという。性別役割は流動的で重なり合い、男女ともに謙虚さと思いやりを重視する。それを一覧にしたに種類の図を掲載しておく。一つはホフステードらの男性性と女性性の定義に用いた指標である。二つは権力性と交差させて男性中心社会であることの度合いを国際比較したものである。男性らしさの強い社会という指標で日本は得点が高い。

一般の意識だけではなく学問の言葉でも男性性や女性性とされる意識や行動があり、それを仮置きしてそれに基づいて社会を比較する試みなので一定の傾向は読み取れる。

４．男性・男性性の生態のなかからの男性相談－「木を見て森も見る」

一般社団法人 UNLEARN は脱暴力を試みる拠点であるが、その過程はそう簡単ではない。これまで暴力的であった生き方の特性が、脱暴力過程にも反映されるからだ。暴力を振るう加害男性と対話していると、たとえば、解決を急ぐこと、問題解決について自分で決めてしまうこと、もう自分は大丈夫と思い込み相談に来なくなること、相手も悪いと述べることなどが散見される。この行動特性は日常的であるのだろう。したがって、暴力の出来事それ自体というよりも、暴力を含んで成立している彼の日常生活という生態学的な環境や行動のシステム、日常生活の営みかた、つまり関係性の組成の仕方自体を対象にして脱暴力を検討していくことになる。

一人ひとり、暴力や虐待をした男性との対話（加害者臨床的）を続けていると、彼の生きられた小さな環境が浮かび上がる。出来事としての身体的暴力は氷山の一角なのでその下に沈んでいる膨大な量の塊を溶かしていくことになる。暴力を肯定する文脈を探ることになる。「図」としての暴力事件

だけではなく「地」としての暴力や抑圧を無自覚に包含する彼のミクロ環境へと降り立っていく。これを暴力の文化として把握する作業をしている。そうすると暴力を育む森がみえてくる。男性性の強い社会と重なる。暴力を振るう男性が生きる森のようである。その森と地続きになった環境に男性である私も生きている。男性相談に携わる者の心得として森と木の双方を視野に入れることが必要だと思う。

今回は考察できないが、引き続きこうした男性の現在や男性中心社会が強い日本社会において紹介・検討していきたいことがある。

たとえば、男性たちのコミュニケーションで「私メッセージ」が難しいと感じることが多い。これも同じように男性性のコミュニケーションの渦があり、「私」が表出しにくいことがある。「私」を言語化することが主眼の男性相談の現場では極めて重要な点である。

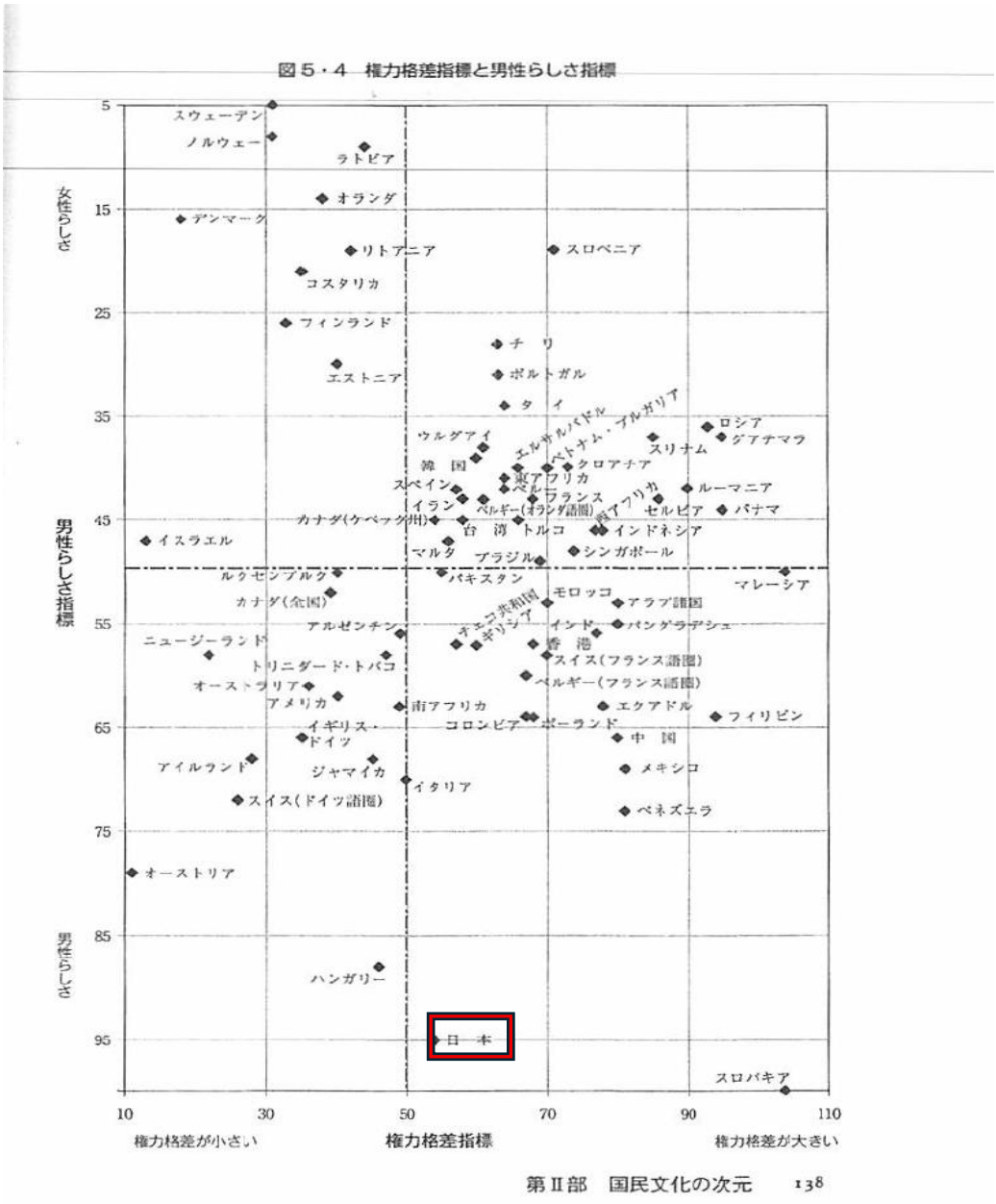
また、男性性が PTSD のように存在し、外傷をもたらすように抑圧的に作用することがある。たんに心の傷という被害者ポジションに立つ言い方ではない外傷の把握が必要なことを痛感している。たとえば、イギリス心理学会の指針（診断マニュアルではなく）があり、社会構造的なジェンダー作用を把握する新しいアプローチであるメアリー・ボイルほか著『精神科診断に代わるアプローチ PTMF―心理的苦悩をとらえるパワー・脅威・意味のフレームワーク』（北大路書房、2023 年）である。これらも今回の論点をもとに考えていきたい。男性との対話の実践から考え直す必要のある事項は多い。

表5・3　女性らしさの強い社会と男性らしさの強い社会の基本的な違い

②ジェンダー，性

女性らしさの強い社会	男性らしさの強い社会
・女性も男性も責任感，決断力，野心，思いやり，やさしさを，等しく持つべきである。	・男性は責任感，決断力，野心を持つべきであり，女性は思いやりとやさしさを持つべきである。
・女の子は男の子を応援しない。	・女性の野心は男性の成功を通じて達成される。
・女性の解放は，男女が家庭でも仕事でも平等に分担することを意味する。	・女性の解放は，これまで男性の占めてきた地位が女性にも認められることを意味する。
・基準はひとつであり，男女とも主体的である。	・ダブル・スタンダードがあり，男性は主体的，女性は従属的である。
・裸を見せることへの規範は男女とも同じである。	・女性よりも男性のほうが裸を見せることのタブーが強い。
・性に関する議論が露骨で，暗黙の象徴的表現が少ない。	・性に関する露骨な議論はタブーであり，官能を象徴する表現は暗示的なものである。
・セックスは二人の人間が関係を結ぶ方法である。	・男性の性的達成は女性にとっては搾取を意味することもある。
・セクハラはあまり問題にならない。	・セクハラは重大な問題である。
・同性愛は普通のことである。	・同性愛は社会への脅威と考えられている。

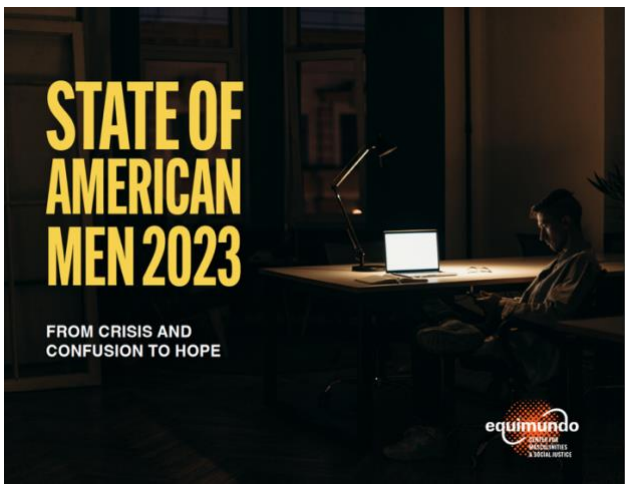
『多文化世界－違いを学び未来への道を探る』（有斐閣、2013 年）144 ページより



『多文化世界－違いを学び未来への道を探る』（有斐閣、2013 年）138 ページより



文末に紹介した PTSD とは異なるアプローチの PTMF の翻訳書と原著（ダウンロード可）



アメリカの「男性の現在」を調査した報告書（ダウンロード可）

2026 年 2 月 28 日受理

なかむら　ただし
立命館大学　社会病理学・臨床社会学・男性性研究

アソブロックの実践から考える
会社の倫理学（全 10 回）

其の 1：アソブロックが考える「事業」ってなんですか？

私が経営するアソブロック株式会社は「社会的自律（成長）支援プラットホーム」として運営しており、まだナニモノでもない、意欲十分な若手たちが多数在籍しています。**「アソブロックの実践から考える 会社の倫理学」**はその若手たちから届いたお題に、私が回答していく形で進める全 10 回のシリーズです。

会社に事業は必要か？

必要だと思います。
それこそ、事業をしたいから、会社にするというか。
継続的に取り組みたいこと、取り組んでいることのすべては「事業」だと私は思うので、「事業がない会社」なんて、ないんじゃないかと思います。

ところが！
アソブロックは「事業がありません」と公言しています。それは、世の中の事業の解釈があまりに偏っていると思うからです。そこにくさびを打ちたい気持ちも込めて、アソブロックは「株式会社なのに事業がありません」と言い続けています。

事業の捉え方が狭すぎる。それゆえに、会社の在り方に多様性がなく、窮屈に押し込まれているのではないか、という問いかけです。

アソブロックの事業は、言葉にすると、「会社の在り方について社会に問いを投げ、それを実験し、持続可能な形にすること」です。ただし、この事業は一切利益を生みません。だから、説明してもほとんど誰にも通じません。なぜなら、一般的な会社にとって、事業とは、商品やサービスを通じて、利益を生む活動を指すからです。

事業は必ずしも稼ぐ手段でなくてもいい

私は、会社における事業は必ずしも稼ぐための手段でなくてもいいと思っています。もちろん、稼ぐための手段であっても全然構わないのですが、多くの人が、事業はそれ（＝稼ぐ手段）しかないと思い込んでいる。ここが、私が矮小化され過ぎていると思うポイントです。

だからアソブロックの事業を「会社の在り方について社会に問いを投げ、それを実験し、持続可能な形にすること」だと話をすると、すぐに「それって儲かるの？」という質問が来てしまいます。そこで「アソブロックには事業がありません」と公言し、自分たちの在り方は「運動」だと呼ぶことにしました。

そもそも事業とは「目的をもって、計画的・継続的に行われる活動のこと」だと私は思います。儲かるかどうかは関係ありません。今は儲からないし、未来も間違いなく儲からない、そんな「事業」があってもいいし、そんな事業をメインに据えた会社があってもいい。言い換えると、アソブロックは、その存在自体が事業だと思っています。

継続性をどう担保するのか？

一方で、株式会社の維持継続には、お金が必要です。
人件費を筆頭に家賃や設備費、システム維持費、税金や保険料、会計や法務のコストなど、息をするようにお金が出ていきます。もちろん、それらを限りなくゼロにすることもできますが、休眠会社に近くなってしまうと、存在自体がないものと同じだと私は思いますし、「会社の在り方について社会に問いを投げ、それを実験し、持続可能な形にすること」という運動が大きくなりません。

そこで、アソブロックでは、それらのお金を「寄付をいただく」形で回しています。
という話は、また次回に。

耳より

アソブロックのポッドキャストが始まりました！
その名も「成長痛ラジオ」

アソブロックのインターン生が、「働くとは何か？」「会社とは何か？」に出会おうとする、ラジオです。
私が、初回のゲストをつとめました！

テーマは**「もらったものの返し方」**。
聞き手をつとめるインターン生が、「もらった給料分を会社に返すために働く」というから、「その発想は給料じゃなくて借金やで。資本主義に毒され過ぎです」という話をしました。
40 分ほどですが、自分で言うのも何ですが最高に面白いので、移動のおともに、ぜひどうぞ！

apple podcast
https://podcasts.apple.com/.../%E3%82%A2%E3.../id1876787174
spotify
https://open.spotify.com/show/2qh2QzKdbBc7Ui5Duy7eMc...
amazon music
https://music.amazon.co.jp/.../%E3%82%A2%E3%82%BD%E3%83...

文／だん・あそぶ
「人の成長に資する場づくり」をポリシーに、アソブロック株式会社、株式会社 ea、有限会社 salvia、株式会社小さな広場ほか、10 社近くの業態様々な会社の経営・運営に携わる。その独自の経営手法が、働き方改革の流れで注目され、全国でワークショップや講演も行っている。21 年より対人援助学会理事。24 年 4 月より軽井沢にある学校法人風越学園の理事。
https://www.asoblock.net/

カウンセリングのお作法　第46回

CON

Counseling Office Nakajima

カウンセリングオフィス中島　中島(水鳥)弘美

～　支援の記録について(4)　～

初回面接　目標　課題



支援を順調に効果的に進めるために、何について記録を残すかの四回目です。

これまで、来所前の状況記録や初回面接の問題確認段階に関する記録などについて話しました。

今回は、初回面接の後半、目標設定、課題に関する記録についてです。

今後希望する方向

初回面接の問題確認段階までに、少しずつ、家族の行動パターンやかじとりの様子がつかめてきたら、次は、今後の目標や方向性の確認をします。

これからどうしたいのか、どうなったらいいのかに焦点をあてつつ、家族それぞれの意思とくに本人の希望を尊重しながら、目標とする方向性を構築していきます。

親の前で話せない

両親がいる前で自分の思いを話すことが難しそうな場合は、子どもさんとの時間を設けることがあります。

「もしも、よかったら、一対一で話しませんか」と、両親の承諾を得て、個別の時間をつくります。

そこで、「どうなっていったらいいと思うのか、できないかもしれないとしても、どれぐらいの時期に、どうなりたいのか」本人の気持ちを確かめます。

また、うつ状態などであれば、さらに配慮が必要です。

どう改善したいのかよりも、いまよりも調子が悪くならないようにするなど、現状の共有をしつつ、状況や症状に応じて、家族全員が納得して、協力できる方向目標を設定します。

課題説明と家族の受けとめ

終盤に入ると、これまで家族からうかがった話の内容をまとめながら、

「それでは、次回までに〇〇〇〇〇〇してきてください」

と、家族に課題を提示し、その目的を説明します。

ここで大切な記録のポイントは、具体的にどのような言葉で、家族に課題を伝えたか、正確に残します。

また、課題に対する家族の反応も記録します。

たとえば、家族のなかで、示された課題について意欲的に受けとめる人もいれば、とくに反応がないように見えるメンバーがいることもあります。

家族参加のモチベーションにもよりますが、その受けとめの反応が異なる場合もあり、二回目の面接以降、どのように変化がみられるのかに注目します。

次回の面接日時

課題を説明し、家族からの質問などを受けた後、面接はいよいよ終了に向かい、最後に次回の面接予約日時を決めます。

どれぐらいの間隔をあけての面接が適切であるかを説明し、家族の都合などをききながら、決めていきます。あわせて、次回の面接までの担当者の行動として、紹介者にご家族来所の報告をしておきますと、関係者とどのようなやりとりをするのかも申し添えます。

クロージングでは、次回の来所日時をあらためて確認し、終わりのあいさつをしてすべてが終了です。

記録記入

面接が終了すると、面接中のメモをもとに、保存する正式な記録に入力をします。

面接での情報は確実に記録を残すことは当然ですが、曖昧でひっかかること、漠然とした印象など、担当者の感覚的な内容なども事実出来事と区別をして残します。

これらのなんとなくの情報が今後、家族理解や介入時のヒントとなる場合もあります。

また、記録を整理しながら、説明漏れはないか、抜けている事柄はないかの点検をします。面接後の振り返りでもあります。

二回目の面接までに

紹介者がいる場合は、記録に基づいて、紹介礼状を作成します。

⑴家族の来所日時　⑵来所メンバー　⑶初回面接の様子　⑷今後の面接内容の予定などを記入してまとめ、報告します。この報告書作成は、関係機関と協力しながら、家族を支援するために大切な情報共有となります。

さらに、二回目の面接が始まるまでの準備として、担当者は、初回面接での内容を再確認し、どのような面接内容にしていくかのプランを立てる重要な作業があります。現在の家族の状況から仮説を立て、次の面接で、検証をしていくことになります。

家族行動の変化

支援の初期において、格別注目すべき時期があるとすれば、初回面接から二回目面接までのあいだです。それは、最も大きく変化するタイミングといわれているからです。二回目の面接時に家族の報告等から変化の様子がわかります。

初回面接の前後の様子を比較すると、面接のなかで、何が最も影響したのかを検証することができます。そのためにも、詳細な記録を残しておくことが必須です。

晩年

D・A・N 通信

No.15

2025. 11. 21（78歳6ヶ月）～2026. 02. 20（78歳9ヶ月）

団　士郎



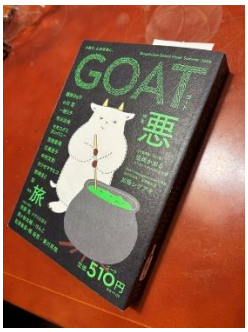
11/22

滋賀県草津市で開催中の漫画展会場で講演会。 2011.3.11 の風化もやむなしの大災害に絡めて、「周辺」というタイトルで話す。私たちは誰かの何かの取り巻きの一部として生きることが多い。



11/24

TV の読書番組で話題にしているのを目にした文芸雑誌「GOAT」。518 ページもあるのが定価五百十円。文芸誌が 4 刷もおかしい。広告もそんなに載ってないし、売れるほど赤字に見える。小学館は何を考えているのかと思わせる。まだ一部しか読んでないが、久々に雑誌が興味深い。



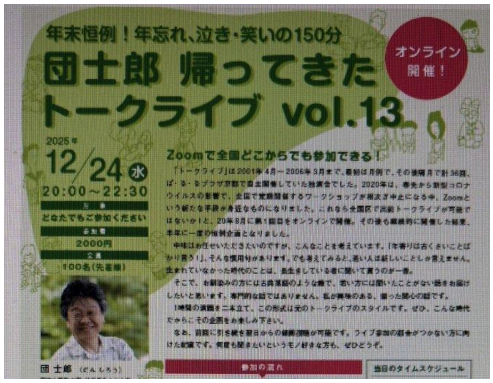
11/25

世間が連休の間に連載マンガの新作第 310 話を完成。おじさんばかりが登場の話になった。 対人援助学マガジン 63 号の締切が今日

だから、続々原稿が届く。だからそれまでに私事は完了しておくのだ。計画的だなぁ、昔はこんなことなかったのに。



今年もこういうzoomトークライブします。 振り返ると 5 年前、妻が亡くなった 10 日後に第 1 回目を行った記憶があります。 関心があれば shiro-san.com をご覧の上、お申し込みください。



11/27

昨日、地下鉄山科駅でトラブった。慌てて対応して無事乗り込んで一息。だいぶ経ってからメガネがないのに気づいた。 あの時バタバタした折に、頭に乗っけていたメガネが落ちたのに気付かなかったのだ多分。 駅に電話してみたが届いていない。落とし物は烏丸御池で全体管理しているからそちらも聞いてみたらという。早速かけてみたが繋がらなかった。この段階で諦めた。高い眼鏡なのに一年ももたずに縁のない。 今日、髪を切りに行って、その足で眼鏡屋に行こうと思った。 ヘアサロンを出ると雨が降り出していたので、傘を出そうとした時、昨日かけた履歴のスマホが目に入った。ダメ元でかけてみるとすぐに出た。 問い合わすと形状やメーカーをという。普段気にもしないが、買ったのが金子眼鏡だったのでそう告げると、おそらくそれだと思われるのが届いているという。 大喜びで急いで取りに行って無事戻ってきたのがこれ。なんでもちゃんと届けてくれる人が多いのだなぁ。嬉しい、ありがとう。



12/02

先日、ずいぶんためらっていたのだが、50 年付き合いの病を得た友人のところにちょっと立ち寄ってみた。 お見舞いとかでもなく、具合が悪ければ、仕方ないと思っていたので手ぶらで。 思いの外、体調が良かったようで、馴染みの喫茶店で久しぶりにゆっくり楽しく話せた。時は晩秋真っ只中。



12/03



仕事場近く、寺町ニ条の交差点に、ブションと言うレストランがある。 以前はちょくちょく行っていたのだが、当時から外国人のお客がとても多い。パリの下町のレストラン風。 久しぶりに行ってみたが、やはり美味しい。お昼時だったので、大賑わい。

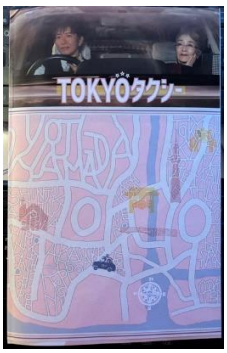


いつもとはちょっと違った表紙の対人援助学マガジン第 63 号。 12月15日の web アップを目指してただいま編集中。 五十人ほどの連載執筆者が皆、締切を守って原稿を送ってくださるのは有り難い。 自分だけは特別扱いなんて思い上がった人がいなければ、こういうことが可能なのだ。



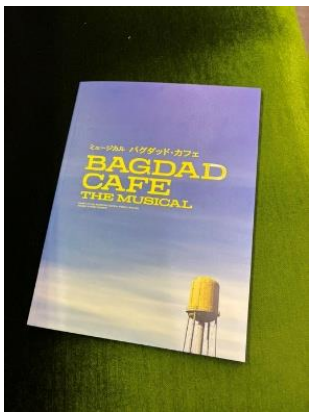
12/03

マガジン編集作業の合間、夕飯に仕事場を出る。その時思いついて、映画「TOKYO タクシー」を観ることに。 サラッと観られて良かった。ラストでうるっときた。元ネタの「パリタクシー」を観てみようと思った。



夜中、早速「パリタクシー」を観た。比較してみると、ちょっとしたニュアンスの差がなんだか良かった。

12/05



とりあえず半年見てみることにした舞台。今回は映画でも記憶のある「バグダッドカフェ」。劇場は大阪梅田ドラマシティ。席は後の方だったが傾斜もあり観やすい。オペラグラスも持っていったので不満はない。 なのに乗り切れない。もう舞台は面白いと思えなくなっているのかと心配。それなら仕方ないが、とにかく半年、6 公演は観る。



12/15

出かける仕事がない時は、ついつい仕事場にこもってあれこれやってしまう。 その結果万歩計のメーターは三桁になってしまう。できるだけ移動の用件を作って、無駄にでも出歩くよう心がけている。 とはいえ、今日もこんな雑然としたところに来る客があるのだから、その対応で仕事場籠りです。





12/16

自宅近く、昔、妻とウォーキングをしていたあたりを、運動不足解消目的に早足で歩く。起伏が結構あるので息が切れて胸が苦しくなる。普段から慣らしておかないと、どこも行けなくなるぞと自戒。 お供は audible「ババヤガの夜」。これはおもしろく快調に聴ける。以前、老婆の殺し屋の小説を読んだが、ピンと来なかったが、この主人公ハードボイルド女子はなかなかいい。 途中の公園でラジオ体操。気がついた時にはこういう高齢者向きのエクササイズをやろうと決心するが、まぁ大抵挫折だ。







時間がある時にやろうと思っていたら、いつになっても始まらない。だから今日手を出した。長年溜め続けたブルーレイ・ディスクの映画の確認作業。一冊に約 720 タイトルのものが七冊ある。つまり 5000 タイトルの映画。死ぬまでに何本観られるかな。そんなことを思いながらチェックしていたら、何度か観て大好きな「ピースメーカー」が目についた。つい見始めたら、またまた編集のスピード感に酔ってしまった。これは面白いですよ。





12/19

しばらく前、柚木麻子の小説「バター」がイギリスで大評判だと聞いたので、文庫本を買った。だが、けっこうな厚さなので思案していた。調べてみたら audible にも、と思ったら収録予定だった。それが今日、12/19 公開になった。今、久々の宮本輝を聴いているので、まだ聴き始めていないが楽しみ。 すみません、遅れています対人援助学マガジン 63 号は明日くらいにアップされます。







12/19

篠原ユキオ　サンタ漫画展をのぞいた。可愛らしい新作がたくさん。 会場で会った野々口が、引き取り手のないというお手製クリスマスグッズをくれたので、仕事場の玄関ミニギャラリーに点灯して飾る。ちょっと師走っぽいいい感じだ。





12/20

対人援助学マガジン 63 号がアップされました。今回も 300 ページ越え。 五十人以上のヒューマンサービス世界あちこちからの現状報告的記事が満載です。 ご自分の業界の近接領域に目を向けてみませんか？

昨夜は zoom の家族講座四回目。「老夫婦サブシステム」について、思うところを述べる。数日前は 76 歳になった妹と久々にランチ。一人で行くことはないのでカニを食べたのだが、昔ほど食欲は活気づかなかった。好みが変わってきたのか。 今日は広島日帰りの WS、道中の新幹線で定番のこれを食す。

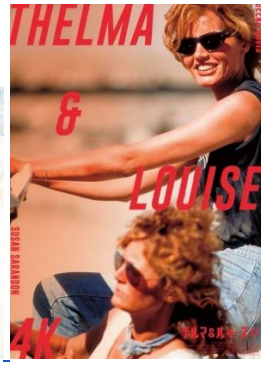




12/21

日曜日らしく過ごす１日。BDの整理の続きをしていたら、「テルマ＆ルイーズ」を見つけた。再見したいと思っていたリドリー・スコット監督作品。ぼんやりした映画館での記憶だったが、やっぱりいい。女優二人のキャラクターが素晴らしく、ポスターも魅力的。朧げに記憶にあったラストシーンには持って行かれた。





12/22

昨夜、おおいに楽しんでいたM1グランプリ。優勝者の左、赤木君は我が家の向かいの打出中学校出身らしい。我が子たちの後輩ということか。なんかちょっと嬉しい。



12/23

長い付き合いの大学の後輩でもあり、児童相談所業務に携わってきた友人たち。 イブイブにケーキを持って訪問。なんのローソクだ？と言いつつ、火をつけて吹き消す。 午後２時頃から、途中で馴染みのスペイン料理店に移って９時過ぎまで。楽しく飲み、語る。幸せなことである。





12/25

昨日のトークライブは「プレゼント」「無知学」の２つのテーマで各１時間余の二本立で話したが、最近の傾向がまた現れた。何やらうまく話せていないのではないかと心残りで仕方がない。 今日送られてきたアーカイブを早速再聴した。するとそれほど悪いとは思わなかった。今話したいことを目一杯話すのと、聞いてもらうために周到に準備したものとは違うのだなぁ。当たり前か。

12/27

快晴の昼前に家を出て、大阪天満橋駅近くの追手門学院大手前中・高校へ。「日本学校心理学会」で基調講演を頼まれていた。準備して楽しく話し終えたら、送っておいた書籍が、10 分ほどで完売！有り難し。 帰路の JR 淀川鉄橋越えの夕陽が美しい。これで今年の御用納。いい一年でした。



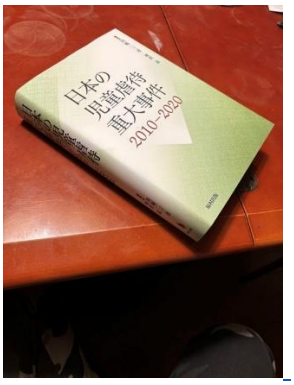
12/28

「バター」を聴き終えて珍しく影響された。 ほぼ初めてバター醤油ご飯をなるものを食べてみた。書いてあったように、冷えたバターを溶かさずに、熱々のご飯に乗せて少し醤油を。美味かった。 バターの種類など考えたこともなかったが、KALDIで二種類のお初を買ってみた。美味い。



12/29

恒例になっているｋ君との年一懇談、食事会。あれやこれやと話題は転々。 そんな時代に生きているのだし、高齢期を迎えたことを考えると、公私共にいろいろあるのは当然だ。 贈られた新著は大労作。京都府福知山児童相談所に彼が仮配置できた初対面以来五十年。お互い、仕事は減りませんなぁ。



12/31

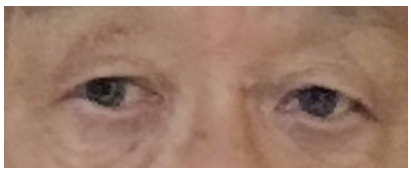
大晦日だが年末年始事は何もしていない。自宅で新作原稿に難渋しながら何とかまとめた。SNSで見かけた全く知らない話題に、30 分ほどの映像を見てみた。封印された作品より、クレームによって起きた事態に関心が向く。 今はもっと様々に過剰用心の時代を迎えているなと思う。正しいかどうかより、「そういう時代だ」の不健全学習ばかりが蓄積されてゆく。



1/1

あけましておめでとうございます。 相当な歳ではありますが、できるだけ開けた目で、物事

を見つめ続けたいです。 鋭いことなど言いたがりませんが、主観的に大切なことは忘れずに発信したいと思います。今年もどうぞよろしく。



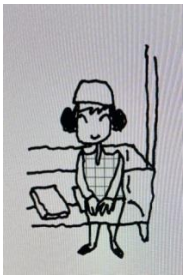
正月っぽい事はしない。去年のように 1 人用お節を買ったりもせず、日常のように月末の新作を描いたりして過ごしていた。
大晦日に次男がやってきて、持参の年越し蕎麦を 2 人で食べた。元旦には次男一家全員が揃ってやってきて、石山寺に初詣の後、AEON でタピオカミルクティー。賑やかな正月になった。





1/2
さぁ、今年の新作書初め。いや、描初めか。第 311 話「大人にする」。 ここ数年、新作に苦労してきたので、ある変化を加えてみることに。読者にはわからないことだが、作り手としては大きな改革だ。 上手くいってなくても、変更するのって決断が要る。できればこのままでとか思うのだよね。





1/5
明日から二泊三日で娘と孫がやってくる。なので 2 日から今日まで、週末の講座、WS の準備をしていた。一月も順調に忙しい。 NHK zoom 講座で無知学の話を鶴田想人さんがやるのを発見。申し込んでおく。



1/5
おいしいと思って何度もリピートしている京都高島屋の店が、こんなお店だったとは知らなかった。



　でもロンドンって美味いモノなかった記憶しかないけど、時代が変わったのだな。これしか食べないので、比較はできないけど、エビとト

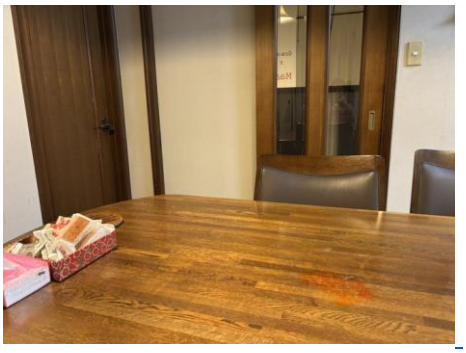
マトのジェノベーゼおいしい‼□サラダもドレッシングがいい、旨い。



1/6

娘親子が帰省してくるので、ならば仕方あるまいとテーブルを片付ける。こんな状態は１年ぶりだ。

やればできるのだが、廃棄整頓好きの娘が帰らなければ気ままな散らかしっぱなし。綺麗なのは悪くないが、散らかったのも悪くない。掃除嫌いの言い草、その通りです。



1/8

片付け名人母子が、大津市清掃局トラック依頼の作業を完了して帰った。



夜の予定(ノルマ)で大阪に。観ると決めた三回目はこれ。さぁどんな舞台なのか？



1/8〜12 日まで、オリックス劇場で演っている「サムシング　ロッテン」元気一杯の達者揃いの舞台だった。 中でも全く存じ上げない、宝塚の男役トップスターだったという瀬奈じゅんさんは愉快だった。福田雄一演出というので選んだコメディだったが 7 年ぶりの再演らしく、今様にバージョンアップしてあって、面白い。チケットの売れ行きがイマイチらしく、カーテンコールでお客さんに告知を主役がお願いしていたので書いてみた。当日券があると思う。

1/10

恒例の家族療法ワークショップ in 京都国際社会福祉センター。step2 なので、馴染みのある人ばかり二十四人が揃う。三日間実習中心の面接と理解のプログラム。 こちらは相変わらずだが、ランチの注文をしていた食堂が閉店らしい。長いものには終わりが来るな。我々も当然そうだが。



1/11
WS 二日目。朝から実在の家族事例の面接ロールプレイを立て続けに 4 ケース。 それを使って、午後から一つずつ様々な技法を駆使して事例検討、家族理解をすすめる。 先ずはジェノグラムからのケース検討。次には家族造形法で。 時代もあるのか、今回はメンタルな課題の家族多し。

1/12
三日間の家族療法ワークショップが無事終了。アンケートを見ると満足度はとても高い。それぞれの現場で仕事をするエネルギーに転換してくれると嬉しい。
ここのところずっと聴いていた「光のとこにいてね」一穂ミチ著を終えた。素晴らしい。 超間接的にだが、この小説の影響を受けて WS で、自分の担当するところを語っていた気がする。



1/13

こんな顔の頃の久米宏さんを 1 番よく見ていた。当然のように毎夜登場する、それがあの時代の生活だった。 そのずっと前、京都である児童相談関係の大会を実施するにあたって、久米宏に何か話してもらおうというプランを仲間のK君が強力に提案した。そして実際に事務所と交渉したのだが断られたという。その理由がまもなく大きなニュース番組をスタートする準備をしているところなので、申し訳ないけれどもお受けできないと言うものだった。それがニュースステーションだった。



1/18
昨日、縁結びなここに来て、久々の出雲大社。竹内まりやさんのご実家も拝見。いや〜何度見てもでかいしめ縄。
今日は朝から一風変わったスタジオで四十人ほどの参加者で一日中 WS 六時間。 初めての人たちには、馴染みのないやかましい爺さんに見えただろう。ついつい喉をフル稼働、枯れる。





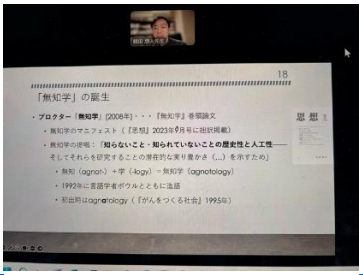
1/20

出仕事がない週なので、枯れた声の回復を願って一人静かに申告書の準備や掛軸漫画の制作。 先週末の出雲で久々に会った何人かは 30 年とか前からの縁。退職してそれぞれの道を歩む。当時若手だった人が所長になって、今回の WS を主導してくれた。 現役の若い援助職者に大勢聞いてもらえた。まだ役に立てることがあるのを幸運だと思う。 帰路にもらった超トマトが美味い。



1/21

昨夜から月に一度、4 ヶ月連続の zoom 講座で無知学の話を聴き始めた。 知らない分野の話をこんな風に受講するなんて久しぶりだ。講師の鶴田想人さんは「無知学への招待」の編者。面白いと思って読んだような展開で、本から膨らんでいくところが楽しい。



1/22

ぼむ展の作品作りが楽しい。ゆえあって古い時代の Photoshop を使っているので手間取ることも多々。 明後日の「家族理解の教科書graphics zoom 授業」の今年度最終回のため、Q&A 作り。「忠誠心」という言葉に多くの反応が。主従関係が匂うのに、みんなの中にずっとあるキーワードだからだろう。



1/24

不思議なものと巡り会うことに。木陰の物語「小雨の行列」を紙芝居にという、少々ややこしいオファーの経緯があった。それが市販品として完成した。 送ってもらったので見た。絵も紙芝居用に新たに描かれていて、全く異なる。私は原作者、なんか変な感じだ。



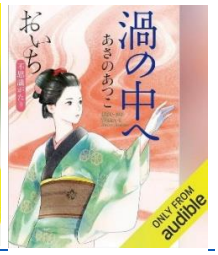
1/27

亀岡市での民生児童委員研修会で話す。

「理解が援助である」のお題で二時間弱。思ったように快調に話した。終了後、男性がとても喜んだ声を伝えに来てくれた。

往復はずっと audible を聴いている。あれこれ聞きすぎて、何やら混乱気味だが楽しい。 途上、今月の新作プランが閃く。





1/28

新作制作、マガジン連載日記、WS パワポ作成、掛軸用カラーリング、郵便物の手配トラブル対応などの合間、感想を聞かれていたドキュメンタリー「ブラック ボックス ダイアリーズ」を観てきた。 その後、御池通りの進々堂でシナモンドーナツ食べながら、マンガの下書き。夕暮れの窓景色がきれい。



1/29

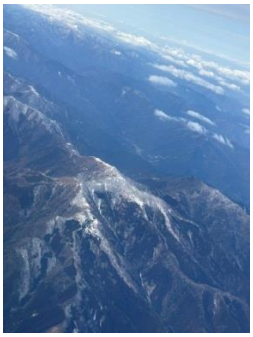


大阪で漫画家グループぼむの月例会。久々に阪急電車で梅田に。車中で連載の下書きが思いがけず捗る。 ランチは篠原選択の満席の店でこれ。その後は富国生命ビル一階のカフェでお茶、歓談。 喋ってると思いつくことがあって、まだまだ脳は干からびていないなと自覚。これが老化防止策だね。



2/1

少し雪もある四国の山並みを上から眺めて、高知に。昨夜は事務局の人たちと楽しく会食。日曜日、朝から六時間のプログラムを二十人で。なかなか活発に声の出る時間。 帰路の空港で、いつもはたたき定食だが、これが目に入ったので選ぶ。美味いかどうかは？






2/2

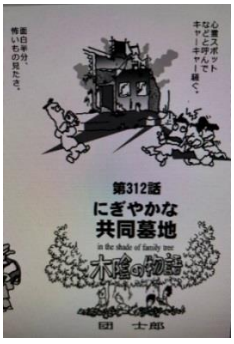
嫌な気持ちしかしない新聞記事が目に入る。こんな冬場のクソ選挙で、ホントかよ？ この先、日本はどうなるの？世間はトランプの子分で行こうと思っているの？ そんな時に書店で見かけた絵本に手が伸びた。80 年近く戦争を知らずにきた団塊世代。近年あちこちで評判がわるいけど、なぜ？





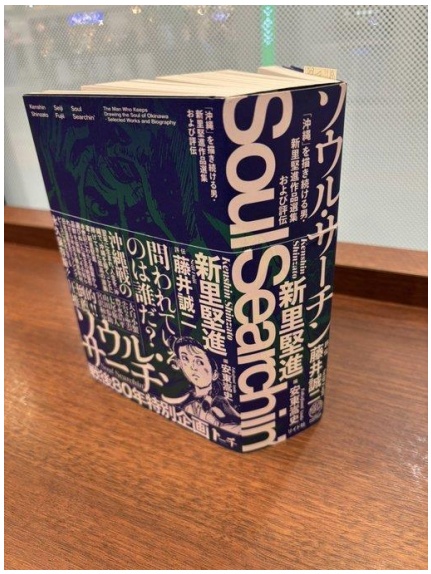
2/3

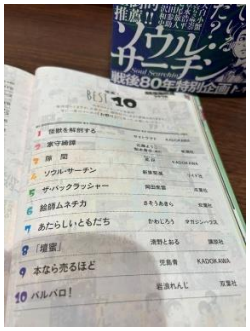
新作完了。第 312 話は「にぎやかな共同墓地」 地球ってそうだよなぁと昔、思ったことがあって、そんなタイトルの一コママンガをある企業内誌に連載していた。 地球が誰も居なくなった静かな共同墓地にならないために、新たな戦争は起こしてはならない。

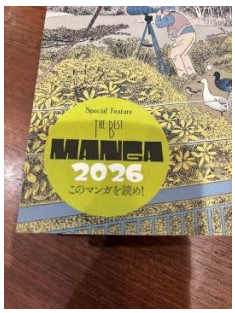


2/3

900 頁越えのマンガってどうよ？と思いつつ、文章は飛ばして読んだ「ソウル・サーチン」新里堅進　著。 毎年参考にしている、このマンガを読め！の第 4 位に入っているではないか。3 位の「隙間」も 1.2 巻は読んだ。 マンガの世界は電子書籍版から拡大していっているようだ。







2/4

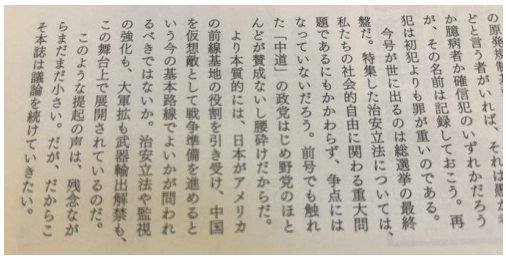
アウトプットばかりの日々。掛軸用彩色大詰めの前に、映画でもと思った。検索してみるとこれだ！と目につくものが。聞いたこともない作品だが決定。 ワクワクして京都シネマに。結構お客がいるんだ！と期待。 面白いんだけど、もっと盛り上がるかと思っていたのでまぁまぁ。パンフレット売切れ。



2/5

書店で目にしたことはあったが買ったことのなかった創刊一年半余の新雑誌「地平」。ジャーナリスト金平茂紀さんが SNS で書いていたのを目にしてポチリ。 先ほど手にしたが、編集後記の終わりに触れられていることが気になった。 購読することも責任の一つかと思った。



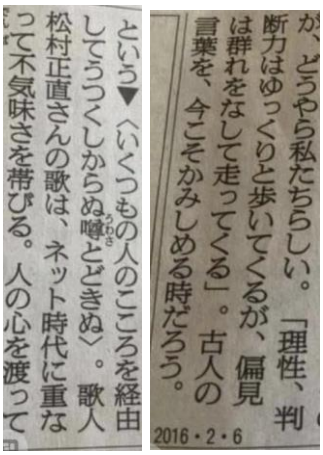

の原発裁判は、それは麻痺と言う者がいれば、それは麻痺か職病者か確信犯のいずれかだろうが、その名前は記録しておこう。再犯は初犯よりも罪が重いのである。今号が世に出るのは総選挙の最終盤だ。特集した治安立法については、私たちの社会的自由に関わる重大問題であるにもかかわらず、争点にはなっていないだろう。前号でも触れた「中道」の政党はじめ野党のほとんどが賛成ないし腰砕けだからだ。

より本質的には、日本がアメリカの前線基地の役割を引き受け、中国を仮想敵として戦争準備を進めるという今の基本路線でよいかが問われるべきではないか。治安立法や監視の強化も、大軍拡も武器輸出解禁も、この舞台上で展開されているのだ。

このような提起の声は、残念ながらまだまだ小さい。だが、だからこそ本誌は議論を続けていきたい。

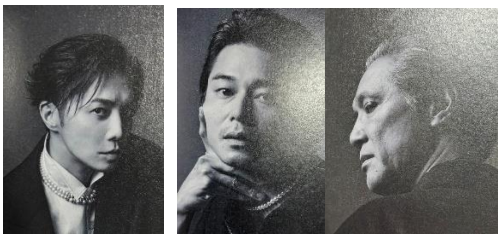
2/6

10 年前の新聞のコラムが、スマホに浮かび上がってくる。 4、5 年前にもこれを拾いあげたことがあった。 本当にそんな時代に加速しているなぁと感じられてならない。



2/6

とりあえず半年、毎月見続けると決めた舞台。本日は三島由紀夫作、「サド公爵夫人」。宮本亜門演出。六人の男優が女性に扮して台詞劇を滔々と。 4 回目にして初めてオーッと思った。 昔、シェイクスピアの作品で女装したものを見たときに感じた違和感が、この舞台では微塵もなかった。凄い。





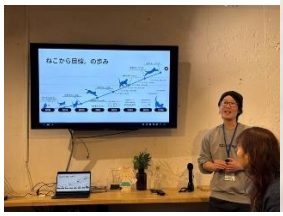
2/8

目覚めて隣家を見下ろしたらこの雪。小雪の中、投票所経由で大津駅に向かう。寒い中、思いがけず多くの人に会う。今夜目にする結

果は考えずに心中で祈る。 JR で本日の用向きの大阪に向かう。滋賀県、京都府、大阪府と 40 分ほどで通過してしまう新快速ははやい。京都も車窓は雪景色。



長年関心を持つ「ネコから目線」。その寄付者のつどいなる小さな、あたたかい会に出かけた。 仕事の拠点オフィス、ネコのシェルターを見せてもらった。現場仕事を支える整然とした清潔な基地に感動。 チーフの小池は世の中の力を集めるのか上手だ。参加者のネコ愛にも感嘆。





2/11

今週は人と会うことか多い。その間に、能登輪島漫画展に向けて掛軸発送。来月のぼむ展用新作掛軸作りのため、完成したデータを業者に送信。週末の児相近接領域山口大会の講演資料作成。 あれこれの合間に録画してあったNHKアナザーストーリー、ABB Aを見て心が動く。前にも見た気がするが。



2/12

朝日新聞文化欄に連載中のこれ。新井敏記さんは雑誌 switch 編集者として長い馴染だ。本も何冊か持っていて愛読した。沢木耕太郎さんや原田マハさんへの関心も重なっている。興味のあること、心動くことが似ている気がするが行動力が私には足りない。私には受け身の今がちょうどいいのだろう。



朝刊［大版］ 2026/2/9(月)
文化

五話る
―人生の贈りもの―
「よかったら」村上春樹からの原稿

編集者
新井 敏記 6

大学時代に池袋のジャズ喫茶で働いた時期があって、村上春樹さんが千駄ケ谷で開いていた「ピーターキャット」にも何度か伺っていました。
1979年のデビュー作「風の歌を聴け」に驚かされました。あまりに素晴らしくて。店を訪れた時、キッチンにいた村上さんの言葉を覚えています。
「僕が本当にやりたかったのは小説を書くことでした」と。
《83年、短編集「中国行きのスロウ・ボート」出版時は「POPEYE」のライターとしてインタビューを依頼した》
当時、千葉にお住まいで「バス停を降りて少し進んだ先にある赤い屋根が目印です」と教えてくれました。ちょうどランニングを終えた後の村上さんは、Tシャツとショートパンツ姿で「ビール飲もうよ」と。僕はお酒が飲めないのでコーヒーをいれてくれて。村上さんはビール と一緒におせんべい、でした。
85年に「SWITCH」を創刊した後、寄稿をお願いする度に「今は長編を書いているからごめんなさい」と独特の丸文字の返信を頂きました。でも、89年のある日、前触れなく「よかったら載せてください」という言葉を添えた原稿を郵送してくれました。後に短編集「TVピープル」に収録される秀逸な作品「我らの時代のフォークロア―高度資本主義前史」でした。
《短編の書き下ろしや翻訳作品などの寄稿を通して作家との関係は続く。2015年、創作の秘密をつづった「職業としての小説家」はスイッチ・パブリッシングから出版された》
密着でも並走でもなく、時々立ち寄るように寄稿をいただくスタイルも編集者には喜びなんです。（聞き手・北野新太）

POPEYE時代。編集長の机で＝1980年代前半、本人提供

あらい・としのり 1954年生まれ。「SWITCH」編集長、スイッチ・パブリッシング社長。

山本容子さんの描き下ろし版画とともに掲載した作品は、雑誌にとって沢木耕太郎さんの日記連載に続く金字塔のような作品になりました。

2/14

山口県湯田温泉に来ている。 33 年前に自分達で立ち上げた勉強会。予算も公的裏付けもなく、熱意を持つ人々の手で継続されて今に至る。手弁当で仕事のことを考える人々が今回参加 200 名越えで全国から。 そこには心身ともの健全さがある。メッセージが若い人々に届くことに期待だ。





2/15

33 回大会のために構成準備した三時間の話は、とてもよく聞いてもらえたようだ。昔馴染みの人々からも、褒めてもらった。 2025 年の新刊「家族理解の教科書 graphics」も、多くの方に手にしてもらえた。 若い世代の聴衆、読者、共感者を得たいと、工夫はしているつもりだが、初参加者から何人もそんな声をもらえて満足、満足。

日程を終えて、帰路につこうと出口に向かったところで声をかけられた。

この 3 月で無事定年退職を迎えるという女性だった。仕事に就いてあれこれ悩んでいるときに私の研修講座に触れたのだと言う。

そしてそれを道しるべに無事ここまで頑張ってこられました。そのことをお礼が言いたくて今回参加しました。ありがとうございましたと言われた。

そんな風であればいいなと思う事はあるが、意図的に何かができる私ではない。面白かったです、ちょっと元気になりましたで充分である。しかし、このように聞いてくださって、それを大切に仕事に活かしてくれた人があるのは、こういう役割を果たしてきた者には果報である。

長生きしてると、こんなことも聞かせてもらえるのだなと思うと、もうしばらくこの世界を賑やかしているのもいいなと思った。



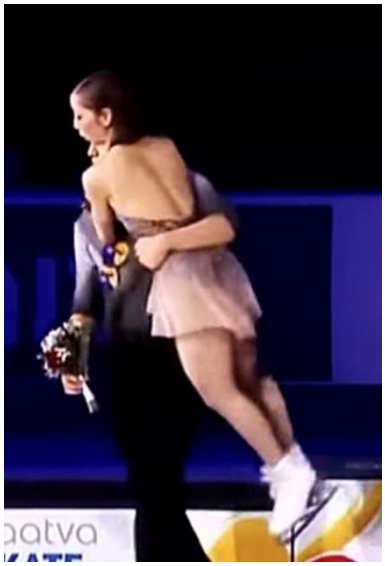
2/19

昨日今日の二日間、立命館院生と学部生対象の 6 コマの家族理解 WS。長年やってきたがいよいよ最終回。ところがインフルの欠席もあって受講生が一人だった。 それなら対話でと 95 分×6 を 21 歳の N くんと二人で。聞くと学部一年生の去年に続いて二度目の受講だという。

この年齢でなにが気にいったのか？ 私的にも初めての面白い時間になった。



2/20
ミラノ五輪「りくりゅうコンビ」の映像を見て、面白いなぁ、可愛らしいなぁと思った気分で、又一つ新しいことをやってみようと決断。



あまり関わったことのない研究会のメンバーに。今日、事前打ち合わせの zoom 会議があった。78 歳にもなってから引き受けるものでもないかもしれないが、面白がってくれる人があるようなので。

64・年長組さいごの参観会

原町幼稚園園長　鶴谷主一（静岡県沼津市）

みんな笑顔の楽しい会！

今回は、盛り上がってほんわかあたたかい連帯感を感じられることまちがいなしの年長組さいごの参観会を紹介します。

原町幼稚園では、子どもたちの成長発達を保護者の皆さんにお伝えする機会として、自由参観日や、子どもたちの目標にもできる『舞台』として
「げんきもりもり運動会」「うたおうあそぼう音楽会(*1)**」「おはなしあそび会**(*2)**」**という３大表現活動と位置付けている大きな行事、父の日に主にお父さん方をお誘いする**「おやこんぼ参観会**(*3)**」**、敬老の日にちなんで祖父母に来園していただく**「サンクスデー」**、そして３学期に年中組の**「ばばばあちゃんカルタことばの発表会**(*4)**」**、**年長組さいごの参観会**を年間の予定に入れています。

この参観会を企画した目的は、卒園のカウントダウンが始まった頃に、我が子の園の友だちや先生たちとの人間関係や、成長ぶりを再認識していただき、卒園→入学の弾みをつけてあげたいと行っています。子ども同士はもちろん、小学校に行っても連帯していただきたい保護者同士も繋げる意味も含めています。（詳しくは次ページの案内手紙を読んでください。）
楽しかった幼稚園生活さいごの参観会とあって、保護者の皆さんも忙しい時期にもかかわらず、休みや時間給を取って参加してくれて感謝です。



会のはじまりは日常楽しんでいるダンスを２曲ほど踊って身体と気持ちを暖めます。
年少組のみんなも一緒に参加して踊っています。

（*1）うたおうあそぼう音楽会 = マガジン30号参照
（*2）おはなしあそび会 = マガジン24～26号＆58～60号参照
（*3）おやこんぼ = マガジン９号参照
（*4）ばばばあちゃんカルタことば = マガジン12号参照

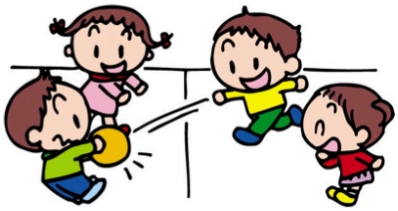
年長組 ご父母の皆様

３学期参観会のご案内

2026.2.9.原町幼稚園　園長　鶴谷主一

☆日時　　２月18日（水）10時～11時半頃

雨天決行、10時迄に集合して下さい。



「子どもの発達はまずカラダから！」‥このことは今までお話ししてきたと思いますが、身体の発達は「考える力や感じる力」を支える基礎となります。

原町幼稚園で行ってきた３大表現活動（運動会、音楽会、お話あそび会）で発揮された精神面の成長も身体の発達があってこそです。

そして、子どもは認められることによって「自己肯定感」を得られます。「〇〇できた！」「よかったね！」･･･この様なシーンは日常生活の中のあちこちに散りばめられているのですが、卒園＆小学校進学前のこの時期に弾みを付けてあげたいと、**改めて“ミニ舞台”を設定します。**小さい舞台ですが、担任をはじめクラスの友だちや保護者みんなから注目されて認められるという喜びは、きっと大きな自信に繋がるでしょう！発表を盛り上げつつ、全員の子どもの成長をともに喜びたいと思います。

親子ドッジボール大会はお楽しみタイム！子どもたちも勝つ気満々で楽しみにしていますので、保護者の皆さんも本気モードで！？大人の力を見せつけてほしいと思います。

時間	プログラム	内容
10時 10時20分	園庭にてダンス・朝の会 園庭で個別発表	いつものダンスと朝の会をやります。 いろいろ見せたいことはあるけど･･･ 体操をして、ステップ砦やチャレンジ砦に挑戦！ みなさんで子どもたちを盛り上げて下さいね！！
	おやこドッジボール大会	年中の頃はこの時期にドッジボールの前段階に取り組み、年長の３学期になって本格的に取り組み始めたドッジボールは日増しに上手くなってきています。 今日は一緒にゲームを楽しみましょう！
11時半頃	終了	
服装と持ち物	ドッジボールができる運動着など動きやすい服装で！寒さ対策も！ 体調の悪い方などドッジボールができない方は、無理をせず担任までお知らせ下さい。	

〇雨天時の個別発表はありません。お迎え時などに個々に見てあげてください。

▶参観会での写真・ビデオ撮影は保育活動の邪魔にならない範囲で可能です。（三脚不可）
子どもたちも活発に動き回っていますので機材の管理は各自気をつけてお願い致します。万が一破損した場合の補償は致しかねますので予めご了承下さい。

▶親子ドッジボールのときは、動きが激しいので撮影はご遠慮下さい。

▶参観中の携帯電話の通話や通信の使用はご遠慮下さい。

▶欠席される方はあらかじめご連絡下さい。



10月の運動会で披露した「跳び箱」のバージョンアップを披露したり（大人も跳んで見せてくれたりしました！）園庭の遊具で得意なところを見せたりして、参加したみんながそれにいちいち大げさに!!褒め称えてくれるのです。**「ＯＫ！君はできるよ！」**そんなメッセージを、おもいっきりキャッチボールする会となっていて、笑顔も弾けるのです。



チャレンジする遊具は自分で申告してチャレンジ！
友だちと大人が見守ります



ドッジボールは最後のプログラム。親子クラス別、親子対決など
バリエーションを変えて楽しみます！

担任がアプリで発信しているドキュメンテーション
当日の様子はこちらからご覧になれます

「幼稚園の現場から」ラインナップ

1号　エピソード（2010.06）
2号　園児募集の時期（2010.10）
3号　幼保一体化（2010.12）
4号　障害児の入園について（2011.03）
5号　幼稚園の求活（2011.06）
6号　幼稚園の夏休み（2011.09）
7号　怪我の対応（2011.12）
8号　どうする保護者会？（2012.03）
9号　おやこんぼ（2012.06）
10号　これは、いじめ？（2012.09）
11号　イブニング保育（2012.12）
12号　ことばのカリキュラム（2013.03）
13号　日除けの作り方（2013.06）
14号　避難訓練（2013.09）
15号　子ども子育て支援新制度を考える
16号　教育実習について（2014.03）
17号　自由参観（2014.06）
18号　保護者アナログゲーム大会（2014.09）
19号　こんな誕生会はいかが？（2014.12）
20号　ＩＴと幼児教育（2015.03）
21号　楽しく運動能力アップ（2015.06）
22号　〔休載〕
23号　大量に焼き芋を焼く（2015.12）
24号　お話あそび会その１（発表会の意味）2016.03
25号　お話あそび会その２（取り組み実践）2016.06
26号　お話あそび会その３（保護者へ伝える）201609
27号　おもちゃのかえっこ（2016.12）
28号　月刊園便り「はらっぱ」（2017.03）
29号　石ころギャラリー（2017.06）
30号　幼稚園の音楽教育（その1・発表会）2017.09
31号　幼稚園の音楽教育（その2・こどものうた）2017.12
32号　幼稚園の音楽教育（その3・コード奏法）2018.03
33号　〔休載〕
34号　働き方改革・一つの指針（2018.09）
35号　働き方改革って難しい（201812）
36号　満3歳児保育について（2019.03）
37号　満3歳児保育・その２（2019.06）
38号　プールができなくなる！？（2019.09）
39号　跳び箱（2019.12）
40号　幼稚園にある便利な道具〈紙を切る〉（2020.03）
41号　コロナ休園（2020.06）
42号　コロナ休園から再開へ（2020.09）
43号　ティーチャーチェンジ（2020.12）
44号　除菌あれこれやってみた（2021.03）
45号　マスクと表情（2021.06）
46号　感染予防と情報発信（2021.09）
47号　親子ソーラン節（2021.12）
48号　親子コンサート（2022.03）
49号　うんちでたー！（2022.06）
50号　子どもが育つ園庭・その1 木登りとブランコ（2022.09）
51号　子どもが育つ園庭・その2 砂場（2022.12）
52号　子どもが育つ園庭・その3 ストライダーとTonka（2023.03）
53号　リスクと安全・園庭編（2023.06）
54号　夏の音楽会・動画（2023.09）
55号　クリスマス劇・動画（2023.12）
56号　こいのぼり製作（2024.03）
57号　この頃、気になること（2024.06）
58号　お話あそび会動画解説《年少編》（2024.09）
59号　お話あそび会動画解説《年中編》（2024.12）
60号　お話あそび会動画紹介《年長編》（2025.03）
61号　マルシェを開催しませんか（2025.06）
62号　夏の暑さ対策！日除け改良版（2025.09）
63号　雨天延期に直面して（2025.12）
64号　年長組さいごの参観会（2026.03）

▶気になる記事・ご感想質問等ありましたら気軽に連絡ください。✉ office@haramachi-ki.ed.jp

こもれびのなかのおはなし
はらまち
HARAMACHI Kindergarten
est.1957

福祉系対人援助職養成の現場から

64

西川　友理

アートプレーパークでのボランティア

学生とともに、子ども向けアートプレーパークでのボランティアに参加しました。

子どもが自由に遊ぶことが出来るプレーパークは、全国各地で様々なかたちで開催されています。今回参加したのは、NPO 法人 地域文化に関する情報とプロジェクトさんによる、アート活動をメインとしたプレーパークです。

具体的には、入口で絵の具代３００ 円を払えば、筆やローラー、ブラシ、へら、スポンジ、ローラー、スポイト、霧吹きなどの道具を自由に使い放題、水彩絵の具も色とりどりの色画用紙もおかわりし放題、開催時間以内ならどれだけ描いても自由！というスペースです。

開催スペースには汚れないようにビニールシートやマスカーテープをしっかり敷いて養生し、全面的に汚れを気にしなくてもいいような環境を整えます。

スタッフは、出来るだけ子どもたちが表現したいことを表現することを大切に、自他に加害を加えるような事態でないかぎり、何かを禁止するようなことは出来るだけしたくない、禁止なんてしなくて済むような場をつくろう、という考え方を共有しています。

以前から授業でこの場所の話をし、一緒に参加しようと学生たちを誘っていたのですが、いささか交通費がかかるということもあり、経済的に苦しい学生も増える中で、なかなか足が向きにくいようでした。紹介し始めてそろそろ１年が経過するかという頃に「せっかくだからー

回くらい行ってみたいかも…」と学生が２人、名乗りを上げてくれました。

活動スタート！

いざ活動が始まって、いろんな親子がやってきました。

子ども達は、最初はおずおずと場の様子を見ながら活動を始めますが、この場の自由さを肌で理解していくにつれて、やがてどんどん自由に、好きなように表現を展開していきます。

子どもがどんどん自由になっていく様子を見て、最初はこの場を汚してはいけない、絵の具のもったいない使い方はいけない…という思いにとらわれていた親御さんたちも、徐々に解放されていきます。

多少服を汚しても、多少腕や顔や足にべったり絵の具を塗っても、多少そのままその場で転げまわっても、多少画用紙と上着を水浸しにしても、そしてそのまま抱っこして、と言ってきても…まぁ、いいか！そうね、いいよね！！と、なんだか楽しくなっていく子どもと親御さんがあちらこちらで発生します。

気になる女の子

色画用紙を渡す担当をしていた学生のうちの１人がふと､ひと組の親子を見て、「あの女の子、３歳くらいやんな？もう１時間以上いるね。」

とつぶやきました。それを聞いたもう１人の学生が、

「え、そうやったっけ‥‥？」

「うん、〇時位から来てるから、もう１時間はずっとあそこにいる。」

女の子は、絵の具を触ってみたり、水に絵の具を入れてみたり、少しだけ紙に絵の具をつけてみたり､あっちの色をこっちに持ってきたり、色のついた水を混ぜたり…真剣なまなざしで､絵の具や道具、色画用紙と向き合い､いろんなことをやってみています。一つの動作ごとにかたわらにいるお父さんに「これ見て！」と伝え、お父さんは「うん、そうやね」と答えています。

お父さんは｢ここに描いてごらん｣｢ほら、ここにつけたらどうなるかな」と、いわゆる「お絵描き」をしてみてほしい様子。女の子に色々と働きかけます。

そんなお父さんに、スタッフが伝えます。

「“お絵描き”だけにこだわらなくていいんですよ。絵を描くだけじゃなくて、水を触ったり､絵の具の色を楽しんだり、いろんな道具で、自由に、好きに、楽しむ場ですから、とにかく好きなように味わっていただけたら…。」

この場に年齢制限はありません。やっとお座りが出来るくらいの人や、はいはいで動き回る子どもさんも参加大歓迎、もちろん子どもを連れてきた大人が遊ぶことも大歓迎｡絵の具を手足で感じたり、

いろんな色を混ぜてみたり、紙にくっつけてみたり、道具を叩いてみたり、水に漬けたり、水で流してみたり、あるいはその水をスポンジで吸い取ってみたり…。

スタッフのその言葉と、周りの人々それぞれの、思い思いのあり方に、お父さんも気持ちがほどかれたようでした。

それからそのお父さんは、「これ使いたい」「ほら、これ見て」「水を汲んできて」等女の子から発せられるメッセージに対応して、見守るように傍らにいらっしゃいました。

２人の学生は自分たちの活動をしながら、その親子を気にしています。

「いやぁ、もう１時間半経つで」

「ええー…すごいな、もう２時間になるで」

「まだ飽きないのか、すごいな…」

結局、その女の子は、２時間半近くかけて、数枚の絵を描きあげました。

女の子のお父さんに「すごい集中力ですねぇ」と言うと、

「何か、これと決めたら入り込んじゃうみたいで…ずっと遊んでましたねぇ！」と言って、笑っていらっしゃいました。

子どもの集中力は何分位？

その親子が帰った後も、学生たちは話していました。

「保育の分野では、よく、子どもの集中力は５分～15分くらい、っていうやん？」

「ほんまに！どこが 15 分やねんって思うな、あの子見てたら。」

「そうそう！あんなに長い時間集中するなんて、マジで学校では習ってないって！ビックリやわ、ほんま！」

そのやり取りを聞いて、私は感心してしまいました。

「確かに！！そうやんね、そんなん習ってないよね！年齢にはよるけど、５分とか 15 分とかその程度だってよく言うものねぇ！！」

終了後、当日のスタッフによるふりかえりミーティングで、学生にこの話をしてもらいました。

アートプレーパークでは、子どもが夢中になってずっと遊び込む姿はよくあることで、学生の気付きに逆に改めて気付かされたという人がいました。

「学校では、子どもが集中できる時間は５分とか 15 分くらい、とか習ってるの?」

「はい」

「「「へー！」」」

「それはさぁ、“子どもが集中できる時間”じゃなくて“大人が与えようとしてるものに付き合ってくれる時間”やんね」

「「「確かに！！」」」

わははは、とその場では皆で笑っていましたが、後から振り返ると、これはなかなか味わい深い話だったと思うのです。

子どもが集中できる時間を５分や 15 分と想定して、集中を途切れさせないような状況を作る、保育の展開を考える。

そして子どもはそのプログラムに合わせて、大人の“おもわく”にあわせて、日々を過ごしていく。そう考えると、なんだか滑稽な、誰のための何のための保育かわからないようにも思います。保育者にそのつもりはなくても、「大人のしたい保育」に子どもを付き合わせるようになるかもしれません。でも、その日その時の保育をどう展開させていくのかを考えるための計画書である「指導案」をつくる時などは、そうすることが正しいと思い込まされるように感じています。

あの３歳の女の子は、学生たちに「ほんとに？」という問いを投げかけてくれました。

親御さんに対する気付き

２人とも、帰るころには、

「小さい頃にここに出会いたかったな…今の歳でやろうと思うと、どっか“服汚れる”“絵の具出しすぎたらもったい無い”って制限入るもの」

「最初、“ちょっと家から遠いわー”と思ったけど、ほんまに来た甲斐あった。めっちゃ面白かった。」

「“遊び込む姿”ってのを見たよね。」

と口々に話してくれました。そして、

「…あとね、あの２時間以上遊んでた女の子、あの子もすごかったけど、お父さんもすごかった。２時間半やで、２時間半。保育者でもあんな状況付き合えへんって‥‥。」

「確かに、あのお父さん、すごいなぁ。あんな親がいるんやなぁ。ああいう対応が出来るから、子どもが安心して遊べられてんのやな…。」

私は、そういえばそういう親の存在も「学校で習ってない」ことだよな、と思いながら聴いていました。

テキストに出てくるのは、子育て支援が必要な親御さん。子どもと向き合えない、子育てに苦しんでいる、余裕がない、そんな親御さんにどう向き合うか。「お母さんやお父さんは苦しんでいる生き物」とでもレッテル貼りするような事例ばかりが掲載されています。

実際に、要支援・要養護の子どもとその親御さんに対応すること、悩みや苦しみがある親御さんに対応することは、保育者にとって大切な仕事です。しかし、先ほどの学生の言葉を応用するならば、

「あんなに子どもに根気強く付き合える親がいるなんて、マジで学校では習ってないって！」といったところだと思います。

“大変で”“困っている”人を助ける保育者像

保育士養成のテキストには「“集中力が切れがちな子ども”にどう対応するか」「“苦しみ悩む父や母”にどう対応するか」という文脈に代表されるように、子どもや親が課題と共にある姿と、それへ

の対応方法が多く取り上げられています。

その課題解決に動く保育者は、さながら子どもと親にとってのヒーローです。困った人を助ける人、悩んでいる人を慰める人。子どもや親と共にいる、という姿すら、“寄り添う”という言葉で表現され、なんだか懐の深さを持っていますよ…みたいな表現だなぁと感じます。保育者というのは、そういうものだと教えています。

でも、そうではないでしょう。子どもや保護者はそんなに弱い存在でも、ダメな存在でも、ありません。保育者が何かしてあげなければ、助けてあげなければ…などと考える間もなく、本当はどんどんと自分たちで気付き、自分たちで対応し、どうしたらいいか、色々考えて、行動できる人たちです。

「日々をいきいきしく生きる子ども」「遊び込める環境があれば、何時間でも集中する子ども」「子育てを楽しんでいる親御さん」「子どもとの向き合い方がとても素晴らしい親御さん」、そんな人もいることを、いやむしろ環境さえ整えば、ほとんどの人がそうであることを、まずは実感として知る事が大切だと思います。

これにより、「子どもを一人の人として尊重しましょう」「親御さんには敬意をもって接しましょう」という言葉だけの表面的な理解でなく、心から子どもと親御さんに敬意を持ち、相手の存在を尊重していくようになります（例えば、養成校へ入学当初は「子どもって可愛い」と言っていた学生が、いくつかの現場経験を経ると「子どもってすごい」「子どもって面白い」と表現するようになる、といった形で現れます）。

自分たちはヒーローではない。子どもや親御さんたちは力を持った存在で、本当にその成長を共に過ごすことが大切。そのように、ヒーロー幻想がなくなってはじめて、ヒーローではない“わたし”だからこそ、素晴らしい存在である“子ども”や“親御さん”だからこそ、いっしょにいることで何ができるのか、地に足付けて考えることが出来るようになると感じています。

現実と理想

ボランティア終了後の帰り道、途中まで学生のうちの１人とともに、２人で帰りました。その時に、初めて彼女が、
「…でも、あれは普通の幼稚園や保育園ではできないですよねー。」
ため息交じりに言いました。
「…というと？」
「実際そんな無制限に絵の具を使えない、服も体も汚す。ああいうの嫌いな子も好きな子も、いろんな子がいる。ていうかそもそも、園だと、大人に対して子どもの人数が多すぎる。環境設定とかどうしたらええのか…“園”という場所であれをやろうっていうのは、なかなかできない。…なんていうか、今日のプレーパー

クは…贅沢な体験やったと思う。ほんとに、楽園みたいなところでした。私が子どもの時に出会いたかった…。あれを普通の園でやろうってのは、出来へんと思う…。」
「出来へんと思うの？」
と聞き返すと、ちょっと戸惑ったように
「え、だって…出来へん…のじゃないのかな？全く出来へんというわけではない…かな？いやでも難しいんじゃない…かな…？」
頭を捻る学生です。
「今日“好きなことを好きなだけ遊び込むことが出来る所では、子どもはこんな姿を見せる”っていうことを、体験として知ったというだけでも全然違うと思うねん。だって、今日の子どもたちみんなすごかったでしょ？」
「はい。すごかった。」
「あれに少しでも近づけるためにはどうしたらいいか、っていうことを考えることが出来るんじゃないかなぁ…。」
「えー、そんなん無理ー（笑）」
「いや、だから、“少しでも”よ（笑）！本物の“子ども、すごいな！”という場面を見たことがあるのとないのとでは、はやっぱり違うねんって！なんかできないかな、って考えられるヒントがいっぱいあったやん！だって、あんなの、したいと思うでしょ？」
「したいと思う！でも、ふつうの幼稚園や保育所で､どうやったらええのか‥‥？」
　理想を知って、地に足付けて、うーんと考え込む学生です。

ヒーローでも、楽園でもないから、どうするか。

　子どもが何時間でも、自分の好きなだけ、好きなことに無制限に没頭できる環境なんて、今のこの国には本当にわずかにしかありません。
　でも、それがどういう体験や意味をもたらすか、この日この学生たちは目のあたりにしました。遊び込む子ども、ともにいる親御さん、楽園のような環境、スタッフの対応…きっとこの学生たちは｢子どもの主体性を大切にした保育｣という、今や子どもの現場ではどこでも聞かれる言説を、この日以降、今までと違う味わいでもって口にするに違いありません。
　目指したい姿を見たのです。それに近づくには制限があるということもわかっています。その制限がある中で、園の中で、何をどう達成できるのか。実践的に考える保育が始まります。

先人たちの研究結果と対人援助の場にやってくる“言説”

　人を支援するにあたり、難しいことも多いから､いろんな人が研究しています。その研究結果は素晴らしいものです。私たちはそれらの本を読みます。また、養成校教員は自らも研究を進め、学生にもそれらを伝えます。先人の知見に基づく

様々な考え方、手法、技術が世に出されます。

だけどそれが広まる際には、「〇分なら集中できる」「自己決定が大事」「親御さんには寄り添って」等、手法やテクニックや耳に心地いいスローガンのような言説がついつい印象に残りがちです。

テキストや、授業もそうです。養成校教員としては、哲学や理論や根底に流れるスピリッツを伝えているつもりでも“では実際に子どもに対して具体的にどんなテクニックが有効か、何を伝えれば正解か”を知りたい、というニーズは強烈です。今の悩みに正解が欲しいのです。それを使えば、まるでヒーローのように、問題解決が出来るような手法が欲しいのです。

そうすると、その言説自体が、根底にある考え方や科学的根拠や倫理観、哲学等から離れて、単なる小手先のテクニックとして独り歩きしてしまうことがあります。そこから生まれた誤解が、子どもや幼児教育の現場にはそこここに存在すると感じています。

例えば、近年では“不適切保育”という言葉にその匂いを感じます。

“不適切保育”という言葉が独り歩きして、何が不適切なのか、本当にわからなくなりつつ、「いつか自分が不適切をしてしまうのではないか、むしろ自分で気づいていないけれど、不適切なことをすでにしてしまっているのではないか」とモヤモヤを抱える保育者が増えています。そもそも“何をもって不適切とするのか？”追い詰められた保育者に、一次資料や背景論理や哲学・倫理までさかのぼって考える余裕は、時間的にも精神的にもありません。

すると「〇〇するのは不適切なんだって」「〇〇しちゃいけないんだって」‥‥枝葉末梢の言説に踊らされがちになってしまいます。

地に足付けて、
今、目の前の人と向き合う

そんな時、目の前にいる子どもや親御さん、同僚といった「人」が、こちらの目を覚まさせてくれます。３歳の女の子が２時間以上遊び込む姿を目の当たりにしたことで、「あなたが学んできたことは、本当に本当のことなのかな」という問いを、学生たちに突きつけてくれたように、「現場で起こっていることは、本当はどういうことなのか？」と、リアルに突きつけられる対人援助の現場です。

実習も大事、だけど本当は、出会うということそのものが大事。

学生たちは、子どもに直接出会う“実習”で多くのことを学んできます。机上で学んだことを､実習で確かめることで、理論と実践が往還する、素晴らしい学びです。専門職として保育者になるために必要なプロセスです。でも、実習は「〇〇を学ばねばならない」「評価をクリア

しなければならない」「日々の記録を書いて毎日提出しなければならない」‥‥等、やらねばならぬことが多すぎます。

だから私は、実習もとても大切だと思うのですが、それよりもまずはただ、「人と人」として、子どもといわず大人といわず、いろんな人に「出会う」ということ、その体験そのものこそが大切だと感じています。

そこで出会う様々なことから、今まで思い込んでいたものとは違う世界が見えてくる。実習のように評価する/される、という関係性がなく、ただ出会うなかで、自分自身が持っていた常識や世界が揺らされる。その体験によって、机上の空論でないひとのありさま、ヒトという存在について、地に足つけて考えるきっかけが生まれる。それが対人援助の専門職になる者としての大切な土台となると考えています。

なにせ学生という人たちは、出会える環境さえあれば、あとは自分たちで素晴らしい気付きを得ていく方々なんです。知識と情報は授業で伝えられますが、何より自ら得た気付きが学生を大きく成長させます。

養成校教員としては、学生と一緒に新たな気付きに出会い続けていきたい、そのためにどうしたらいいかしら…と、考え続けています。

ああ、相談業務

～ 杞紗さんの話 ～

24

かうんせりんぐるうむ　かかし

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

保護者からの虐待を受けた子どもが思春期以降、リストカットや大量服薬、自殺未遂等を繰り返す事例は多い。今回はそういうケースを描いてみようと思う。

家族

杞紗さん（仮名）は当時２５歳。三人兄弟の真ん中で、２歳上の兄と、３歳下の妹がいる。父親は５０歳で運送業、母親４６歳は杞紗さんが中学校１年の時に離婚し、現在パートナーと暮らしている。父方祖父母、母方祖父母はともに遠方に住んでいる。

相談経過

筆者が最初に杞紗さんに会ったのは、小学校のスクールカウンセラーをしていた時である。ただし、その時はカウンセリングに杞紗さんが来たことはなく、先生方も、「変な子」というイメージだけで、カウンセリングに繋ぐことが無かった。それでも、小学校低学年だった杞紗さんは、廊下の隅のちょっとくぼみになっている壁面に、時々隠れていたり、机の下にもぐっていたりする様子を目撃しており、先生に「あの子何かあるんじゃないかな？面談できないかな？」と言ってはみたものの、先生は「変な子だけど、それ以外に特に問題はないので」とつないでもらえなかった。そ

の後その小学校にいくことがなくなったため、それっきりになっていた。それでも気になっていたので、その後中学校での様子なども気にかけていた。問題行動として、リストカットが見られるとの情報はあったし、杞紗さんがかなりひどい虐待にあったらしいという噂は耳にしたが、中学校のスクールカウンセラーが担当しているということで、筆者に繋がることは無かった。

高校に進学して間もなく、当該高校のスクールカウンセラーから筆者に繋がって来た。情報としては「多重人格、リストカット、オーバードーズ（大量服薬）がある。病院受診も勧めているが中々受診に繋がらない。家族関係にも問題があるのではないかと思われる。」とのことであった。

初回面接は、北海道の短い夏が始まる６月初旬のことで、１人で来室された。杞紗さんに会うのは小学校以来だったが、横も縦も大きくなっていた。以前杞紗さんがいた小学校のスクールカウンセラーをしていたから、杞紗さんのことを知っていると伝えると、「そういえば見かけたような気がする」と言い、結構赤裸々に今までのことを語ってくれた。

３，４歳ごろ、ちょうど妹が生まれた後くらいから母親の精神状態が悪化し、暴れたり騒いだり酷かった。杞紗さんは、決して聞き分けの良い子ということではなく、どちらかというと活発な子だったため、母親から叩かれること日常茶飯事、更に父親からも殴られたり、逆さづりにされたり冬に締め出されたり、ひどい虐待を受けていたという。しかし、児童相談所が介入することは無かった。誰もその虐待に気づかなかったという。母親は精神病院に何度も出入りしていて、その間父親が子どもたちの面倒を見てくれた。それでも、小学校に上がってからは、妹の面倒を看させられ、兄は我関せずで勝手な行動をとっていたが父親は兄には何も言わなかった。そんな兄を随分恨めしく思っていた。学校から帰ったら自分の宿題などを片付け、食事の準備などを父親に言いつけられたとおりに行い、妹と一緒に遊んだりして面倒を見ていたそうだ。

その後、父母は離婚し、父子家庭となってからは、杞紗さんが家事をある程度担うようになった。中学に進むと時々父親が長距離で出かけることもあり、数日帰ってこない為、その間の家事一切は杞紗さんの仕事となった。友人と遊びたくても、中々遊ぶ時間もなく、学校が唯一友人と関わる場となった。しかしその学校でも、女子からのいじめが勃発し、不登校傾向となった。女子からのいじめは、明らかな仲間外れやネット上での悪口の流布、時にはばい菌扱いなどもあったそうだ。その頃からネットゲームにはまり、ゲームで知り合った子とやり取りをするようになっていった。

兄はその後寮制の高校に進学し、家にいなくなった。妹と二人で留守番することも多く、妹もゲームにはまり、二人でゲームをすることもあったが、基本的には別々にゲームをしていたそうだ。

妹と仲が悪いわけではないが、妹は友達と遊びに行ったりしていたのでいつも一緒にゲームをするという雰囲気ではなかった。一方杞紗さんは家にいなくちゃという思いから、出かけることは少なく、その様な中リストカットをするようになった。

最初は何となくしてみた、という感じだったものが、辛いとき、苦しい時、必ずするようになっていった。ネットで知り合った仲間同士でリストカットの跡を見せっこするなどと言うこともあった。学校に行けば女子たちに白い目で見られ、悪口を言われるので、学校から帰るとリストカットをせずにはいられなくなった。学校に行かないと、父親に連絡が行き、その結果殴られるので、学校に行くしかなく、板挟み状態だったそうだ。スクールカウンセラーと話したことはあったが、余り力になってもらえなかったそうで、１、２回行って辞めてしまったという。

勉強はそこそこできたので、中くらいのレベルの高校に進学することができたが、リストカットは悪化し、だんだん上腕部や太もも、腹等様々なところをカットするようになった。加えて、薬もブロン（咳止め）、メジコンなどネットで仕入れた情報を元に、オーバードーズをするようになっ

ていった。同時にいくつかの人格を抱えるようになり、気が付いたら遠くにいて、どうやってそこに行ったのか覚えていないという状況も出てきたという。

筆者のところに来た時は、多数のリストカットの跡と多重人格、オーバードーズという三つの問題を抱えた状態であった。

まずは病院受診をあらためて勧めたが、父親が受診を納得しないという。何故と訊くと「母親ほどひどい状態じゃないから受診は必要ない」というのだそうだ。父親と話したいというと、杞紗さんは頑なに拒否し、何とか父親を説得してみると言い張るので、待つことになった。過去の虐待については聴いたが、最近はないのかと聞くと、最近は殴られることは無いとのことで、それはひとまず良しとし、一応トラウマ処理をした。人格交代だが、何人ぐらいいるのかと聞くと、１９人という。丁寧に一人一人を説明してくれた。幼児もいれば、自分より年上（その当時杞紗さんは高校生で１６歳）１９歳とか２５歳くらいの人格もいる。性別も関係なく男子も女子もいる。また、それぞれが役割を持っていて、ゲームが得意な人格がゲームをするとき変わって出てくれるし、絵が得意な子が絵を描くときでてくる、数学が得意な子が数学の授業を担当する、バイトの時は年齢が上の落ち着いた人格が出る、などである。最初の内は他の人格が筆者の前で出てくることは無かったが、しばらくしたら様々な人格が出てくるようになった。別人格を持ち始めたのは多分４，５歳くらいだったと杞紗さんは言う。そのころ大変だったので、さもありなんと思う。そして辛いことがあると別人格を作ることが繰り返されてきたのだ。

人格が交代するとき、杞紗さんは一瞬眠ったようになり、起きた時に別人格になる。筆者のところに来ている多重人格のクライアントさんたちにほぼ共通してみられる現象で、一瞬寝るというか、切れるというかそんな感じで、そのあと別人格が出てくるのである。そして、幼児の時は話し方でわかるが、誰が出てきたのかわからない時があるので名前を聞くと、〇〇とか××とか名乗ってくれる。１９人の人格は一応聞いたので、表にしており、誰がどの人格かを確認しながら話を続けていく。

１９人の中にはひたすら死にたいという△△がいて、その人格が出てくると、冬の川に入ろうとしたり、橋の上に立っていたり、オーバードーズをしたり、リストカットも深く切ったりした。

人格統合をしないかと提案したこともあったが、杞紗さんは統合したい人格がいないと言い、ずっと経ってから一人だけ希望があり統合できたことはあった。

更に杞紗さんにはもう一つ困った行動が見られた。それが不順異性交遊（売春行為）である。そのことを聞いてから、売春は辞めることを後ろの人格（他の人格）にも聞こえるように話して約束させた。

何故売春をするかと言えば、当然理由は簡単でお金が欲しいからである。父親からの小遣いはないがアルバイトのお金だけで足りないのかというと、父親がギャンブルにはまっていて、時々バイト代からお金を貸してと言って持っていかれるのだそうだ。

こういう事情も受診を先延ばしにしている要因なのだろうとわかったので、父親と話すことにした。杞紗さんは抵抗したが、それでは話が進まないし、このままでは生死に係ると説得して、電話で話すことにした。

父親に受診が差し迫って必要であることを話したところ、外面が良いのか、特に反発することは無く、了解してくれて、無事に受診に繋げることができた。その結果出た診断は、解離性同一性障害、ADHD、自閉症スペクトラム症となった。投薬を始めても、時々悪化して入院することもあったが、治療は続いている。この間に高校は無事卒業できたが就職は難しく、アルバイトでつないでいた。

杞紗さんとは月１回程度面談を続けてきた。高校１年の時からだから９年になる。その間に彼氏とくっついたり離れたり、母親との関係が修復さ

れ、母親と一緒に働いたり、農家に働きに行ったり、人と関わる中で気持ちが上がったり下がったりをしながらも少しずつ安定してきた。診断を受けたことで、精神障がい者手帳の取得、障害者年金の取得に向けて動き、どちらも得ることができたので、あとは B 型就労となったが、最初の就労先では人間関係が上手くいかず、直ぐに辞めてしまった。しばらくどこにも行かずにいたのだが、コンピューター関係の仕事をしている B 型作業所ができたこともあって、そちらに入り、継続して働けるようになった。最近他の人格は後ろで寝ていることが多くなってきた。良い傾向である。

今、杞紗さんは自分の辛い人生を振り返り、当事者の会を立ち上げ、積極的に活動している。

まとめ

杞紗さんがもっと早い時期、小学校低学年の時期にカウンセリングに繋がっていたら、そして児童相談所や病院にもつながっていたら、ここまで酷いことにはならなかったのではと悔やまれるが今となっては仕方がない。

子どもの頃に虐待を受けていた人が、思春期以降、解離性同一性障害（多重人格）やリストカッター、摂食障害、オーバードーズの問題を抱えていたり、鬱やパニックになっているケースに度々出会う。特に鬱やパニックになっている方の多くが、虐待や小中高でのいじめられ体験を持っている。

人は人に対し、どうしてこうも残酷になれるのだろう。小学校低学年くらいまでは、人の気持ちをおもんばかることができないから、思ったままを言ってしまって傷つけることがあるのはわかる。しかしある程度大きくなったら、このことばが相手をどれだけ傷つけるかについてわからない筈もない。それでも言葉の暴力をするし、SNS での拡散も故意に行う。小中高ではこの手の問題があちこちで起こっている。スマホを持っているからでもある。高校生はともかく、小中では、保護者のスマホの共有でよいのではとずっと思っているし、いろいろなところの講演会でも言い続けている。でも学校ではタブレットが各自にわたり、スマホも中学生のほとんどが持っているし、小学生でも高学年では多くの子がスマホを持っている。本当に必要か、使い方が間違っているのに持たせておいて良いのか、今一度考えるべきではないか。

そして、虐待は親子という最も安心・安全であるべき関係の中で起こっている。この経験は人間としての基盤を根底から脆弱化し、人への信頼感を否定し、そして自分自身をも否定することになる。

多くの虐待サバイバーと面談する中で、自分を守るために解離せざるを得なかった状況がわかるだけに、その傷の深さをみると、人間の残酷さを考えずにはいられない。文明が発達すればするほど、人間は動物的本能から遠ざかり、子育てに困難を呈するようになってきていると感じる。

杞紗さんのように、被虐待児として、いじめ被害者として、そして発達障害を持った一人の人間として、生きることにずっと困難を抱えながらも生き延びて、時には死にたくなったり、嫌な気分から逃れたくてオーバードーズをしたり、余りしんどくなると解離をしたりして自分を何とか守ろうとしている人がいる。そういう人たちが、小さくても生きがいを見つけ、少しでも楽しく、少しでも楽に、笑顔で生きていける世の中になっていくように、我々支援者はコツコツとできることをしていくのだ。

帰って来た__対人援助学の縦横無尽（4）

2025 年度後半期のふりかえり

立命館大学総合心理学部　サトウタツヤ
学校法人立命館理事・副総長／立命館大学副学長

前口上

コロナ禍以降の文化心理学ネットワークの再始動の様子を記録として『対人援助学マガジン』に寄稿するのはこれで 4 回目になる。今回は前回に続き、2025 年度秋学期の活動をまとめた。

まず、8 月下旬にはオールボー大学の Sarah Awad 先生を迎え、学内での講義に加えて、学生も同行して京都の名所を回った。9 月は福島に滞在し、復興に関する文化心理学研究会の場を持ちつつ、現地の人々とも時間を共有した。10 月から 11 月にかけては学会や学園祭など学内外の出来事が続き、12 月以降は卒論期の山場や、海外からのゲスト受け入れなどが続いた。

2025 年 12 月から 2026 年 2 月にかけて、海外から 3 人の研究者・学生を迎えた。歓迎会ではたこ焼きを自分たちで焼いてもらうのが恒例になっている。



1 人目はウィーンのジークムント・フロイト私立大学（Sigmund Freud PrivatUniversität: https://www.sfu.ac.at/de/）から来た Dominik Stefan Mihalits である。Dominik は主に臨床心理学を専門とする助教で、日本には 2025 年の 11 月から 1 年間滞在する予定だ。

名前の日本語表記を考えたりもした。



2 人目はブラジルのカンピーナス・カトリック大学（Pontifícia Universidade Católica de Campinas, PUC-Campinas: https://www.puc-campinas.edu.br）から来た Rebecca M. A. Ferreira Carvalho である。Rebecca はマンガと心理療法について研究している博士課程の学生で、滞在期間は 2026 年 1 月から 4 ヶ月の予定だ。

Rebecca のサイト↓
https://rebeccaferreiracarvalho.com.br
Rebecca のインスタ↓
https://www.instagram.com/rebeccapsi/

3 人目はデンマークのオールボー大学（Aalborg University: https://www.en.aau.dk）から来た修士課程の学生の Anna Villholth である。Anna はインターンシップ学生として 2026 年 2 月から 3 ヶ月滞在する予定である。

1. 2025 年 8 月　Sarah 先生 in 立命館

デンマークのオールボー大学（Aalborg University: https://www.en.aau.dk）から Sarah 先生が来訪し、4 日間の夏季集中講義を行ってくれた。また、学生たちも交え、京都でエクスカーションを行った。竜安寺を拝観し、豆腐懐石料理を食べて、金閣寺に行った。




2. 2025 年 9 月　福島訪問

9 月 19 日から 21 日にかけて福島を訪問した。初日には「第 7 回 福島原発事故からの復興に関する文化心理学研究会」に参加した。



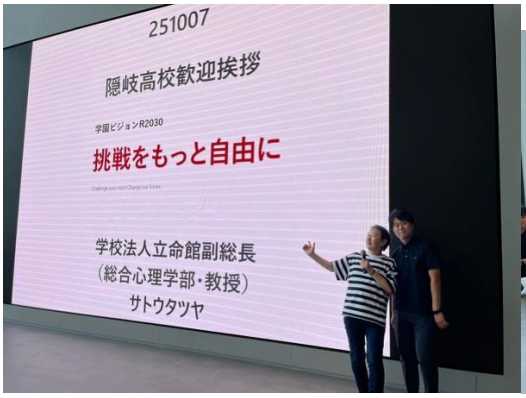
あわせて福島市では、10 年以上付き合いのある果樹園（たかはし果樹園）を訪ねた。また浪江町では、2025 年 5 月に居酒屋（さっちゃん）を始めた移住者さんと出会った。





3. 2025 年 10 月　隠岐ジオパーク研究発表会 in 立命館

島根県立隠岐高校の生徒が OIC に来て、ジオパーク研究発表会を行った。





4. the 7th Transnational Meeting on TEA

TEA 国際集会が OIC にて行われた。オンラインで繋いだ Jaan Valsiner 教授によるナノ心理学についての講義が行われたほか、VR やメタバースを切り結ぶ質的探究といったワークショップを実施した。





5. 2025 年 11 月　京都賞

京都にて開催された京都賞 晩餐会に出席した。前回出席した 2016 年の京都賞のときは、渡辺公三先生が副総長として出席していた。その役に自分が就いているわけで感慨深い。
受賞者としての Carol Gilligan にサインをもらった（実は推薦したと言ったら本人も喜んでいた）。Gilligan

はLawrence Kohlbergの道徳理論を男性的理論であると批判し、配慮（Care）と応答性（Responsibility）を加味した新しい道徳のあり方を提示した（サトウ，2021)。それが彼女の主著『もうひとつの声』である。



6. 2025年12月　卒論シーズン

卒論締め切りも間近となり、先輩たちから激励の差し入れが届いた。

今年は例年以上に卒論の発表が良かった。謝辞も面白かった。 謝辞に感謝と謝罪が入っている人、自分に感謝する人、卒論の考えに詰まって泣き出したことを告白する人。卒論を泣くまで考えるってのはすごい。

ゼミ生たちの多くは研究者になるわけではないけど、正解が誰にもわからない問いを考えて苦しんで、その先に、何かつかめる、という経験をしてほしいと思っているので、泣くのもまた一興（本人は怒っていたが・・・)。





7. 2026年1月　2nd Transnational Meeting on Innovative Human Science (TraMIHS)

海外大学から教員や大学院生を招聘し、シンポジウムを行った。





8. 2026 年 2 月　R-GIRO　記号創発ロボティクスに関するシンポジウム

今年度の R-GIRO の成果報告会が行われた。Dominik や Rebecca も発表した。







サトゼミ一期生の宮下太陽氏が（松葉杖も痛々しい姿で）講演を行った。




当日のプログラム↓

https://www.ritsumei.ac.jp/rgiro/events/article/?id=265

9. その他

色んな活動の一部（説明は省略）









引用文献
サトウ タツヤ（2021）．心理学の名著 30　筑摩書房

路上生活者の個人史

第 18 回

竹中尚文

千葉　賢太郎　氏（仮名）

1953 生まれ。72 歳

私は愛媛県で昭和 28 年に生まれました。現在 72 歳です。父親は漁師でした。私と弟と両親という 4 人家族でした。小学校、中学校を卒業して、私は就職で大阪に出てきました。町工場で機械の部品を作る工場でした。田舎育ちですから、都会の生活にあこがれがありました。あこがれだけだったかもしれません。「金の卵」と呼ばれた時代でした。町工場は 1 年あまりで辞めて、田舎に帰りました。都会の生活は馴染めなかったですね。

田舎に帰って、父親の船に乗りました。3 トンほどの小型船です。父親に漁師の仕事を教わりました。父親は、もっと昔にはもっと大きな船で漁をしていましたが、嵐に遭って九死に一生という思いで帰ってきました。それから小さな船で漁をするようになっていました。

私も独立して漁師として生活をするようになって、30 歳の頃に結婚をしました。娘が 2 人生まれて、幸せな時代でした。その頃は底引き網の船で操業していました。40 代後半の頃に離婚しました。子どもたちは中高生でした。原因は経済的なものでした。底引き網というのは燃料費がしっかりとかかるものでした。おまけに網が破れたり、思

うような水揚げができなかったりすると、しっかり赤字です。あの頃は燃料費が高くなって、漁師には辛い時代でした。女房は子どもたちを連れて、出て行きました。それから、数年後には船を手放して、大阪に出てきました。女房、子どもたちは地元で暮らしているそうです。子どもたちは、結婚して子どもができているそうです。幸せに暮らしていてくれたら、それでいいです。何もしてやれんですが。

大阪に出てきて公園とかで寝る生活をして、日雇いで土木の仕事に就くようになりました。日雇いですから、毎日仕事があるわけではありません。断続的に路上生活が続きました。2009年でしたか、アメリカでひどい不況が起きた頃に生活保護を受けられるようになりました。60歳になっていませんでしたが、飯場の仕事もなくなってきて路上生活になった頃でしたから、助かりました。

昨年、故郷に近い街で倒れました。頭の中で出血していたそうで、頭を開く手術をして助かりました。後遺症も何にもないようで、ありがたかったです。それから大阪に戻ってきました。大阪以外の街では、生活できないですよ。大阪だと、どこかでこうした炊き出しなどがほぼ毎日あります。私が倒れた街だと、一週間か二週間に一回の炊き出しがあるようなことです。生きていけないですよ。

ずいぶんと前のニュースで燃料費高騰が流れたという記憶がある。その時、多くの漁師の方が困ったという話だった。私も自動車を使う生活で節約をした記憶がある。しかし、その時が過ぎてしまえば忘れていた。同じ時にそのことで人生が変わった人たちもいたのだ。また、燃料が高騰しようとしている。戦争を始める人たちはそのことでどんな被害が出ているか知りもしない。




スポーツおじいさんになりたい！⑧



『ゴールデン・ボーイ』
（ルーベン・マムーリアン監督・1938）

國友万裕




1. 近づいて来る死

12 月、ついに母の兄にあたる叔父が死んだ。そして、1 月入るとすぐに亡父の妹である叔母が死んだ。そんなわけで、この 2、3 ヶ月はダークムードが続いた。叔父さんは 90 歳、叔母さんは 91 歳か 92 歳だったはずだから、十分に生きたわけで、決して早死ではないのだけれど、やはり人が死ぬことを受け入れなくてはならない年齢になってきているという気持ちになってくる。

死は刻々と近づいてくる。俺はこの原稿が出る頃には 62 歳になっている。あと 10 年ぐらいは元気でいれるかもしれない。人間の健康寿命は 75 歳くらいのはずで、だから、人生 100 年時代とは言っても、健康で生きることができるのはせいぜい 70 代の間なのである。もちろん、80 歳過ぎて、バリバリに現役の人もいるが、そういう人はラッキーな一握りだろう。

そろそろ死に支度をしなくてはならないと考えている。でもネットに出ているような終活サイトは眉唾物で、ああいうところに頼んだら、騙されそうな気がして、どこに頼んでいいのかという気持ちになる。

母に何かいい方法がないかと電話すると、「私が今、終活しているところなのよ。あなたはまだ終活というには早い。年をとるにつれて、周りがそうなっていくから、だんだんとわかってくるわよ」という返事。母はもうすぐ 88 歳だが、肝が座っていて、死ぬことも恐れていないし、なんとかなると思っている。

だけど、俺はそういうふうに考えることができないのである。

人生の終章に近づいてきて、俺の人生っ

て何だったのだろうとつくづく思う。

俺の人生は子供の頃から一貫していじめられっ子だった。スポーツ音痴で、普通の子が簡単にできることが何もできなかった。そのことで先生たちからは暴言を吐かれ、女の子たちからも馬鹿にされ、心が壊れたのが 15 歳の時だった。

今だったら不登校はたくさんいるが、あの頃はまだ走りで登校拒否と言われていた。学校に行ってもいたたまれなくて、休み時間に鞄を置いたまま逃げ帰ったこともあった。それから 3 年間はどん底だった。母と俺は、どん底の辛酸を舐めながら、藁にもすがる思いで、あちこちに行ったものだ。しかし、そこで、出会った人は、常識にハマることが人間の真っ当な生き方だと信じているカウンセラー、「人に感謝する気持ちを持たんと行かんなあ」と幼稚園の子にいうような次元の道徳ばかりを真顔で繰り返す精神科医、「私もスポーツ音痴だったけど、逃げませんでしたよ」と諭そうとする学生運動世代の男のカウンセラー、やっと通信制の高校に入り、少しだけでも抜け道をともがいていた俺に、「もう一度高校を受験して高校に行かれることをお勧めします。ちゃんとプロセスを踏んでいかないと」と諭す宗教団体の偉そうなお婆さん、何もわかっていないくせに自分は分かっていると思い込んで、上から目線で俺をレールの上に戻そうとする人ばかりだったのだ。今思い返せば、あの当時の人（昭和の人）は、誰も彼も社会が間違っているという認識がなかったのである。したがって、誰もが社会のレールに沿って生きるのが人間の真っ当な生き方であり、それができないやつは不良品と思っていたのだった。

本当に昭和はバカの時代。あんな幼稚な考えのまま、中高年まで生きてこられた昭和の人たちは、ある面幸せだ。

その後バブルが弾け、自殺が増え、心を病む人が増えて、やっと社会の方が間違っているという考えの方が大勢になっていった。今の人だったら、一生懸命生きていても、不登校になる子や心を病む子、周りについて行かれない子が存在するという認識は少なくとも持っている。だけど、あの当時はそれがなかったのだった。当時のことを思い出すと今でも怒りは込み上げてくる。しかし、このことは自分の十字架だと思うしかない。

俺はクリスチャンになった。社会の理不尽は人間の罪と思って受け入れて行かなくてはならないのだ。キリストのように十字架を背負って、余生を生きる。それが俺に課せられた運命なのだ。

幸い、だいぶ人生の終わりは見えてきた。あとは老いを生きる年代なのである。

2. 去り行く人々

年が明けて、2026 年となった。

今年の初め、ある大学に出講し、授業が終わった後、いつも通り、行きつけの喫茶店に向かおうとしていた。すると、どうやらお店が閉まっている。なんとなく不穏な予感を感じながら、店に近づいてみるとやはりそうだった。

「2026 年の 12 月 26 日を持ちまして、営業を終了いたしました。昭和 51 年の開業から長くご利用いただきました、お客様方々、ありがとうございました」という貼り紙がされていた。

いつか、こういう日が来ることは想像し

ていた。

そのお店はもう高齢のおじさんとおばさんがご夫婦でなさっているところだったのだが、もう 10 年くらい前から、「私たちは、もう年金生活者ですから、いつ辞めるかわからないんです。だから、タウン誌から取材の申し込みがあっても断っているんです」と店のおばさんが話されていたのだ。

俺がこの店に通うようになったのは、何よりも大学に近いからだったのだが、最初は俺の存在なんて、どうでもいいのだという気持ちで通っていた。ところが、お店のおばさんは俺の存在を気にかけてくれていたのである。

あれは 15 年くらい前だろうか。俺はその大学に週に一度だけ出講しているのだが、前期は 1、2 時間目、後期は 1 時間目のみという時期があったのである。そのおばさん、そのことにも気づいていらしたみたいで、「先生が来られるんだったら、後期も早い時間に店を開けておきますから、来てください」と 11 時前に店を開けてくれていたのである。

そう言われると、俺の方も行かないわけにもいかなくなる。半ば、強制的に行くことになった。しかし、ありがた迷惑というわけでもなかった。毎週、通って軽く会話を交わすのも心の安らぎだった。おばさんの方も「先生の顔を見るとまた 1 週間過ぎたんだなあという気持ちになるんです」と言ってくれていた。

12 月 26 日に辞められたということは、もう去年いっぱいで辞めるという計画でいらしたのだろう。しかし、去年の最後にお店に行った時は、そのことは一言もおっしゃっていなかった。おそらくあまり大袈裟にしたくない。辞めるときは風のようにスーッと辞めていきたいと思われていたに違いないのだ。

3. 過去をどう処理するのか？

どうすることもできない過去のことは断捨離しなくてはならないとは思う。

実は、1、2 年前までは滋賀の國友村に一度は行ってみようかと思っていた。俺の先祖が滋賀であることは前から聞いていた。そして、実際にそれを調べた人もいるので、おそらく間違いなく滋賀が俺のルーツなのだ。

とは言っても、國友村に行ったからと言って、何があるのかと思うのだ。俺は自分の過去が嫌いだ。俺は不登校のトラウマをずっと背負って生きてきた。俺にとって過去は郷愁の懐かしい思い出ではなく、悲しみと憎しみと怒りと悔しさに満ち満ちているのである。それを治療するのに残りの人生を俺は使ってしまった。今更、自分のルーツに戻ったりしたら、また過去に引き戻される。

一度は國友村に行ってみたいという気持ちはあるのだが、まだ過去を引きずっている俺は、過去に完全に折り合いをつけることができるようになるまでは過去に戻らない方がいいと思うのである。

俺は九州の実家に里帰りするのにも一大決心がいるのだ。去年の暮れに 2 日だけ里帰りするのにもあれこれ葛藤があったのである。でも、母も高齢なので、あと何回会えるかわからない。だからどうにか意を決して、新幹線に乗ったのだった。しかし、そうそう長くいることはできない。2 泊 3 日の里帰りだった。俺は九州に帰るとそのまま京都に戻れなくなるのではないかという心

配が湧いてくるのである。

俺はマンションの１階で暮らしている。俺が留守の間にそこに泥棒が入ってきたら、そして、出席簿だとかテストだとか絶対に無くしちゃいけないものを盗まれたりしたら、そういう不安が湧いてくるのだった。そうなったら、京都での生活が成り立たなくなる。そうなったら、故郷に帰らざるを得なくなるのである。

この不安との戦いはもう 25 年以上続いている。俺の強迫症が一番ひどかったのは 30 代半ばだった。俺はあの頃生活が切羽詰まっていた。今みたいに授業をたくさん持っていなかったので、保険も税金も払えないような日々だった。何よりもちょっとしたミスで、その時持っていたわずかなものでさえ、無くしてしまうのではないかという不安があった。そのため、常に強迫的に神経を張り詰めて生きていた。そして、それが高じて神経症になってしまっていたのだ。せっかく京都で頑張ってきたのに、何も無くなったとき、俺は何をよすがに生きていけばいいのだろう。

元々俺が男性グループに足を踏み入れたのも、生活が苦しく、将来の展望が見えず、何か他の世界で生きることを考えなくてはと思い始めたからだったのだ。あの時、俺は 34 歳、通っていた心療内科の女の先生から言われたのだ。

「國友さん、これまで一生懸命、一心不乱で勉強してこられたと思うし、今まで勉強してきたことは今は報われなくてもあと 5 年、10 年経った時に報われる日は来るはずだから、勉強や仕事のことはしばらく忘れて、他のことを考えてみてはどうですか。そういう時には、仕事ではなく、人間関係に目を向けることです」

そう言われて、俺は男性運動に関わる決心がついたのだった。勉強ばかりの生活はしばらく止めにして、人間関係に目を向けようと。

ところが、いざ足を踏み入れてみると、関西の男性運動は学者集団である。伊藤公雄さんや中村正さんだけじゃない。他にも当時は若手だった研究者の人たちは何人もいた。それ以外の人でも、大学で非常勤をしていたり、どこかの大学で教えていると言っても不思議ではないような学識のある人ばかりだったのである。

大学の世界はしばらく忘れるつもりで男性運動に入ったのが、逆に火に油を注がれるようなことになったのだった。そして、前回の連載にも書いたと思うが、俺は男性運動の歴史の中でも一番の嫌われ者になってしまった。

本当に因果だった。俺はあの団体で最も大きな、おそらくあの団体の最初で最後の大きなプロジェクトに参加した。俺がいなければ成り立たないプロジェクトだった。

しかし、プロジェクトのリーダーの人との性格の不一致はだんだんと顕在化していき、お互いを憎しみ合うようになっていった。そして、俺はあの運動を破門になった。2 年間、自分の居場所を探そうと必死に頑張ったのが、別れは素っ気なく、しかも最悪の形で訪れたのである。

ますます、俺の強迫神経症はひどくなっていった。

当時、こころの健康増進センターだったと思うのだが、心に悩みを抱えた人のための無料の法律相談を受けにいったこともあった。その時に大事なものに対する紛失恐

怖を俺は相談した。「もし、出席簿をなくしたりしたら、どうなるんでしょうか」

すると弁護士の人からはこう言われた。

「普通、出席簿とかテストみたいなものは盗まれないものなんですよ」

そのことを当時かかっていた女性のカウンセラーの先生に話すと、「そうでしょうね。普通盗まれると言ったら、金目のものなのだろうから・・・」と言われたものだった。

確かに出席簿やテストは俺にとっては、無くしてはならない大事なものだけど、泥棒たちにとっては盗んでも何の意味もない紙切れなのである。

あれから 25 年。ついに男性グループのミニコミの復刻本が出た。この後、その運動の中心人物のうちの 1 人の先生からインタビューを受けることになっている。これまでの男性運動の歴史を辿るために関わりのあった人たちにインタビューをしているらしい。

俺が確執を起こした人は 70 代の後半になって、認知症になられたとのことで、もう 5 年くらい音沙汰なし。復刻本やこのインタビューのプロジェクトには関わっていない。

人間って何が起こるかわからないものだなあと感慨深いものがあった。もちろん、俺はインタビューで、その運動を批判するつもりではいるのだけれど、そういう反対派もいた方がインタビュー集は深いものになるから、むしろ歓迎してくれているみたいだ。

そして、何よりも今回やりとりしていてわかったことは当時のあの運動の中核だった人たちは、25 年前、俺がどういう確執を起こしたのかということを全く知らないということなのだった。おそらく皆んな、忙しい盛りだったし、適当にスルーしていたのだろう。俺がどれだけ傷ついたにしても、自分が傷つけられたわけじゃないから、他の人は何も思わないのである。

しかし、巡り巡って 25 年、ここで、俺はついに濡れ衣を晴らすことができるのである。

4. 立命館との復縁！？

考えてみると、この運動との関係は、俺と立命館との関係とも重なり合うのだ。

これまでもこの連載の中で、立命館の人が中心になっているこのマガジンで、立命館を批判するのは心苦しいけれど、俺は立命館に対してわだかまりを持っていることは書いてきた。

俺は不登校で高校に行かず、大検で大学に入った。1 年間、塾みたいなところには通っていたのだが、受験勉強の期間も普通の人に比べれば短かったし、どこの大学に入ったらいいのか、真剣に考えている場合でもなかった。どこかに入らなくては！そして、高校にも行かなかったんだから、大学だけは出なくては！！！そういう気持ちで、大学にはいった。

立命館という大学のことも何も知らなかった。それどころか京都に来たことすらなかったのだ。でも、大学なんて第一希望で入るやつばかりじゃない、だから入ったところで前向きに頑張れば、それでいいのだと俺は思っていた。

しかし、現実はそんな甘いものじゃなかったのだ。3 年間も引きこもっていた俺が、大学に入ったからと言って、すぐに大学に溶け込めるわけはない。そのことは覚悟はしていたけれど、現実はその何倍も、何 10 倍も過酷だった。

あの頃は幸運の女神が俺に完全に背を向

けていた。次から次に悪い方に物事は進んでいった。何よりも女子から受けた集団的な悪口が原因で不登校になった俺が、女の子が８割近いクラスに入れられることになったのである。まさに恐怖と悪夢だった。

しかし、俺はあの時、前向きだった。これもトラウマを癒すチャンスだと前向きに捉えようと思った。なのに、女子からの毛嫌いや白眼視はやはり始まっていったのである。立命館という大学の雰囲気も明らかに俺とは合わなかった。それはそうだろう。俺は大学の下見もしないで、地方試験で入っているのだ。何の予備知識もなく入ったのだ。見合いもしていない人と結婚したようなものだったのである。

しかもあの当時の立命館は人気が落ちた時期だった。当時、貧乏学校・左翼・暗いというイメージを引きずっていた立命館は偏差値が落ち、他の大学の連中からも嫌なことばかり言われた。

だけど、俺は頑張った。今度こそ這い上がらなくては！

しかし、どんどん混乱は広がっていった。そして、最悪の結果が俺を待ち受けていたのだ。卒業間際になって、指導教授からパワハラを受けることになったのである。とは言っても、まだパワハラという言葉もない時代。今だったら、学生の方が先生を訴えることもできるけれど、あの当時は学生が先生を摘発するなんて考えられなかったのである。

あの時、あの先生は魔が刺してラストワード(決定的な言葉)を言ってしまった。その先生は魔が刺しただけのことだったのだろうけれど、4 年間、ずっと嫌がらせをされ、満ち足りなかった俺にとっては、一生消えないような言葉になってしまったのだ。

人生って本当に残酷だと思ったものだ。4 年間あれだけ頑張ったのに、最悪の結果を神様は俺に与えたのである。俺は憎しみの残るような気持ちで、大学を卒業し、他の大学の院に入った。

あれから 40 年近くが過ぎた。大学卒業後、少しずつ薄紙を剥ぐように俺の人生は上向きになっていった。大学で教え始めたのが 29 歳の時、あれから 33 年間、俺は大学の非常勤講師としてたくさんの大学で教えてきた。そして、楽しい思い出もたくさんできた。学生からもたくさん慕ってもらった。

ところが俺は立命館で教えたことは一度もなかったのである。それはトラウマのせいだった。もう大学の頃のことは思い出したくもないし、他の大学にアイデンティティを追い求めた 40 年間だったのだ。もう立命で教えることは永遠にないだろうと思っていた。

ところが、である。今年の 2 月、突然立命館の先生からメッセージが来て、1 コマだけ映画の講義を持ってくれないかというのである。おそらく、ピンチヒッターなのだろう。今学期だけの依頼なのである。

どうしようかと一瞬迷いはした。また何かトラウマ的なことが起きたりしたら、また過去に引き戻される。せっかく、他の大学での仕事は順調で、「京都の大学で教える非常勤講師」という自分のアイデンティティが固まって来たのに・・・。

しかし、考えようによってはこれで立命館に対するわだかまりを溶かすチャンスなのかもしれない。どっちみち半年だけの依頼なので、短い期間だ。半年間教えてわだかまりが溶ければ儲け物。溶けなかったとし

てももう俺の心の中では、自分が立命の学生だったという記憶は遠い過去のものになろうとしている。あの後、色々な大学で教えてきた俺は、他の大学の方が関わりが長くなってしまっているため、流石にもう立命館という大学の名前を背負うことは無くなってしまった。

俺に決定的な屈辱を与えた先生は、俺が卒業してから3年後、まだ50代の若さで亡くなった。また立命館はその後が大学改革で、今となってはかつての貧乏というイメージは無くなり、暗いというイメージもなくなり、学生運動も皆無のはずだ。学生の気質も変わっているだろう。キャンパスも綺麗になっている。

おそらく、半年教えたくらいで立命館と復縁(？)というところまでは行かないだろうけど、半年間教えることで、何かが吹っ切れるような気がするのだ。

今から 30 年近く前、原田美枝子主演の『愛を乞う人』という映画があった。原田美枝子が一世一代の名演技で女優賞を総なめにしたやつである。彼女が演じているのは二役。娘にわけもなく暴力をふるう鬼のような母とそういう母の DV に耐えながらも健気に生きて、今は母親になっているヒロイン。悪女と聖女のような女性を原田美枝子が渾身の演技で演じわけている。

この映画で興味深いのは、今は年頃の娘もいて中年になったヒロインが、母に会いに行く場面なのである。そのことで母と彼女が仲直りするわけではない。母の方は彼女が自分の娘だということに気づいてもいないのである。しかし、ヒロインは自分を虐待した母と再会することで、自分の人生に区切りをつけるのである。母にあった後、彼女が、「お母さん、泣いてもいいかな」と娘の前で涙を流す場面は今でも覚えている。

30年近く前にあの映画を初めて見た時はこの涙の意味はよくわからなかった。しかし、俺も歳をとって、25年ぶりに男性運動の復刻本が出て、40年ぶりに立命館に関わることになって、彼女の涙の意味がわかるのである。自分がそれまで抱え込んできた過去のトラウマに折り合いをつける、その涙なのだ。

俺は男性運動にしろ、大学にしろ、真剣になり過ぎるのである。最初からこの程度のものなのだとクールに距離を置くということができない。本気になり過ぎるために裏切られた時の傷が大きくなるのだった。それは俺の人生の一貫したパターンなのである。

5. 中京に生きる

結局、62年の人生を振り返って、俺が一番、縁があったのは京都、中でも中京区である。

これまでも何度か書いたと思うが、俺が京都に来たのは本当にひょんなことから。俺は東京志向だったから、京都なんて考えもしなかった。しかも、俺は大の漬物嫌いである。漬物を見るのも嫌なくらい嫌いな人が京都で暮らすなんて、前にアメリカ人の先生から、“You live in a wrong place”(間違った場所で暮らしている)と言われたものだった。

歴史に関心があるわけでもなかったし、実際京都に来てみると、京都は摩天楼がないので、俺の憧れていた都会のイメージではなかったのだ。

それがいつの間にか腐れ縁で、43 年の京都生活。

俺は大学院の博士課程は兵庫の大学だったので、その時に引っ越すことも考えたけれど、結局、阪急の大宮から西宮までは意外に近くて通えることがわかったため、京都を離れなかったのだった。

大学の頃は北区だったが、その後、大学院の修士課程になってからは、西院の近くのマンションに引っ越した。その後、留学のチャンスが回って来て、1 年アメリカで暮らし、それから帰国後は大宮駅近くの千本通のワンルームマンションで暮らし、それから 30 歳の時に見栄を張ってちょっと高いマンションに移ったのだが、そこは前のマンションから数件先の２K のマンションだった。

その後、18 年ほどそのマンションで過ごした。賃貸マンションで 18 年も暮らす人というのはそうそういるものじゃない。周りはどんどん抜けていったが、俺は引っ越す金がずっとなかったということもあって、そこで暮らし続けた。

今から 14 年前、ついに他のところに移ろうかという気になって、エージェントで紹介してもらえたのが今のマンション。ここは新しくて、綺麗なマンションだが、ここも前のマンションと同じ通りで歩いて５分もかからないところ。

すなわち、俺はアメリカから戻ってきた 25 歳の時から 62 歳になる今日まで千本通で暮らしているのである。留学する前の 1 年半も多少離れてはいたものの、中京区のマンションであることに変わりはない。

ということは、23 歳から 62 歳、そのうちアメリカ留学の１年間を抜かせば、38 年、俺は中京区で暮らしている。

もう１回くらいは引っ越そうかと大学の近い出町柳に新たな住居を探そうとした。しかし、なかなかいい物件が見つからない。出町柳は美味しいお店も多いし、大学街が残っているところで楽しい雰囲気はあるのだが、駅まで歩いて 15 分とか 20 分、そういうところが多いのである。

今住んでいるところだったら、二条駅まで歩いて５分、大宮駅も歩いて 15 分で行ける。これから先老いていくんだから、できる限り駅に近いところで暮らさなかったら、どこも行かれなくなってしまう。

65 歳を過ぎると貸してくれなくなるマンションもあると聞いていたので、エージェントに確かめたところ、今のマンションは、それはないとのことである。

もう、ここで死ぬまで暮らそう。死ぬ時は病院だろうけど、病院に入院する間際までは、中京区の千本通で暮らすのが一番いいのだ。

今となっては、ここが俺のアイデンティティ。実家にいるよりも、ここにいる方が遥かに落ち着くのである。

6.『ゴールデン・ボーイ』（ルーベン・マムーリアン監督・1938）

音楽とスポーツの話である。

イタリア系のお父さんが息子にバイオリンをやらせていて、息子も音楽が嫌いではないのだが、むしろ父親思いの彼はお金のためにボクサーの道に転身しようとしている。

ヴィンセント・ミネリ監督の『お茶と同情』（1956）では、息子は音楽や演劇の方が

好きなのに、お父さんはアメフトの方が男らしいと思って、息子が音楽をすることを快く思っていない。それとは逆の話である。

「音楽とスポーツは両立しない」というセリフが出てくるのだが、まさにそうなのかも知れない。音楽は女性のイメージ、スポーツは男性のイメージというステレオタイプはいまだに根強い。

俺は小学生の頃、体育は男子の中でビリだったが、音楽は男子の中では一番だった。得意だった。器楽クラブで演奏したこともあった。あの当時の器楽クラブは男は 3 人で、あとは女の子ばかり。でも、これは昔の話で、今は男の子も多いだろうと思い、学生たちに聞いてみたら、「今でも、そんなもんですよ」と言われた。軽音だったら男の子もいるけど、吹奏楽とかそういうのになってくると女子というイメージがまだ強いのだということがわかって愕然としたものだ。これは明らかにジェンダーへの囚われだ。

偉大な音楽家とされるのはショパン、モーツアルト、ベートーベン、バッハ、男ばかりなのである。実際、男の子でも音楽が好きだという子はいくらでもいるだろう。なのに、一般的には芸術は女性的な分野だという社会通念があるため、女ばかりの吹奏楽部に男の子が足を踏み入れるのは抵抗があるのだ。ちなみに、ダンス部に至っては、男はゼロなのだそうである。

俺は、大学の授業で『プラダを着た悪魔』（2006）を使ったことがある。この映画ではヒロインの先輩の同僚役でナイジェルという男が出てくるのだが、彼は特別女っぽい仕草をするわけでもなく、映画の中で彼が男性と付き合っている場面はないし、ゲイなんていう言葉は一言も出てこないのだが、学生たちの中には彼はゲイであると思ってみている子が相当な数いるのである。それは彼がファッション界に務める都会生活の男性といういかにもゲイのステレオタイプのキャラで、時々、皮肉で冷笑的な態度をとるところなども、ゲイのステレオタイプによく出るパターンだからなのだろう。

先日『青色革命』（1953）という市川崑監督の古い映画を見た。この映画では、三國連太郎が仕草から話し方から女っぽく、今だったら、間違いなくゲイと見なされるであろうキャラクターの役で出ている。しかも、不思議なことに今となったらゲイと思われるキャラであるにも関わらず、彼は女好きで、女の子を一生懸命口説こうとするし、周りの人もそのことをわかっているのである。

この当時まではまだゲイという概念が浸透していなかったため、女っぽく見える男であってもヘテロだという前提があったのだろう。しかし、今となっては大して女っぽくなくてもゲイだと思われるのである。それだけ LGBT が身近になって来たからなのだろうか。

ジェンダーは流動的だ。人によって、「男らしさ」「女らしさ」の定義は違ってくるため、息子にバイオリンをやらせようとする親父もいれば、アメフトをやらせようとする親父もいる。

しかし、この吹奏楽部やダンス部の男女差の偏りを考えれば、やはり男は音楽よりもスポーツという固定観念が強いことは疑いようがない。

スポーツ音痴で、少年時代に散々辛酸を舐めた俺は、やはり、男になりたい！　スポーツおじいさんになりたい！！そういう気持ちが抜けないのである。

役場の対人援助論

（54）

岡崎　正明

（広島市）

研修を、企画してみた。

研修会はお好きですか？

「研修会」というものが、わりと好きである。受けるのも、あるいは話し手になったり、企画するのも。しかもどちらかというと、仕事で業務として義務的に関わるものより、自ら選択して費用を負担し、時間を作って参加する研修会の方が楽しめる気がする。

新しい知識や人との出会い。日常業務から離れ、非日常を味わえる。自分のおススメを、みんなに知ってもらえる。ちょっと元気がもらえたり、「悩んでるのはオイラだけじゃないんだな～」と、同じ穴のムジナ（？）を見て、なんだか安心したり。みんなで集まれる、お祭りみたいな雰囲気が好きなのかも？ただのイベント好き？なんて思わなくもないが、会の大小や人数の多寡に関係なく、先を行く人の話を聴いたり、互いの想いや知恵を市場みたいに並べてアレコレとやりとりをする、そんな「開かれた場」の空気が好きである。

そうを言うと「熱心だねえ」「えらいね」などと褒めていただくことがあるが、それと同時に「私は休みの時間を使ってまではちょっと…」「いやー。そんな元気ないわ」「忙しくて」などという反応も結構セットでついてきたりする。まあそこは個人の人生であり、自由なのでとやかく言う立場にないのだが。でも、もし今の自分の仕事をそれなりに継続させるつもりで、できればより効果的な仕事ができたらそりゃ気分いいとか、上達したり感謝されたら嬉しいとか、やりがいも難しさも感じているようなら。無理のないペースでいいので、自分のために、自分にお金と時間を投じることは、やったらいいと思う。ただ“消費”するだけの楽しみも、それはそれでストレス解消にはなると思うが、そればかりだと虚しくなったり際限が無くなったりと、バランスが難しくなりがちだ。その点「自分への投資だ！」「成長につながっている！」と思えることは、罪悪感もなく、むしろ苦労の根源に自ら打って出ている、前向きな気にさせてもらえる。そんな態度で生きていくことで、幸せになる確率が上がる例を結構見てきた。

研修会というのはスポーツで例えるなら「練習の場」だと思う。試合本番はあくまでゲンバ（現場）、日常業務の中である。試合経験を積むことで技が上達したり、体力がついたりする。多くの試合をこなすことで、「試合慣れ」することはもちろん、試合でしか学べないことがある。

ただし、やみくもに試合ばかりに出て、当たらないバットを振り、取れない球を追いかけるのも何だか違う気がするし、非効率ではないだろうか。試合の場を一旦離れ、コーチの助言や理論（講師の話）を聞いてコツやワザを学ぶ。自分のフォームの動画を見て弱点や悪い癖を理解し（振り返りや内省）、改善や能力向上のための擬似動作や反復運動を繰り返す（ロールプレイや事例検討）。そういう「練習」が個人の力量に及ぼす影響は、決して小さくないはずだ。練習を全くせずに試合で結果を出そうなんて、大谷やイチローが聞いたら鼻で笑われてしまうだろう。

そんなわけでこれまで受講したり、企画したり、ときには話し手となって研修に関わってきた回数は、少なく見積もっても年に１０回以上。２０年以上この界隈で働いているので、ゆうに３ケタは研修というものに参加してきたことになると思う。

そんな私が広島や山口・岡山など、児童相談所とその周辺に関わる勉強仲間の、通称SKB（せとうちあたりの家族支援勉強会）のメンバーと、１年以上前から企画し、準備をしてきた**「第 33 回　児童相談所とその近接領域における家族療法・家族援助の実際研修会　山口大会」**（長い！）が、2026 年２月 14 日～15 日に山口市で開催された。当日は、北は北海道から南は沖縄まで、全国各地から約２００名の参加者が集まってくれ、懐かしい顔や新たなつながりに出会え、様々な刺激的で興味深い学びを得ることができた。

この会は３０年以上前、当時の京都府や広島市の児相関係者が有志となって集い、誰に頼まれたのでも、業務上のノルマでも学会の当番でもなく、本当にやりたい者がやりたい想いで企画して始め、その後全国有志の手で受け継がれて続けてこられたという、なかなかに稀有な研修会である。そして若き頃の私にこの業界の面白さを教えてくれ、様々なつながりをくれたとても大切な場所でもある。

そこで今回の「役場の対人援助論」は、この山口大会の企画に込めた思いや、無事終えた私の個人的な感想、嬉しかったエピソードなどについてレポートしたい。行こうと思っていたけど残念ながら来られなかった人、初めてこんな会があることを聞いた人など、様々あると思うが、少しでもこの会の魅力が伝わればと思う。

研修会を準備する

そもそもこの研修会、学会や主催団体などの母体がない。そんなものが年に 1 回ペースでどうやって 30 年以上も続き、誰が次の開催地を決めるのか。初めて聞く人からすれば、全く想像がつかないだろう。

私も開始当初のことは知らないが、少なくとも最近は、長年この会に関わってきた中心メンバーが、目ぼしい候補先に「やってみない？」「おもろいで！」「手伝うで！」と勧誘したり、その年の懇親会で、酒の勢いで興味がある人がうっかり手を上げたり…。まあ、特に決まったルールもないため、「やりたい！」「やります！」と言えば、周囲が「ドーゾ、ドーゾ」と促して決定するという、ダ〇ウ倶楽部みたいな流れなのだ。

そんなわけで（どんなわけだ）、昨年度の徳島大会の終わりに「やってみたら？」と声をかけられた私は、「SKB の仲間とだったら、面白い企画がやれるかも！」と盛り上が

り、山口の主要メンバーに「ぜひ山口でやらない！？湯田温泉行きたい！」と半分煩悩みたいなお願いをして、大会を引き受けることになった。二つ返事で「やりますか！」と言ってくれた山口メンバーの懐の深さに感謝しかないが、私の無茶ぶりのおかげで、会場は本当に湯田温泉すぐ近くとなり、参加者の多くは「美肌の湯」としても名高い温泉を楽しむことができたのだから、まあ私のワガママも結果的にファインプレーということになるだろう（自己弁護）。

私たちは１年前の３月頃から、月１回ペースでオンラインでの打ち合わせを重ね、役割分担やチラシの作成、分科会や全体会のコンセプト作り、講師の選定と依頼など、少しずつ準備をしてきた。

何事をやるにも「ヒト・モノ・カネ」が肝心といわれるが、研修会の準備も同様である。「ヒト」の部分で言えば、講師の多くが長年この研修会に関わってきた人たちや、会のコンセプトに理解を示してくれた人たちで、協力をお願いするとほぼ手弁当で集まってくれる。今回もそんな講師陣がたくさん集まってくれ、おかげで予算内で充実した内容のセッションを用意することができた。こんなことが実現できるこのネットワークこそ、この研修会の最大の強みであろう。

次に「モノ」の準備では、「ハコモノ＝適切な会場」を確保するというのが、実行委員会の大きな仕事のひとつとなる。会場は大きくて立派ならいいということでもなく、あまりに豪華だとそれだけ運営費がかさんでしまい、参加費が高騰してしまう。大学関係者にツテでもあると、キャンパスを低額で貸してもらえたりすることもあるが、毎度そんなに都合よくはいかない。予算を抑えようとすると、ホテルなどの民間施設より公共の施設が望ましいが、その分利用するのにいろんな条件があったり、予約の競争率が高かったりする。この点は地元山口メンバーが本当に頑張ってくれ、書類作成や市の後援をとることで、利用料を抑えたりしてくれた。

最後に「カネ」だが、この会はどこからの補助も支援も得ていない（そこがこの会の自由度を保っている良さでもあるが）ため、純粋に参加者からの「参加費」だけが運営に当てられる費用となる。ようは参加者を一定以上集めることが必須で、「カネ＝ヒト」なのだ。そのため、この会の強みである顔の見えるネットワークを活用し、山口・岡山・広島の実行委員たちの地元での広報はもちろん、これまで会に参加したことのある方々へのお知らせと、そこからの宣伝や紹介をお願いするなど、「口コミ」での広がりを大切にした。ネット隆盛の時代だが、やはり人は知らないチラシやポスターだけ見るよりも、信頼する人から「これよかったよ」と言われた方が、心動かされるものである。もちろん全国の児童相談所に手分けしてFAXで案内を送付したり、児童養護施設や近隣市町村などの関係機関や団体、様々な会議や集まりの場へも広報を行い、少しでも多くの人に存在を知ってもらう努力も行った。

また、普段はオンラインでやりとりをする実行委員会のメンバー同士が顔を付き合わして士気を高め、開催地・山口の機運を高めるため、2025 年夏には山口県周南市でプレ企画としての研修会を開催。夜の懇親会では、本番に向けた様々なアイデアや想いを語り合い、「下見」という名目の下、山口のグルメやお酒を味わったりもした。ようは実行委員メンバー自身が楽しむことを大事にしたわけだが、これもこういう有志の会にとって大事なプロセスのような気がしている。

こうして約１年の準備期間を経て、山口大会は無事開催された。突然の解散総選挙も、数年ぶりの大寒波と大雪も、見事に１週間ズレてくれ、主要メンバーもインフルエンザに罹ることなく、当日を迎えることができたのだった。

山口大会レポート

準備のため開始 2 時間前に会場である「山口県健康づくりセンター」に入ったが、すでにご当地山口メンバーが中心になって、受付や会場づくりを進めてくれていた。私は自分が関わる分科会の部屋のチェック、書籍コーナーの準備や実行委員メンバーとの打ち合わせ、担当するオープニングセッションのリハなど、慌ただしく動いた。食事は作業しながらサンドイッチを頬張って済ませた。その間にも、懐かしい顔、わざわざ訪ねて来てくれた人、ずっとオンラインでやりとりしていてリアル対面は初めての人など、いろんな方と挨拶ができたのは心湧きたつ時間だった。

私が担当するオープニングセッションは「グループワーク『わたしをふるわす物語』」というタイトルの 1 時間程度のセッションで、大会の初めに緊張を解きほぐし、他の参加者との距離を縮めてもらうとともに、自分の仕事や人生への向き合い方について、少し想いを馳せてもらうことを目的に企画したものだった。

200 人ほどの参加者でいきなりグループワークということで、どこまでみんながついてきてくれるか心配もあったが、テーマが自分の好きな物語（本、映画、ドラマなど）という身近なものでもあり、大変盛り上がったように思う。こどもや家族の支援という領域で働く者同士、興味惹かれる作品が似通っていたり、意外な作品の紹介に心動かされたりと、新たな出会いやつながりのきっかけになったのなら、企画者として幸いである。

1 日目はその後３つの分科会に分かれて会が進行した。私が企画者として参加した分科会②は、「機関・立場・職種間の連携を『TIC』で考える　～トムとジェリーを目指して♪～」というタイトルで、よく言われる多機関や組織内での連携不全について、トラウマインフォームドケアの視点で想いを語り合い、自分の感情を味わうことで、葛藤や対立が生まれる関係を見つめ直し、それを乗り越える知恵や手法について考えるというものだった。京都府福知山児相の吉村拓美さんを講師に、リフレクティングトークを使って語り・聴くという実践を時間いっぱい行った。

私も TIC を知ることで、これまで関係機関や他職種へ腹を立てたり、無理解を一方的に嘆いていたものが、「ひょっとしたら相手のあの反応の裏側には、傷つきや不安があるのかも？」と立ち止まれたり、自分の感情についてもより詳細に言語化でき、消化できるようになったため、参加者のみんなとそうした感情や体験を共有でき、大変有意義な分科会になったと感じている。参加者からは「多くの方の発言を聴くことができた」「まずは自分が TIC でしなやかになっていけたら。エンパワメントされました」「TIC を連携に使う方法がとても納得」などの声をいただいた。

同時間の分科会①は「こどもの日々の生活を振り返る低いゴールから始めるライフストーリーワーク（LSW）」で、ライフストーリーワーク相談室の才村眞理さんを講師に、「真実告知」や「生い立ちの整理」など、重いテーマをこどもに伝えないといけないイメージが先行しがちな LSW を、もっと日々の生活を振り返るような『低いゴール』から始め、分かりやすく、楽しいものにしていくことを考えるものだった。また分科会③は「家族理解の特別授業:やまぐち編」と銘打って、この研修会でもお馴染みとなっている、家族心理臨床家で漫画家の団士郎さんが、アレコレと家族支援や人への支援について語りワークするセッションで、今回の大会で最も参加者の多い分科会となった。

初日の夜、山口スタッフの準備で 80 名以上が参加する懇親会が開催され、全国の児相とその周辺領域の仲間が交流する場が設けられたのも、とても印象的で嬉しい場面だった。夏の下見の成果もあり？この日の懇親会はプレ企画の懇親会のお店と同じ系列店で行われ、「獺祭」など有名な山口のお酒と、瓦そばや長州鶏などの地元の名物が味わえ、

大盛り上がりの懇親会だった。そんな盛り上がりの後半。もうすぐお開きという時間に、私は 1 人の女性に声をかけられた。私よりも少し年配の関東の児相職員さんで、この会で何度か顔を合わせていた A さんだった。A さんは今年度で退職を迎えられるとのことで、「この研修会で育ててもらって、助けてもらった想いがあって、お礼の思いもあって今回参加しました」「長年続けてもらって、ありがとうございました」ということを、私に言ってくれたのだった。私は別にこの会を長年続けてきた責任者でもなんでもなく、お礼を言われるような立場でもない。むしろ A さんと同じような育ててもらった立場だが、こんな場面に立ち会わせてもらえたことが、大変光栄で嬉しかった。

二日目の午前、私が参加したのは、企画・進行を担当する分科会⑤「ジ。～事例の検討について～」だった。児童精神科医の岡田隆介さんと、元大阪市児相の心理職である、京都橘大学の宮井研治さんをスーパーバイザーとして、2 つの事例検討をグループワークで行う企画で、いつも業務で行う事例検討を、もっと自由に、元気が出る新たな発見の場にしようと試みる会だった。

６人ほどのグループに分かれ、ジェノグラムだけで事例家族ついて想像することから、保護者やこどもがこれまで持っている、「自らを説明するストーリー（そもそも私はこういう人生を生きてきて、こういう人間で、だからこんな問題があって、きっとこれからもこうだろうといった仮説）」や、そのストーリーを描き変え得る、見過ごされた事実から描かれる別のストーリーについて話し合った。その後、岡田さんからストーリーを描き変えるときに起こる脳の動きや、どうすれば変化が起きるのかのミニ講義があり、後半は対象者のストーリーを描き変える手法のひとつとして、リフレクティングのロールプレイをグループごとに行った。

企画段階で欲張りな私がつい内容を詰め込み過ぎたこともあり、ペースが早過ぎて困る参加者も出てしまったり、全体的に消化不良な感じになってしまったことが大いに反省する点である。ただ事例提出者の 2 人が多様な意見を聴くことができ、ケースについて振り返ることができたと喜んでくれたことと、岡田さんの講義や宮井さんのロールや助言などを通して、参加者が学びを得ることができ、アンケートでも「岡田 Dr の言葉がガンガン心に杭のように打ち込まれました」「ストレングスを見つけることや新たなストーリーを創ることで支援を考える場だった」「ジェノグラムだけで想像してみることは面白かった。リフレクティングの時間は心地よかった」などの感想も聞かれたことは、主催者として大変うれしかった。

同じ時間にあった別の分科会としては、分科会④が「次の一手を考える！（対バリプラス）」で、そだちと臨床研究会の菅野道英さん、衣斐哲臣さんが講師となり、家族療法のポイントを踏まえながらグループによる事例検討を行い、家族を見立てる練習や、対応のロールプレイを通して学ぶ企画であった。もうひとつの分科会⑥は「『児童相談所職員の採用・人材育成・定着支援事業』への参加から考える 」というテーマで、静岡県内の児相職員である井戸美和さんと早野仁也さんが、PwC ｺﾝｻﾙﾃｨﾝｸﾞの 水谷祐樹さんと共に、児童相談所における人材育成や定着支援の課題や今後のあり方について、参加者と一緒に深めていく企画だった。

午前の分科会が 12:30 に終わりお昼休憩となったが、今回の大会では特別に「ランチタイムセッション」が企画されていた。フィンランドの児童福祉分野で働くアンティライネン知里さんが、現地からオンラインで「幸福の国フィンランドの児童福祉事情」と題して、聴き手の北谷多樹子さんとのトークを展開しながら、フィンランドの児童福祉の状況について紹介してくれた。福祉先進国のイメージがあるフィンランドの日本とは

違う仕組みや、実は共通して抱える家族とこども支える現場の課題など、私たちが普段当たり前と思っている日本の普通が、あくまで地域限定のものであることを教えてくれる、とても視野を広げてくれる刺激的なトークセッションだった。

そして最後のセッション。午後の全体会では、「『明日はもっといい日に、なるかなあ？』―ドラマを超える現場のリアル―」と題し、葛飾区児相の浅田浩司さんと、港区児相の佐藤靖啓さん、そだちと臨床研究会の川畑隆さんによる講演＆シンポジウムがあった。浅田さんは、フジテレビで放送された児童相談所が舞台となったドラマの監修として協力をした体験談を語ってくれたり、小手先のエビデンスではない、体当たりでとことん相手に付き合う情熱と直感のケースワーク遍歴について、真っ直ぐに語ってくれた。また、佐藤さんは富裕層が多い港区で経験した、新たなこどもと家庭を取り巻く課題について語り、それらを受けて川畑さんが感じたことや、通底する大切なことについて語ってくれ、かなり聴き応えのある２時間であった。

こうして研修会は無事終わった。この会は、スタッフが提供する側として会のお世話ばかりに追われるのではなく、参加費も払ってしっかり研修本体に参加し、スタッフこそ学びを得られるものにすることを大切にしている。今回、特にご当地である山口スタッフは誠実で、おもてなし精神が高く、なかなか十分に研修に参加できない面もあったかもしれないが、岡山や広島のスタッフほか、当日手伝いを買って出てくれた多くの参加者の協力もあり、スタッフみんなが分科会やなんらかのセッションを受講できたことは、最初に「山口でやろうよ！」と言い出した者として、非常にホッとした部分だった。

また、次の開催候補地として、複数の方から手が上がる状況があったのも、嬉しい出来事だった。創設メンバーの１人である団士郎さんは「無理に続ける必要はない。続かなかったら止めたらええねん。でも、続くならできる限りやったらええ」といつも言い、次の開催候補地が出れば、「やったらええやんか！生きとれば協力するで！」と嬉しそうに背中を押してくれるのだった。

確かに無理に続けようとすると、本来手段としていた研修会が目的化し、義務のようになってしまいかねない。やりたい人が集まり、自主的な動きが無理なく持続していく。このほうが健康的で、開催する方も受講する方も、きっと満足感が高いはずだ。だから無理して続ける必要はないとの意見には賛成だけど、それでも私はこの会が「ぜひ続いて欲しい！！」と強く願っている。それは業務上必須な研修が増えたり、児童虐待に関する学会が大規模化していく今だからこそ、この小さいけれど広く開かれた集まりが続く意味や役割がある気がしているからだ。

そんな思いを共有できる仲間と、今回無事研修会をやり遂げ、次へつないでいくことができこと。考えてみたらなかなかできることではないし、私は相当に運が良く、幸せな人間だと思う。これもひとえに実行委員会の仲間や講師のみなさん、協力してくれたすべての人々と、何より集ってくれた多くの参加者の方のおかげである。この場を借りて、心から感謝を伝えたい。本当に本当にありがとうございます！また来年、この研修会で会えることを願って！！

臨床のきれはし

SHEET32

浅田 英輔

Is Trying Hard Actually Supportive?

「がんばらなくていい」って言葉が増えてきた気がする。学校でも仕事でも、がんばりすぎな人たちが疲れ切ってしまっている。「逃げてもいいんだよ」っていう言い方もある。ほんとそうなんだよなーと思うことは多い。

「がんばらなくていい」は大事

これまでも書いてきたけど、大きなストレスがドカンとくるのもいやだけど、慢性的に長く続くストレスフルな環境は、精神をじわじわと削る。わかりやすいのは毎日遅くまでやっている残業。「今月は大きな案件のまとめだから、みんなすまんが頼む」っていう状況はまだいい。「今月末」までがんばればいいって思えるし、たぶん達成感もある。でも、通常案件がずっと続いて、締切が毎週きて、毎日21時まで仕事をしている。こういう状況は達成感も感じてるヒマもなく、終わりはみえない。

そういう状況はやっぱりおかしくて、そこにいるだけでジワジワと精神は削られ、視野は狭まり、体も精神も悪化していく。

学校っていうのは、逃げ場がない。オトナになると、1年のなんとはやいことよ！でも、子どものころのことを考えると、1年1年が大事だし、たいして先を見ているわけでもないし、時間感覚が違っていたなあと思う。そういう長い、逃げ場のない学校生活において、例えば味方が誰もいないという状況は結構つらい。一人でうまく過ごせる人は、ある意味強い。でも、いじめといえる暴力を受けたり、疎外対象になったりといった体験が入ってくると、とたんにつらい場となる。自分で環境を変えることが難しい子どもにとっては、「いつ終わるかわからない」という感覚になるのも当然である。

こういうときは、逃げてほしい。「ここでがんばる」っていうことはすごく大切なことだけど、そのままでいると自分がうまく機能しなくなってしまう。オトナであっても子どもであっても、がんばるのをやめて、環境を変える方法は、絶対なにかある。自分の機能を損なってまでもそこにいる理由は、たぶんそんなに大したものじゃない。

「がんばらなくていい」が人を傷つける

最近の支援に関する言葉でよく聞くよね。がんばらなくていいって。

すごく大事だし、「がんばる以外の道もあるんだよ」と示すことは大体の場合は必要であることが多い。「逃げてもいいんだよ」と教えることで、ラクになる人は結構いるんだと思う。

ただ、これを安易に使うのは危ないことだとも思う。「がんばらないこと」や「逃げること」を、「逃げる　＝　負け、ダメなやつ」と思う人もいるだろう。ちょっと穿った見方をすると、「お前はそこで逃げるという選択肢も選べないダメなやつ」ととらえる人もいるかもしれない。

大体、どこに逃げるんだよ。逃げたあとどうするんだよ。仕事やめたあとオマエがなん

とかしてくれるのかよ。逃げる段取りをつける気力なんてないんだよ。
なんてことも思うかもしれない。
安易な「がんばらなくていい」は、その相手にとっては、害である可能性は、結構高い気がする。

啓発の功罪　-対応マニュアル信仰-

発達障害のところでも書いたが、いろいろな問題や課題が世間に認知されることはとても大事なことだと思う反面、表面的に理解する人が増え、逆に理解されないという状況も多くみられるようになってしまう。仕方のないこととは思うのだが、もうちょっと本質の理解も求めたいところである。
うつや不登校や職場不適応についても同様で、『「ダメなやつがうまくいかない」のではない』というところが浸透してくると、「じゃあなんと声をかければよいのか」という”対応マニュアル”の話になっていく。うーん、間違っているわけではないんだがーー。
何度も書いているが、対人援助場面において、人は、「対応マニュアル的に正しい対応」をされると、ムカつくことが多い。傾聴とかもね。対応マニュアルに書いてあることは全然間違っていないし、ちゃんと正しい場合がほとんどなんだけど、そのままやるとまず間違いなくうまくいかない。
「うつの人に効く言葉がけ」「不登校の子にはこう話せ」なんてのは、そのまま使うとうわっつらの響かない言葉にしかならないのだ。

「がんばらなくてもいい」が効くとき

いつも頑張っているのを知っている上司が、「おまえ、がんばりすぎだ。ちゃんと休め。この仕事はこっちが引き受けるから」というのは、大体の場合は効き目がある。
いつもわたしの仕事に興味がなく、あの人ばかり気にかけている上司が「がんばらなくてもいいんだよ」というと、イラっとすると思う。
行きつく先は、関係性なのだと思う。
対人援助職がやるとしたら、「がんばらなくていいよ」のセリフの前に、丁寧に、丁寧にその人のがんばりを聞かなければならない。大体の場合、「がんばっていること」はその人が大事にしていることだ。つらいし、やめたいけど、何か理由があってがんばり続けた結果、そこにいる人である。どういう思いでがんばり続け、どういう思いでその相談の場にいるのか、しっかりと”傾聴”し、もしかしたら、「がんばらなくていいよ」ではなくて「がんばりをやめられない理由」や「がんばらなくなるとどうなる？」ときいたほうがいいのかもしれない。もし私が「がんばらなくていいよ」というとしたら、かなり厳選して、絞り出した末に言うのかもしれない。
状況をちゃんと理解してくれている人がいう「がんばらなくていいよ」は、たぶん効く。

事象や状態を並べて「がんばらなくていい」と思えるものはたくさんある。ひとごとのように「そんなにがんばらなくていいのに」と思うことはよくある。でも、目の前の相手に対して「がんばらなくていいよ」と言える場面って、たぶんずっと少ない。

発達検査と対人援助学

㉓ AI の問いから考える発達相談　その③

大谷多加志

62 号から連続で、Microsoft の AI ツールである Copilot に『現代の幼児期の発達障害のアセスメントに関する課題点を挙げ、それらに対する改善の方針を、①わずかな改善につながる水準、②具体的改善につながる水準、③中長期的、組織的に取り組むメタレベルの水準でそれぞれ提案してください。』と指示し、そこで提示された問いについて考える、ということをシリーズ的にやってきました。今号がその 3 回シリーズの最終回になります。今回取り上げるのは最後の「抽象的・理論的な問い」の回答についてです。3 つの問いが提示されていますので、順に考えてみましょう。

🧠 **抽象的・理論的な問い（発達理論・制度設計に関する疑問）**

- KSPD2020 の構成概念は、現代の発達理論（例：動的システム理論、文化歴史的発達理論）と整合的か？

→ 検査の理論的背景と発達観の一致性。

- KSPD2020 は、文化的・社会的背景の異なる子ども（例：外国籍児、多言語環境）に対してどのような限界を持つか？

→ アセスメントの文化的妥当性と限界。

- 発達検査という枠組み自体が、子どもの多様な発達のあり方を規定・制限してしまう可能性はないか？

→ アセスメントの倫理的・哲学的問い。

現代の発達理論との整合

まずこれらの問いの内容を精査するところから始めます。AI が述べた「動的システム理論や文化歴史的発達理論」についてですが、これをいったん『ヴィゴツキーの社会的構成主義やエスター・テーレンらのダイナミックシステム・アプローチなどの発達理論に準拠しているのか』という問いであると整理してみました。これらの発達理論の内容をものすごくザックリとまとめてみると、子どもの発達について、個人に内在された仕組みが決まったタイミング（年齢）で発現するという、古典的な発達理論で捉えるのではなく（ピアジェは Key-age という概念を用いていました）、周りにいる他者や環境、さらに社会や文化との相互作用の中で子どもの発達を捉えようとしている理論であると言えるかと思います（かなり乱暴

ですが)。

さて、このような発達理論の考え方と K 式発達検査が整合するかという問いに対してどう答えることになるのか考えてみましたが、これはなかなか難しい問題であるように思います。まずこれらの発達理論が指摘するように、子どもの発達は子どもの生物学的な機序だけで成り立っているわけではなく、環境や他者との関わりの中で進んでいきます。つまり子どもの発達自体が、社会や文化を含みこんでいます。K 式発達検査も定期的に改訂を行うことでその時代と環境における子どもの発達を捉えるように調整されていますし、検査項目の中には文化的な要素も少なからず含まれます。例えば子どもの語彙を評価する課題において、今の時代、今の文化において子どもが理解しているであろう語彙が選定され、項目に設定されているわけです。

一方で、検査構造自体は、課題(検査用具や教示)を提示し、それに対する子どもの反応を観察するという、古典的な時代から変わらない評価方法を用いています。子どもの反応はあくまでも「検査場面」における反応であり、検査を実施した時点では、特に子どもの生活環境などが考慮されているわけではありません。むしろ、検査結果の解釈や報告書を作成する際に、子どもの生活環境や社会、文化的背景と結び付けて子どもの反応を理解し、その結果を保護者や関係者に伝えていくという形で、重視すべき文脈になっているように思います。

異なる社会文化的背景の子どもに対する限界

次は 2 つ目の問いについて考えます。「異なる社会文化的背景を持つ子ども」はかなり幅広い意味を持つと思われますので、ここでは AI が例に挙げている「外国籍の子どもや多言語環境における子ども」への適用について、アセスメントの妥当性や限界という観点で考えてみます。

この連載の中でも何度か触れていますが、発達検査は「標準化」という手順を経て公刊されます。つまり、検査を使用する国や地域、時代に合わせて基準値が調整されています。そのため、外国籍に子どもなど、異なる文化圏の子どもの評価に用いることは基本的に難しいというのがまず前提となります(外国籍だけれど日本で長く暮らし、日本語でのコミュニケーションにも支障がない、などの場合は除きます)。時には「通訳を介して検査を実施してよいか」という質問がある場合がありますが、これは一段と難しいことになります。検査の教示(指示)は子どもの年齢に応じて用いる言葉が選別されており、項目ごとに「幼児語を使ってよいか」、「教示だけでわからない場合に指さしや例示などを行ってよいか」なども厳密に決められています。一般的に通訳の場合は、より伝わりやすい表現を意図的にするでしょうし、日本語での表現とぴったり一致する語があるとも限らないため、標準化された基準通りの手順で実施することはおよそ不可能であると思われます。行政における手続き上、どうしても検査の数値的な結果が必要であるなど、様々な事情があるのだとは思いますが、少なくとも、このような状況であれば基本的には無理をして発達検査を実施するより、別の手立てを探る方が適当と言えるでしょう。

発達検査という枠組みがもたらす制限

いよいよ最後の『発達検査という枠組み自体が子どもの多様な発達のあり方を規定・制限してしまう可能性はないか？』という問いを取り上げます。最初にAIのコメントを見た時から、この問いが一番興味深く、検討する意義があると感じました。まずこの問いに対する回答を行うとすれば、それは「ある」でしょう。

発達検査の項目の配置は、いわば子どもたちの標準的な発達のプロセスを示したものであり、だからこそ子どもの発達経過を見る目安として使えたりもするわけです。一方で、AIが危惧したような、いくつかの問題もあります。ひとつは必ずしも発達のすべての側面が網羅されているわけではないこと、もうひとつはわかりやすく発達のプロセスが示されていることの弊害です。順に考えてみます。

まずひとつめです。発達検査は子どものあらゆる発達の側面を網羅する構造にはなっていません。特に就学前の幼児期の検査課題は、ビネーの検査項目から取り入れたものも多く、学校での学習につながるような準備性が確保されているか（一定の巧緻性や概念理解、数理解、指示理解が可能か）という観点が重視されています。この検査構造により、子どもの発達をみる視点が狭められる恐れは十分にあると思われます。

ふたつめの「発達のプロセスが示されることの弊害」です。プロセスが示されているという検査構造上、どうしても検査結果をもとに『今できないものをどうすればできるようになるか』という思考が生じたり、『できるものを増やす＝発達』という感覚を持つことにつながってしまう気がします。

では、どうすればよいのでしょうか。「この検査結果はあくまでも子の発達の一側面だ」と説明したり、「できるようになることが目的ではなく、まずは今の発達状態でよりよく過ごせる環境を作りましょう」と方向づける、などの対応が考えられるでしょう。この対応は妥当ですし、現状これくらいしか仕様がない、という気もしますが、何となく気休めや根拠の薄い励ましをしているような後ろめたさを感じることもあります。

子どもの発達支援の中で目指すべき方向は何でしょうか。執筆者短信にも書いたのですが、先月にたまたまフランスに行き、児童福祉を学ぶ機会を得たのですが、その事前学習の中で聞いた世界人権宣言についての話がそのヒントになるように思いました。

世界人権宣言の第26条には教育の目的に関する記述があり、原典（英語）では「Education shall be directed to the full development of the human personality and …」という記述になっていました。日本語訳では「教育は人格の完全な発展ならびに…を目的としなければならない」となります。邦訳としては正確なのだと思いますが、「人格の完全な発展」って何？という気もしますし、何を持ってそれが達成されたとするのかも曖昧で、単に理念を掲げたものとも思えます。一方、フランス語訳は少しニュアンスが異なるそうで、そのフランス語を邦訳すると「教育はその人らしさが開花することならびに…」となるそうです。次々とできることを増やすのではなく、その子どもがその子らしく育ち、自分の花を咲かせること。それを教育や発達支援で目指すことができれば、縛られた発達観、成長観を脱することができるかもしれません。

講演会＆ライブな日々㊺

古川　秀明

『般若心経とオープンダイローグ 5』

そんなある日、困り果てていた両親の前に、強力な助っ人が現れました。
父方の祖母です。

私の状況を聞いた祖母は、
「心の病を治してくれるところを知っている。そこへ連れて行こう」
と提案しました。

私と両親は祖母に案内され、市電に乗って、出町柳にあった祈祷所へ向かいました。
そこは当時、拝み屋さんとして有名だったようで、祖母もそこで祈祷を受けていたようです。

祈祷所は古い民家で、入り口にはしめ縄のようなものが張られ、白い雷のような形の紙垂（しで）が揺れていました。
引き戸を開けて玄関に入ると上がり框があり、靴を脱いで上がると、大きな囲炉裏のような場所がありました。

薪が井形に組まれ、まるでキャンプファイヤーのように火が燃えています。
その前には丸いゴザのような座布団が四枚敷かれていました。

祖母、父、私、母の順に座ります。
しばらくすると、白装束の巫女さんのような女性が現れ、
「ご導師様が来られるまで、両手を合わせ、こうべを垂れて待たれい」
と言い残して去っていきました。

さらにしばらくすると、ドン、ドンと太鼓の音が響き、先ほどの巫女さんが
「ご導師様の御入場」
と大きな声で宣言しました。

やがて、腰の曲がった白装束のおばあさんが、大麻（おおぬさ）と呼ばれる榊に紙垂をつけたものを両手に持ち、私たちには目もくれず、キャンプファイヤーの前に正座しました。

老婆は大麻を振りながら呪文を唱え始め、そばに置かれた紙のような木片のようなものを次々と火の中へ投げ込みました。
投げ込むたびに炎は大きくなり、それに呼応するように老婆の声も動きも激しくなっていきます。

やがて老婆のテンションは最高潮に達し、
「キェ～！」
という叫び声とともに、その場に倒れ込みました。

祖母はその姿をありがたそうに拝み続け、両親と私は、まるで何かのお芝居を見ているような気持ちで眺めていました。

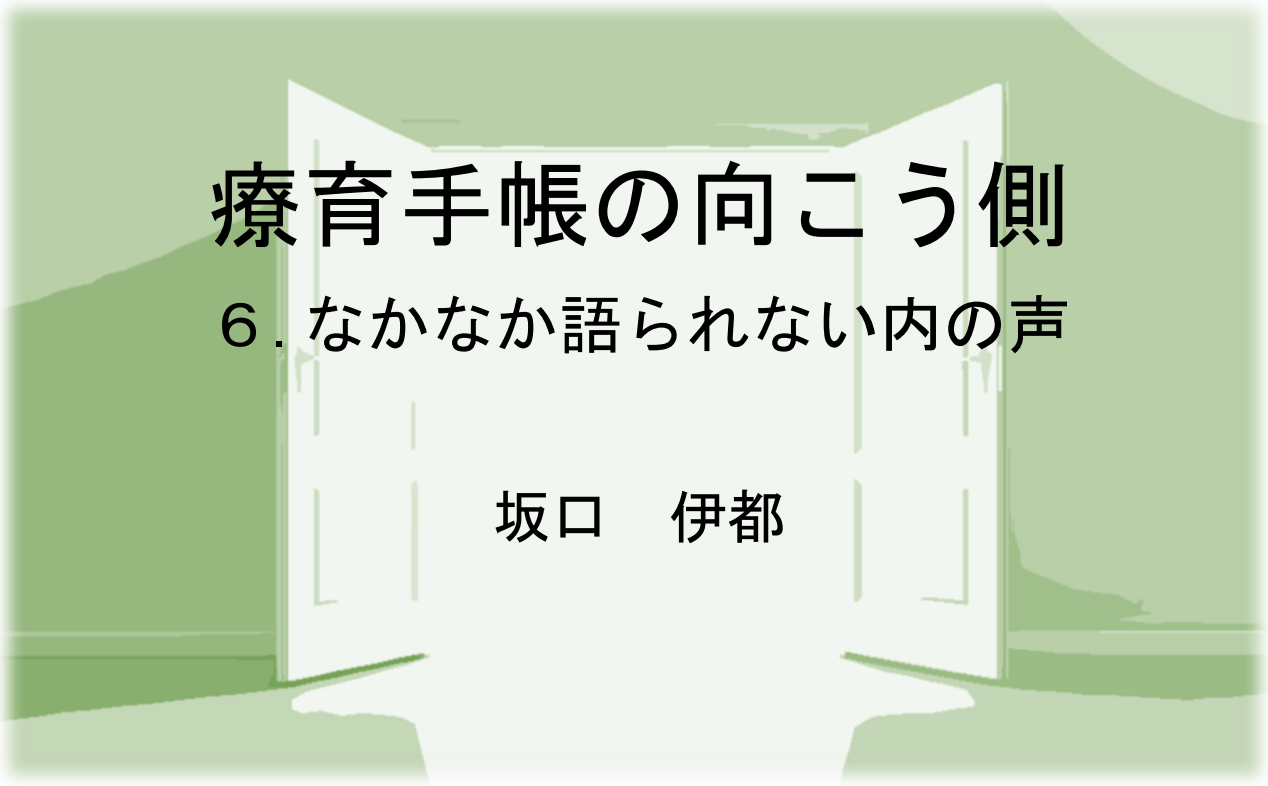
すぐに巫女さんが老婆を抱き起こし、
「ご導師様の御神託がある。有難く聞くように」
と告げました。

老婆は祈祷の結果を語り始めました。
「この子には狐の怨霊が憑いておる」
この言葉に一番驚いたのは、ほかでもない私でした。

身に覚えはまったくありませんし、そもそも狐という動物はテレビや動物園、絵本でしか見たことがありません。

いったいこれから何が始まるのだろう……。
いつ、どこで狐の怨霊なんてものが憑いたというのか……。
私たち四人は、それこそ“狐につままれた”ような気分でした。
（次号に続きます）

シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき



療育手帳の向こう側

６.なかなか語られない内の声

坂口　伊都

はじめに

　前回は、子どもの内と外との対応について書きました。子どもは何も考えずに毎日を過ごしているように見えますが、子ども同士や先生等の人間関係の中でいろいろ思案し、自分なりに対応しようと頑張っていることを理解していたいものです。

　もちろん、大人も頑張っています。子どものために何をしていけばいいか必死に考えていると伝わってきます。
療育手帳の検査時に親御さんから、
「療育手帳を持っていて得になることはありますか？」と尋ねられたことがあります。
「損得ですか？？？」
何を得だと表現しているのかわからずにいると、
「療育手帳を持っていなくても支援級や放課後等デイサービスの利用ができますよね」と続き、
できれば療育手帳を持たずにいたいのだと伝わってきました。
　中には「療育手帳をどうしても取る気になれず、申請を拒み続けて今になりました」と話す方もいます。葛藤を繰り返してきたとわかります。

　そうかと思えば、１歳になるかならない頃に療育手帳の新規申請をされ、
「この子のために早く療育手帳を取りたい」と言い、

「できることは何でもしてやりたいのです。少しでも早く取り組めば効果がでやすいと思うので」と前のめりで語る方もいます。この年齢だと、「まだ小さくて判断ができないので、経過を見ていきましょう」と援助者から言われることが多いのですが、藁をも掴む思いでいるのでしょう。

子どもにしょうがいがあると告げられたら動揺し、しょうがいを受け入れるまでに 5 つの段階があると言われています（ドローター；１９７８）。

第 1 段階　ショック　　頭が真っ白になる
第 2 段階　否認　　間違いに違いない
第 3 段階　悲しみと怒り　　何で我が子だけがこんな目にあわないといけないのだ
第 4 段階　適応　　現実を受け入れていく
第 5 段階　再起　　未来に向かって進む

当たり前ですが、この段階をきれいに流れるのではなく、行きつ戻りつします。何かショックを受けるような事柄は、しょうがい受容だけではありません。大きなトラブルに遭遇した時、同じような心の動きを体験したことがある方は多いのではないでしょうか。

しょうがいがあると言われ、子どもの将来を不安に感じ、どうしたらいいかわからないと焦る気持ちが起きるのは当然です。だからと言って「しょうがい」だから不幸でしかないと言い切れる人はいないでしょう。得になるかと言った方も、療育手帳を取る気になれなかった方も、できることはできるだけ早くと語った方も、子どもの将来がイメージできない不安が根底にあります。ご自身の気持ちの整理が追いついていないのかも知れません。今回は、心の内に焦点をあてて考えたいと思います。

見えない未来



子育てに将来への不安やトラブルはつきものです。親がいくら思い悩んでも、子どもがこの先どうなるかは誰にもわかりません。療育手帳を申請される背景に事故にあって、難しい疾患だと診断されてという方もいます。

対処療法しか治療の方法がないと言われて、
「これからどうなるかわからないから、今を大切にしています」という深く重い言葉を聞いたこともあります。

「本当に大変で」という言葉は、いろいろな親御さんから何度も聞きましたが、この方は大変だとは一度も口にしませんでした。「困っていることはあまりない」と笑って語る姿

に違和感を覚えました。

将来、何らかの症状が出る可能性が高いとドクターに言われているとお聞きすると、聞いているこちら側の胸が痛みます。この状況下で母の気持ちの吐露はどうしているのか、相談相手は誰になるのだろうと疑問が浮かびます。ご夫婦の会話に疾患の話題が上がることはないそうで、「私が通院や療育に対応しているから」と言い、「それに明るくしていないと、どんどん落ち込んでしまいそうで」と母の目が潤んでいきました。

本当は人目をはばからず大泣きをしたいのではないか、どうしてと怒りたいのではないでしょうか。

気丈に振舞うことで自分を保っているのでしょうが、支援者側はその人の困りごとに向き合おうとするので、困っていないと言われるとどう手を伸ばせばいいかわからなくなります。支援者から、「一旦、終わりにしましょうか？」と提案されたこともあるそうです。

母の言動は笑顔で話し、困っていないと言われれば大丈夫なのだろうと判断される雰囲気もわかります。所々で目が潤む母からは、何かとてつもなく大きい何かと戦っているように見えました。
相談援助職に疾患を治す力はありませんが、できることもあるはずです。

母が、今まで抱えていただろう言葉を投げかけてきました。
「私、上手く言えないから、わからないことも何を尋ねてもいいか、いけないのかわからなくて」と言い、これはどうか、あれはどう思うかと幾つもの質問が出てきました。全ての疑問に答えられるわけではないので、わからない部分は「何でそうなるのでしょうね」と唸りあいました。一緒に悩んでいる時、この方は答えを求めながらも、独りではなく誰かと悩みたかったのではないのではないかと感じました。

人は大丈夫でなくても、「大丈夫です」と答えがちです。その人の語る大丈夫の背景は多様であると教えられました。常に耳を傾けることを忘れないようにしたいです。

意外

訪れたその親子は、しっかり者の母とほとんど喋らないおとなしい対照的なイメージでした。

母からの聞き取りから語られた親子関係は、
「私よりは父の方が話しやすいみたいです。父にはいろいろ言っています。私は、口うるさい所があって、父の方が優しいので」と言うので、母は厳しく、父は優しいタイプで父に甘えているの

かと思って聞いていました。

続いて「父には、割とズケズケ言っていますね」
ズケズケ？優しい父に何をズケズケ言うのだろう。
「例えば、どのような話しになるのですか？」と尋ねると
「そうですね。うちはお風呂洗いが当番制なのですが、父親はすぐに忘れてしないでいることが多くて。そうすると、またしてないじゃん、お母さんにばかりやらせて」と怒っているそうです。

私のイメージは間違っていました。この子は、お父さんっ子というより、お母さんが大好きで守ろうとしています。そして、母も厳しいというよりも家でも外でもよく働いているので、子どもとしては休ませてあげたいと思っているのかも知れません。

次は、この子の話を聞いてみたくなり、母から聞いていた学校の様子を質問しました。
「〇〇部で頑張っているのだってね。練習きついでしょう。」
「はい、もう本当にきつくて大変です」と待っていましたと言わんばかりに「もう信じられませんよ、本当に力仕事ばっかりで」と続きます。

またもや意外。こんなに力説するとは。
前回の記録にも話している記載はなく、知らない人に気安く話をしてくれないのだろうと予測していました。この子が話したい話題は、聞けば話してくれるとわかり、勝手に決めつけてはいけないと反省しました。目の前の人の話に耳を傾けているつもりでも、聞けていないものです。優しいという曖昧な言葉の中にどのようなエピソードがあるのか尋ねてみることが大切だとわかりました。この回は、この親子の関係性を勘違いせずに聞き取れた気がします。

内の声



その人の印象でバイアスをかけず、聞き取る必要性を感じます。同じ出来事でも人によって感じ方が違います。例えば、いじめでは、いじめていた側はふざけていただけ、冗談だったと言い、いじめられていた側は深く傷つきながらも笑っていて、周りにいた大人達は遊んでいると思っていたと語られ、立場によって見えている景色や感じ方は変わります。

それは家族も同様で、父、母、上の子、下の子、祖父、祖母とそれぞれ立場、経験、世代、性別が異なり、大事にしているものも違い、感じ方も変わります。親は良かれと思ってしてい

ることでも、子どもには迷惑でしかないと言う事も起こります。

例えば、子どもに発達面での遅れがあると、普通級、支援級、支援学校、どこに入るのがいいのか迷います。支援級ではなく普通級に在籍する、年少期に療育手帳を取れそうにないと言われたため科目別に少人数指導を受ける通級を利用、学年途中から支援級に入る、地域の学校から支援学校へ移る、小学校入学前の相談時に地域の小学校の支援級では、手厚くケアすることが難しいと言われ、支援学校に進学等、その子によって辿る道は違います。

「普通級にいた時は勉強について行けず、ずっと下を向いていましたが、支援級になってから上を向くようになり、笑うようになって別人のようになりました」
「子どものペースでできると、できた・わかったが増えたからだと思う」と語られていました。

子どもにとってどの道を選ぶべきか悩みますが、子どもの様子を見ようとすることが何よりも大事なのですね。

自分のことは自分が一番よくわかっていると思いがちですが、言われてみればいつもより表情が暗かったり、仕事や勉強に集中できなかったり、何か別のことで気を紛らわせようとしていたりということの経験はないでしょうか。
「大丈夫です」を強調する、連呼する人は大丈夫ではないのだと感じます。困っていることはありませんと言われる方にも出会いますが、子育てはそんな簡単なものではないはずですが。

内の声は、実は本人も自覚していないことが多いと感じます。トラブルや悩み事に気を取られ俯いてしまう気持ちの時はなおさらです。他者から自分が意識していなかった質問を投げかけられることで、自分の中の一面を感じると、狭まっていた視野が広がった感じがする時があり、それは、大きな変化と言えるのではないでしょうか。その質問は、援助者だから投げかけられることもあります。

大人よりも子どもの内の声は、言葉として表現することが難しく、言葉の遅れがあれば表出すること自体が難しく、感情の理解も未熟で、内の声に届くまでの距離感が大人よりも長い。だから、近くにいる大人が一緒に考えようとすることが子どもの力になり、コミュニケーションの助け船になりのだと思います。



周辺からの記憶 50

2023年度シンポジウム

震災を語り継ぐ～いのちのバトンを手渡すために

村本邦子（立命館大学）

1 月 29 日から 2 月 4 日まで、台湾に行ってきた。この時期、毎年のように台湾に行っているが、今回のテーマは、日本が与えた植民地時代や戦争中、戦後の影響である。そのなかでも印象深かったのが、霧社事件のことである。「セデック・バレ」（2011年）という長編映画があり、「セデック・バレの真実」（2014年）というドキュメンタリーがある。一昨年、霧社で、モーナ・ルダオの子孫にあたる方のお話を聞いた。その時に、彼は「正当な語り部」であるが、その弟や女性の話も聞いた方がいいと紹介してくれたが、時間が足りず、「またあらためて来ます」と帰ったので、それを聞くためだった。

総じて、びっくりするような話、そんなこともあるだろうという話、まさかそれはないだろうと思うような話が混在している。かなり重要な部分で、上記ふたつの映画の話とはまったく違った話があった。最初に語られたのは国民党時代で抗日英雄の話が必要だったため、また映画を面白くするためだろうという。1930 年の事件なので、今となっては、その時代を直接知る人はおらず、みんな伝え聞きであるため、何が本当なのかは藪の中だ。

あらためて、歴史を記録するとはなんと困難なことだろうかと思う。ひとつの出来事でも、誰がどんな視点から語るかによってまったく異なる話になるし（インドの寓話「6 人の盲人と象」のように）、意図的歪曲もあるだろう。東日本大震災をめぐる私たちのプロジェクトの「証人になる」も、それだけに一筋縄でいかない。それでも、私たちは、社会のなかで誰からも耳を傾けられない声、多様な小さな声に耳を傾け、可視化していこうと志している。未来、私たちがいなくなった後、いつまでこのオンラインマガジンが残るのかわからないが、とにかく記録を続けていきたい。



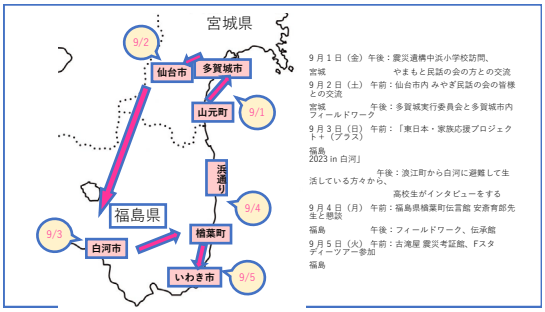
第一部　東北各地の今を語る
院生報告

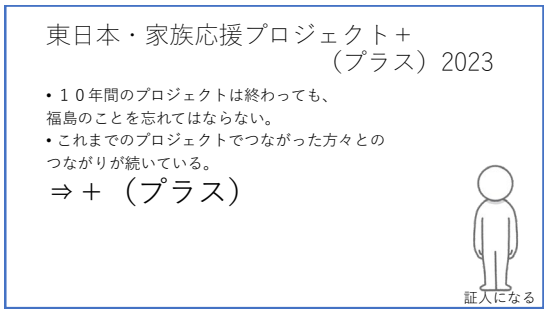
2023年9月23日、「東日本・家族応援プロジェクト＋（プラス）2023年度シンポジウム　震災を語り継ぐーいのちのバトンを手渡すために」を開催した。最初に簡単にプロジェクトの紹介をしたが、数えてみると、13年間で延べ370名もの立命館メンバーが東北4県13ケ所に赴いて活動していた。まず、「第一部　東北各地の今を語る」ということで、今年度のプロジェクトに参加した院生4人が報告してくれた。

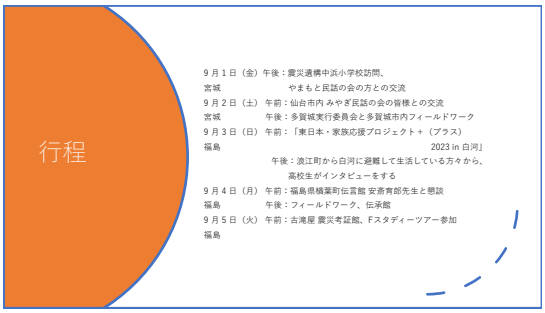




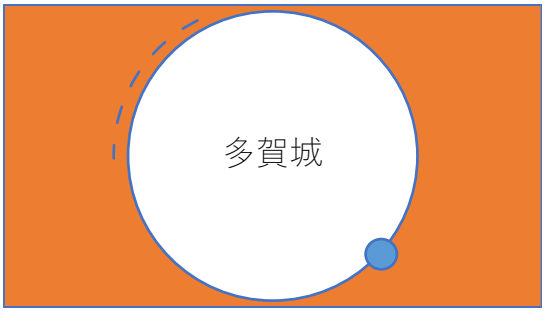












初年度からずっと、プロジェクトを共に実施する方々から学ぶ
（9 月 2 日（土）トレーラーハウス、多賀城駅周辺）



震災を描かない漫画屋 被災地で支持されるのはなぜ？ | NHK 宮城のニュース

２０２０年　オンライン開催

漫画トークあり。
「DMAT 隊員と被災者・行政が見た多賀城」
増尾佳苗さん（大津赤十字病院 DMAT 隊員・災害看護
災厄を生きるにも登場）
「災害救護者が再び臨地に立ち知り得た事」
丸山隆さん（当時、多賀城市建設部都市計画課次長・課長）
「被災者の目・行政の目で見た東日本大震災の記憶」



２０２１・２０２２年　現地開催



１１年とは
こういうこと



プロジェクトの中でできた、語り合うことのできる関係

２０１２年　多賀城市での初企画

「特定非営利活動法人チャイルドラインみやぎ」「災害子ども支援ネットワークみやぎ」と応用人間科学研究科が主催、**おおぞら保育園**共催の形で、10月7日、**多賀城市公民館**にて、家族漫画展、団士郎先生の漫画トーク「木陰の物語」と村本先生の「支援者のための支援講座」を開催。



２０１３年　多賀城図書館



この地域の方が次世代に残したもの

宮城県多賀城高等学校の学生が
津波がここまで来たという目印を
町のいたるところに作った。
現在市内１２０箇所に設置しており、
現在も設置活動が続いている。



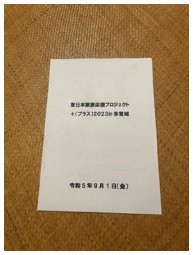
２０１４年　多賀城図書館、多賀城民話の会との共催　２０１５年



２０１６年　多賀城市立図書館の運営形態変更



震災に関する冊子
（丸山さん作成）



２０１７年　多賀城市立図書館の共催、おおぞら保育園
10月6日（金）～10月22日（日）　隣地の対人援助学に登場

- **山形大学上山真知子先生の講義。**沿岸部の史料レスキューとレジリエンスの話
- 新しい多賀城市立図書館に移って二年目。駅前はずいぶん変わっていて、被災後、二、三年頃の面影は消えつつある。砂押川も道路も位置は変わらないが、あの橋の直ぐむこうにクローバー保育園があった・・・と思い出すことは出来ても、今そこは駐車場。駅周辺の空気も大きく変わってきていることを感じる。図書館も利用者によってこなれてきているのか、当たり前感の賑わいが漂う場になってきている。（団先生）

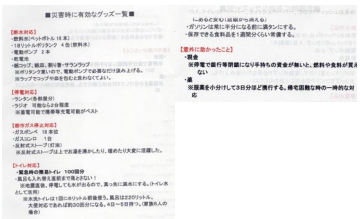
２０１８年　多賀城市立図書館の共催、おおぞら保育園
10 月 5 日（金）～10 月 12 日（日）

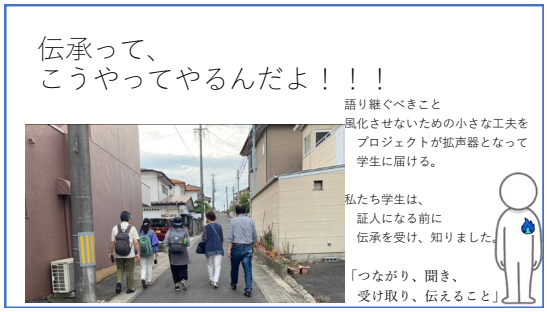
会場は二階奥の、オープン スペース…三階の部屋よりもいい。…今週から始まって、月末までの長期間開催（短縮していない？）。**会場横に配置された長椅子**が、少しの時間浸っていたい人や、小冊子をその場で読む人にとって、良い場所になっていた。短時間、私もそこに座って様子を見ていたのだが、その間に三人の方と言葉を交わすことになった。（隣町から見に来た二人連れは自分の子ども世代（所帯持ち）に見て欲しいと思うと話した。その時、長椅子で熱心に冊子を読んでいた女性がその会話を聞いていて「作者の方ですか？」と話しかけ…と自分の事情を語り始めた。…空間と物語が作り出す雰囲気の中での会話に なった。（団先生）

２０１９年　多賀城市立図書館の共催、おおぞら保育園
9 月 19 日 ~10 月 8 日

今回の多賀城で一番感じたのは、誰の何がと言うのではない、図書館スタッフも、こちらのスタッフも、全体として**今後に向けて、何が考えられるだろう**と当たり前のよう に議論する姿勢だった。これが蓄積、定着というものだろうか。10 年目を迎える来年、そ の後のことを考えることが今からのテーマになっている。（団先生）

丸山さんの経験に基づく知識が記載されている。



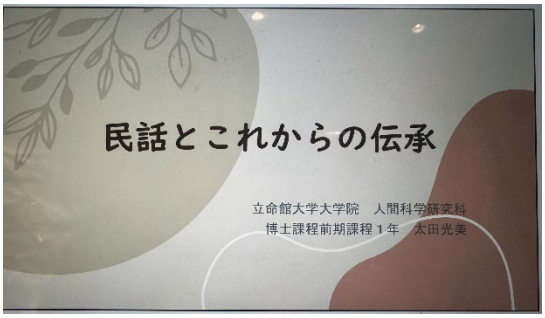


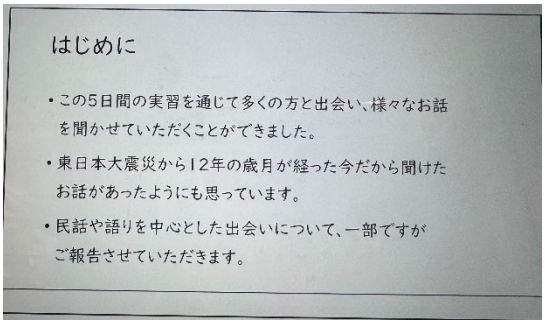
一番バッターの武田明恵さんは、シンポジウムのサブタイトル「いのちのバトンを手渡すために」に触れ、「実習を通じて、世代を越えた伝承が起きている中に入れてもらったので、お裾分けしたい」と報告を始めた。

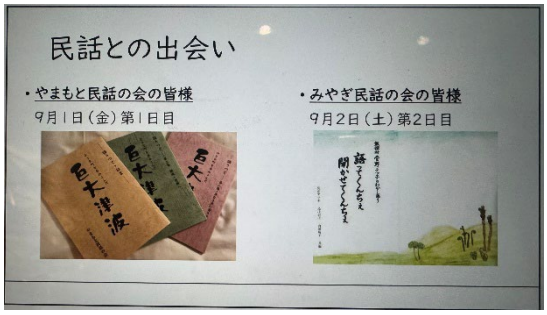
白河で行った団士郎トークイベントでは、10年以上前に二本松で開催した時に参加してくれた人が来てくれたことから、「プロジェクトが続いているというのは、また会えるということ」「また会えるというのはとても大切なこと。前を知っているから、今を語れる」。多くの人とこうして出会えるのも、10年間のプロジェクトが今なお続いているからだと。そして、多賀城でのプロジェクトの12年間の記録を写真で振り返ったうえで、今年の報告をしてくれた。

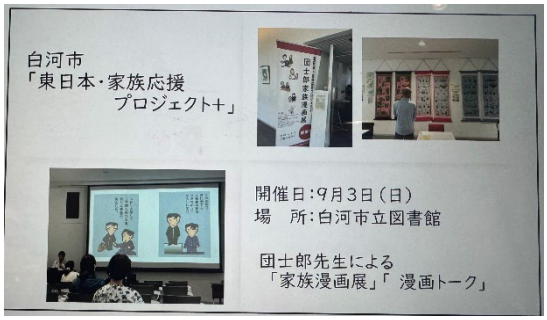
震災後に保育を再開したおおぞら保育園トレーラーハウスの中で、多賀城プロジェクト実行委員会を担ってくれている丸山隆さん、黒川恵子さんと語り合った。被災の経験について語り合うという二方向を超えた関係性がそこにはあり、多賀城の地域の人たちが次世代に残したものがあった。それは津波襲来の痕跡の目印で、多賀城高校の生徒たちが設置活動を続け、現在、市内120ケ所にある。経験を風化させない伝承のひとつである。それから、丸山さん作成の冊子には、丸山さんの経験に基づく知識がたくさん記載されている。災害に有効なグッズ一覧、地震が来てすぐは水が出るので、その間にお風呂の水を溜めることができれば4日程度のトイレの水洗に使える、サランラップを敷いておけば、コップや皿を洗わなくてよいことなど。今すぐできることとしては、常備薬を携帯しておくこと、保存食やティッシュなどのストックを持っておくことなど。

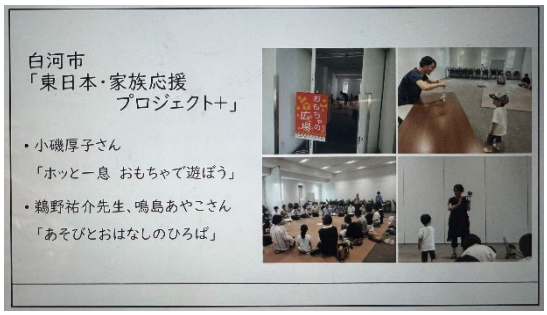
最後に末の松山に向かう実行委員の背中の写真、この姿に、「伝承ってこうやってやるんだよっていうふうに言われているような気がしました」と語った。語り継ぐべきことを風化させないための小さな工夫を、プロジェクトが拡声機となって学生に届ける。学生は証人になる前に伝承を受け、つながり、聞き、受け取り、伝えるということがどういうことなのかを学ぶ。「私の胸にちょっと青い炎が燃えています」と報告を終えた。院生の視点に私たちも学ばされる。

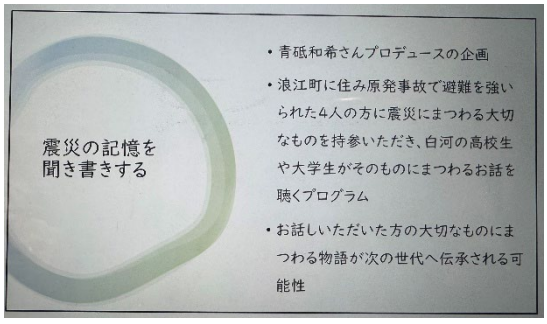


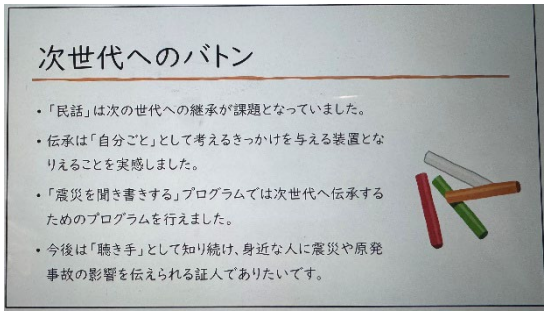












太田光美さんの報告は、「民話とこれからの伝承」。1日目、やまもと民話の会との交流で、寺島重子さんから「下田沼の大蛇」「宝下駄」の民話を聴いた。会の方は、震災時のことを、「自分のことで精いっぱいの状況下だった」「震災の状況を聴いて残していく活動によって心が落ち着いた」と当時の思いを聞かせてくれた。また、2021年に亡くなられた庄司アイさんについて、自分の体験と重ね合わせて証言を聴いていたため、聴いた後は寝込むほど疲れ果てていたとのことだった。

2日目、みやぎ民話の会との交流。島津信子さんからは、「放射性物質による被害に力が及ばないと思いながらも、原発事故によって変化した生活について話を聴き、語り継ぎたいと思った」と伺った。長正サツキさん、山田裕子さんからは今年5月に亡くなられた「かんのてつこ」さんから飯館村の民話やご本人の生い立ちについて聴かれたときの話を聞かせてもらった。出版された『語ってくんちぇ聞かせてくんちぇ』では、本の表紙のように美しい飯館村の昔話や村での暮らし、原発事故後の避難生活について残しておきたいという思いでまとめられたそうだ。

次に、「東日本家族応援プロジェクト＋2023 in 白河」について。白河市立図書館で開催した団士郎漫画トーク、「ホッと一息おもちゃであそぼう」、「遊びとお話のひろば」。それから、一般社団法人未来の準備室の青砥和希さんプロデュース「震災の記憶を聞き書きする」が実施された。原発事故で避難を強いられた浪江町の方々の「震災にまつわる大切なもの」を持参してもらって、白河市の高校生や大学院生がそのモノにまつわるお話を聴かせてもらった。

当時大学生だったWさんは、原発事故により避難を強いられ、生活が大きく変化した。家族それぞれが異なる土地に避難せざるを得なくなり、連絡の取れない日々を過ごされた。大切なモノは、両親が自宅に戻って持ち帰った3人の子どもがそれぞれ1年生だった時に撮影された家族写真で、「お金で買えないもの」だった。

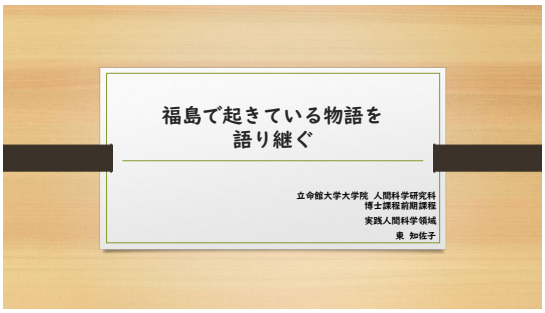
Nさんは当時高校2年生で、すぐに帰って来れると思っていた。弟が漫画本を持ち出したことに呆れたが、避難所を転々とする生活では漫画を兄弟で回し読みすることで少し生活が豊かになったという。避難生活は暇でストレスフルとなり兄弟げんかが多くなる中、兄弟で始められた避難日記を持参された。

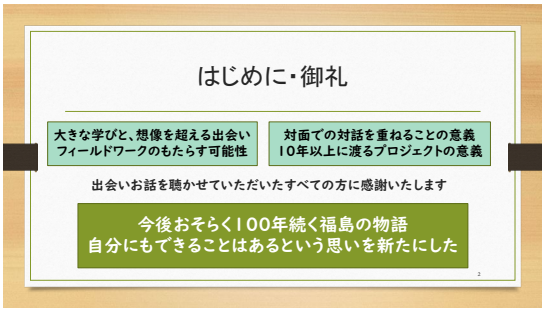
このようなお話を震災当時4歳や小学生だった人たちが聞き手となるこのプログラムは、次の世代へ物語が伝承される可能性を感じた。

民話は高齢の方たちが中心となり収集活動をされているため、次の世代への継承が課題となっているが、証言集や本による伝承は後世まで多くの人に伝えることを可能とし、今回私たちが聞かせていただいたその土地の言葉で語られる伝承はしみじみとした余韻が残り、その土地の生き生きとした力を感じた。

東日本大震災による地震や津波、原発事故による被害についての伝承は離れた土地にいる人や後世の人に自分事として考えるきっかけを与える装置、つまりバトンになると考え、「震災の記憶を聞き書きする」プログラムは東日本大震災から12年経過しているにもかかわらず、今なお原発事故による新たな課題が発生し続けている今だからこそ、次世代へ伝承するプログラムを初めて実施できたのではないかと考えた。

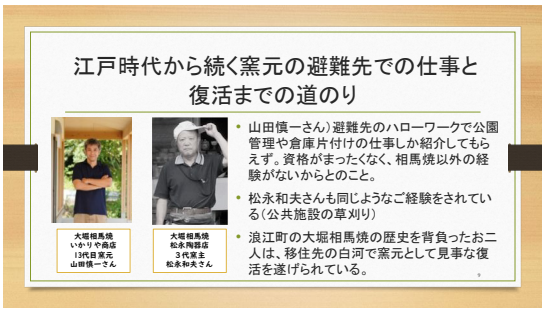
みやぎ民話の会の方からカンノテツコさんは村一番の語り手だった母親のキクさんが亡くなられた後から民話の語りを始められたと聞いた。語りのきっかけには聞き手の存在があった。太田さんは、「私は、今後、震災や原発事故の影響を知り続け、小さな物語を聴き、伝えられる証人でありたいと考えています」と報告を結んだ。



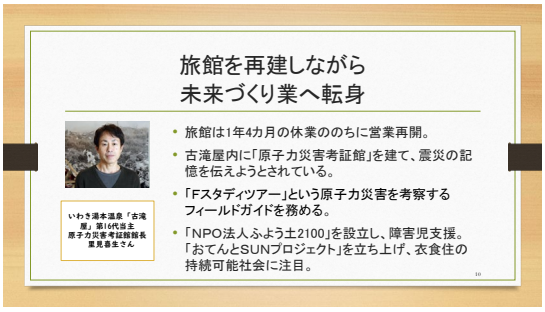


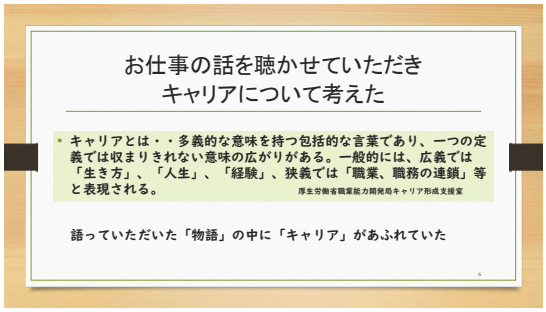


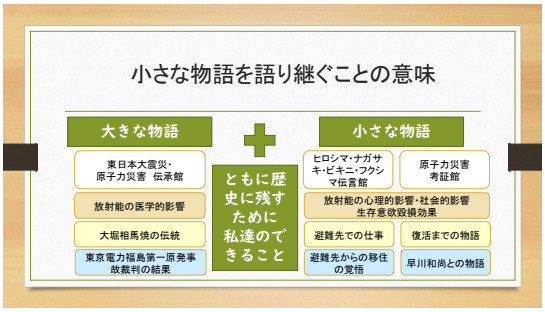


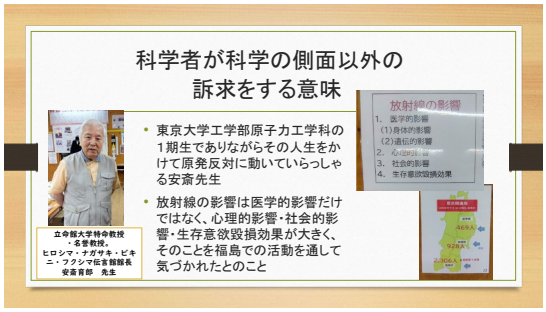


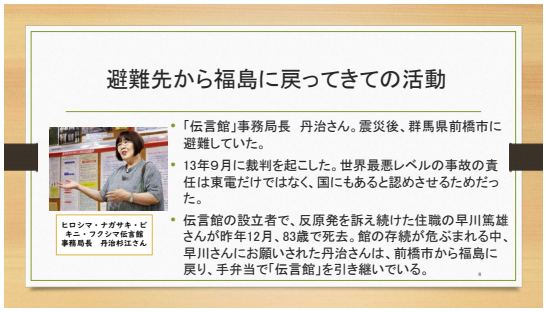












最後は東知佐子さんで、「福島の物語は今後おそらく100年続く、その中で自分にできることは必ずあるという思いを新たにした」と報告を始めた。

現地では、福島第一原発のある、大熊町を案内してもらった。12 年経っても、地図の灰色の部分、帰還困難区域がこれだけ残っている。その中にある濃いグリーンに塗られた地域は、除染・インフラ整備等を集中的に行い、住むことを可能とした「特定復興再生拠点区域」である。最新施設の学校が今年開校し、0～15 歳まで 30 人程度が学んでいるそうだ。

最新の建物が並ぶ一方で、路地に入ると12 年前に崩れた住宅がそのままで、何ともいえない、不思議な感覚に陥った。車で案内頂くと、居住可能とされる 0.23μSv/h を大きく超える場所もあった。除染作業の道のりはまだまだ遠いのだと思わされた。

福島で原発事故にまつわる話を聴かせていただいた 5 人の方々の物語を紹介する。主にキャリアの話をお聴きした。キャリアとは、広義では「生き方」「人生」という意味がある。まさに 5 人の皆さまの生き方、人生に触れたと思う。

立命館大学特命教授・名誉教授であり、ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館館長の安斎育郎先生。東京大学原子力工学科の1期生でありながら、人生をかけて原発反対に動いていらっしゃる。放射線の影響は医学的影響だけではなく、心理的・社会的影響や生存意欲毀損効果が大きいと仰られていた。

同じく「伝言館」で今年から事務局長になった丹治杉江さん。震災後は群馬県前橋市に避難されていた。原発事故により避難した一人として、裁判を起こされている。伝言館の設立者で、反原発を訴え続けた住職の早川篤雄さんは昨年 12 月、83 歳で死去された。病床の早川さんに頼まれた丹治さんは、避難先の前橋市から福島に戻り、手弁当で伝言館を運営されている。

大堀相馬焼いかりや商店 13 代目窯元 Y さん。江戸時代から続く窯元は、避難先の東京では公園管理や倉庫片付けの仕事しか紹介されなかった。理由は資格や経験がないからとのこと。大堀相馬焼松永陶器店3代窯主 M さんも、避難先で公共施設の草刈りの仕事をしていたそうだ。お 2 人とも現在は白河に移り窯元として復活。賠償はそれ相応にはあったが、新天地で相馬焼を再開する資金でほとんどなくなったと、M さんは原発事故への憤りとともに話してくださった。

いわき湯本温泉「古滝屋」16 代当主の里見喜生さんは、震災で大きな被害を受けたが再建し、旅館を継続しながら、館内に原子力災害考証館を建て、「Fスタディツアー」のガイドを務めたり、未来をつくる様々なプロジェクトを運営している。仮に、歴史上の大きな流れを「大きな物語」と呼んだとき、そこに現れない小さな物語が存在する。震災と原発事故を語り継ぐ博物館として、東日本大震災・原子力災害伝承館があげられるが、地元の方からは、国と東電の作った施設であることを意識してほしい、と言われた。

それに対して、早川和尚が作り、安斎先生と丹治さんが引き継がれた伝言館や、里見さんの作られた考証館は、小さな物語を紡ぐ施設だ。放射線は医学的影響がクローズアップされるが、それ以外の側面も命や健康に大きな影響を与える。大堀相馬焼の伝統の中で、窯元の避難先での仕事や復活までの物語は小さな物語になるのかもしれない。裁判の結果は歴史に残るが、福島に戻り戦う覚悟を決められた亡き和尚との物語こそ、歴史に残したい。「今回の学びにより、私は小さな物語を語り継ぐことの意味を知りました。それらも含めて歴史とするために、証人の存在が大きいのだとも学びました」ということだった。

4 人目の報告は博士課程後期課程の河野暁子さんで、最後には院生それぞれの学びが紹介された。

新たなミュージアムと大学院生の学び

立命館大学大学院人間科学研究科
博士課程後期課程　河野暁子

アート作品の展示

- アート作品は力強い
- 作品を見て、「これは何だろう？」
- 解説を読んで、「そういう意味だったのか…」
- もう一度作品をじっくり眺める
- 様々な感情がわいてくる
- チェルノブイリ博物館の中にも、アートを使った展示があった

個性的なミュージアムが次々に設置されてきていることで、より多声的になる



参考資料：後藤忍「FoE Japan シンポジウム　原発事故を語り継ぐために」

大堀相馬焼



画像出典：浪江町HP



画像出典：松永窯HP

- 道の駅なみえで、大堀相馬焼の商品を見かけた
- 前日にお話を聴かせていただいた、窯元の方々の商品だった
- 実際に出会った方と商品がつながり、より心に残る体験であった
- フィールドワークを行うと、点と点とがつながっていく感覚になる

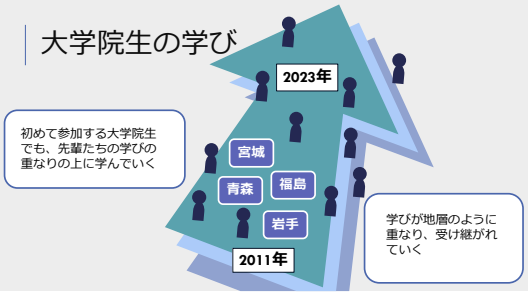
おれたちの伝承館



- 福島県南相馬市小高区
- 2023年7月12日開館
- 館長：中筋純氏（写真家）
- 小高駅近くの双葉旅館を中心に、中筋氏やボランティアたちが空き倉庫の除染をし、2カ月で開館へこぎつけた
- 21名のアーティスト、約80作品を常設展示
- 「おれ」とは、浜通りや全国各地で使われる、性別を問わない一人称
- 原発事故はすべての人にとっての問題であり、その伝承は公的なもののみに頼るのではなく、一人ひとりの「おれ」に関わってほしい

参考資料：もやい展実行委員会HP、 FNNプライムオンライン(2023.9.2)、 東京新聞TOKYO Web(2023.7.25)

大学院生の学び



初めて参加する大学院生でも、先輩たちの学びの重なりの上に学んでいく

学びが地層のように重なり、受け継がれていく



吹き抜けの館内
絵画、彫刻、写真、短歌など

大学院生の学び

我々院生は、研究活動の始めに先行研究を受け取る。良いセンサーを持ち、しっかりと受け取り、伝える研究をしたい。
自分の家族の物語も、親から聞くことができるような自分でありたい。
最後に、自分の体験の中に語り継ぐべきものがあるのならば、しっかり残して後世に伝えていかなければならない。

（武田明恵）

この実習を通じて話を聴くための姿勢や聴き手のあり方を振り返ることができました。
また、語れない状況や語れない意味を考える大切さを学ぶことができました。そして、小さな声を大切にこれからも知り続け、その声を伝えられる証人でありたいと考えました。

（太田光美）



小林桐美氏の作品
小高を象徴する、原発事故後に餓死した牛を和紙で表現した作品

大学院生の学び

社会人大学院生として
・大きな物語の裏にある小さな物語の証人となり語り継ぐ。
・フィールドワークの重要性と現地の声を伝え続ける。
→物事を多面的に捉えるとともに、直接人と関わり様々な声を聴いて学ぼうとする人を増やす。

（東知佐子）

プロジェクトに参加することで、震災や原発事故との距離がぐんと近くなり、自分ごととして考えるようになりました。見たこと、聞いたことを自分が暮らしている場所で語り伝え、ともに考える人を増やし、行動したいと思います。
自分ごとの種をまいていく作業でもあり、「証人」としての責任だと思います。

（河野暁子）

河野さんは2018年からこのプロジェクトに継続的に参加してきた。中でも震災と原発事故を伝承するミュージアムに関心を寄せている。福島県には原発事故を扱う施設や伝承のためのミュージアムがいくつも設置されてきた。今年のプロジェクトでも、東日本大震災原子力災害伝承館、広島・長崎・ビキニ・福島伝言館、原子力災害考証館ふるさとなどを訪ねてきた。そのうちの一つ、「おれたちの伝承館」を紹介した。

「おれたちの伝承館」は、福島県南相馬市小高区に、2023年7月12日に設置された。館長は写真家の中筋純さん。小高駅近くの双葉旅館を中心に、中筋さんやボランティアの方々が空き倉庫の除染をし、2ヶ月で開館へこぎつけた。 21名のアーティスト約80作品を常設展示している。「おれ」とは、福島県浜通りや全国各地で使われる性別を問わない一人称である。原発事故はすべての人にとっての問題であり、その伝承は公的なもののみに頼るのではなく、一人一人の「おれ」に関わってほしいという願いが込められている。

館内は吹き抜けで、絵画、彫刻、写真、短歌などの作品が展示されている。天井を見上げると、5m×7mの巨大な絵が飾られている。小高区では、原発事故後、酪農家が牛を残したまま避難せざるを得ず、残された牛が牛舎で餓死した。飢えた牛は牛舎の柱までかじって死んでおり、それを和紙で表現してある。アート作品はとても力強い。作品を見て、これは何だろうと思い、解説を読み、そういう意味だったのかと理解する。もう一度作品をじっくり眺めると、さまざまな感情が湧いてくる。以前、ウクライナのチェルノブイリ博物館を訪ねたことがあるが、その中にもアートを使った展示があった。福島でも個性的なミュージアムが次々に設置されてきていることで、より多声的になるだろう。

「おれたちの伝承館」へ行く途中、「道の駅なみえ」に寄った。そこには大堀相馬焼の商品があった。前日聞かせていただいた窯元の方々の商品で、実際に出会った方と商品がつながり、より心に残る体験だった。フィールドワークを行うと、点と点とがつながっていく感覚になる。

ここからは大学院生の学びについてである。毎年、大学院生は先輩たちの報告書をじっくりと読みながら事前学習を進める。初めて参加する大学院生も、先輩たちの学びの重なりの上に学んでいく。学びが地層のように重なり、それがまた受け継がれていく。

最後に、今年の大学院生の学びが順番に述べられた。竹田さん「初めに受け取った先行研究に対して、良いセンサーを持ち、しっかりと受け取り、伝える研究をしたいと思った。自分の家族の物語も親から聞くことができるような自分でありたい。自分の中に語り継ぐべきものがあるならば、しっかりと残して後世に伝えていかなければならないとも思った」。太田さん「話を聞くための姿勢や聞き手のあり方を振り返った。語れない状況や語れない意味を考える大切さを学んだ。小さな声を大切に、これからも知り続け、その声を伝えられる証人でありたい」。東さん「大きな物語の裏にある小さな物語りの証人となり、語り継ぐことの意味、そしてフィールドワークの重要性を知った。普段は教員をしているが、自らの研究や仕事を通して、物事を多面的に捉え、直接人と関わり、様々な声を聞いて学ぼうとする人を増やすことに取り組みたいと思った」。河野さん「プロジェクト

に参加することで、震災や原発事故との距離が近くなり、自分事として考えるようになった。見たこと、聞いたことを、自分が暮らしている場所で語り伝え、共に考える人を増やし、行動したいと思う。自分事の種をまいていく作業でもあり、証人としての責任だと思っている」。

現地からの報告

眞手忍さん（青森県むつ児童相談所子ども相談課課長）

むつ児童相談所では、このプロジェクト以降、市町村支援の一環ということで、市町村職員の研修を実施しているが、そこでは、プロジェクトの支援者支援セミナーで積み重ねてきた「家族の強みを引き出す支援」を意識している。昨年度は2回の実施だったが、今年度は3回実施する計画で実施中である。そのためにはやはり、その家族に興味や関心を持って、家族のことを知ろうとする気持ちが大事なんだよと伝えている。そういったところを職員に定着させられるように、そして地域の支援者にそれが広がっていくような活動をしていけるように次年度以降も継続していきたい。団士郎先生の家族漫画展については、11 年間継続させて頂き、会場の図書館が改修工事中で、規模を小さくして開催した。

斎藤清さん（宮古市企画部田老総合事務所所長）ビデオレター

田老地区は、コロナの影響もあり、令和2年度、3年度はほとんど人の動きがない静かな街になってしまった。令和4年度から人の動きが戻ってきて、なんとか前の状況に近づいてきているように思う。この「道の駅たろう」は産直施設の売上が好調で、昨年度はおよそ1億円ちょっと切るぐらいということで、だいぶ売り上げも戻ってきた。この道の駅にあるドームは、立命館大学の皆さんのご協力により造られたもので、今も元気に活躍をしている。田老地区の人口は震災の前から見ると減少しているが、なんとか元気でやっているということを皆さんに知って頂きたく、頑張って活動している。

佐々木純子さん（宮古観光文化交流会まなぶ防災ガイド）

震災から12年経ち、コロナもある程度落ち着いて、だんだんお客様が戻ってきて、修学旅行も戻ってきて、またいつもの1年になっているなと思う。ただ、エージェントが減ったことで、前のような1年で何万人というのは難しいが、本当に来たくて来てくださっている方がすごく多くなっているのが実感としてわかる。そういう方と密に話ができる年齢になったのか、いろいろな話ができて、仕事が終わると、本当にこの方たちに出会えて良かったな、幸せだなと思えるようなお別れの仕方ができるようになった。

田老の町は14.7mの防潮堤で覆われて海は見えないんけれど、海の恵みがあって生かされてきた町だから、漁師さんが住んで漁が行われている。今は天然昆布を収穫している。海は綺麗だよ、恵みもあるよ、でも災害があって恐ろしい津波がくる時があるから、しっかり逃げましょうということを伝えている。来た人が、三陸の海は津波の海だと思うのでなく、津波もあったけれど、すごく綺麗な海なんだよとわかってほしい。

この道の駅ではみんな頑張っていて、サッ

パ祭り、笹の葉の形をしたサッパ船に物を乗せて売るサッパ市というのが年2回ある。あと、全国の気になるところから名物を取り寄せて各店で売るミニサッパ市。10月末のハロウィンでは、「タロウィン」というのをやっている。可愛い子ども達がおしゃれして、お菓子をもらいにみんな来る。あわび祭り、竹あわび祭りなど、少しずつ人が集まるようになってきた。まずはお客様をいっぱい集めて元気を頂いて、防災を発信していく。もう甘えてちゃいけないと思う。みんなからやってもらえる、来てもらうのでなく、ちゃんと来て頂く、それくらい魅力ある町にする。あそこに行かなきゃ食べられないもの、あの人に会いたいなって思える人になりたいなと思っている。そういう道の駅、街づくりをしていきたい。

立命館大学の皆さん、皆さんの先輩が作ってくださったあのジオラマ、すごく大事に、何回も壊れたところを直しながら修復して使わせてもらっている。いつかまた会える日を本当に楽しみに待っています。

丸山隆さん（多賀城市教育委員会障害学習課副主幹）

12年という月日が過ぎ、図書館長の時に村本先生、団先生にお会いし、そこからのつながりで今日に至っている。震災を直接受けてはいるものの、やはり5年、10年、12年となると、もうまったく震災の時の話は通常はもう出なくなってしまったという状況がある。聞かれれば話すが、聞かれなければも話さないという状況の中で、立命館大学の皆さんが毎年来られて、当時のことを話す機会をくださっていることが、自分にとって語り継ぎさせてもらう機会になっているなと思う。そういうチャンスがなければ話す機会がないと思った時に、感謝以外の何物でもないというふうに感じている。

院生の皆さんに雑談風に話した翌日、鮮明に覚えていらっしゃって、話していることをすごく感じてくれているんだなと思って、大切なことをプロジェクトで学ばせてもらった。立命館の方たちが来てくれて、12年も続いていると言うと、みんなびっくりする。本当に驚いて感動する。今年は文化センターの改修工事等が入り、周辺もダメで、漫画展ができなかったが、来年は新しく裾野を広げた形でこのプロジェクトをつないでいきたいと思っている。

小磯敦子さん（NPO法人白河市民活動支援会おひさま広場副代表）

白河の状況だが、白河城、小峰城というお城の崩れた石垣が復元され、昭和の時代からずっと開通を願われていた道が昨年開通した。ちょうどその一部が、唯一白河で、東日本大震災の時に亡くなられた方が出た場所だった。そこを通るたびにそのことを考えるが、そういう思いの人が他にもいるのかなとか思うと、やはり語り継ぐとか、発信していくとか、そういうことの大切さを今年は特に感じた。このプロジェクトをやって頂くことで、やはり誰かと誰かをつないだり、楽しい出会いをするのがすごくいい思い出になったりする。勉強の蓄積にもなるし、団先生の漫画展は、今年、一番いい形でできたと自負していて、来年以降もこの形で続けていきたいと思っている。

東日本大震災の時に福島県にいたが、ほとんど被害がなくて、今年初めて高校生と院生の皆さんに浪江から避難してきてくださ

った避難者の話を聞くというプロジェクトをした。利用者の中に避難してきた人があっても、あえては聞かない。話したいという時に話せる環境があればいいんじゃないかと勝手に思っていたが、今年初めてこの企画をやって、当時高校生だった方に「私、初めてこういう話をする場所をもらいました」と言われた。「話したかったかは自分でもわからない」と。その自分が受けた嫌な思いだったり、困ったことだったり、悲しかったことだったり、なんかもう表現できないいろいろなこと、誰かに言いたかったり聞いてほしかったり、訴えたかったりしたかもしれないけど、そのチャンスをもらえてないというか、チャンスにめぐり会えてない人が、もしかしたら、たくさんいたのかもしれないと思った。

日常的にはさりげなく話を聞く機会はあっても、細かなことまで聞くことはなく、それがいいことだと勝手に思っていた自分がいた。毎年立命館のみなさんが浜通りに行く時、ついて行きたいと思うが、実際県内にいる人がどれだけ行っているのかと思うと、自分も証人の一人となるために、誰かに伝えられる一人になるために、まだまだこういう活動をしなくてはいけなかったし、今までしてこなかったんだなということを改めて気づかせてもらった今年だった。

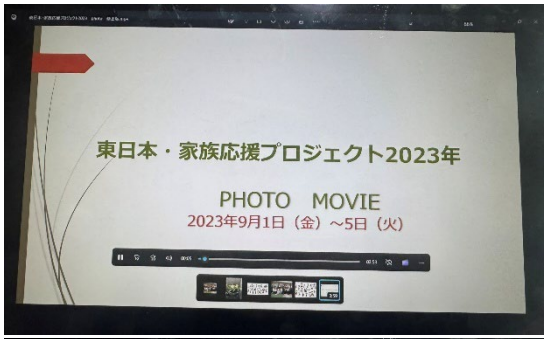
青戸一樹さん（東日本大震災原子力災害伝承館常任研究員）

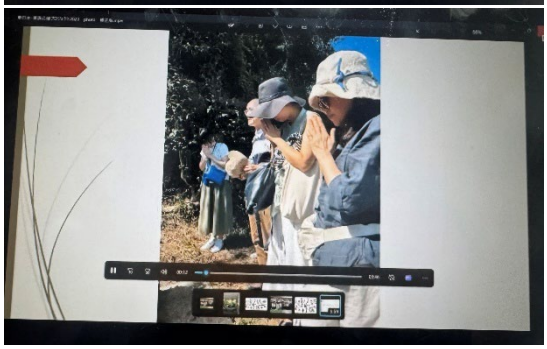
今回、小磯さんと一緒に白河の高校生・大学生が立命館大の院生の皆さんと一緒に、避難者の方々のモノにまつわる記憶をお聞かせいただくという取り組みをさせて頂いた。私は白河市でコミュニティカフェEMANONという高校生を贔屓するカフェを立ち上げて8年目になる。今の現役の高校1年生というのが当時3、4歳で、今、福島県でも行政とか学校とかが、今の高校生が震災を知る最後の世代だというふうに盛んに言っている。高校生に関わる事業や研究をする立場の一人として、高校生にそういう期待を向ける意味というのは、思っている以上に複雑ということを皆さんと共有していきたいし、引き続き考えていきたい。

今回参加した高校生たちは、たまたま高校生活の中で震災に関する活動に参加したことがある高校生だった。白河市では、日常生活において、とくに震災について学ばないと暮らしが成り立たないという状況ではない。浜通り、双葉郡以外の市町村でも多くの場合はそうで、浜通りの高校生でも日常的にそれを考えないと暮らしが送れないという状況にはなっていない。事前にいろんなプログラムに参加したことがあった高校生たちの参加動機は、純粋にその人の話が聞きたいというよりは、学校の先生に言われたからという場合もあるし、東日本大震災とか防災に関する活動をすることが、自分の自己効力感を上げることになりそうだとか、自分の進路キャリアを考える時に、そういう経験を今、しておくことがなんとなく良さそうだなとか、ある種利己的な理由で参加したこともあるかもしれないし、周りが参加しているからということで特段意識せず参加した高校生もいたと思う。

地元福島県内の次の世代が、この問題を捉えなければ、この国の中で誰が捉えてくれるのか、諦めずに粘り強く考えて伝承ができるのかというと、当時3、4歳くらいで知っているけども、具体的にはあまりわからないというような子どもたちがやはり考えなけれ

ばいけないという状況はある。一方で自分にとってそれがどんな意味があるのかということを考える余地、余白がないまま、皆さん伝承するべきなので、一緒に考えましょう、参加してくださいという形で話を大人側から子どもに振っていくことで、子どもとしてはそれをどう受けとめていいのかわからない、そういうふうに振られるんだったら、むしろ受けとめたくない、それは私としては背負えないというような受けとめも出てくるのかなというふうに感じている。何か答えがあって、今こうやってお話しているわけではないが、当事者の福島の高校生が、教育旅行として伝承館に訪問した時にどう思ったのかとか、どんな感情が生まれてきて、この取り組みをした後にどのように自分は考えたのか、そういうところをまず大人として受けとめたいし、そのことをベースにまたこれからどのように次世代と関わっていくのがいいのかを一緒に考えたいなと思う。





第二部　語り継ぐために
～聴く・編む・手渡す～
高校生たちの活動報告

第二部は、院生の太田さんと東さんの司会で、「語り継ぐために～聞く・編む・手渡す」というタイトルでの報告だった。

「本プロジェクトは、被災と復興の証人になることを目的とし、震災後12年間継続してきました。私たちは、歴史を客観的事実としてよりも、一人一人の人生の物語として理解したいという本プロジェクトの思いを受け取りました。編むとは、互い違いに組み合わせてひとつの形に創り上げること。聞かせていただいた話に聞き手の思いも編み込み、次世代へ語り継いでいきたいと考えます。今日ここからのお時間は、聞き、そしてこの場をご一緒している皆様と編んで、さらに次世代へと手渡すことを意識したプログラムとなります」ということで、まずは、自由の森学園高等学校選択講座「東北と復興」メンバーの高校生と社会科教諭内田一樹さんからの報告である。

内田一樹さん（自由の森学園高等学校社会科教諭）

自由の森学園は埼玉県飯能市にある緑豊かな高校で、「東北と復興」は昨年度から立ち上がった企画で、昨年も報告させてもらった。私は2015年に立命館大学の修士課程にいる時に、増田先生が担当されていた石巻を訪れ、そのご縁もあって石巻を中心にスタディツアーということで講座をさせてもらっている。毎週火曜日の5・6限の1時40分から3時10分の90分授業で、1年間通して高校1年生から3年生を対象に行っている。

今年度は、高1から高3まで合わせて21人が登録してくれて、前期は石巻、後期は福島について学んでいこうと思っている。

高校生報告

1日目、7月20日の活動報告。まず石巻博物館を訪れた。石巻博物館は、歴史、民俗、考古、美術の各分野の所蔵資料を中心にそれぞれの調査・研究を進めている。石巻の街はとても綺麗で昔を感じるような風景だったが、博物館を訪れることで石巻の歴史に触れることができた。また、他の講座で学んだアイヌ民族とのつながりも再び学習することができ、違う視点から考えることで新たな発見があった。

続いて雄勝に行ってきた。雄勝では小島漁港を訪れた。銀鮭や帆立、牡蠣、ホヤの養殖を行っている。船で実際に養殖現場まで行き、帆立の養殖を見せてもらった。漁港の入り口に設置されている防波堤の高さがとても高くてめちゃめちゃ驚いた。地震や津波が実際に起きた際には自動で防波堤の扉が閉まるということを聞いて、津波対策もしっかりとされているんだなということを感じた。津波があったことを感じさせないくらいに穏やかな海だった。処理水の問題について漁師さんに尋ねたところ、「私たちが騒いでも大ごとになってしまうだけ」とおっしゃっていて、本当に思っていることを言葉にできないのはすごく苦しいことだなと感じた。

一日目はモリウミアスというところに宿泊した。森と海に囲まれた雄勝町に築百年余の桑浜小学校があり、2002年閉校となった。東日本大震災によって町の8割が壊滅してしまった地域の復興への想いから、もう一度学び舎として再生するために、MORIUMIUSが作られた。ご飯がとても美味しく、漁港で見せてもらったホヤや銀鮭も食べ、雄勝の食の豊かさを感じることができた。また星がとてもきれいに見えた。お風呂はすべて手作りで、スタッフさんとボランティアの方々が作ったそうだ。

二日目は雄勝病院、大川小学校、門脇小学校、そしてMEET門脇を訪ねた。たくさんの命が犠牲になり「亡くなったいのちで伝える」大川小学校、そして地震・津波・火災に見舞われながらも一人の犠牲も出さなかった「助かったいのちで伝える」門脇小学校にフォーカスする。児童74人が犠牲になった大川小学校では、当時小学六年生の娘さんを亡くされた佐藤利郎さんのガイドのもと、敷地全体を見て回った。普段の学校のこと、震災当時の学校のこと、そして娘さんを迎えに行ったときのことを、佐藤さんは時々冗談を交えながら、慣れた口調で淡々と話された。想像もつかないような葛藤をされてきたであろう佐藤さんの「一生目を逸らさない」という言葉は、話を聞いた瞬間から今の今まで、重く心に響き続けている。被災者でありながら、震災と娘の死に真正面から向き合ってきた佐藤さんの言葉と想いを、私たちがどういった距離感で受け止め、受け継ぐべきなのか。被災者の方一人一人にとっての復興や向き合い方はそれぞれであり、私たちは当事者ではないが、他人事にしてもダメで、どう未来につなげていくか、伝承をキーワードに考えていきたい。

門脇小学校では学校の中を見て回り、たくさんの展示物を見た。偶然、当時の校長先生とお会いし、当時の学校の避難の様子もお聞きした。その中で心に残ったことは、避難の連鎖だった。門脇小学校は普段行ってい

た避難訓練のおかげで、子どもたちが率先して避難をしたそうだ。そんな子どもたちに続き、地域の方も保護者の方も避難をした。避難訓練は地域も救うということが印象的だった。最後に「がんばろう石巻」の看板の前で集合写真を撮り、二日目を終えた。

3日目は午前に雄勝法院神楽保存会のお話を伺った。雄勝法院神楽は、石巻市雄勝町に伝わる民俗舞踊で、600年の歴史があり、無形民俗文化財に指定されている。雄勝町では160名が亡くなり、71名が行方不明になり、保存会の会長も亡くなり、道具のほぼ百パーセントが流出した。そんな中で例祭を通常通り行っていいのかという葛藤があったが、被災者から神楽が見たいという依頼があり、残った道具と借り物で、5月28日雄勝復興市で神楽を奉納した。その後、国からの支援、公演の機会や道具伝承者などにも恵まれ、雄勝町のものとしての雄勝法印神楽が再び引き継がれた。

こども無限カンパニーさんは、東日本大震災当時、代表の田中雅子さんが緊急支援に訪れ、炊き出しを行っている時、子どもの遊び場がないことに気づき、 2011年6月に臨時の遊び場を作ったことが起源となり、活動を開始した。現在は、子どもの笑顔が地域の中で育てられる街をモットーに、フリースクールやプレイパークの運営を行っている。

NPO法人Relaさんは石巻市周辺で活動している移動支援の団体。石巻市では交通機関が整っていない地域が多くあり、地域の人たちの移動支援を行っている。孤立している人たち、特に高齢者を中心にお出かけ支援も行っている。仮設住宅から復興住宅に移り住み、新しい人間関係に馴染めず孤立している高齢者がたくさんいて、孤立を防ぐという活動も裏にある。

NPO法人の抱える問題は共通して資金不足による経営難が挙げられる。Relaさんの移動支援は、行政の認可が下りていないことから、ガソリン代しか利用料金を実施することができていない。こども無限カンパニーさんのフリースクールは助成金が下りないため、経営は赤字になっている。このような支援は、本来、国が実践してやることが大切なのではないかと考えた。

最終日である7月23日の午前中は、石巻市にある上品の郷を訪れた。上品の郷は平成17年にオープンし、道の駅グランプリ2位になったそうだ。

午後は石巻を離れ、仙台メディアテークを訪れた。その中にある「3月11日を忘れないためにセンター」、通称「わすれン！」は、東日本大震災に向き合い、共に考えるための施設で、映像、写真、音声、文章など、どんな立場の人でも記録し、保存できる。今まで学んできたものより日常が記録されていると感じ、様々な視点から考えたり、撮ったものが記録されており、ひとつの物事をたくさんの視点で感じることができた。

モリウミアスの海鮮丼はすごく美味しかった。現地の人のお話を聞いたり、たくさんの施設に見学させてもらい、最初の授業では、みんなで振り返りをした。今回学んだことを日常生活にどう受けとめればいいのか、東京の街並みを見た時に石巻に比べると別の世界に見えた、時代が進んでない石巻だけは何か昭和っぽく感じるという意見もあった。今回のツアーでは、いろんな体験をさせてもらい、とても良い4日間だった。ツアーが終わっても、私たちの学びは続く。

青砥和希さんから白河市の高校生の活動

福島県白河市で高校生贔屓のコミュニティカフェEMANONを運営している。高校生たちが試験なので、立命館大学の皆様と先日取り組んだ「震災の記憶を聞き書きする」という取り組みについて代理で紹介する。

白河市は福島県中通りの南部にあり、人口5万人くらい。市内には3つの全日制高校があるが、高等教育機関がないため、大学に進学する場合、地元にいるのが最後の年間になる。その時期に地元の中で居場所を感じたり、つながりを作ったり、地域について知ったりするというラストチャンスということで、このような活動を始めた。高校生は利用無料で時間制限なしで使うことができるということで、高校生をとにかく贔屓するという仕組みを作って、行政との共同事業でカフェを運営している。

簡単に機能の説明をすると、まずは、ありのままの自分でいられることを家庭と学校以外の空間で提供したいということで、居場所の機能を提供している。同時に、学校や家ではなかなかできない取り組みやきっかけ作りということで、活動拠点としていろいろな活動を支援、提案をしている。また、社会関係の橋渡し、高校生と学校の先生、保護者以外の地域の大人をつなげる機能ということも取り組んでいる。高校生が「この町、居心地がいいな」とか、「ここはありのままの自分を受け入れてくれる人がいるな」というふうに感じてもらうのがゴール、あるいは出発点かなと思っている。

福島県は、自治体も震災のことを調べたり発信したりしてほしいという強い期待を高校生や高校の先生に向けているという現状があり、震災に関して勉強をしたり、県外に発信したりという取り組みをすると予算がついてくる。そういう制度あることそのものはすごくいいことかなというふうに思っている。

今回は、「震災の記憶を聞き書きする」ということで、カフェEMANONに集まっている高校生に声をかけて、参加してもらった。浪江町から白河市周辺に避難されている方を囲んで、白河の高校生と立命館の院生の皆さんでお話を聞いた。お話を聞くにあたって、「あなたの人生全てを教えてください」とか「震災について喋ってください」という形ではなく、「今回皆さんが震災について思い出す、あるいは震災にまつわる記憶や思い出があるものを3つ持ってきてください」というリクエストをした。たとえば、Aさんは2本の鍬を持ってきて、高校生と院生の皆さんでお話してくれた。この形にしたのはいくつかの理由があるが、ひとつには、このAさんは最たる例かと思うが、度々、マスメディアの取材で、「震災について喋ってほしい」とか、「今の気持ちを聞かしてほしい」とかいうインタビューを無数に受けてこられたことを知っている。12年経った中で、これまで何度も何度も語ってきた話で、その場にしか生まれない関係性が生まれづらいのではないかと考えた。

高校生は素直なので、震災について教えてくださいという風に質問を作ってくれる。目の前にいる方と質問者の間で、その場にしか生まれない関係性や、その場の組み合わせだから聞かせていただける話、そういったことに意味があるのではないかなと考えた。事前にLINEや口頭で、こういう感じで当日集まってほしいということをお伝えした。避難や震災について思い出して考えたりする上で欠かせないものについて当日はお話を

聞きたい、そしてそのものがどんなものなのかということを教えてほしいということで、話し手と聞き手の間で共通点を見つけたり、聞き手が想像力を持つことを目指した。

参考にした取り組みとして、福島県立博物館が行っている震災遺産を考えるという企画展がある。震災遺産と学芸員の方が名付けているが、震災をめぐるものを収集保存し、それを展示する企画展である。モノや記憶をどのように残していくのか問いかける対話型鑑賞も、この企画展とあわせて学芸員の方が取り組んでおり、すごくいいなと思っている。震災について学びましょうという声かけよりも、まずモノが私たちの目の前に現れて、これがどんな意味があるのかをみんなで考える。そういうことで、従来は震災について興味がない、あるいは学校で勉強しなさいと言われるからやらされ感があって、あんまり興味が持てないという高校生でも、こういう切り口なら、自分の地元で起こっていた、あるいは自分の立場でも起こったかもしれない震災について想像力を持っていくってことができるのではないかと思った。

事前に高校生とで学芸員の方のお話を聞いた後、高校生からこの取り組みについてどう思うか意見交換の場も作った上で、当日のインタビューに臨んだ。

まずは4つのグループに分かれてお話を聞いた後に、それぞれのグループでどんな話をしたかというのを全体共有するという流れだった。この取り組みの後、高校生たちに持ってきて頂いた3つのものを紹介するテキストをまとめてほしいというふうにお願いをしてまとめてきてもらった。まとめるにあたって、まずそのモノの名前、説明文、お話のなかでいただいた方の中のお話の中で最も印象に残った一言。この3つを選んでテキストに書き起こしてもらうことにした。いくらか紹介する。



たとえば、Aさんのひとつ目はスズメバチ用Tシャツ。Aさんは震災後7月に避難して町営住宅に住んでいた。高校を卒業してからすぐ窯を継いだ。震災後、生まれて初めて草刈りの臨時職員の面接を受けた。その時に買ったTシャツだった。スズメバチに刺されにくい色である白色のシャツで、奥様が買ってきた。今も袖を通すたび、震災前を思い出し、自分が今なぜここにいるのか、虚しくなることがあると語った。2つ目のものは、避難先で始めた家庭菜園で使っていた鍬。「避難先の新しい家で何もしないことと、東電への憤りに限界を感じたさんは家庭菜園を始めた。その際使っていたのがこの鍬だそうだ。一振りするたび、この野郎、この野郎と、東電へのやり場のない怒りが込められた。今でも家庭菜園は続けており、奥様がその野菜を調理しているそうだ」。Aさんは、「いつか東電へ合法的に一泡吹かせたい」とも語った。それが今生きる、今、焼き物を続ける生きがいであると語った。3つ目は、避難前の家の裏の川で息子と魚取りとかしていたが、かなごう石（製鉄の際に出るくず石）が川によく転

がっていて、焼き物作りの際には釉薬や模様付けなどに用いられる。震災当時、Aさんの息子は中国にいたが、電話で震災の報告を受け、もう故郷には戻れないと言われた。この石は、Aさんと息子にとって故郷の形見である。

Bさんが持ってきてくれたものは、避難所できょうだいで読み回しした漫画。初めての避難で何を持っていけばいいかもわからなかったNさんだったが、きょうだいが当時好きだった漫画十巻を車に積み込んだ。すぐに変えれると思っていたので「そんなものいらないよ」と言ったが、実際の避難所生活は何もすることがなく、漫画を兄弟と回し読み読み回し日々を過ごしていたそうだ。それから何気なくつけ始めた避難生活日記、連絡用携帯。友人とはミクシィを使って連絡を取り合い、避難中、知り合いや家族との連絡用として使っていた。それから震災後の生活を支えてくれた電子レンジの写真。避難後の支援物資として日本赤十字社から届いた電子レンジで、3日前（2023年8月31日）、最後に人参を温めた後、扉が開かなくなり壊れてしまった。かれこれ12年以上、被災後の生活を支えてくれていた。

Cさんは、みんなが一年生の写真。父が「お金で買えないものを持ってきた」とアルバムなどを重点的に持ち帰ってきたうちのひとつ。年の差でみんな一年生のタイミングで撮った写真で、祖父がその年に亡くなってしまったこともあり、最初で最後の家族写真となった。

Dさんは肌身離さず持っていた携帯電話。震災直後、電波が入らない状況に陥り、ほとんど情報が得られなかったが、携帯電話や財布など最低限のものを持参して近くの体育館へ避難した。翌日の夕方、ようやく携帯電話がつながるようになり、「原発が爆発したらしいよ」と聞いた。初めて今回の事態を判断した瞬間だったから、当時の自分にとって、判断する際の重要なツールとなった。それから、息子さんが使っていたプラスチックの硯。Dさんは最初、東京に避難したが、子どもが福島から来たということでいじめられるのではないかと心配した。しかし、近所の小学生が遊びに来てくれた姿を見てひと安心した。その後、白河に引っ越し、小学校を行った際、同級生が自分の子どもを鼓舞するように応援している姿を目にした。Dさんはこの硯を見ると、行く先々での人たちに本当に恵まれたと思い出し、今でも相馬焼の絵付けを実演する際に出会った人と何らかの縁で繋がっていたと必ず自賛している。それから、今は亡き父が描いた九匹の馬の絵。父の残した馬の絵を次の代に残したい。Dさんの父はかまどでは珍しい自分の手で馬の絵を描く人だったが、20年以上前に病に倒れた。父の闘病中に自分が馬の絵を描いてしまうと、父自身が長くないと感じるのではないかと思い、しばらく描かなかったが、父は震災の3年前に亡くなってしまった。震災後、馬の絵を描いてほしいという依頼をもらい、描けるかと心配したが、不思議とうまく描けた。Dさんは、その経験を通して、父の馬の絵を次世代にも残したいと地元から持ち出した。



以上のような話を高校生と立命館大の院生の皆さんで聞かせて頂いた。昨日の振り返りは時間が限られていたが、高校生の感想で多かったのは、「避難についてはテレビで知っていたが、実際に話を聞いてみるとそれ以上の情報があって、知らなかったことをお伺いすることができた」「あの避難って大変っていうイメージがあるけども、お話しする姿は重々しくもなく楽しかったこともあったというような明るい語り口で語っていらっしゃった。だからこそ壮絶な避難生活が伝わってきて、そのギャップを直接お話しすることで感じた」「福島を巡る報道について、福島の印象が悪くなってしまうのではと普段メディアを見ていて思ってしまうこともある」などの感想があった。

民話の語りと次世代へのメッセージ

大平悦子さん（岩手県遠野市日本民話の会会員）

私は岩手県遠野市の出身で、遠野言葉で民話を語る語り部、今は神奈川県川崎市と遠野2地域に住んで、行ったり来たりしながら活動を続けている。あの2011年の東日本大震災の後、民話の中に津波にまつわる話があることを知って、それを語りながら自分が見たり聞いたりした範囲で被災地の様子を伝える活動もしてきた。たとえば、今年の2月には、千葉県の丸山公民館というところで、被災地が抱える問題の一つ、人口減少について語った。こうした活動を続けていくうちに、私は民話の中には津波だけではない様々な災害にまつわる話がたくさんあることに改めて気づいた。

ひとつには水害の話、それから野生動物の被害の話、飢饉の話など。水害の話では、洪水を防ぐために人柱を立てたという話がいくつもある。野生動物の被害の話では、何と言ってもオオカミの話が多い。遠野物語38番の話は、ある農家がオオカミに襲われて七頭もの馬が殺されてしまうという話。そして飢饉の話。岩手は東北にあって寒い地域なので、かつて度々、冷害による飢饉に襲われた。悲惨な様子やそれを乗り越えていく話などがいくつも残っている。

今日は、飢饉にまつわる「ヘビノタイモジ」という話を聞いてください。『民話と文学』17号に古い資料にこんなのがありましたよと紹介されていたお話。「ヘビノタイモジ」というのは毒のある植物の名前で、マムシグサのことを言うんだそう。

「聞いておくれ」と始まったお話は、天保の飢饉の時の話で、食べるものもすっかりなくなった。こうして子どもたちがお腹をすかせて死んでしまうぐらいなら、いっそのこと毒でも何でもいいから、せめて最後に腹いっぱい食べさせてから死なせたいとの親心で、父と母は山へ行って「ヘビノタイモジ」の芋を掘ってきた。「芋があるから、鍋で茹でで食っていいぞ。喧嘩しないよう、仲良く輪切りして食えよ」と言うと、子どもたちは大喜びし

た。その喜ぶ子どもたちの顔を「ああ、これ最後の見納めだ」と思いながら、見ていられず、「また山に行ってくる」と出て言った。

子どもたちは早く食べたくて、「まだかまだか」とつついているうちに、灰が鍋にたくさん入ってしまった。ようやく芋が柔くなくなって、子どもたちは「うめえ、うめえ」と腹いっぱい食った。親たちがおそるおそる帰ってくると、子どもたちがはしゃいでいる。実は、「ヘビノタイモジ」の毒は灰で消されたのだった。その後、親たちは、「助けられた命、何としても生きなければ」と踏ん張って生きたと。

民話というのは、普通の人々の暮らしの歴史で、ご先祖様が私たちに残してくれた宝物だと思う。だから、どうか皆さんも、昔話、民話に関心を持っていただいて、後世に伝えるということにも関心を持って頂けたらありがたく嬉しいと思う。

萱場裕子さん（宮城県山元町やまもと民話の会会員）

庄司アイさんの娘さんである萱場裕子さんから、やまもと民話の会で編集した『巨大津波』の裏話が紹介された。

何もかも流されてパソコンもない。ただ、母はワープロを持っていて、それで自分でずっと打ち込んでいた。聞く方も同じ体験をしてしまうので、話を聞いて帰ってくると、もう 3 日ぐらい寝込むような状態だった。相当疲れてるなと思って、私は 55 歳で早期退職して、ワープロぐらいだったらできるよということで手伝い始めた。

本来ならボイスレコーダーなどで録音してから文字起きしするのが通常だが、とにかく聞くのに徹して、家に帰って思い起こして、広告の裏みたいなのに、ダーッと書いて文字にした。母は字は上手な方だったけれど、娘でもちょっと読みにくいような、みっちり書いてあるのを渡される。それを今度は私が打ち込む。大変な作業だった。全部自分でまず一回書くんだから。

はっきり言って、復興していかなければならない時に、高齢の方たち、母も 78 ぐらい、そういう人たちがなぜそんなにひどい思いをしながらやっているのか不思議なぐらい、パワフルだった。

今、考えてみれば、そういう形で津波の記録を残すそのために、10 年ぐらいの母の寿命だったのかもしれないなと思う。それがどんな風な形で、後世に伝わっていくのかはわからないけれど。

私の家族も同じように被災していて大変な思いをしているからこそ聞けるのかもしれない。「大変だったね」というところから、私もこうだった、ああだったんだと話し始めるのではないかと思う。ですから、文字に残っている以外のいろんな会話が行間にあるのだろう。

母は、「自分には何もなくなったけど、民話だけは残った」と思ったぐらい民話が好きだった。だからこそ語り継がれる民話が生まれてくる。

寺島重子さん（宮城県山元町やまもと民話の会会員）

次に、寺島重子さんがやまもと町の伝説「下田沼の大蛇」のお話をしてくれた。

山元町坂元に下田沼という美しい沼があり、それを見下ろせる「御狩屋崎」という丘の上に立派なお寺があった。この寺には、器量もいいしお経を唱えるのも上手、人柄もいい、

笛の達人の若い和尚が住んでいた。その笛の音は御狩屋崎いっぱいに響くので、そこを通る人たちは本当に心打たれた。ある夏の美しい月の美しい晩、滝の山の松に月がかかって、その景色が静かな沼に映るんだと。若和尚さんも、その景色に見とれて笛を吹いていた。笛の調べに引き寄せられたのか、美しい姫が現われた。それから月の美しい夜にはいつも姫が通ってきて、楽しい時を過ごすようになる。

やがて二人は深い仲になり、赤ん坊が生まれたが、大蛇の姿だった。実は、姫は下田沼の主の大蛇だった。間もなく、子を抱いたまま姫は下田沼に身を隠してしまった。残された若和尚は大層な悲しみで、何も手につかず毎日ぼんやり過ごしていた。ある夜、突然大蛇が現れて和尚を殺してしまった。その場所には和尚さんのお墓が祀られ、「和尚壇」と呼ばれるようになった。そのうち、寺は無くなってしまったという。

夢中で喋りましたが、その後どうなったのかわからない不思議なお話だった。

長正さつきさん（みやぎ民話の会会員）

長正さつきさんは飯舘村のキツネの話。今はキツネいなくなったんだけど、テツコさんがキツネにばかされた話をいっぱい載せてるのだけど、自分自身の話をあんまり語ったことはない。私も飯舘生まれで、飯舘育ち、家も山の中にあって、町までは自転車で7、8分。

明日遠足という日に、何か買ってこようと思いながら、友達と喋って何も買わないで帰ってしまった。いなり寿司作ってもらうのに油揚げを買うのを忘れたと思った。でも、町の方に行くと、友達に何か言われたらいやだなと、今度は山道を通っていく遠い方に行った。そこまでは自転車で10分ぐらい。バスの停留所があって、そこもお店があった。「行ってくるからね」と親には言って。

油揚げは停留所のところのお店で買った。ずっと行くと、ちょっと小高いとこがあって、ちょっと気持ち悪い。そこに来たら、急に自転車が走らなくなって、ペダルも動かないでグッグッと。どうしても。そこを何度も通っているのに不思議だった。母が迎えに来て、「サッコかーっ」と呼び、「かあちゃん」と言った途端に自転車がクルクル動き始めた。本当に不思議。それ、絶対キツネだぞ。本当に。だからキツネの話を聞くと、自分も経験してるので、本当だな、嘘の話じゃないと思う。テツコさんの話にもキツネがいつもいっぱいいるところがある。どこにでもそういうところがある。

飯舘村もぼちぼちと戻る人はいるが、3分の1弱ぐらい。むしろ、空いている土地を使って何か作ってみようかという若い人がちらほら村の人になっているようだけど。本当に閑散としているが、公共的な建物などは、ほとんどの作り変えられたりして、何となく新しい村という感じがする反面、新しい人が入ってきて、人間的な付き合いは薄らいでいる部分もある。それでも、今までのように農業をする方はほとんどおられないようだ。

ご主人の方は帰りたいと何度も通って、リフォームもしたけれども、最終的には高齢者2人が住んでいたら、子どもたちに迷惑をかけることになるから思い留まって帰れない。そういう選択をせざるを得なかったと。同じような思いの人は他にもいるだろう。住み慣れたところで自分の一生を終わりたいが、や

はり若い人についていかないとと狭いところに同居してるために、いざこざがあったりというような方がある。要するにお医者さんとかが身近にないっていうこと。そうなるとやはり自分の家があっても帰れないという人がほとんどだと思う。

瀬尾夏実さん（アーティスト/一般社団法人NOOK）

私は東日本大震災の時に大学生で、美術の勉強をしていて、大学院に上がるタイミングだった。震災が起きて、いろんなニュースが飛び交う中で、自分にできることは何だろう、表現、アートにできることは何だろうと考えるようになり、ボランティアに行った。

ボランティアに行った先で、さまざまなお話を聞かせていただく機会が多かった。ボランティアといっても、力仕事が得意なわけでもなく、何かすごくできるわけでもないのに、「わざわざ来てくれてありがとう」と、被災をした方たちが体験を語って伝えようとしてくれる。語らずにはおれない体験をした人というのは、必ず「次の人に伝えてね」とおっしゃったりする。それを聞かせてもらった時に、まず私はこれを覚えておいて、誰かに伝えることをやるべきだろうと思った。どうやったら自分にそれができるだろうと考えながら、12年いろいろやってきた。

映像作家の小森はるかさんとは大学の同級生で、一緒に作品を作ったり、2012 年から3年間、岩手県の陸前高田に住みながら、お話を聞いて、書いて、一緒に作品を作ったりしていた。体験をした場所とか、現地というものと、体験をしていない、違う場所であると感じている人たち、その間を行き来してつないでいくような媒介になるというのが自分たちのやることだと思った。体験者、現地にいる人たちは、語らずにはおれないことがある。語るということは癒しでもあるので、そういう意味で語らなければいけないということもあるし、自分の貴重な体験は未来の人にとっても貴重な体験であるということを理解されていて、それを話さなければいけないと思っていらっしゃったりする。そういう体験を持つ人たちに会いに行って、お話を聞いて、伝えていく。

まず現場というか、人に出会ったり、風景に出会ったりするということがあった。そこで出会ったものをどうやって伝えていくかというときに、何かしらの形で記録・記述していくことを自然に始めた。私の場合は絵を描いたり、小森さんなら映像を撮ったり。体験をした人たちと一緒に協力して映像作品を作ったりということも含めて記録してきた。今度はそれを伝えるということで、いろんな場所で展覧会をして発表していく。たとえば神戸に展覧会を持っていくと、神戸で阪神・淡路の震災の経験をした人や、経験はしなかったけれども、そこで生まれて育った人たちが自分たちの話をし始めたり、遠い場所と体験がつながって、ちょっと違う形の連帯感が生まれたりということがあった。そうして別の場所に運んでいくと、また新たな出会いが生まれるので、そこでまた語りを聞く、そういう循環でずっと活動を続けてきた。

ひとつだけプロジェクトを紹介すると、2018年に、「二重のまち/交代地のうたを編む」という作品作りをした。陸前高田では、津波でなくなった場所にかさ上げ工事をして、その上に新しい町ができてというプロセスを踏んできたが、工事をしている時は、被災した人たちが仮設住宅で体験を語るなどの場

があったが、街ができると震災の体験を語ることは日常的にはなくなってくる。反対に、被災地ではないとされる関東とか関西とかに行くと、震災当時子どもだった年代の人たちが、あの時はまだ子どもで何もできなかったけど、今なら何かやりたい、被災地に行ってみたいという人たちがどんどん育っていた。

語る場が減ってきた被災の現場と、外で成長してきて、今聞き手になりたいと思っている人たちが出会う場所を作れば、それはシンプルに体験の継承の場になると考えた。公募をして、4人の旅人を陸前高田に招き、15日間のワークショップをして、みんなで一人で話を聞く、聞いた話を仲間内で語り合う。そして、カメラを向けて記録をするように語り直しをする。そしてみんなで振り返るというようなプロセスのワークショップをした。

外から来た彼らには、最初は自分がここにいて良いのかとか、自分に聞く資格があるのかとか、あるいは自分は何が聞けているのかわからないとか、そういう不安や葛藤がある。それを自分なりに語ってみたい、語ってもいいんだと思うまでのプロセスですごく重要だなと思ったのは、聞き手である彼ら自身が励まされる、彼ら自身の存在が尊重される、それを体験していくことだと感じた。「今、あなただから話すんだよ」とか、「今、聞きに来てくれてありがとうね」と声を掛けられながら、「あ、自分がここにいていいんだ」と思ったり、「これを誰かに伝えてね」と励まされたりして、彼らは、すべてはわからないけれど、受け取れたものは語ってみたいというステップに進んでいく。

被災をした人に聞くと、彼ら自身の一対一のやりとりでもそういうことが起こるし、あるいは、仲間内で励まし合ったりしながら、自分自身はここにいたいんだとか、自分はこういう経緯を、背景を持っているから、こういうふうに語るんだということを整理していく時間が彼らの励みになる。

思い出すのが山元町の庄司アイさんが民話について話してくださった時に、民話っていうのは愛なんだよと話をしていて、どういう意味で語られたか、細かいところはわからないけれど、語り手と聞き手、子どもさんやお孫さんに対して、語り手は聞き手のことを尊重して、「あなたに語ってるんだよ」ってことをすごく大切にしながら語っていて、聞く人はそうやって、身近におばあちゃんとかおじいちゃんの皮膚感覚とか匂いとかを感じながら、今受け渡されてるんだとか、自分がここにいていいんだ、いなきゃいけないんだってことも含めて、語りを受け取るということがあるんだろうと思った。そういうことが、震災経験を語り継ぐときにも、語る人が重要なんだけれど、聞く人の存在が大事にされることが必要なんだと感じている。 そうやって15日間のプロセスを記録して、「二重のまち/交代地のうたを編む」という映画ができて、展覧会をやって全国を回っている。



「二重のまち/交代地のうたを編む」
https://www.kotaichi.com/

加藤恵子さん（みやぎ民話の会会員）

ちょっとここ数カ月体調を崩して、９月に皆さんがおいでになる時にお会いできなくて、とても残念に思っていた。なんとか今日は体調を戻してお話できて嬉しい。私は、今、瀬尾さんがおっしゃった、この震災を通して、絶対出会わなかった人たちとたくさん出会い、そしてすごく親しくなった。村本さんがおっしゃっていた「証人になる」ということで語りたい、語る人に寄り添うということをやってきた東日本・家族応援の皆さんとも近づけた。

一番最初出会ったのは、立命館大学の鵜野先生だった。笠地蔵の授業を八本松小学校で私が語っている時、鵜野先生を学生と間違って、授業見た方がいいんじゃないかなと、よく聞きもしないで誘ったのが最初で、帰りの車の中でみやぎ民話の会のこと、そしてそれを立ち上げた小野和子さんのことをずっと話した記憶がある。

小野和子さんがやってきた、人に寄り添って聴くことの大切さというものを、震災の後、真剣に考えるようになった。「たくさんの人たちと出会って、ただ同じように語っても、ちゃんと聞いてくれない人には、話はすーっと抜けていくんだよ」と小野先生はおっしゃる。

アイさんのお嬢さんが、震災にあった人たちの話を聞くと、それをノートに書いて、夜になると、もう次の日から三日ぐらい疲れたと寝込むのだとおっしゃっていたが、小野先生はいつも車の中で「あなたたちは疲れないわよね」と、「一人の方の語りを聞いていると、もう私はぐったりして疲れるのに、あなたたちは元気よね」という意味が全然わからないでいた。でも、震災後、人に寄り添って語りを聞くという、寄り添うとはどういうことなのか、語りを聞くとはどういうことなのかをすごく考えるようになった。

津軽、福島、山形と、小野和子さんについて回って語りを聞くということを体験して、それを今度はテープから起こして文字にする、その作業は私にはとても勉強になった。1回会ったら話が聞けるわけはないということを思う。

その中でも、今ではすごく親しい親友みたいになったのが、双葉町で被災して、今はひたちなかにお住まいの目黒トミ子さん。目黒さんは、庄司アイさんと同じように、ご自分の身近にいた双葉町の人が仙台に避難してきた話を何も持たず、とにかくひたすら聞いて、うちに帰ってきてからそれを文字に起こして本を作った。目黒さんとはみやぎ民話の会で最初に始めた「ゆうわ座」のオープニングの時に初めてお会いした。自分は双葉町で被災して、福島の子どもたちの将来のために、どうしても自分のことをお話ししたいと初めて出会ったその場で話をして、小野さんやみやぎ民話の会と出会ったという経緯だった。

もう一人、出会いがあって、私が書いた北上町にある女川というところの女川口説きに出てくる秘伝物語みたいなものを調べている間に出会った佐々木ゆうこさんという方。女川口説きの話を聞いていると、だんだん彼女は北上町の吉浜というところに住んでいて、そこは全部流されてしまったということを最近になって聞いた。何年も会っていたのにその話は全然しないで、女川口説きの話ばかりしていた。その彼女が今日も電話をくれて、土地にまつわる話をしてくれた。

そんなふうに、この震災で新たな方たちの出会いがあって、聞くチャンスをもらえた。そしてそれは心と心を寄せて聞くということを体験させてもらった大事な年間だったというふうに思う。

今日は高校生たちの白河の話、被災した方が3つのモノを持ってきて、それに関わる話を聞いたという話だった。被災はどうでしたかと聞くと話せないが、持ってきたモノから原子力発電所に対する怒りが、直接その話を聞くよりかえって伝わる。突然のことで逃げ惑って、どうしたらよいか、何を持っていっていいかわからなかったという話、当時の彼女たちの被災地での暮らしが類推できるし、周囲の人に恵まれた感謝など、それを高校生の皆さんがしっかり聞いて受けとめていることがすごいなと思った。

今日は民話もいろいろ語ってもらったが、民話は、やはり最悪の事態を乗り切るための次世代に対する言い残しだったんだなと今日も感じた。先ほどから島津さんの話が出ていて、瀬尾さんも丸森でお世話になったと思うが、島津さんにも何かエールを送ってほしいと電話したので、島津さんにバトンタッチしたい。

島津信子さん（みやぎ民話の会会長）

瀬尾さんと加藤恵子さんのお話を聞きながら、民話を語り継いでくるには、やはり語る人の人生とか、生きている環境とか、今、最悪の事態という言葉がでたが、いろんな知恵があったり、勇気があったり、そういうものが語られてきたんだろうと思う。東日本大震災の語りは、とにかく誰かが伝えなければならないものだと思うし、それを語る人たちが年を経てだんだんと語れなくなっていくから、それを聞いた者が何らかの形で残す努力をしなければならない。そういう意味で、瀬尾さんはとてもいい形で、本、展覧会、映像にしてくれているし、私たちはやはり語ることで語り継ぐことをしていかなけれなまらない。

今日、大学の学生や高校生が聞いてくれて、自分の目で見て感じたことを発表してくれるのがすごくよかったと思うが、やはりある程度まで大人が仕組んでやらないと、自分ではなかなか動き出せない、そういう場を設けて、そしてできるだけ自分から動き出す、そういう若い人を育てていかなければならない、そういう役割が今の私たちなのかなと思った。

毎年次々に起こる災害があり、東日本大震災だけではないことがこれからももっともっと予想されるわけで、長期にわたって立命館大学の先生方が学生さんに仕組んで、こういう場を設けてくださっていること、本当にすごいことだと感じている。

第3部　交流会

第3部は交流会ということで、全体で感想をシェアした後、ブレイクアウトルームに分かれてグループ交流を行った。

団士郎さんから、今日の感想として、「過去の出来事というのではなくて、いろいろあったその場所で出会ったり、学んだこと、その場所で受けとめたことを話したり、感じたりすることがぐっと前に出てきている感じがして、改めてそれがいいなと思った。このプロジェクトのきっかけになった災害そのものは 2011 年の 3 月 11 日に起こっていて、それは時間的にはそこに属しているけれど

も、学ぶ人とか、そのことを今日のような形で考えたりしている人は、みんなそれぞれ今にいる。去年参加した人は去年のその今にいたし、今年参加した人は今年のその今に属している。そういう意味で言うと、人はいつでも自分が今見えること、今自分が向き合えることに遭遇して、そこで何かを受けとめたり、感じ取ったりする。クロアチアに観光で行ったことをふと思い出した。ユーゴ内戦という難しい戦争があって、その戦争の銃弾の痕とか大砲が壊したものとかいうのが、まだそこにずっと残っている。公の建物の中の壁に刻まれている銃弾の連射したダダダダダって跡がそのまま残してある。ユーゴ内戦のことは情報としては知っていたが、実際に行ってみて、銃弾の残った壁を見たり、戦後再復興して今、暮らしている人がいるのを見た時に、届いてくるものがあった。つまり観光に行って、今、それを見ていて、これは昔のことという風に見えているけれども、戦争の遺構というか、傷痕というものが届けてくる何か、それは雄弁だと思った。今日の話の中に、例えばモノを持ってきてもらったり、博物館や様々な形で残されていっているものの話がたくさんでてきたが、それは過去の出来事の証拠ではなくて、それが今に持ち越されて、その場所にあって、それに今、出会う人がある。それに出会いに行く人がある。よく話題になる風化とか風評というのも今に属している言葉だと思うが、要するに、今自分が見に行く、あるいはそこへ行って、今自分がそこから受けとめる。それは昔の事実を知っている人がわかっているではなくて、今見に行く人がそのことから受けとめるという、その力が多分、風評とか風化とかいう言葉が持っている今に対する強い対抗力になる。風化している今、風評にもてあそばれているという状況を評論的に語るのでなく、それに対抗する形で、今そのことを見ている人間が受けとめるものがこんなにあるという、なんかそういうことがここで行われている仕事かな、そういうことを行うということが大切だということを、今日改めて感じていた」と語った。

今回のテーマは「語り継ぐ一命のバトンを手渡す」ということで、短い時間だったが、たくさんの人たちから少しずつお話を頂き、改めて語る、聞く、伝えるということを考えた。語らざるを得ない人たちがいて、それを聞かせていただく一方で、やはり語れない人たちがずっといて、そのことにも眼を向けていたい。最近になって、「震災の時の経験を初めて語ります」という方のお話を聞かせていただく機会があり、聞かせて頂くということはなんと尊い、貴重でありがたいことなのかとつくづく思った。そういう意味では、語りとは、ひとつひとつが真珠のような宝物で、それを受け取りきれずに、あちこちにバラバラにあって、それをきちんと拾って、ひとつひとつ大切に見える形にして、また次の世代に渡していくことが必要なんだと思う。そこの作業が今の社会で難しくなっている。語り継がれてきた民話は、聞き取って文字にしてくれたり、語り継いでくれる方たちの存在があって、長い長い時代を生き延びて今にある。今日もここでたくさんの小さな物語を聞かせて頂いたが、それが 50 年後、100 年後、200 年後まで生き残れるかは私たちがどんな形でこれを残し、受け継いでいけるかにかかっているのだとあらためて思った。

つづく

精神科医の思うこと㊵

岩手と宮沢賢治

松村　奈奈子

実は私のルーツは岩手県なんです。父親が3歳の頃亡くなったという私の祖父は、岩手から大阪に出てきたと聞きました。私の旧姓はかなり珍しい名前で、岩手に数百件しかなく、読み方も難しく、生まれ育った大阪では子どもの頃から「何て読むんですか？」「変わったお名前ですね」と言われ続けてきました。大学生の頃、家族でとりあえず「ルーツ探しの旅」でもするかと盛岡に行った時は、本当に岩手がルーツなのかしら？と急いで電話ボックスに入り電話帳をめくりました。すると、そこには同じ名前が数十件あって「ああ、同じ名前の人がたくさんいる！」「ここがルーツなんだ」となんだか嬉しかったのが忘れられません。
そんなご縁もあってか、関西からは遠いんですが、ふらっと盛岡一人旅をしてみたり、夫婦で花巻温泉に行ったり、精神科関連の学会が岩手であると魅かれるように岩手を訪れてしまいます。そして岩手と言えば宮沢賢治。数年前の学会も、昨年の秋に参加した学会も、毛色は異なるのですが、いずれも宮沢賢治を絡めた話を学会長がされ、秋の学会ではテーマにもなっていました。岩手での宮沢賢治の存在感の大きさに驚きました。
そんな岩手の秋の街を散歩しながら、なんだかいろいろ考えさせられたので、今回のテーマは岩手と宮沢賢治。

私が宮沢賢治に初めて触れたのは、岩手ではなく兵庫県の田舎町の母方祖父母宅でした。その仏間に、大きな額で「雨ニモマケズ・・」の詩が飾ってあったのです。毎年帰省すると仏間で寝泊まりするのですが、いつも眠る前にお布団から眺めて「よくわかんないけど、なんだかスゴイ詩だなぁ」と小学生の私は思っていました。この詩を書いたのはどんな人なんだろう？どんな人生を歩んだ人なんだろう？と想像するのが面白かったです。そして、小学生の終わる頃にはそらで言えるようになっていました。しかし、他の家族は興味も無いようでこの詩について話題に出る事はなく、先日、母親や弟に聞くと「そんな詩あった？」と言われました。いやー、文化的素養の無い家で育ちました。
なので私も、気にはなっていたけれど「雨ニモマケズ・・」の詩が宮沢賢治の作品だと理解した

のは、恥ずかしながらずいぶん大人になってからです。さらに、宮沢賢治の作品に興味を持ちだしたのも、岩手を訪れるようになってからです。
中学生頃の私はなんだか詩を書くのが好きになり、中学生向けの雑誌に詩を投稿して賞をもらった事があります。しかし、父母の反応は今ひとつで、一番喜んでくれたのは祖母でした。大学生の頃には、祖母は「ボケ防止だから」「返事はいいよ」とよく手紙をくれました。私は時々しか返事を書かなかったのですが、祖母が亡くなった時に、私の詩が賞をとった時の雑誌と私の手紙とがひとつの箱に入って大事にとってあるのを見た時、じーんときました。ふりかえると、「雨ニモマケズ・・」の詩は、読書家だった祖母が買い求めて飾っていたのだと思います。大正時代生まれの祖父はワンマンで、今でいう DV 的な一面もあり、家族に暴力があったと母親から聞いたことがあります。あの詩を祖母が選んだのには、いろんな思いがあったのかなぁと想像しています。祖母とは亡くなるまで「雨ニモマケズ・・」の詩について話す事は無かったです。今思うと、「あの詩のどんなところがおばあちゃんは気に入っているの？」と聞いてみればよかったと思いますが、祖母の人生を考えると、あの詩について誰にも話さずひとりで受けとめたかったのかなぁとも思っています。
数年前の学会は精神司法関係の学会だったのですが、岩手出身の宗教学者である山折哲雄氏がゲストで登壇し「雨ニモマケズ・・」の詩にある「デクノボー」について講演されました。いやぁ、その時に初めて、あの詩にはそんな意味があるのかぁと感動しました。
ちなみに「雨ニモマケズ・・」の詩は、宮沢賢治とかけてググると全文閲覧できます。

昨年の秋に参加した学会は「日本死の臨床研究会」という会で、歳をとって死を意識するようになった私が気になっている分野です。テーマは「“あめゆじゅ”を求め、向き合い、そして支える」で、宮沢賢治の「永訣の朝」という詩のなかの「あめゆじゆとてちてけんじや（雨雪をとってきてください賢治兄さん）」のフレーズからの引用でした。恥ずかしい話ですが、宮沢賢治フリークではない私、「永訣の朝」という詩を初めて知りました。ググるともちろん全文閲覧できるし、高校の教科書に採用されるなど、有名な詩でした。死にゆく妹が、そばで何もできずに寄り添っている兄である賢治にお願い事をするという場面を書いた詩です。演者の解説を聞きながら、これまた深いなぁと頷いてしまいました。賢治は、質屋のような商いをする両親とは裕福だけど分かり合えない部分が多く、妹トシとの関係が深くなっていったと聞きました。トシの「雨雪をとってきて欲しい」という兄賢治への依存は、逆にトシに何かしてやりたいという賢治の気持ちを満たす・・・という妹トシの深い思いを兄賢治が言葉にした詩ともとれる事です。

この詩の話を聞きながら、そうそう、そうなんだよねと、精神科での診察場面を思い出していました。精神科を受診される患者さんの中に、家族や友人誰にも相談せずに受診される方がいます。精神科医ではありますが、こんな見ず知らずのオバサンに相談するより、まず自分を思ってくれている人に相談したらどうやねん、と思うケースがあります。そんな患者さんは口をそろえて「迷惑をかけたらアカンし」「家族を心配させたくないから」と言います。「逆に家族や友

人が困っている時に、自分に相談してくれなかったらどんな気持ちがしますか？」と問い返すと「それは、さみしい」と言います。「では、人に相談されたらどんな気持ちですか？」と聞くと、「相談してくれると嬉しい」「頼ってくれるのはイヤじゃない」と話します。
そうなんです、人は信頼する人に言葉で依存するので、依存するという事は信頼している存在だと認識させる事でもあるんです。もちろん、ハチャメチャ家族で「家族が信用できない」という事もあると思います。でも、友人や恋人は自分で選んだり選ばれたりするので、家族でなくてもいいので、まず信頼できる人に言葉で依存してみる事は、相手に迷惑をかけるのではなく、信頼している証であり、相手に喜びを与える事なのだと患者さんに説明しています。
その後、ほとんどのケースは家族や友人に悩みや困っている事を話して楽になったといい、言葉で親しい人に依存するだけで、症状が良くなることをよく体験します。

もちろん、死にゆく最愛の妹との関係でおこる言葉でのやりとりは究極であり、私が診察の場面でであうレベルとはずいぶん異なる事なのかもしれませんが、信頼した相手に言葉で依存する事は、大切な事だと再認識させられました。
死の臨床の場面では、仕事ではあるけれど関わっている我々と、亡くなりゆく人の間で、言葉を介してお互いが「じーん」とくる場面を体験しているのではないかと思います。私もまた緩和ケアの専門ではないけれど、総合病院勤務の頃は死にゆく人の診察を通して、信頼されて依存される言葉で逆に助けられた事を思い出しました。

宮沢賢治は彼の死後に多くの作品を評価されたので、著名な文学者などがさまざまな解釈を発表するなど、いやぁなかなか謎が多い。ゆえに、熱烈ファンがいるんでしょうね。実は旦那が「ほとんど読んでないけど・・好きなんだよなぁ」と宮沢賢治全集を大切に持っていたり、北海道のふらっと入った小さな町のカフェの本棚に宮沢賢治全集があり、店主が熱く宮沢賢治について語り、宮沢賢治記念館にいった話で盛り上がったりなどなど、気になる存在です。
いやーそういう私、現代小説が好きなので、宮沢賢治をぜんぜん読み込めてません。しかし、岩手を訪れる度に、宮沢賢治に触れて考えさせられています。
むかしむかし、祖父はどんな気持ちで岩手から大阪に来たのか、それは父親も知らないと言ってました。今、孫の私はなぜだか岩手に魅かれて、今年の夏休みは岩手に行こうかなぁと計画しており、旦那の宮沢賢治全集を開いてみようかなぁと思っています。

馬渡の眼 19

子ども食堂篇

転　機

馬渡　徳子

くして、我が子ども食堂は、昨年のうちに五回の地元ニュースや新聞報道、県内全小中高校への配布季刊誌などに取り上げられる機会があったことが影響し、毎回 80 名を超える参加者となりました。保護者とともに参加される方も急増しました。

そのことで、四つの部屋が常に満員状態となり、自分時間でゆっくりと食事取ることや、好きな場所で勉強したり、ゲームやパソコンをしたり、友だちと話したり、保護者同士で交流したりという時間をもつことが難しくなりました。せかされるように食事をしたら、直ぐに帰宅される方が増えてきました。

ずっと何年も通っている子どもたちや、学校など子どもの公的支援機関から紹介を受けた子どもたちは、ガラッと変わってしまった雰囲気になじめず、一月末にスタッフに率直な気持ちを伝えてくれました。

「ずっとここは自分のいこごちのよい居場所だと思ってきた。けれど、ボランティアの方と勉強している横で平気で大声でふざけたり、食器もいつまでも戻さないでゴミのままに帰ろうとする人やそれを見過ごす保護者の方もいて、悲しくなる。新しい人を拒否する気持ちはないけれど、前のようにお互いがどんな状況かは知らなくても、その場の様子を観て譲りあったり、基本的なルールを守りあえる居場所に戻したい。」

その発言を受けて、一月の運営会議において、当面の間の新規受け入れを中止しました。また、子どもたちと保護者に現状への思いを伺い、子どもたちには大学生と一緒に、一か月かけて「ルール」をつくってもらうことになりました。

転機を迎えた我が無料塾と子ども食堂。
子どもたちの参画のもとに、次の一歩を踏み出す時が来ています。

次回 6 月の投稿時には、自分たちの居場所のルールをどのように子どもたちが大学生とともにつくったのか、ご報告したいと思います。

如来さんの祭り

「座敷ぼっこの話」宮沢賢治

脚色・漫画：柳たかを

・・・
行きたい

・・・
行きたい

熱はどうえ？
まだしんどいか？

・・・へ
行きたい

何を…
なに行き
たいの？

如来さんの
祭りに
行きたい

如来さんの
祭りに
行きたい

熱は
下がった
みたいね

けど…まだ
寝とらんと
いかんよ

如来さんの
祭り…
行きたぁい

困った子
じゃなあ

どおした？

どーれ
どぉした
なにダダ
こねとるん
かの？

なに？
如来さんの
祭りに
行きたい
てか？

うん

心配せんで
ええ

祭りは
のばして
やるから

はよう
良うなれ

子どもの
麻疹は
甘う
思うたら
いかん

祭りは
のばすから
はよう
良くなれ

・・・
・・・

リ
リ
リ
ン
ン
ン

あいつの為に
ひどい目に
あったわ

・
・
・
・
・
・
・
・
・

あいつのせいで
如来さんの
祭りのばすて
本家の
おばぁが
言うて
きたんじゃ

ワシの
宝もんの
鉛のうさぎも
あいつの見舞い
じゃ言うて
取りあげられた
んじゃ

許せん

許せん
許せん

今日
あいつが
来ても
ワシはぜったい
遊ばないぞ

おい
あやつが
来たぞ

よおし
隠れろ

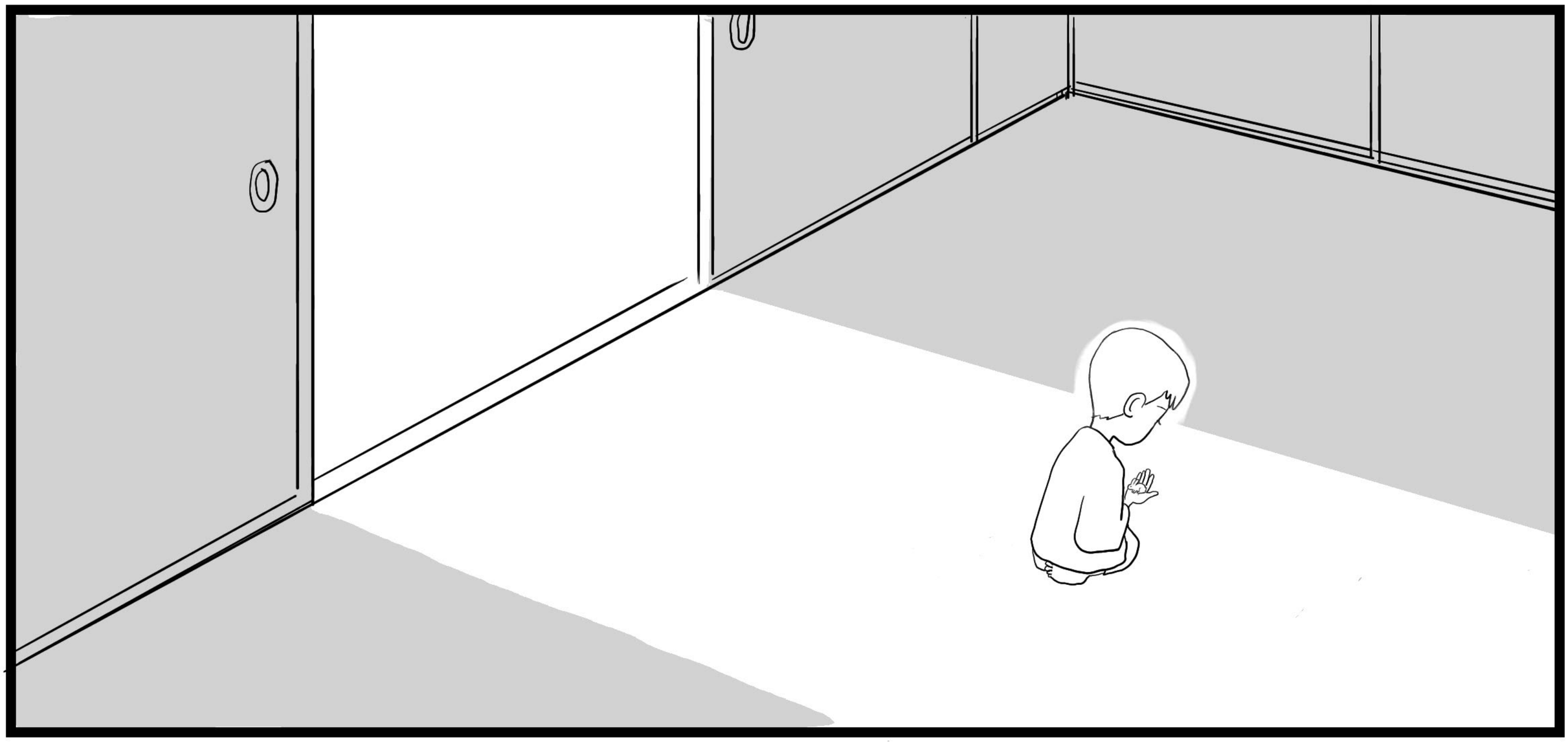
隠れろ！

ドド
ドタ
タ

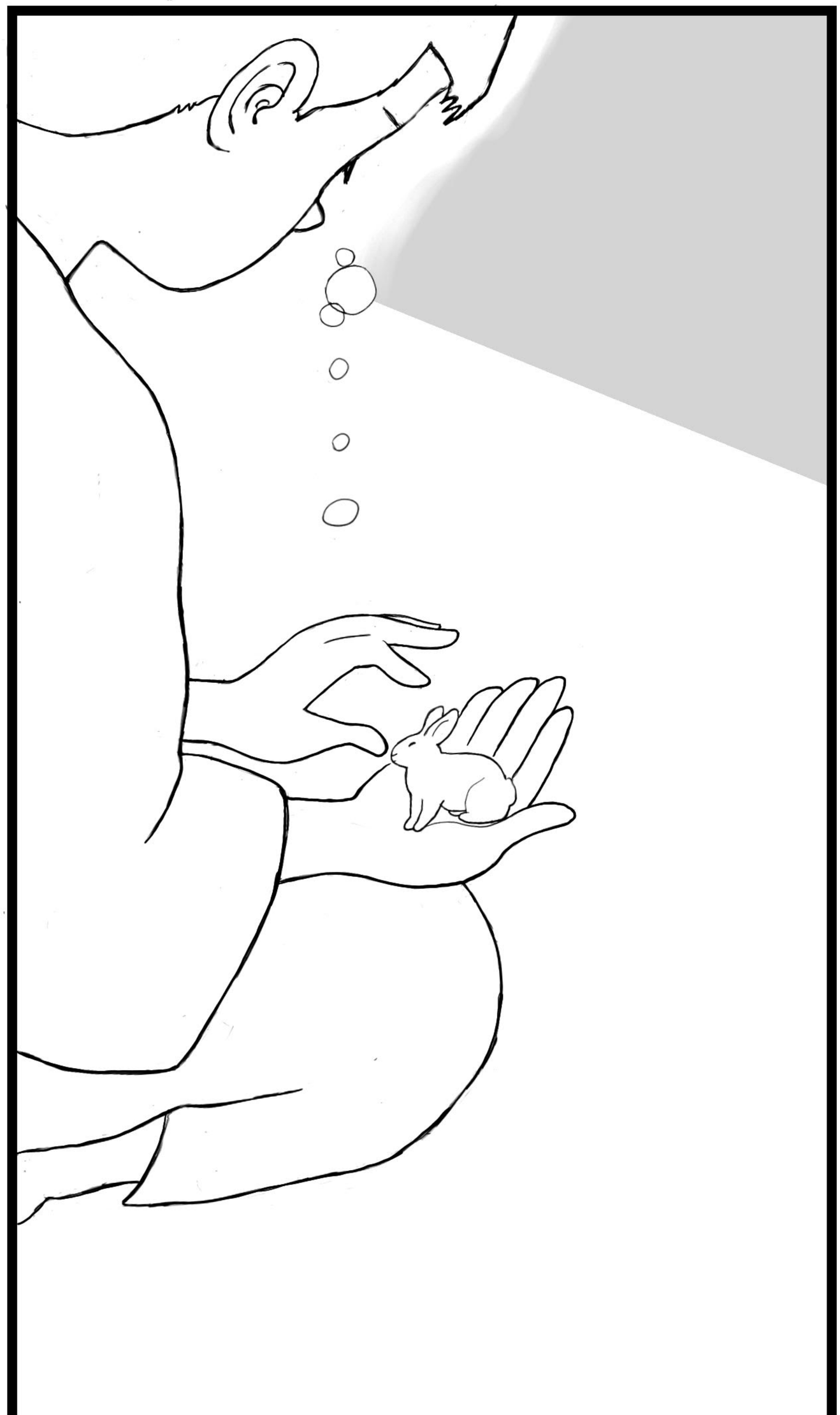
ガラッ

お…

お客




こんなのが
お客です
続く



心理コーディネーターになるために
Vol.21

山下桂永子



☆朝のスケジュール確認

始業時間は 8 時 45 分。出勤したらまずスケジュールの確認から。今日は午前は、9 時からと 11 時からの 2 ケースと午後は 13 時、15 時、16 時の 3 ケースの合計 5 ケース。

8 時 45 分からは、職員朝礼があり、8 時 50 分からは相談員全員集まっての短い打ち合わせを行う。その後、9 時からは面談という合間を縫って、母子並行面接の相談員同士の打ち合わせを何時にいれるかの確認をするため他の相談員と声をかけあう。

A先生「山下先生、明日の 9 時のケース、今日どこかで打ち合わせできますか？」

私＜あーA 先生、ちょっと待ってくださいね、B 先生B先生、今日の 15 時のケース打ち合わせしたいんやけど、10 時空いてます？＞

B先生「すみません、10 時ケース入ってますね」

私＜じゃあ 14 時はどうかな？＞

B先生「オッケーです」

私＜じゃあ B 先生とは 14 時打ち合わせでお願いします。A 先生、打ち合わせ 10 時でもいいですかね？＞

A先生「大丈夫です、お願いします」



C 先生「山下先生、今日の 16 時のケース、どこで打ち合わせしましょう？」

私＜あららそうだった。C 先生は何時が空いてます？＞

C先生「11 時と 14 時なんですけど、14 時に A 先生と打ち合わせの予定で。。。」

私「おおう、どうしよう。11 時は私ケースだし、14 時は、えーと、えーと、あ、B 先生との打ち合わせだ。お互い 14 時からの打ち合わせのあと 14 時半からでいいですかね？」

C先生「了解です」



☆パズルゲームなスケジュール

このように毎日朝からスケジュールがパズルゲームのようである。面接の合間を縫って親子並行面接で組んでいる相談員とのケースの打ち合わせが入るのだが、それ以外にも面談の記録、他機関との連携、その他事務作業などが入ってくる。

相談員は各曜日に4～5人いて、それぞれ勤務曜日が異なり、持っているケースも異なる。保護者面談の担当のときもあれば、子ども面談担当のときもあるので、バラバラなスケジュールの中、どこで打ち合わせを行うのかが難しい。

打ち合わせが難しいなら、曜日ごとに保護者担当、子ども担当のペアを固定すべきではという意見もあるが、さまざまなケースに対応するためには、相談員の年齢、性別、経験、得意不得意などに多様性があることが重要だと思うので、ペアを組む相談員を固定することが良いこととは思えない。結果、スケジュールが難解なパズルのようになってしまう。

数年前まではここまでスケジュールが混みあうことはなかったのだが、ここ数年の間にケース数が増えたこと、面接以外の業務が増えたこともあり、その日では打ち合わせの時間を取れないので、前日や前の週に打ち合わせを行っておくこともしている。また、私自身、「心理指導員」の仕事として、相談員のマネージメントや、他機関との連携窓口、緊急支援時の学校訪問やコンサルテーション的な役割がここ数年増えてきている。

☆目安の崩壊

以前から、面接1回につき、必要な時間は 2 時間というのを目安にしてきた。50 分面接、10 分面接室の準備と片付け、20分記録、30 分打ち合わせ、10分保護者や他機関との連絡などである。なんとなくではあるが、「一日 7 時間で 4 ケースまでがちょうどよいぐらいだよなあ」などと考えていたし、その目安を元に、他の相談員の方々にも新規ケースの割り振りを行っていた。1日に受けられる面接数は7枠あるが、それを全部埋めてしまっては、記録、打ち合わせ、準備と片付けができない。

しかしここ数年、一日のケースが 4 ケースという目安は、他の誰よりも真っ先に私が崩壊している。一日5～6ケースが当たり前のようになって、そこに他機関連携会議、学校訪問などが入る。打ち合わせも他の相談員の方々が気を遣ってくださり、前もって私のスケジュールに合わせて早めに声をかけてくださったりするのだが、急に他機関や保護者からの連絡が入り、打ち合わせが中断したり、十分にできないことも発生している。ま





ともな記録が書けず、自分でも解読不能なメモを見ながらの打ち合わせで、準備と片付けも他の相談員の方々にフォローをしてもらってなんとかやりくりしている状況である。ケース数が増えていく中で、本当なら月に 2 回の面接を月に 1 回にせざるを得ないことも多々ある。

＜A先生ごめん！そこケースいれちゃってた！＞＜B先生ごめん！ちょっとこの電話だけ打ち合わせの前にさせて！＞＜C先生ごめん！打ち合わせ 5 分ぐらいしかとれへんかも！＞と謝り倒す私にどの相談員の先生も怒らず(怒っているかもしれないが)優しくフォローしてくださるのだけが救いである。

☆目安の再構築

いつまでもずるずるとこの状況を続けるのは、他の相談員の方にも迷惑をかけてよろしくないので、ここで一度、改めて相談員としてのケース数の目安ではなく、私が心理指導員として働くケース数の目安を整理しておこうと思う。

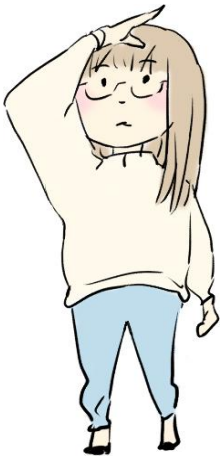
まず、私の週の勤務日数は 4 日で、1 日は約7時間あるので、4日×7時間＝28時間。つまり週に私が業務に仕える時間は28時間である。4 日のうち 1 日は教育支援センター(不登校児童生徒が通う教室)に 10 時～15 時までスタッフとして入るので残り 23 時間。週にもよるが、電話やメールなどの他機関連携や会議出席などで週に 2 時間程度は使うとして、残り 21 時間。教育相談や相談員のマネージメントに関わる打ち合わせや事務作業に週に 1 時間はかかるとして、残り 20 時間。他に校内支援センターで行うソーシャルスキルのプログラム準備や緊急支援が入ることもあるが、とりあえず、この 20 時間が私が相談員として担当している面接やケースワークにかけられる時間である。先ほど述べたように、数字上 20 時間あるからといって、すべて面接を入れるといろいろと追い付かなくなるので、1 面接に 2 時間かかることを目安にすれば、私が 1 週間に行う面接数は 10 回、一日だと3回が目安ということになる。

☆教育相談援助の言語化と可視化

こうしてみると、一日 4 ケースすら無理があったことにびっくりである。一日 7 時間あって、3時間しか面接をしてないなんて外から見たらだいぶ暇そうじゃないか？予算委員会で報告したらさぼってるって思われて予算削られる数字じゃないか？暇じゃないし、さぼってないし、余裕なく働いているつもりでも、外から見れば楽そうに映るのかもしれない。面接数が多けりゃいいとは思っていないし、別に忙しそうに見られたいわけじゃない

けれど、過去に相談員の予算を削られて、悔し涙を流しながら上司と喧嘩上等の議論をしてきたことを思うと、これはなかなか難しい問題である。

面接の数だけでは推し量れない、面接以外の教育相談活動をどのように援助として言語化し、心理士以外に向けて可視化していくのか。目に見えない相談員の仕事をどのように上司に伝え、評価につなげていくのか、予算削減を食い止めていくのか、これまでもそれなりにやってきたつもりではあるが、今後は益々知恵を絞り、工夫を重ねていかなければならないと思っている。



先人の知恵から
51

かうんせりんぐるうむ　かかし

河 岸　由 里 子

今回は「ま行～み行」まで以下の１０個。残すは「ま行」の残りと「や行、ら行、わ行」のみ。今年中には終わるのかなと思いつつ。あと少し。

- **負け犬の遠吠え**
- **負けるが勝ち**
- **待てば海路の日和あ**
- **学べば則ち固ならず**
- **迷う者は路を問わず**
- **丸くとも一角あれや人心**
- **身修まりて後家斉う**
- **身から出た錆**
- **自ら勝つ者は強し**
- **自ら見る之を明と謂う**

＜負け犬の遠吠え＞

臆病な者が、かげでからいばりすることのたとえ。喧嘩に弱い犬は相手から遠く離れたところから吠え立てるということから。単に「犬の遠吠え」ともいう。

「弱い犬ほど良く吠える」というが、余り陰で文句ばかり言っているのは、負け犬の遠吠えと一緒だと伝えることがある。文句があるなら、またその内容が正しいのであれば、堂々と面と向かって相手に話せばよい。

揉め事が苦手、穏やかに過ごそうとばかりする傾向がある子どもたちに、あえてこの諺をぶつけることが増えた。陰でぶつぶつ言ったり、SNS で匿名でつぶやいたりすることは、格好良いことではない。言いたいことがあるなら、堂々と言えばよいのだ。

堂々と言えないなら口を噤むべきである。こそこそと、SNS で言いたい放題言っているのは、卑怯だ。

言いたいことはあるが、自分に火の粉がかかるのは厭だというのは、少し虫が良すぎるのかもしれない。以前であれば、新聞の投稿欄に投稿する人もいた。もちろんそこでも匿名というやり方はあった。新聞の投稿欄より、SNS は気軽で、誤字脱字があろうが、書いていることが支離滅裂であろうが、すべて流れてしまうことになる。そして、そんな投稿に踊らされている人たちは、滑稽としか言いようがない。

言論の自由の中で、言うべきことは、主張すべきことは、きちんと主張すればよいのだ。おかしいと思ったら、おかしいと言えばよいし、賛同するときも、しっかり賛同すれば良い。匿名やハンドル名だけで、他人を誹謗中傷するようなことは、腰抜けの、卑怯者のすることだと子どもたちには伝えていきたい。

＜負けるが勝ち＞

時には相手に勝を譲って、徹底的に勝負を争わないことが、かえって有利な結果となり、勝ちに結びつくという事。いろはがるた（江戸）の一つ

勝ち負けにこだわる子どもたちが一定数いる。勝てないと全てがだめになってしまう子たちだ。一番じゃないとダメ、百点じゃないとダメ、完璧じゃないとダメ。そんなことをしていたら潰れてしまうのは目に見えている。持てる力以上を出そうとすれば、当然無理が祟って潰れる。

そんな子どもたちにこの諺を伝えることがある。「負ける」という言葉を聞いただけで拒否反応を示すような子らだが、「勝ちを譲る」という言葉だと、納得しやすいように思う。この諺が入ると、この子どもたちはずっと楽に生きられるようになるのだ。

生きにくさを持つ子どもたちが、少しでも生きやすくなれるように、この諺を生かしていきたい。

＜待てば海路の日和あり＞

海が荒れていても、じっとまっていれば必ず航海に適した日が来るということ。転じて、今は状況が思わしくなくても、焦らずに待っていれば、必ず幸運が訪れてくるという事。

不登校の子を持つ保護者と関わっていると、保護者が焦っている間は良いほうに動かないと長年の経験が教えてくれる。保護者にしてみれば、中学校は３年間しかないし、高校は休みすぎれば留年ということになるため、時間に追われ、焦っている。しかし、長い人生、１００年ともいわれる人生のほんの数年のことである。高校中退となっても、別に人生が終わるわけではない。焦っている保護者たちに、「待ちましょう」というと、「いつまで待てばよいのか」と返ってくることが多い。「いつまで」かはわからないが、親がプレッシャーをかけている間は動かないということはわかっているので、まずはプレッシャーをかけないことから始めてもらう。

待つことは難しい。特に世の中がこんなに早く動いている時代では、たとえ１分１

秒でも早くという思いがそこここで流れている。そうした流れの速さについていけない子どもたちが増えている。子どもたちのペースで、ゆっくりゆっくり進めていけるような環境を整えてあげると、子どもたちは元気を取り戻してくる。元気になれば、動きが出てくるのだ。

幼児期から急かされて、小学校高学年くらいから疲れ切っていて、中学で心が折れる、そんなパターンになってしまう子どもたちを救うためには、ゆっくりゆったりが必要だ。だからこそ、保護者にも「待つ」姿勢を持ってもらいたい。「待つ」ことは中々難しいが、あえてこの諺を出して、「待ってみましょう」と伝えている。

英語では・・・

Everything comes to him who waits.（待つものはすべてを得る。）

He that can stay obtains.（待つことのできる者は欲しいものを手にする。）

＜学べば則ち固ならず＞

学問をすれば視野も広くなり、考え方も柔軟になって、かたくなに一つの考えにとらわれるということも無くなる。「固」＝頑固で独りよがりな事。

出典　論語

子どもたちと関わっていると、「どうして学校に行かねばならないのか？」「どうして勉強しなくちゃいけないのか？」と聞いてくる子がいる。これは今も昔も変わらない。

何故、子どもたちは学校に行かなければならないのかについて、「それが義務だから」という答えでは納得しない。そんなのは「大人が勝手に決めたこと」だから。

正しい知識を得ることで、間違っていることがわかる。例えばニュースやネットで流れる情報に対し、何が正しくて何が間違っているかについての物差しを我々はしっかり持てているかと言えば疑問である。それでも、基本的な知識がその物差しとなってくれることは多々ある。

学問をすることは様々な知識を得ることである。知識は必ず自分を助けてくれるものでもある。古くから学問をする意味について疑問に思う人が居て、それに対して答える人が居た。この諺もそうした一つの答えである。ずっと昔からこうした答え方をしているという意味で、筆者はこの諺を出して説明することがある。知識が少なく、視野が狭ければ、井の中の蛙になってしまうからと。

＜迷う者は路を問わず＞

愚かな者に限って、賢者に教えを受けようとしないというたとえ。自分を過信して、人に意見を求めようとしないのは、失敗につながるという事。道に迷う者は、人に道を尋ねないからであるという意から。

出典には、この後に「溺るる者は遂を問わず（溺れる者は浅瀬がどこにあるかを尋ねないからである）」と続く。独善をいましめることば。

出典　荀子

人に道を聴くことは、グーグルマップなどを使うようになって減った。マップを読めない場合、或いはマップを見てもわから

ない時に限るだろう。ただ道に関してだけなら聞かなくても済むかもしれないが、いろいろな場面で、「人に聞けばよいのに」と思うことが増えた。

わからないことをわからないままで、結局仕事上のミスを増やし、叱責されて職場に行けなくなったなどと言う相談が来るのだ。どのタイミングで訊けば良いかわからない、忙しそうだから声を掛けられない、声を掛けたら怒られるのではないか、などと思って、ひたすら困りながら、思い込みで勝手なことをしてしまい、怒られてしまうのである。以前「聞くは一時の恥・・・」という諺も紹介したが、訊くときにちょっと一言添えることができれば訊けるのである。「ちょっといいでしょうか？」「今大丈夫でしょうか？」「確認したいことがあるのですが・・・」等の言葉がけから始めれば、相手も今はダメならダメというだろうし、大丈夫なら「いいよ」というだろう。何も前置きをせずに、突然「〇〇は××でよいか？」などと言えば、訊かれた方は注意を向けていないから聞こえなかったりして、「は？何？」と怒ったように言ったり「何を藪から棒に言っているんだ」と気分を害することもあるだろう。

手順を守れば相手の気分を害することなく訊くことができるのだが、その手順を怠るからうまくいかない。道を訊くのだって、通行人に突然「〇〇駅はどこ？」と訊いたりしないだろう。「ちょっとすみませんが」と声をかけるのが普通だ。

また、きちんとわからないことを訊いて理解して行けば、そのあともずっと楽になるのに、ぐずぐずと訊かずにおいておいて、困って困ってやっときくと「なんでもっと早く聞かないんだ！」と怒られることにもなる。

最初の内はいくらでも訊けるのだから、最初のうちにどんどん訊けば良いといつも伝えている。仕事の上でもなんでも一緒である。自分で調べてわかることは調べたらよいが、調べてもわからなかったら早めに訊くことが上手く生きていくコツの一つではないかと思う。

＜丸くとも一角あれや人心＞

性格が円満であるのは良いが、時と場合によっては自分の意地を通すような一面があるほうが良いという
事。

良い子で居ようとする子が増えたのは、以前から書いている通りである。人に嫌われないように、目立たないように、親にも友達にも先生にも良い子で、にこにこと穏やかな姿を見せている。誰かの意見に合わせ、自分の意見は言わない。そんな子たちに伝えたいのがこの諺である。

人の言う通りですべて納得できるはずはない。「違う」「そうじゃない」と思うことが必ずあるはずだ。それでも人に合わせて、「そうだね」「そう思うよ」と合わせている子に言いたいのだ。「それでよいのか？」と。「自分」をしっかり持つことは大切である。人にある程度合わせることも必要ではあるが、あれもこれも、すべて人に合わせていたら苦しくなるだろう。自分を殺しすぎである。

どうしても納得できないことがあったら、或いはどうしても同調できないことがあっ

たら、しっかりと自分の意見を言おう！自分を出そう！「自分はそうは思わない」と言おう！みんなが右に行くから自分も右ではなく、一人左に行くこともあっても良いのだ。その方が人間らしいのだ。人の言うなりで、Yes man でいるとしたら、それはロボットと同じなのだ。人間が人間らしく、人間として生きるためにも、もっと自分を出そう。

＜身修まりて後家斉う＞

わが身の行いを正しく修めてこそ、家庭を上手く治めることができる。

出典　大学

この諺は若い母親たちに度々使っている。子どもや夫のダメなところばかりをあげつらい、自分のことを棚上げしている母親がいる。折角縁があって一緒になって、子どもまで生まれたのだから、何とか家族を上手く回していく知恵が必要である。それを、あれがだめ、これがだめとダメ出しばかりしていたら、そして子どもも、「わざと泣いて私に意地悪する」と憎らし気に言うようでは、母子の関係も夫婦の関係も家族全体が上手く回らなくなるのは明らかだ。

自分自身の態度、行いをきちんとしていけば、子どもも夫も少しずつでも変わっていくだろう。それでも変わらなければ文句を言えばよいのだ。先ずは人を変えるより自分を変えるところからやってみようという意味でこの諺を伝える。

＜身から出た錆＞

自分自身が犯した行いや過失のために、あとで禍を受けて苦しむこと。刀身から出た錆が刀身を腐らせてしまう意から。「身から出した錆」ともいう。いろはがるた（江戸）の一つ。

この諺は、時々使う。嘘ばっかりついてしまって、家族や先生方から信じてもらえなくなった子などに、この諺を出して説明するのだ。オオカミ少年の話もする。人は時として嘘をついてしまうことがある。嘘にも良い嘘、仕方ない嘘があるだろう。人を守るための嘘というのも存在する。

しかし、自分の不都合をごまかすために嘘をついていると、結局つじつまが合わなくなり、嘘が全部ばれてしまうことになる。そういう状況になった子には、つい嘘をつきたくなってしまう気持ちは受け止めつつも、嘘をつくという行動が、結果的に自分自身を信頼してもらえない人間にしてしまうのだと伝え、そんな自分で良いのかと訊く。人に信じてもらえないのはとても寂しいし辛いことだと説く。それでもかまわないと居直る子もいるが、そういう時は「君がそれでよいならいいよ。私は困らない。」と言い放つこともある。

自分でやってしまったことは自分で責任を取るしかない。誰かが替わりに責任を取ってくれることなどないのだから。嘘をついてしまったら、すぐに謝って嘘だったことを詫びて、信頼に足る人間になっていこうよと伝える。

同様に自分がやってしまった失敗のせいで、自分が困った状態に陥ったとしても、それも自分の責任だから、きちんと責任を取

らないと、後々自分が困ることになるよとこの諺を伝えている。

＜自ら勝つ者は強し＞

自分の欲望を抑えることのできる者こそ、真の強者であるということ。

出典には「人に勝つ者は力あり、自ら勝つ者は強し（人に勝つ者は力があるだけだが、自分に打ち勝つ者は本当の強者である。）」とある。

出典　老子

自分で自分をコントロールするのは中々難しい。特に怒りの感情は抑えるのが難しいし、ゲームややりたいことをやらずに、やりたくない勉強をするなどと言うのは一番難しいかもしれない。そこで自分を自制することができる人はきっと成功するだろう。

野球の大谷選手やイチロー選手のような成功者は、自分に対してシビアーだ。プロボクサーやプロサッカー選手にしても、ストイックなところがある。自分を律することができないと、自分の体を良い状態で保つことができない。体を良い状態に保てないと、良いパフォーマンスが出来ない。自分の欲望のままに過ごしていたら、体も崩れ、良い結果を出すことなどできなくなる。

運動選手に限らず、自分の言動をしっかり見つめながら、よく考えて行動するなら、政治家も教育者も、破廉恥な罪で捕まることなどないだろう。

人が成功するためには、何らかの犠牲も必要だろう。何かを成し遂げるために、自分を律すること、それが成功の秘訣なのだと子どもたちにも伝えたい。最近の子どもたちは好き勝手、やりたい放題の感じが否めないから。

＜自ら見る之を明と謂う＞

他人を知るのではなく、自分を見つめ、自分を知ることが真の明知であるという事。

出典では、この前に「知ることの難きは人を見るに在らず、自ら見るに在り。故に曰く」とある。

出典　韓非子

前述の諺とも似ているが、他人のことばかり言う子がいる。自分のことを棚に上げて、同じようなことをしているのにも関わらず、他人のことばかり言うのだ。自分を知るのは意外と難しい。自分で自分は見えないからだ。小さいうちはともかく、小学生になって、客観的に自分を見ることができるようになると、他人のことばかり言わなくなってくるのが普通だろう。それでも他人のことばかり言う子も大人もいる。それはやはり客観視が出来ていないからである。

客観視をさせるためにも、自分の言動を一つ一つ振り返り、確認していくことが必要になる。時には、やったこともやっていないと言い張る子に出会うこともある。如何にその子がやった行動であるということを納得させられるかにかかっている。丁寧な話し合いが必要で、信頼関係も大事である。自分ではやったつもりがなくても、やってしまうことはあるのだと伝え、その子を否定せず、その行動を否定し、行動は修正できるということを説明していくと、徐々に理解が進む。自分がやったことをやったと認められることができるようになると、その子は大きく成長する。

この諺を出して、自分を知るということの難しさと、自分を知ることができた子は素晴らしいのだと何度も話している。

出典説明

論語・・・二十編

儒教の経典。「大学」「中庸」「孟子」とともに四書の一つ。孔子の言行や門人たちとの問答を記録した書で、講師の死後に門人たちが編集したものと言われる。孔子は諸国を回って仁の徳による政治を説いたが、本書は孔子の人物や思想を知る上で極めて重要な資料である。

荀子・・・全二十巻三十二編

中国、戦国時代末期の儒家。姓は荀、名は況。荀卿（じゅんけい）、孫卿と損傷される。趙の人。斉に遊学した後、楚に仕えた。孟子の性善説に対して性悪説を唱え、礼法による秩序維持を重んじた。『荀子』二十巻は荀子とその一門の著とされている。

大学・・・全三巻

中国古代の兵法書。周の太公望（たいこうぼう）の著とも、また、前漢の張良（ちょうりょう）が土橋の上で黄石公（こうせきこう）から授けられたとも伝えられるが、後世の偽作と言われる。上略・中略・下略の三巻から成り、老荘思想（ろうそうしそう）を基調とした治国平天下の大道から政略・戦略の道を論じている。同じ兵法書の『六韜（りくとう）』と併称され『六韜三略』ともいう。

老子・・・

春秋戦国時代の思想家。道家の祖。姓は李、名は耳（じ）、字は聃（たん）（一説には伯陽）。老子は尊称。周の図書室の書記官だったが、周末の乱世を逃れて西方の関所を通った時、役人に頼まれて『老子道徳経（老子）』二巻を著したという。

韓非子・・・

中国、戦国時代末期の思想家韓非の尊称。韓の公子（貴族の子）。荀子に師事して刑名学（けいめいがく）（法治主義）を学んだ。国の弱体化を憂い国王を諫めたが入れられず、発憤して「韓非子」五十五編を著して法による政治を論じた。のち、秦に使いしたとき、謀略にあい自殺した。

うたとかたりの対人援助学

第 35 回「沖縄の子守唄とわらべうたを聴く」

鵜野　祐介

はじめに

今年（2026 年）2 月 25 日（水）- 26 日（木）、沖縄県那覇市を訪ねて、長年子どもたちに伝承の子守唄やわらべうたを手渡す実践を行っておられる石川キヨ子さんと平良京子さんにお会いする機会を持った。

ネット空間に囲まれたIT 情報社会に生まれ育った今日の子どもたちや若者たちに、地元沖縄で伝承された子守唄やわらべうたをどのようにして継承しようとしておられるのか。お二人の実践には、全国各地で同様の取り組みに悪戦苦闘しておられる多くの方がたにとって、参考になると思われる点がいくつもあった。ごく一部だが、ここに紹介してみたい。

みどり保育園とガジュマルの樹木

2月 26 日（木）の午前9時 30 分、沖縄県那覇市の首里城公園から程近い石嶺地区の住宅街に「みどり保育園」を訪ねた。元園長の石川キヨ子さんが、園庭の一画に聳える巨大なガジュマルの樹木と一緒に迎えて下さった。



多数に分岐した幹が絡まり合いながら枝のように手を広げ、そこから無数の気根が垂れ下がっていた。子どもたちが木登りをしたり、鬼ごっこや隠れん坊をしたりするのに打ってつけの遊び場だという。一方で、暗がりには妖怪キジムナーが棲んでいそうな気配もあった。

第二次世界大戦末期の「沖縄戦」で、焦土と化したこの地で生き延びた生命力を持つこの「みどり」の樹に惹かれて、キヨ子さんは沖縄が本土復帰した 1972 年に、「みどりご（嬰児）」が集う「みどり保育園」を始めた。そして、沖縄の昔話やわらべうたを取り入れた保育実践を行ってこられた。



（石川キヨ子さんと筆者）

わらべうた遊びの設定保育

この日は、キヨ子さんが保育士さんと一緒に、3 歳児クラスから 5 歳児クラスまでの約 60 名が参加する「わらべうた遊び」の設定保育の時間があり、沖縄地域児童文学協議会事務局長の山川喜美子さん、山川さんの姪御さんと一緒に見学させていただいた。

「うちなーぐち（沖縄言葉）」のわらべうた遊びの楽しさを身体じゅうで表現する園児たちや、一緒に跳びはねる保育士さんたちやキヨ子さんのエネルギッシュな姿に圧倒された。

歌い方や遊び方は、キヨ子さんが、那覇わらべうた会の皆さんと一緒に長年かけて試行錯誤しながら作り上げたものだという。コダーイ・メソッドは参考にしなかったそうだ。「ド - ミ - ファ - ソ - シ」という琉球音階の歌が多いが、「ラ - ド - レ - ミ - ソ」という民謡音階の歌もあるし、西洋音楽の替え歌も交じっていた。

なーみ なーみ　（波よ波）
わんわちゃくり　（私をくすぐれ）
ゆーちぬさーちぬ（ユーチヌ崎の）
鼻もーもー　（鼻もーもー）

――海辺で子どもたちが波とたわむれている様子をうたにしている。「花いちもんめ」のような２列隊形で向かい合って、一方が前進し、他方が後ずさりする（高江洲義寛『おきなわのこどもあそびうた』那覇わらべうた会 2002 年を参照、以下同様）。

雨雨(あみあみ)ふぁーふぁー　（雨を食べよう）
雨雨ふぁーふぁー　（雨を食べよう）
なら子や やーしゃてりや
（私の子はお腹がすいている）
牛まん馬まん　（牛や馬に乗って）
ガンカラ ガンカラシー
沖縄上り 大和上り　（沖縄へも日本へも）
ぼんぼん ぶりかましってぃ（桃をもいで食べて）
くーよー　（来なさい）
雨雨ふぁーふぁー　（雨を食べよう）
雨雨ふぁーふぁー　（雨を食べよう）

――雨が降ってきた時に「早くやんでほしい」という意味の歌だが、「雨を食べよう」といって、むしゃむしゃ食べる真似をする。

こーじゃー馬小(んまぐわ)　（こーじゃー馬よ）
潟原(かたばる)かいど　（潟原(地名)へ行くんだよ）
馬ぬ鞍置(んまぬくらうー)してぃ　（馬の鞍を置いて）
チャンチャン馬小(んまぐわ)　（チャンチャン馬よ）
潟原かいど　（潟原へ行くんだよ）
ちんしけー打(う)ち割(わ)てぃ（ひざを打ち割ってしまって）
ミハッハ ミハッハ
じゃんけんぽい

――「こーじゃー馬小」とは、灰色まだらの小さな馬のこと。「チャンチャン馬小」とは、張り子のオモチャの馬のこと。「ミハッハ　ミハッハ」とは、馬のいななきを模した掛け声のこと。まずはじめは、全員バラバラで、歌に合わせ跳びはね、じゃんけんで負かしたい子のところへ寄っていきジャンケンをする。負けた子は勝った子の後ろにつながり、再び歌と動作を繰り返す。こうして、最後には一列につながってしまい、さらに歌と動作を繰り返し、今度は先頭と最後尾の子とジャンケンをし、最終的には一つの輪になる。

子守唄でクールダウン

子どもたちのテンションが最高潮に上がったところで、キヨ子さんは子どもたちに板張りの床の上に寝転び、目を閉じるように指示した。それから八重山の子守唄「月ぬ美(かい)しゃ」を歌った。「ホーイチョーガー　ホーイチョーガー」と、ゆったりとしたリズムで繰り返した。ほとんどの子が目を閉じて、身体をごろーんとしていた。

「興奮したままで終わると、暴れまわったり走り回ったりする子が出てきます。そうならないように、最後に必ず子守唄を歌って、心と体を鎮めてあげるのです」と、後で話して下さった。わらべうたと遊びと子守唄が見事に融合した保育実践だった。

月ぬ美(かい)しゃ 十日三日(とうかみーか)（月の美しいのは 十三夜）
みやらび美しゃ 十七(とうなな)つ
（乙女の美しいのは 十七歳）
ホーイ チョーガ

東(あ)りから上(あ)りおる 大月(うふつき)ぬ夜(ゆ)
（東から上がる 大きなお月様）
沖縄(うきな)ん八重山(やいま)ん 照(てぃ)らしょーり

（沖縄も八重山も　照らして下さい）

ホーイ　チョーガ

（高江洲 2002：39）

「耳切坊主」の案内板

みどり保育園を後にして、首里城公園の北側に位置する「大村御殿」跡を訪ねた。現在、御殿の周囲の石垣だけが残っており、広い道路に面した場所に「耳切坊主」の案内板が立っていた。次のように紹介されている。

「ここは、北谷御殿（のちの大村御殿）跡地で、わらべ歌「耳切坊主」の舞台となった場所です。昔、妖術を使った悪事をはたらく黒金座主（クルガニザーシ）と呼ばれる僧侶がいました。噂を聞いた国王は、弟である北谷王子に成敗を命じた。黒金座主は、北谷王子に耳を切り落とされ、恨みを抱きながら殺され、屋敷の南東角の辻（うふかじまやー）に埋められてしまいます。それからというもの、大村御殿の角には、黒金座主の亡霊が小坊主たちを引き連れて現れるという噂が立ち、また、大村家に男子が育たないのも黒金座主の祟りとされました。そのため、男子が生まれても亡霊に狙われないように「大女子（ウフイナグ、大きな女の子）が生まれた」と言って祟りを避けるようになり、その風習が琉球全土に広まったと云われています。（亡霊云々は別として登場人物は実在しており、十八世紀頃のこととされます。）」

平良京子さんの歌う「耳切坊主」

「耳切坊主」は子守唄の中で最もポピュラーなもので、沖縄全島に流布しているが、この日の午後お会いした平良京子さん（沖縄県子どもの本研究会顧問）が歌って下さったバージョン（類歌）を記しておく。



ハイヨー　ハイヨー　ハイヨーハイ

夕　市　うーいーね

（夕方になって、市場へついていくと）

大村御殿ぬ御門なかい（大村御殿の門に）

耳切坊主ぬ立っちょんど（耳切り坊主が立っているよ）

幾人幾人立っちょみせが　（幾人幾人立ってますか）

三人四人立っちょんど（3 人も 4 人も立ってるよ）

何とぅ何とぅ持っちょみせが（何と何を持ってますか）

鎌ん刀ん持っちょんど　（鎌や刀を持ってるぞ）

小刀ん包丁小ん持っちょんど

（小刀や小さな包丁も持ってるぞ）

泣ちゅる童ぬ　耳グスグス

（泣く子の耳をグスグス切るぞ）

んみんが　んみんが　守いしかさわ

（お姉さんがお守りしてあげましょう）

定役　書役　しみゆんど

（首里王城の定役人や事務役人に出世させましょう）

唐ん　大和ん　あっかさや

（唐や大和にも遊学させましょう）

下駄小ん　さば小ん　くますんど

（下駄やぞうりも買ってあげましょう）

へィヨーへィヨー　泣かんど泣かんど

（だから　泣かないで　泣かないで）

なかなか寝つかない赤ん坊に音を上げて、怖いお話を聞かせて何とか寝かしつけようとするもので、現在 50 代である山川さんの姪御さんも、幼い頃によく聞かされて怖かったそうだ。

それから彼女は次のようなエピソードも語ってくださった。同じ高校に大村家の末裔の男の子がいたのだが、自分も幼い頃は「耳切り坊主」の祟りを避けるために女の子の格好をしていたという。そのため、写真がほとんど残っていないのだそうだ。少なくとも今から 50 年ぐらいまでは「耳切り坊主」伝承の習俗が息づいていたのだ。

英国スコットランドにも、19 世紀頃まで上流階級の家では男子が生まれると、邪霊に連れ去られてしまう危険があると女装をさせる習俗があった。今も残る当時の富裕な家庭の子どもの肖像画はほとん

ど女子の容姿である。洋の東西を超えて、同じ発想が受け継がれてきたのだ。

ともあれ、子どもの心と身体を安らかにさせる「月ぬ美しゃ」、子どもの心をざわつかせる「耳切坊主」、二つの子守唄を上手に使い分けて歌い継いできた沖縄のアンマー（お母さん）たちの知恵に感服する。

平良京子さんの手遊び唄と早口言葉

平良さんに沖縄の手遊び唄や早口言葉をいくつも実演していただいた。ここにはその一部を、しかも歌詞（唱えことば）だけなのが残念だが、紹介しておこう。

＜手遊び唄＞

1と1で　いちゃりばちょーでー（出逢えば皆兄弟）
2と2で　にーぶいびにーぶい　（眠たい眠たい）
3と3で　さーらないさーらない(早く早く)
4と4で　よんなーよんなー　　（ゆっくりゆっくり）
5と5で　ゴーヤーシリシリ　（ゴーヤーチャンプル）
いやっさっさ　おどりましょ

2(にー)･4･4　2(にー)･4　　（「によー」(童名)よ　によー）
10(じゅー)･4(しー)･8(やー)　　（雑炊が）
2(にー)･10(とー)･9(く)･10(とう)　　（煮えているから）
9(くー)･4(よー)･8(や)　　（来なさいよ）
2･4･4･2･4　　（によーよー　によー）

いっちくたっちく　　（一つ二つ）
じゅうにが　ふいが　　（十二に　巻いた）
ちくむく　ちんぼらが　（不明　チンボラ貝が）
うどぅんぬ　くしんじ　（お屋敷の後ろの方で）
ふーるが　やい　　（糞をたれた）

――「ずいずいずっころばし」のような指遊びのうた。4～5 人のグループで輪になり、皆両手を軽くにぎり突き出す。誰か一人が親になり、歌に合わせて皆のこぶしの穴に人差し指をさし込んでいく。おしまいの「ふーるがやい」であたって人は手を引っ込め、さらに同じ要領で続けていき、最後に手の残った人が鬼になる（高江洲 2002：(13)より要約）。

＜早口言葉＞

なまむくるまー　むるグルぐるま
（今の車は　すべてゴム車だ。）

しちぐぁちぐんぼー　ぶんぐんぼー
（7 月の牛蒡(ぐんぼー)は　お盆の牛蒡だ。）

ちびぬあくびや　にじていにじららん
（おならは我慢しても我慢しても我慢できません。）
すばにうるしんか　鼻うすていたぼうり
（皆さんどうか鼻をつまんで許してください。）

長年、那覇市内で公共図書館司書を勤め、沖縄県子どもの本研究会顧問でもある平良さんは現在、沖縄キリスト教短期大学でゲストスピーカーとして、保育士を目指している学生たちに沖縄の子守唄やわらべうた遊びを教えている。とても熱心に受講してくれ、授業後の感想をたくさん書いてくれる。「うちなーぐち（沖縄言葉）」で歌ったり遊んだりするのが、学生たちは大好きだと実感できるという。



（平良京子さんと山川喜美子さん）

おわりに

2019 年の火災で焼失された首里城正殿は、今年秋に復元作業が完成するとのこと。その暁にはぜひ訪沖して、首里城公園でゆっくり過ごし、みどり保育園にもお邪魔したいと考えている。

今回の沖縄でのフィールドワークにあたって、沖縄の児童文学や児童文化研究の専門家・齋木喜美子さん、沖縄出身の子ども文化研究者・上林梓さんに事前情報を教えていただいた。また現地では、石川キヨ子さん、平良京子さん、山川喜美子さん、山川さんの姪御さんに大変お世話になった。全ての皆様に、紙面をお借りして謝意を表したい。

あぁ、結婚！

―婚活日記―

第 37 回

黒田長宏

＜2026年2月4日＞

日記のはずだったが、いや、日記だから、これは三カ月に一日分を書いた日記である。

三週間連続で片道3時間かけて、茨城県から東京都大田区のポップアップストアまで行ってきた。

一週目は経営コンサルタントの先生の意見を聞き、最終リハーサル。二週目はオープン。

昨日は、初めてのお客様入店。マーサの友人は参考事例。マーサも私も知らない人が入店。

その前に経営コンサルタントの先生に初回の意見を聞き、昨日のアドバイスも受けた。

詳しくはぜひ、短信に書いたホームページを観ていただきたいが、これで対人援助を目指します。

〔PBLの風と土　第36回〕

誰かに＜行くんですか？＞と言われたら

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授・立命館大学サービスラーニングセンター長）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でのPBL（Problem-Based Learning）の導入で知られており、現地から本連載を始めました。

連載2年目はアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにAAU以外での知見を紐解きました。連載3年目からはサービス・ラーニングとの比較を重ね、4年目はコロナ禍での立命館大学の科目への影響を、5年目からは米国での大学・地域連携の教育に関わる理論を解題し、8年目からは再び筆者の教育実践を紹介中です。

1. それぞれにとっての「あの日」

1.17、10.23、3.11、これらは単なる日付ではなく、阪神・淡路大震災、新潟県中越地震、東日本大震災の発災日である。同じように、9.11という数字は、アメリカ同時多発テロを想起させる特別な記号となった。本来、数字は無機質であるが、日付に集合的な記憶が刻まれた瞬間、魂を揺さぶる道具になる。例えば、9.11の追悼集会で朗読された詩「最後だとわかっていたなら」は、インターネットを通じて日本にも広く共有され、書籍化もなされた（マレック, 2007）。さらに、この詩は2017年、つまり6年目の3.11に、盛岡商工会議所など139社が連携して岩手日報の朝刊やテレビCMとYouTubeで紹介され、3月11日をすべての人が「大切な人を想う日」にしようと呼びかけられた[1]。このように、詩は追悼の場を越え、あの日の悲しみに思いを馳せる手がかりとして人々のあいだに響いていった。その結果、2021年2月17日には3月11日が「東日本大震災津波を語り継ぐ日」として岩手県の条例で制定されるに至った。災害は明日も同じ日常が続かないことを私たちに否応なく突きつけると同時に、わずかな時間で日常を突然奪われた人々にどう寄り添い、支えることができるのかを問いかけてくる。

筆者にとって1.17は、研究人生の原点でもある。本連載の第29回などで触れているとおり、筆者は阪神・淡路大震災の際、学生ボランティアとして現地に向かった。当時は土木工学を専攻していた筆者の周辺では、復興とは目に見える世界、とりわけインフラの復旧や再建にあると捉えられる傾向にあった。しかし、被災された方々との対話を重ねるなかで、地図に描ける世界だけでは復興は完結しないことに気づかされた。失われたのは道路や建物だけではなく、関係や時間や、未来の約束だったからである。その経験を言葉にできるようになるまでには時間が必要だった。転機となったのが、後に師となる渥美公秀の著作『ボランティアの知』である。「緊急救援活動は、ジャズのような即興である」（渥美, 2001, p.31）という比喩は、支援とは計画の遂行ではなく、関係のなかで立ち上がる応答であることを示していた。ここから筆者は、社会心理学、とりわけグループ・ダイナミックスへと専門を移すことになった。

災害支援はしばしば「災害支援サイクル」によって説明される。図1のとおり、救急・救命

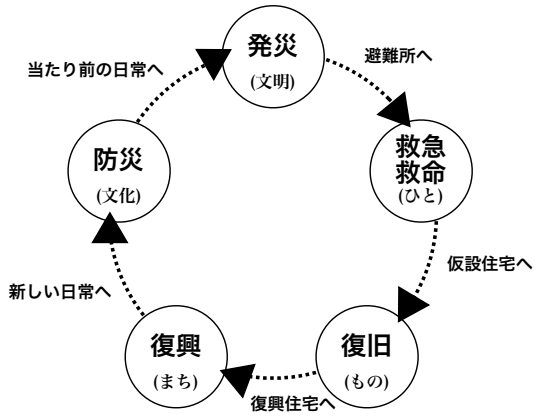


図1：災害支援サイクル（筆者作成）
（全国社会福祉協議会全国ボランティア活動振興センター, 2006をもとに、特に各ステップ間に場所を加筆・修正）

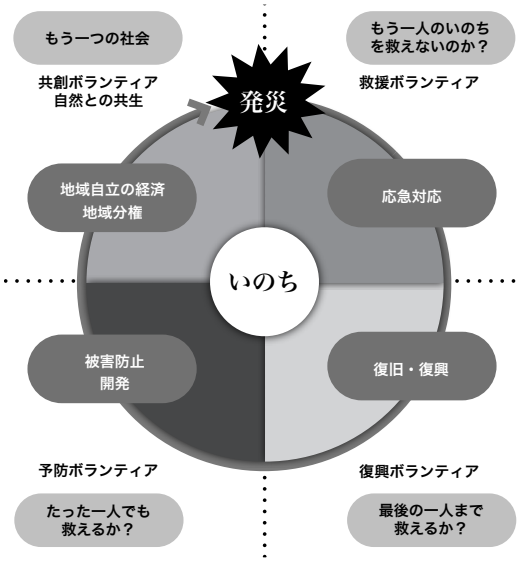


図2：減災サイクル（村井, 2011, p.160）

期、復旧期、復興期、防災期と段階的に整理する枠組みだが、現実には、その境界は明確ではない。被災された方々は、避難所、仮設住宅、復興住宅へと生活の場を移しながら、仕事や人間関係を再編していく。その時間の流れのなかで、支援のかたちもまた変わらざるを得ない。だからこそ、外部者に求められるのは効率的な一回性の支援よりも、細くとも長く関わり続ける姿勢ではなかろうか。少なくともワンショットの支援や学習プログラムでは、被災地を題材として消費してしまう危うさを常にはらんでいる。そのため、支援する／されるという固定的な関係を越え、時間を共有することができるかどうか、そこに小さな、しかし譲れないこだわりを抱き続けてきた。

そこで36回目となる今回は、前回の結語で予告したとおり、2024年に令和6年能登半島地震が発生した「その日」に現地に行くということの意味を考えてみたい。これまでも1.17に神戸市中央区の東遊園地に、10.23に小千谷市塩谷集落に、3.11に宮城県気仙沼市や福島県楢葉町に、そして本連載第32回でも紹介したとおり、2025年の1.1には七尾市田鶴浜地区に足を運んできたが、筆者のそうした振る舞いを知る人々の中から「また行くんですか？」と訊ねられることがある。そこには「危なくないのか」「迷惑にならないのか」「当事者でもないのに不謹慎ではないか」など、いくつもの含意がある。しかし、被災していなくとも、復興に向けて時間や空間を共有してきた者として、特別な日を現地で丁寧に過ごしたいという素朴な思いがある。むしろ、その日を共に過ごすことこそが、「細くとも長く」関わるという姿勢の具体化なのではないか。そう考えながら、2026年1月1日を迎えた。本稿では、七尾市田鶴浜地区における「1.1」の前後の動きを紹介してみたい。

2. 集いたい人と集わない人への尊重

2025年および2026年の1月1日、七尾市田鶴浜地区では、「たつるはま未来会議」の主催により「たつるはまのつどい」と称する追悼の集いが開催されている。たつるはま未来会議は、令和6年能登半島地震後の地域のあり方を住民自身が構想する場として、2024年11月6日に「田鶴浜で未来を考える会（仮）」として発足し、同月22日に現在の名称へ改称された団体である。ただし、たつるはま未来会議は地区内外の動きが複数絡み合う中で設立されたため、以下に設立に至る流れを整理しておく。

たつるはま未来会議の設立の背景には、石川県および七尾市が復興計画の策定を進めていたという事情がある。七尾市では市全域の復興計画の策定が進み、地区別計画の検討も視野に入っていた。そこで、田鶴浜地区では2022年3月に策定された5カ年の「田鶴浜地区地域づくり計画」の見直し時期を迎えていたこともあり、次期の地域づくり計画の検討を視野に入れ、田鶴浜地区地域づくり協議会により2024年10月12日に「田鶴浜復興会議（仮称）準備会」が開催された。この準備会および11月2日の第2回会合を経る過程で、アンケート結果の読み解きを行った11月1日の事前協議において、外部支援者も含めた「復興会議」と「未来を考える会」とを統合することが望ましいのではないかとの意見が出された。

筆者も外部支援者の一人として田鶴浜復興会議のメンバーへと呼びかけられ、両会議の一本化に賛成の立場を取った。こうした議論を経て、11月6日の考える会に続き、11月22日に通算第2回の両会議を「第2回たつるはま未来会議」として開催するに至った。すなわち同会議は、「復興に正解はない」という前提のもと、震災復興と地域振興を住民自らが模索する場として整えられてきた。

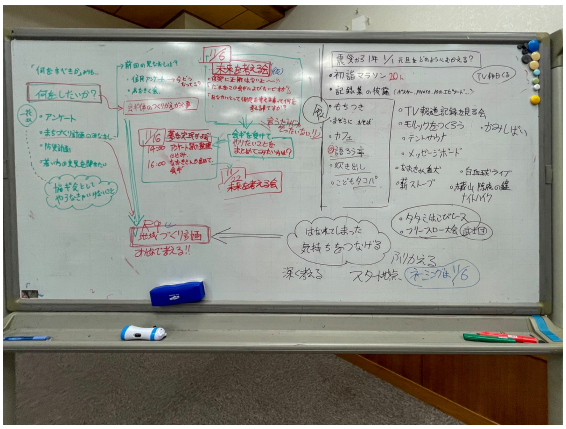


写真1：元旦の迎え方は（**2024年11月2日、筆者撮影**）

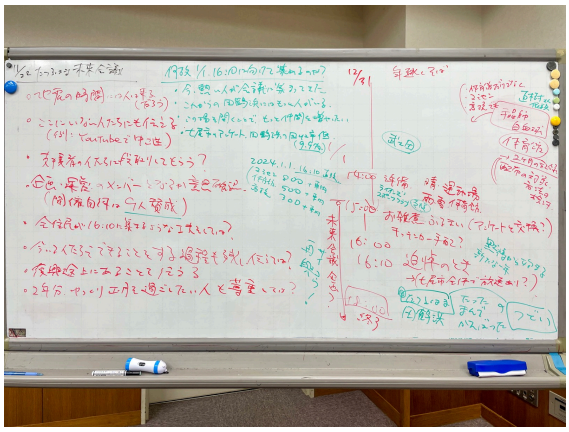


写真2：正月を尊重（**2024年11月22日、筆者撮影**）



写真3：会議の様子（**2024年11月22日、筆者撮影**）

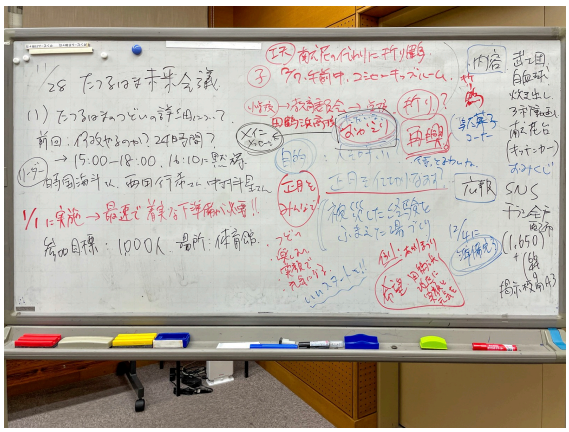


写真4：折り鶴で祈りを（**2024年11月28日、筆者撮影**）

このように、たつるはま未来会議は「復興会議」と「考える会」との合流のなかで設立されたが、その最初の具体的な営みは、1.1を迎える追悼行事「たつるはまのつどい」の企画であった。ここには「考える会」では議論に留まらず、それぞれが思い描く未来を実現することに取り組む「夢を実現する会」が2024年11月16日に開催されたことが背景にある。加えて、「考える会」と「夢を実現する会」の前、11月2日の「復興会議」では、令和6年能登半島地震以前の田鶴浜ではどのように1月1日を迎えていたかについて議論が及んでいた。そこでは、田鶴浜ではかつて「初詣マラソン」が行われていたことが確認され、その流れのもとで発災1年を迎える「その日」はどう迎えるのがいいか、逆にどのような迎え方は避けたいかが語り合われた。

「たつるはまのつどい」の骨格が定まったのが2024年11月22日の第2回会議であった。そこでは、「今、熱い人が会議に集まってきた」「これからの田鶴浜にはもっと人がいるはずだ」「こういう場を開くことで、もっと仲間を増やしたい」といった声が交わされた。さらに、「七尾市のアンケートは田鶴浜地区の回収率が低い（9.9％）」という事実も共有された。こうした議論を受け、会場に集えない人にもYouTubeライブで配信すること、全戸配布で参加を呼びかけること、一方で2年分ゆっくり正月を過ごしたい人の意思も尊重すること、これらを体現する場を設けることにした。

そして、11月28日のたつるはま未来会議では、被災した経験を踏まえた場づくりを通じて田鶴浜地区に笑顔と元気をもたらせるよう、16:10に黙祷を捧げること、正月を仕切り直してみんなで過ごすこと、駄菓子コーナーやキッチンカーやおみくじなど、こどもたちや家族が楽しめるようにすること、雨天でも内容の変更を必要としない田鶴浜体育館内で開催することが定まった。その際、11月22日の段階では前夜に年越し蕎麦を、当日はお雑煮を振る舞う、というアイデアも出ていたものの、前夜からの企画は運営側にも負担が大きく、お雑煮には喉に詰まらせることが危惧された[2]。そこで、つきたてのお餅を餡子ときな粉で振る舞うことにな



図3：「たつるはまのつどい」チラシ（表・裏）



図4：「第2回たつるはまのつどい」チラシ（表・裏）

り、田鶴浜ライオンズクラブの奉仕で提供されることになった。そして、2025年の最大の工夫は、多くの住民が祈りを捧げることができるよう、生花による献花や、体育館ゆえに裸火の使用が難しいために蝋燭での献灯ではなく、地名の田鶴浜になぞらえて折り鶴を張り巡らせた「折り鶴タワー」を会場に設置することにした。その準備のため、田鶴浜地区コミュニティセンターのキッズルームに集うこどもたちに、また教育委員会を通じて田鶴浜小学校の児童たちに趣旨を説明し、協力を得ることとなった。

3. 建具の街・田鶴浜として復興推進へ

2回目の1.1となる2026年の「たつるはまのつどい」では、前年に設置した「折り鶴タワー」に代わって、590個の井桁状のパーツで能登半島をかたどった組子細工を作り上げるという企画が軸に据えられた。また、昨年度は追悼式典での黙祷を終えた後には多くの方が帰宅されたことから、交流企画などは追悼式典の前に配置することとし、開会を1時間早めて14時に設定した。前年度に引き続き、田鶴浜ライオンズクラブの奉仕により、400食分の餅つきが振る舞われた。

たつるはま未来会議の組子細工への着目は、第2回たつるはまのつどいに限らない。2025年3月に田鶴浜地域づくり協議会の呼びかけで開催された「七尾市戦略的復興プラン」の読み解き会（3月13日）と「復興アイデア」知恵絞り会（3月25日）に、たつるはま未来会議のメンバーが複数参加したことで、田鶴浜の地域資源である建具に焦点を当てることの意義が再確認された。3月25日には短い時間の中でも「シン・建具ものがたり」と題するアイデアをまとめ、その内容をもとに、クラウドファンディングサービス「READYFOR」にて、2025年6月30日から9月28日まで、「建具のチカラで町づくり！歴史と文化を継いで」が展開された。このクラウドファンディングでは、建具の街・田鶴浜のシンボルロードづくりの契機とするため、のと鉄道の田鶴浜駅ホームにかかる跨線橋を組子細工で装飾する費用を募ることとした。その結果、8月9日に当初目標額100万円を達成し、明治25年に宮大工が建てた古民家を、ゆるやかに集える交流サロンへと再生することを目指すセカンドゴールを設定した。最終的には合計で97人から2,364,000円の支援を得た。

このクラウドファンディングにより、たつるはま未来会議と田鶴浜の建具職人の方との関係が深まり、第2回たつるはまのつどいにて、参加者と共に組子細工で能登半島を浮かび上がらせようという企画が形になった。当日は約500人の参加により、参加者がそれぞれ能登の復興への思いを込めて組み上げた組子細工が追悼式典の開始までに仕上げられた。この組子細工と共に集合写真も撮影され、復興への願いを共有することになった。

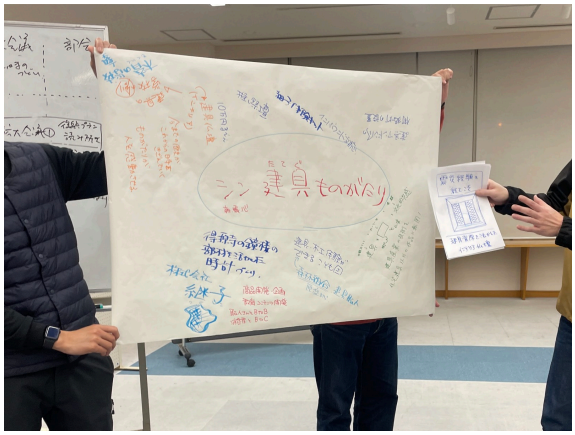


写真5：シン・建具ものがたり（**2025年3月25日、筆者撮影**）


写真6：組子細工制作
（2026年1月1日、筆者撮影）


写真7：組子と集合写真
（2026年1月1日、筆者撮影）


写真8：小学生の夢と未来
（2026年1月1日、筆者撮影）


写真9：跨線橋の装飾
（2025年12月24日、筆者撮影）

なお、第1回のたつるはまのつどいでは、事前に折り鶴を折ることで地域のこどもたちの積極的な参加を得ていたものの、第2回では組子細工を会場で制作することになったため、別の形で小学生の参加を促すことにした。結果として、追悼式典の前に田鶴浜小学校の協力を得て「子供たちの夢や未来を聞こう」というトークセッションを設け、話題提供を行った5人の小学生が黙祷を前に代表献花を行うこととした。また、前述のクラウドファンディングで掲げた駅舎装飾が12月24日に実施された。当日は地元の田鶴浜高等学校に加え、立命館守山高等学校の生徒も参加し、田鶴浜の地域資源への関心を喚起する機会となった。

4. 行く場所からすごす場所へ

今回は、「また行く」先である七尾市田鶴浜地区における1.1の営みを、2025年・2026年に開催された「たつるはまのつどい」の開催に至る背景と当日の様子を通して紹介した。特に第2回の開催では、田鶴浜の地域資源である建具に着目した企画が多面的に展開されたことで、災害支援サイクルで言えば、徐々に復興期へと移行していることも感じ取っていただけたのではなかろうか。また、本稿を通して筆者の現場との向き合い方の一端が伝わるならば幸いである。

筆者が田鶴浜に通い続けるようになったのは、大学時代からの友人が令和6年能登半島地震の発災時に七尾市能登島地区に居住していたことがきっかけである。JR七尾線が七尾駅まで運転再開となって間もない2024年1月27日から29日にかけて彼を訪ね、「春休みに入る大学生たちが支援に入ることができそうな場所を見立ててほしい」と相談した。

複数の場所を回るなかで、1月28日15時過ぎに避難所となっていた田鶴浜体育館を訪れ、世話人の一人で後にたつるはま未来会議代表となる山本直樹氏を紹介された。懇談ののち支援受け入れの合意に至り、2月2日から学生が駅伝のように交代しながら支援をつなぐ「能登ボランティア駅伝プロジェクト」を開始した。

「能登ボランティア駅伝プロジェクト」では計29日間にわたり、学生34名が延べ141人日、教員5名が延べ38人日の活動を行った。そのうちの一人が、2025年12月24日の田鶴浜駅装飾にサポーターとして参加した。今回、その経験について実名での紹介を許可いただいた手記が寄せられたので、以下に掲載する。

2025年12月田鶴浜地域において、田鶴浜高等高校と立命館守山高等学校の交流プログラムに、私は学生サポーターとして参加した。その中で、両校の高校生たちが徐々に関係を広げていく様子を間近で見ることができた。

当初、高校生たちはぎこちない様子で、言葉も少なかった。しかし被災地の現状や活動の意味を知った後、各活動の場面では積極的なやりとりが見られるようになった。学校や地域、自分自身の事などについて教え合い、最後には名前を呼び合う仲にまで発展した生徒もいた。そこでは被災経験の有無に固定された関係性はなく、ささやかな会話の中で関係を育む様子があった。

後日、キャンパスプラザ京都で行われた、防災活動を共有し交流する場にも参加した。学生や企業、地域の方々が集まり、私は能登での活動を自分の言葉で共有する機会をいただいた。ここでは「自らの声」で語ることの重要性を実感した。体系的な知識の共有だけでなく、各自の目線や実感を持ち寄って語り合う時間は、自分にはない考えや視点に触れる機会となった。また、自分自身の経験を実際に言葉にする過程は、体験を一度きりで終わらせず、次に生かすために磨き直す作業であるとも感じた。

この経験から、「ボランティアは行って終わりじゃない」とも感じた。伝えること、支えること、つなげること、そして関係が続いていくことなど、参加後にもできる関わり方がある。共有の相手は、まずは身近な家族でもよい。その輪は、同じ大学の学生、別のコミュニティ、地域の人へと広げていくことができる。見聞きし語り合うことは、地道だが人の手でしかできない支援の形だと感じる。

今回の経験から、防災やボランティアの現場には、関係性に囚われない軽やかさと、その継続によって生まれる重厚さの双方を感じた。今後も今回のような経験を活かし、現場に足を運び、見て得た感覚を言葉にして磨き続けながら、思考の基礎体力を鍛えていきたい。

（栗 和奏・立命館大学産業学部4回生）

この手記に記された言葉は、筆者自身がこれまで関心を寄せてきた災害復興論とも響き合うものであった。想起されたのは、宮本（2015, 2024）が提示する「めざす」関わりと「すごす」関わりの区別である。宮本（2024）は、保育実践の分析を手がかりに、災害復興支援を再考し、「互いの存在を無根拠に肯定しあうことで、自分を無力な存在としてうけとめる」関係性の意義を指摘している（p.67）。そして2026年度、筆者は再び立命館大学の学外研究制度を利用し、京都大学防災研究所の私学研修員として1年間田鶴浜に身を置き、滞在型のフィールドワークを行うことを決めた。前回の学外研究を機に始まった本連載も、新たな展開を迎えることとなる。阪神・淡路大震災以来、多くのまちに関わってきた筆者であるが、改めて能登の現在に触れながら、前掲の手記に記された「軽やかさ」と「重厚さ」に向き合いたい。これからは「行く」場所としてではなく、「すごす」場所として田鶴浜に身を置き、現場で見て、感じ、言葉にしたことを重ねていく。その蓄積のなかから、復興と支援の現在形を問い直していきたい。

(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)

【引用文献】

渥美公秀. 2001. ボランティアの知：実践としてのボランティア研究. 大阪大学出版会
マレック・ノーマ・コーネット、佐川睦(訳). 最後だとわかっていたなら. サンクチュアリ出版
全国社会福祉協議会全国ボランティア活動振興センター（編）. 2006. 被災者中心の災害ボランティアセンターとするために：災害ボランティアセンターコーディネーター研修プログラム開発委員会報告書. 全国社会福祉協議会全国ボランティア活動振興センター
宮本匠. 2015. 災害復興における“めざす”かかわりと“すごす”かかわり：東日本大震災の復興曲線インタビューから. 質的心理学研究(14) 6-18.
宮本匠. 2024. 「みんな」って誰？：災間と過疎をのびのび生きる. 世界思想社,
村井雅清. 2011. 災害ボランティアの心構え. ソフトバンク.

【注】

[1] すべての人が「大切な人を想う日に」と呼びかけられたこのキャンペーンについて、本稿執筆時点（2026年2月28日）で、2017年から2025年までのアーカイブが特設サイト https://www.iwate-np.co.jp/content/taisetunahito-omouhi/ で閲覧可能である。2017年には、マレックの詩に「明日が来るのは、当たり前ではない。」と添えられた。2018年には詩の紹介と条例制定への署名を呼びかけるが始まると共に、各年ごとにテーマを据えて「大切な人を想う」よう訴えている。2018年には大槌町の「風の電話」での取材内容を、2019年には復元納棺師の笹原留以子さんによるイラストと文章を、2020年には震災で亡くなった方々の「日常の言葉。でも、最後の言葉。」を、2021年には「復興10年の曲」プロジェクトを、2022年には「2011年3月11日の岩手日報テレビ欄」の紹介と岩手県警のホームページでの47名の「身元不明のご遺体情報」へのアクセスを、2023年には岩手県内でいまだ23万5000点以上の東日本大震災拾得物があることを、そして2024年には陸前高田市の漂流ポストを紹介し「ごめんね」を言うに日にも、と呼びかけられた。ちなみに、マレックによる詩の最後の連には「『ごめんね』や『許してね』や／『ありがとう』や『気にしないで』を／伝える時を持とう」という部分がある。これらを受け、2025年には7年間10タイプにわたる広告を教材化され「最後だとわかっていたなら　教育プログラム」の提供と、言えなかった「ごめんね」を書き込めるサイト「ごめんねポスト」が開設された。

[2] 11月22日の時点でのプログラム案は、18:30 オープニング／19:00 フリースロー大会・畳運びレース／20:00 赤提灯語ろう亭オープン／21:00 赤蔵山ナイトハイク出発／22:00 年越し蕎麦／23:00 余興（紙芝居、手品師白血球）／0:00 年越しカウントダウン・（テントサウナ？）／1:00 TV報道を見る会／6:00 餅つき／7:00 お雑煮振る舞い・初日の出／8:00 フリースロー大会（金沢武士団）・初詣マラソン／11:00 餅つき／13:00 モルック／15:00 フリースロー大会／16:10 黙祷／18:30 クロージング・「ありがとう」の記録配布、そして通し企画でカフェ、たこ焼きパーティーとされていた。



治療的ダブルバインド

ＪＲ茨木駅近くの接骨院が、私の仕事場です。

「縮みすぎなのか、伸びすぎなのか、自分ではわからないことがあるのですが、どう見極めしたらいいですか？」

患者さんからこんな質問を受けることがあります。

「実は私も、縮みすぎか伸びすぎか、どっちかわからないときがあります」
「先生でもわからないときがあるのですか？」
「はい。わかっているような顔をしているかもしれませんが、内心どっちなんだろうと迷っていることがあります。はっきりわかるときは楽なんですけどね」
「そうなんですね」
「どうしてもわかりたいですか？」
「いえ、そんなことはありません」
「わかっていて施術をするほうがいいですが、判断を間違うこともあります。わかってからでないと施術ができないというわけでもありません」
「そう言われればそうですね」
「こうかなあと思う方でやってみて、うまくいけばそれでいいですし、うまくいかなければ判断を変えればいいのです」

「あー、それでいいんですね」
「はじめは縮みすぎかなと考えて施術してみたけれど良くならない。そこで今度は伸びすぎかなと考えて、施術を組み立て直すと痛みがとれた。・・・ということは伸びすぎだったんだーみたいに」
「なるほどー」
「縮みすぎているけれども伸びすぎてもいるというような、どっちつかずの状態もあります。どうしてもわからないときは、そんな状態なのかもしれません」
「わかりました」

縮みすぎなのか伸びすぎなのか、それともそれ以外なのか、判断がつかないまま施術を始めることがあります。

ひとまずどちらかなのではないかと仮定して施術する場合、その仮定が合っていれば、痛みなどの症状が消えるか軽くなるかします。
症状の改善が、仮定が正しいことの証明になります。

症状が改善しなければ、仮定が間違っているか、施術が不十分であるかのどちらかです。
あまり改善しないようなら、しつこく施術し続けるより、まずは見落としているものがないか探してみるとか、あるいは仮定を変えて、施術してみるとかすると良いでしょう。

心理療法に治療的ダブルバインドという考え方があります。
症状が出ているクライエントに、症状を減らしましょうという意図の指示を出すと、うまくいかないことがあります。
逆に、症状を出しましょうという意図の指示をセラピストが出したとします。
もちろん、症状によって具体的な指示の言葉はかわってきます。
どういう指示を出すかは慎重に考えないといけませんが、どういう反応が返ってくるかは、指示を出す前にはわかりません。

もし、症状を出しましょうという指示にクライエントが従った場合は、セラピストまたはクライエントが症状をコントロールできることになります。
反対にクライエントが抵抗すると、症状が改善します。
どちらに転んでも、治療が進むという考え方です。
それまでの治療がうまくいってなかったとしたら、つまり、クライエントが治療に抵抗していたのなら、クライエントが抵抗する可能性のほうが高いのではないでしょうか。

「こうかなあと思う方でやってみて、うまくいけばそれでいいし、うまくいかなければ判断を変えればいい」
という考え方も、治療的ダブルバインドになっています。

まず施術してみて、症状が軽くなればセラピストが望んだとおりになるわけですし、症状が重くなれば、症状を変化させることができると考えればいいのです。
もちろん、いきなり強力に施術するべきではありません。
また、あることが悪化させるとわかっても、その反対が必ずしも改善させることだとは限りません。
少しずつ働きかけてみて、これが改善させることだとわかれば、その働きかけをしっかりとおこないます。

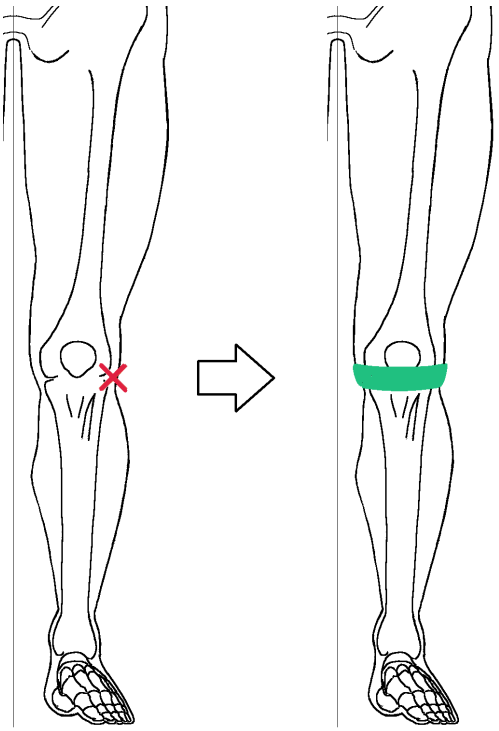
施術に必要なことは、症状をコントロールできることです。
症状に変化を起こせるものが何かを把握して、症状をコントロールしながら、患者さんを少しずつでも快方へ導くのが施術者の役割です。

パラドキシカルストレッチング＆
パラドキシカルコントラクティング
（７）

以前紹介したコンプレッシングエフィシエは、縮みすぎ伸びすぎがかなり正確に判定できる方法です。
それでも、１００％正確に判定できるわけではありません。
判断を途中で変更したケースを取り上げてみます。

ケース１６
（加圧して痛みが減ったため縮みすぎかと思われたが、最終的には伸びすぎだったとわかったケース）

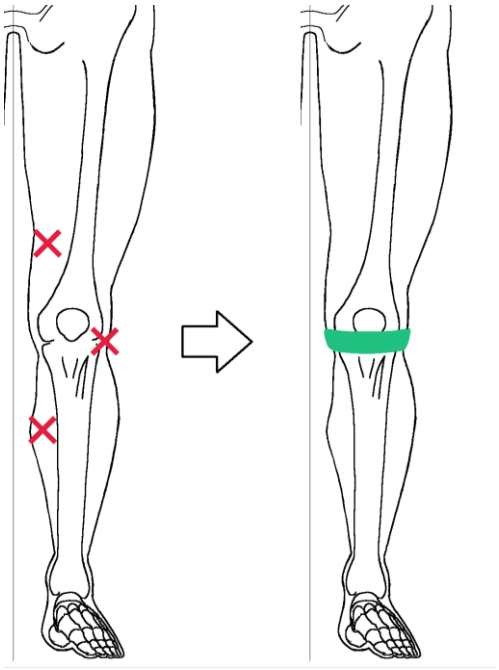
膝関節の外側に痛みがある患者さんが来られました。
関節部分の痛みなので、関節が縮みすぎている（圧縮されている）のか、あるいは靭帯などが伸びすぎているのかを調べようと考えました。
これを調べるには、コンプレッシングエフィシエがしばしば役に立ちます。
膝関節にベルト（緑色の部分）を巻いて加圧すると、膝の外側の痛みが軽くなりました。
ベルトで圧迫すると、圧迫された部分は伸びるので、膝の外側は、局部的に縮みすぎているのではないかと考えました。
ベルトで加圧しながら膝の外側を、痛みの少ない方向にさすってみました。



しかし、しばらくさすっても、ベルトを外すと、痛みは元に戻ってしまいました。
それで、膝の外側が縮みすぎているという判断が間違っているのかもしれないと考えました。

膝の内側が縮みすぎていることが原因で、外側が伸びすぎて痛みが出ている場合、膝にベルトを巻いて圧迫すると、内側も外側も痛みが少なくなる場合があります。
そういう状態かもしれないと考えて、膝の内側を触ってみました。

しかし、膝の内側に、固くなっているところも触って痛いところも見つかりませんでした。



そこで、触診する範囲を上下に広げてみました。
すると今度は、太ももの内側やふくらはぎの内側に固くなっていて、触ると痛いところが見つかりました。
もう一度、膝にベルトを巻くと、太ももやふくらはぎの内側の痛みが軽くなりました。
痛くない状態でしばらく太ももとふくらはぎの内側をほぐすと痛みがとれました。
さらに膝のベルトをはずしても、膝の外側の痛みが元に戻ることはありませんでした。

このケースでは、ベルトで加圧して一見膝の外側を伸ばすような操作をしました。
ところがこの操作は、実質的には、膝の外側を伸ばす操作ではなく、膝関節の内側のすき間を広げて、そこを通る太ももの内側やふくらはぎの内側の筋肉を伸ばす操作になっていたのです。
効果があったのは、膝の外側に対するコンプレッシングエフィシエではなく、太ももの内側やふくらはぎの内側の筋肉に対するコンプレッシングエフィシエだったのです。
内側の筋肉が伸びることで膝関節の内側のすき間が広がり、結果的に膝の外側を縮めることになりました。
このケースでは、一見伸ばすかのようなことをしながら実は縮めるというパラドキシカルコントラクティングをしたことになります。

伸びすぎているところを加圧すると、もっと伸びて痛みが増すのではないかと思われるかもしれません。

しかし、不思議なもので、痛みの原因が縮みすぎていることにある場合には、たとえ伸びすぎたところが一緒に伸びたとしても、縮みすぎているところを伸ばした方が、痛みが減ることが多いのです。

ポジショニングやコンプレッシングで患部を伸ばしたときに痛みが軽くなるなら、たいていはその部分が縮みすぎています。
縮みすぎているところは、伸ばしながらほぐすと、痛みが軽くなります。

伸ばすのをやめると痛みが元に戻ってしまう場合は、実は患部以外の縮みすぎたところが伸びて痛みが軽くなっていたということが多いのです。
痛みが元に戻ってしまう場合は、患部以外の縮みすぎたところをさがして、そこをほぐして伸ばしてあげると痛みなどが軽くなります。

コンプレッシングエフィシエの補足

縮みすぎて痛いところは、伸ばしながらほぐすと、早くほぐれて痛みが軽くなります。
コンプレッシングエフィシエをする際、ベルトで圧迫して縮みすぎた箇所が伸びるのは、以下の３つの場合です。

① 縮みすぎて痛い箇所そのものにベルトを巻く場合。ほとんどの場合、これで縮みすぎた箇所をしっかり伸ばせます。

② 縮みすぎて固くなっている筋肉が動かしている関節をベルトで圧迫する場合。関節を圧迫したほうが、縮みすぎている筋肉を伸ばせることがあります。

③ 縮みすぎて固くなった筋肉が、骨格から浮き上がった部分をベルトで圧迫する場合。限られた筋肉ですが、このような伸ばし方もあります。

骨格から浮き上がった部分がある筋肉は、L 字型やコの字型になっている骨同士を連結しています。

L 字型の部分にある筋肉は、僧帽筋上部線維、大胸筋、広背筋、手の水かきの（拇指内転筋・第一背側骨間筋）、太ももの内側の筋肉、大腿二頭筋、脚のすね（前面）の筋肉などです。

コの字型の部分にある筋肉は、広頚筋、腹直筋、内腹斜筋、外腹斜筋、腰方形筋などです。

ただし、僧帽筋上部線維と広頚筋のコンプレッシングエフィシエは頸動脈を圧迫する部分では使用できません。

これらの浮き上がった部分を通る筋肉は、筋膜などで浮き上がらないように抑え込まれています。

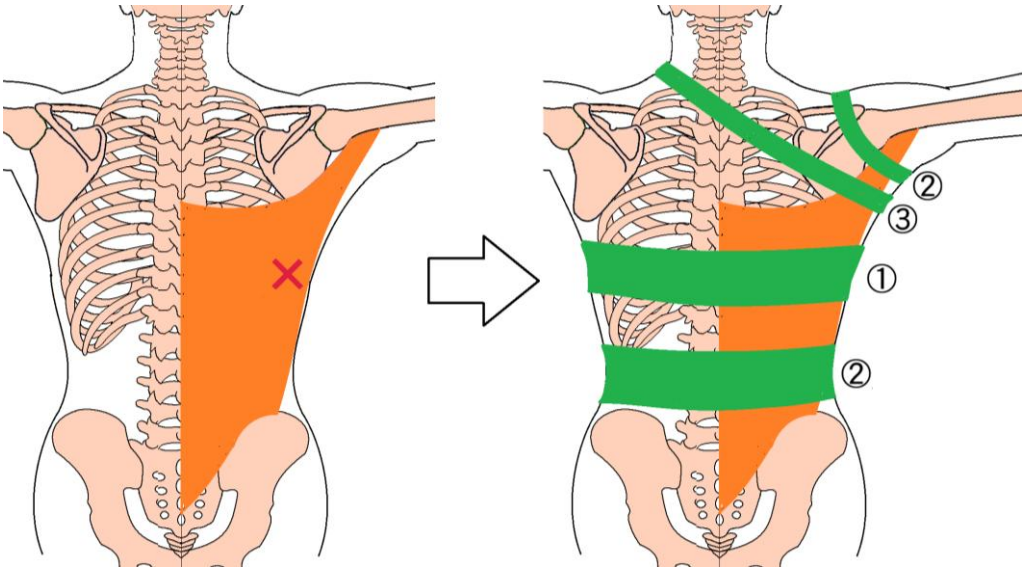
抑え込んでいる筋膜などが伸びすぎて、筋線維が浮き上がってしまうと、筋肉が縮みすぎてしまいます。

骨格から浮き上がった部分をベルトやテープで圧迫すると、伸びすぎた筋膜などを縮めることができ、一方、縮みすぎた筋線維を伸ばすことができます。

たとえば足首付近などでは、支帯というバンドがあり、すねの筋肉の腱が浮き上がらないように抑え込んでいます。
足首の支帯が伸びすぎてしまうと、すねの筋肉が縮みすぎ、時には痙攣してしまって激痛に見舞われることもあります。
すねの痛みがなかなか治まらないときに、足首にベルトやテープを巻くと落ち着く場合もあります。

例えば、次の図のように、広背筋（オレンジの部分）の赤い✕印のところに痛みがある場合に、コンプレッシングエフィシエを試すとすれば、次の箇所が考えられます。
① 縮みすぎているところ
② 肩関節あるいは腰椎の椎間関節（椎骨の間の関節）

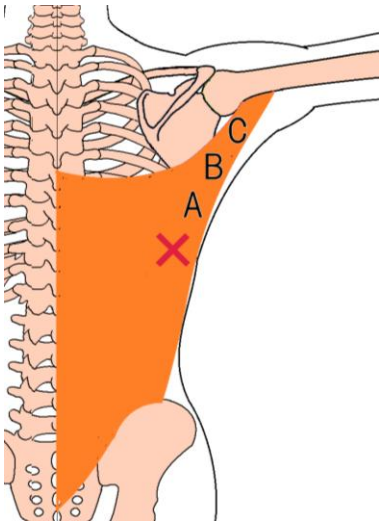
③ 脇の筋肉が浮き上がっている部分



ケース１７
（ベルトで圧迫して痛みが軽くなったところとは違うところに縮みすぎたところがあったケース）

先ほどの図の赤い✕のところに痛みのある患者さんがいました。
まず、痛い部分に先ほどの図の①のようにベルトを巻いてみたところ、痛みが減らず、むしろ痛みが増しました。
つまり赤い✕印の部分は、縮みすぎではなく、伸びすぎている可能性が考えられました。

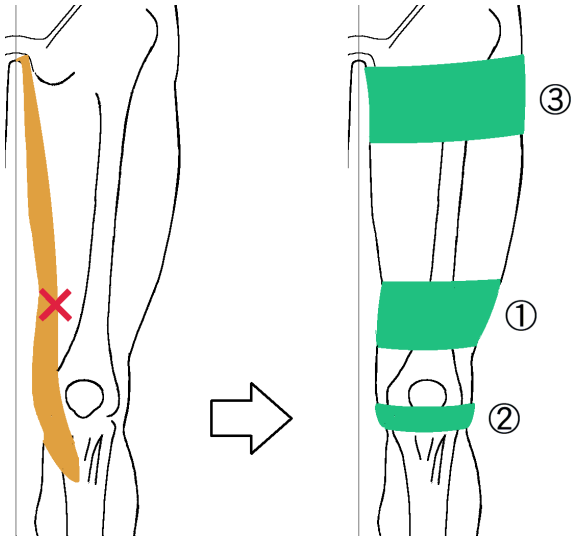
この広背筋以外には問題点が見つからなかったので、広背筋の赤い✕印以外の場所にベルトを巻いてみることにしました。



②の腰や肩関節にベルトを巻いても痛みは改善しませんでしたが、③の骨格から浮いている箇所にベルトを巻いて広背筋を圧迫すると、赤い✕印の痛みが軽減しました。
いったんベルトを外して、さわって痛いところをさがすと、A、B、Cの３箇所が見つかりました。

もう一度、③のベルトを巻くと、B の痛みが少なくなったので、B をほぐしてみました。しかし、ベルトをはずすと痛みは元のまま、あまりかわっていませんでした。
もう一度③のベルトを巻くと、A の痛みも軽くなったので、ベルトを巻いたまま A をほぐしました。すると、A だけでなく、B も C も赤い✕印のところも痛みが消えていました。
つまり、A が縮みすぎたことで、B、C、赤い✕印が引っ張られて伸びすぎ、痛みを発していたのです。

太ももの内側の筋肉が縮みすぎている場合に考えられるコンプレッシングエフィシエは、①縮みすぎているところ、②膝関節、③脚の付け根の筋肉が浮き上がっている部分などを加圧してほぐすことが考えられます。



ケース１８
原因が複合して痛みが出ているケース

膝に痛みがある患者さんが来られました。
まず膝に、上の②のように関節を圧迫するベルトを巻きました。痛みが減ったので、そのままコンプレッシングエフィシエをしました。しかし、ベルトを外すと、痛みは元に戻ってしまいました。
次に①のように太ももの痛いところにベルトを巻きました。痛みが減ったので、そのままコンプレッシングエフィシエをしました。しかし、ベルトを外すと、痛みは元に戻ってしまいました。
さらに③の脚の付け根の、筋肉が浮き上がった部分にベルトを巻きました。痛みが減ったので、そのままコンプレッ

シングエフィシエをしました。するとこの施術によって、膝の痛みがかなり改善しました。
それでもまだ痛みが残っていたので、骨盤を動かしてみました。すると骨盤を前下方にひっぱると、さらに膝の痛みが改善することがわかりました。
そこで骨盤を後ろに引き上げている筋肉に縮みすぎているものがないか探すと、肩周りの胸や腕、肩、首の筋肉が縮みすぎていることがわかりました。
これらの筋肉にポジショニングエフィシエをして、伸ばしながらほぐしました。そうすると骨盤の位置が修正され、膝の痛みが改善しました。
２、３日後には痛みがもどってしまいましたが、この患者さんの場合、まず、肩周りの縮みすぎた筋肉にポジショニングエフィシエをし、続いて脚の付け根の筋肉が浮き上がったところにコンプレッシングエフィシエをすれば、膝の痛みが改善することがわかりました。
この二つの施術は、どちらか片方のみおこなっただけでは、膝の痛みがとりきれないということがわかりました。
この患者さんの脚の痛みの原因は、肩周りの筋肉の縮みすぎと、脚の付け根の筋肉の縮みすぎが複合したものだったのです。
肩周りの筋肉が縮みすぎると、胸郭が上方に引き上げられ、それに連動して骨盤が引き上げられ、大腿部は外に開きます。すると膝は内側に曲がってきて、脚の内側の筋肉が縮みすぎになり、脚の付け根の筋膜が伸びすぎてしまいます。

ベルトで圧迫して痛みが少なくなった場合、圧迫したところ自体が縮みすぎていて、そこをほぐすと楽になることが多いのですが、１００％ではありません。

先ほどのケース１６は、痛いところに加圧しながら、圧迫したところの上下をほぐすと楽になりました。
ケース１７は、痛いところとは別のところに加圧しながら、圧迫したところの下をほぐすと、痛いところが楽になりました。

ケース１８は、痛いところとは別のところに加圧しながら、圧迫しているところをほぐすと、痛いところが楽になりました。

圧迫して、別の縮みすぎたところが伸ばされることによって、痛みが少なくなる・・・そういうことが、ときどきあるのです。
ベルトで圧迫した状態でもんだりさすったりしても痛みがとれない場合は、痛い場所の付近や反対側に縮みすぎている箇所がないかさがしてみましょう。

ではまた

現代社会を『関係性』という観点から考える㊱

家族のなかの「秘密」と「嘘」 続・映画「どうすればよかったか」から考える

更生保護官署職員　三浦恵子（社会福祉士・精神保健福祉士）

今回は『第 60 号:連載 32:家族における「ケア」の在り方 映画「どうすればよかったか」から考える』に続くものです。なお、本稿は、映画「どうすればよかったか」の内容・構成などを言及するものでも、映画評論でもないことについて、冒頭でお断りしておきます。

「現代社会を『関係性』という観点から考える」というテーマでの連載ですので、本稿でもそれを意識しています。これまでの連載については末尾に記載しています

記載している事項は筆者の私見であることを申し添えます。

1 ドキュメンタリー映画「どうすればよかったか」

知識や技術を持つ専門家であっても、自分の家族が疾病・障害を抱えたとき、適切にケアをする、あるいは、適切なケアを求めて専門機関にケアを求めることができるとは限りません。

そのことを実感した映画が、令和 6 年 12 月 7 日に公開されたドキュメンタリー映画「どうすればよかったか」（藤野知明監督）です。私は封切翌日にミニシアターの席を予約して鑑賞しましたが、席は満席であり、来場された方のなかには精神保健分野で働く専門職や家族と思われる方も多くおられたようでした。

映画を製作された藤野監督の実姉は優秀な医学生でしたが、四度目の受験で入学した大学時代に統合失調症と思われる症状を発症してしまいます。藤野監督の実父母は基礎医学の研究者でしたが、監督の実姉を精神科医療や精神保健福祉サービスにつなげることを拒み、約四半世紀にわたり実姉を自宅に閉じ込めることとなります。

当事者に「適切な医療を受けさせない」「外に出られないように鍵をかける」という言葉からまず想像されるのは、私宅監置の時代に設置された「座敷牢」でしょうか。映画を鑑賞された方のなかには、一般家庭において「座敷牢」を実際に確認した経験があるという研究者の方もおられました。

しかしながら、映画のなかでの実姉は、自宅内では比較的自由に行動することができていました。実父は停年退職した後は、資金を投じて様々な設備が整備した研究所を自宅に設置し、実姉はそこで「研究」を続けるという「形」をとることになっています。実姉は、大学医学部こそ卒業できましたが、医師免許を取得することはできず、就職もできなかったため、実父はこの「形」をとることで、実姉の統合失調症の発症を家族以外に「秘密」にすることにしていたのです。

実姉にとって、衣食住も社会につながるはずの仕事も、全てが家族や家庭のなか、閉ざされた関係のなかで完結しています。戦前に医学校を卒業し父と基礎医学の研究を長年行っていた母もまた、自身が老いて病いを得ても受診することなく家からは殆ど出ることはなかったのです。

実姉の最初の発症とみられる時、まだ高校生だった藤野監督は、優秀だった実姉の変

化、実姉に対する実父母（監督と母が救急車を要請し受診させるものの、実父の指示ですぐに帰宅することになったこと等）の対応に戸惑います。実父から「問題ない」と説明を受けますが、それでも何かを隠しているという懸念を拭えません。大学職業は首都圏で就職をしたため実父母方を離れるものの、その後、実父母の同意を経て、帰省等のたびに両親や姉にカメラを向けていきます。

映画の冒頭でも触れられていますが、これは統合失調症の治療の在り方を世に問う作品ではなく、家族メンバーが病い、それも偏見がないとはいえない統合失調症であったとき、本当に「どうすればよかった」という問いかけもあると思いました。

2 映画「どうすればよかったか」と、書籍を読み向き合う

映画「どうすればよかったか」については、視聴後も同僚や援助専門職の仲間の間で話題に上る機会も多く、考えさせられることが多くありました。

「高学歴の両親による教育虐待ではないか」

「精神疾患（障害）に対するスティグマが根底にあるのではないか」

「閉じ込めることによる人権侵害が生じている」

など、それぞれの職歴や立ち位置によってこの映画の受け止めも異なっており、それゆえにこの映画を多くの角度から考える機会がありました。こうした反響の大きさは、ドキュメンタリー映画、ミニシアター系映画としては異色と呼ばれる満席が続き、上映も長期間に及んでいることからもわかります。

さらに公開から1年余りたった令和8年1月 29 日、藤野監督による書籍「どうすればよかったか」（文藝春秋）が発刊されました。私はこの書籍を予約し発売日に入手しました。じっくりと向き合いたい事象については、自分のペースで読み進めながら時に手をとめ考えたり調べたりすることができる「読書」という形で触れたいと考えているからです。映画「どうすればよかったか」を視聴して以降、折々に触れて考えてきた事項、特に、家族関係における秘密や嘘の扱いについて、監督の文章をたどりながらより慎重に考えてみたいと思いました。

書籍においては、映画の反響等といったことも多く盛り込まれていました。何よりも藤野監督が社会人になってから撮影したカメラでの映像からこの映画が作成されている関係で、映画中では多くは触れられなかった監督自身の成育歴についてより詳細に記されていました。そしてそこには、実姉の発症にまつわる家族関係における藤野監督の苦悩が記されていました。

私は特に「家族のなかの秘密と嘘」という点に注目しました。

本連載第 30 回では 「家族がケアを担う」ときというテーマを、この映画を素材にして記載しました。今回は映画を軸に、家族における「秘密」について考えていきたいと思います。

映画「どうすればよかったか」に登場する家族　家族構成

父：基礎医学の研究者（本文中の記載は「実父」）

実母：基礎医学の研究者（本文中の記載は「実母」）

長女：父母の期待を担う優秀な長子であったが医学生時代に統合失調症に罹患
（本文中の記載は「実姉」）

長男：自分の原家族にカメラを向ける藤野監督自身（本文中の記載は「監督」）

3 一般論としての、家族における「秘密」の取り扱い

対人援助の場面では、家族のなかの「秘密」に触れることがあります。ケース記録等にお

いて「要配慮事項」等の注意喚起の記載が付されている事項については、当事者や家族の面接場面等ではその取扱いに十分な配慮が求められます。

家族メンバーだけの（対外的な）「秘密」

家族メンバーはその事項について承知しているものの、家族メンバー以外には触れられないようにしている事項です。「秘密」を守るためには、家族メンバーには、その秘密を守ることができる（未熟さや軽率さゆえうっかり他言しない）という条件が求められるでしょう。

刑事政策関係の仕事をしている者にとってよく触れるのは、「ある家族メンバーが矯正施設入所中である」という「秘密」です。その理由は、「矯正施設入所中の本人のことを幼いころから心配していた祖母に心配をかけたくない」というものから、「口うるさい親族に色々言われたくない」というものまで様々ですが、矯正施設入所を恥じる心理だけではなく、本人の行った罪に対する責めが家族にも及ぶことに対する辛さも背景にあると私は考えています。

昨今では、ネット上で「特定班」等と称される人々が、当事者（加害者だけではなく被害者も）やその家族の住所や勤務先・学校等を確認し、ネット上にあげるという動きが活発化しています。ひとたび事件・事故の当事者となれば、加害・被害の立場を問わず、個人情報がたやすく暴かれ、それが独り歩きし、時には誹謗中傷の的となる社会のなかで、「秘密」を守ることは非常に困難となり、家族メンバーに大きなストレスを強いることになっていると感じています。

家族メンバー内における秘密

前述した矯正施設入所については、家族内に当事者の子ども世代、当事者の祖父母世代が含まれる場合、幼少・高齢といった事情を鑑みて、子ども世代・祖父母世代には長期出張・入院による不在であるという旨を伝え、「秘密」にされていることもあります。この場合、秘密を保持する立場の家族メンバーには、日常生活の端々に気を配らねばならないという点で、家族メンバー外への秘密とは異なる苦労が求められます。

矯正施設以外の「家族メンバーの事情」が特定の家族のみ「秘密」にされるということも往々にして見られます。治癒が難しい病気（余命）などは、当事者に対しても伏せられていることがあります。

「家族関係の事情」が「秘密」となっていることもあります。母親が子どもを出産後離婚し再婚、2 人目の夫とその子どもが養子縁組をしたケース等において、子供には養父であることを一定期間伏せているといったこともあるでしょう。

家族メンバー内における「秘密」の取り扱いからは、その家族のなかの関係性が見て取れることも往々にあります。

家庭における大人世代が対処しかねている家族や家庭における困りごとについて、子ども世代に「誰にも言わないでね」というかたちで「秘密」を伝えている家庭においては、親世代などの大人が適切に機能せず、子ども世代が年齢不相応の悩みを抱えることになります。昨今解決すべき課題とされている「ヤングケアラー」は、大人世代が不在という場合に限り発生するだけではなく、大人世代がしかるべき役割を果たせない場合にも発生していることに、我々は心をいたすべきでしょう。

さらに踏み込めば、不適切介護や虐待が発覚しづらいのは、「誰にも言ってはいけない」「内緒」という言葉によって、不適切介護や虐待をする側がされる側を縛っていることもその理由と考えています。

家族における 「秘密」については、その内容だけではなく、家族における「秘密」の取扱いという点に、家族の関係性が反映されていると考えます。これについては以下 4 で言及していきます。

4 「どうすればよかったか？」 家族のなかの「秘密」そして「嘘」

藤野監督の家庭における「実姉の統合失調症の発症」は、において四半世紀にわたり保持されてきた「秘密」そして「嘘」であると私は考えています。

実姉の発症時、監督はまだ高校生でした。何が大変なことが起きているに違いないとは感じているはずなのに、それを「秘密」にされる不安の大きさは、当時の写真のなかで、監督だけが目をそらしている映画ポスター等からも感じられるところです。

家族メンバー内における「秘密」の取扱いからは、その家族のなかの関係性が見て取れることも往々にある、ということを先に述べさせていただきました。理解できるかどうかは関係なく「だって家族だからあたりまえ」と「秘密」を共有するあるいが（共有を強いる）ことは、風通しのよい関係性でも、家族の団結が強固というわけではありません。子ども世代など心理的な発達途上の家族メンバーに対する養育上の配慮として「秘密」を伝えないということは、家族関係において健全と考えられることであり、むしろ、子ども世代をも巻き込んだ「秘密」は、家族関係を一見強固にするように見えても、それが理解できない場合はなおのこと、子ども世代の不安・負担になるのではないでしょうか。

姉の統合失調症の急性症状と思われるものが出たのは昭和 58 年（1983）年、監督が高校時代、実姉が医学生の時でした。監督の実父は単身赴任中であり、監督は実母と相談し救急車を要請し、実姉は病院に搬送されます。しかしながらその翌日には単身赴任先から帰省した実父が実姉を連れ帰り、「まったく問題ない」と説明されます。監督は納得がいかないものの「父がそういうなら」とこの状況を受け入れる一方、以後、「一体何が本当なのかわからない」状況で日々を送ることになります。実姉と実母だけを自宅を置いておくことが不安で、自宅通学が可能な北海道大学に進学するものの、同じ大学内で実姉のことが噂にもなっており、「姉さんが精神障害ならお前もか」と教官からいわれるなど、家庭のことに加え自分自身の将来についても不安が重なっていきます。なにより、「病気でないことの根拠」を、医学部卒業資格や研究従事に求めた実父母の対応については、高校時代より大きな疑問を持つようになっています。

監督の高校生～大学生時代の不安や混乱は、実姉の症状起因の言動がもたらす混乱よりも、親世代から、大切な家族メンバーである実姉の状態し、到底納得できないような「秘密」を共有することを強いられたからではないかと私は考えています。「精神分裂病」という言葉が日本精神神経学会によって「統合失調症」に変更されたのが H14（2002）年、実姉の急性症状発症はそれより約 20 年前であり、スティグマはより強いものだったと推察されます。実父母は基礎医学の研究者であり、「様々な状況が発生しているけれども、問題ない」と言い切ることは、信念や妄信ではなく、監督に対して「嘘」の共有を迫っているようにも感じました。

ここでは仮に、「秘密」を、その内容に関して一定の真実性があるもの、あるいは、真実であると信じられているものとし、「嘘」はその内容に真実性がないものとすれば、家族メンバー内でそれを保持し続けることが困難であるのは、「嘘」の方ではないかと私は考えています。

なぜならば、違和感を持ちながらもそれに疑問を発することなく一定の状態にとどまるこ

と、家族間のパワーバランスにゆがみが生じてくることが往々にしてあります。一見安定しているようにみえても、それは「嘘」を中心核にした凝集に過ぎないかもしれないのです。そして、その凝集のなかでは、家族メンバー4 人が課題を解決できないまま固まっている状態だと感じました。

「連載㉜:家族における「ケア」の在り方 映画「どうすればよかったか」から考える」でも述べましたが、実姉、そして実姉の疾病のことを、それが精神科医という専門家に対してですらも漏らさないというこの父母の姿勢は、実姉の弟たる監督に対し秘密をつくり、当然ながら家庭のなかではそれが『秘密』であるがゆえに、家族メンバーがそれを抱え込むということになっていきます。つまり、家族メンバーの突然の不調に対して不安を覚えている 10 代の子どもに、十分な説明がされないまま家庭の秘密を守る共犯者を担うような役割が科されてしまうのでした。 家族メンバーの不調や不在などを外に漏らさない(話さないなど)よう秘密を抱えて生活することを(暗にではあっても)迫ることは、不調などを抱える当事者にとっても不利益なばかりか、他のメンバー、特にその不調による影響を最も被りやすい立場の者や、若年の者には、ある意味ケアを担うよりも過酷なものということはいうまでもないでしょう。

ただ、監督自身がその状態に生きづらさを感じ、自身の目線と生活場面を家族以外の場に求める、具体的には、ボート部に入部し家族と距離を置いたことが、実父母と実姉をつつんでいた「嘘」という鎖からの脱出の端緒となっています。健康な家族メンバーが「嘘」の外に身を置くことで、外部からの支援が入り、「嘘」が明らかになることも往々にあります。

監督が選択したのは、「嘘」に絡み取られた家族からの断絶でもなく、告発でもなく、カメラ越しの対話でした。そうした形だからこそ、家族メンバーとしての関わりを続けることができたのかもしれないと感じています。

5 おわりに

困難を抱えた家族について、「毒親」「絶縁」といった、ネガティブなパワーワードで「判断する」ことが、日常会話等で広まってきたのはここ 10 年ぐらいでしょうか。しかしながら、「判断する」だけでは状況は改善しませんし、距離を置くことはできても法的な「絶縁」はありえません。「どうすればよかったか」を撮影した藤野監督も、大学卒業後一度は首都圏で就職し生育家庭を離れるものの、映画という手法を通して、自分の生育家庭や家族関係に向き合っておられます。家族を考える際には、家族の属性だけではなくその関係性、そこに「秘密」や「嘘」があるとすればその取り扱いがどうなっているのかという点に目を向けることが必要ではないでしょうか。

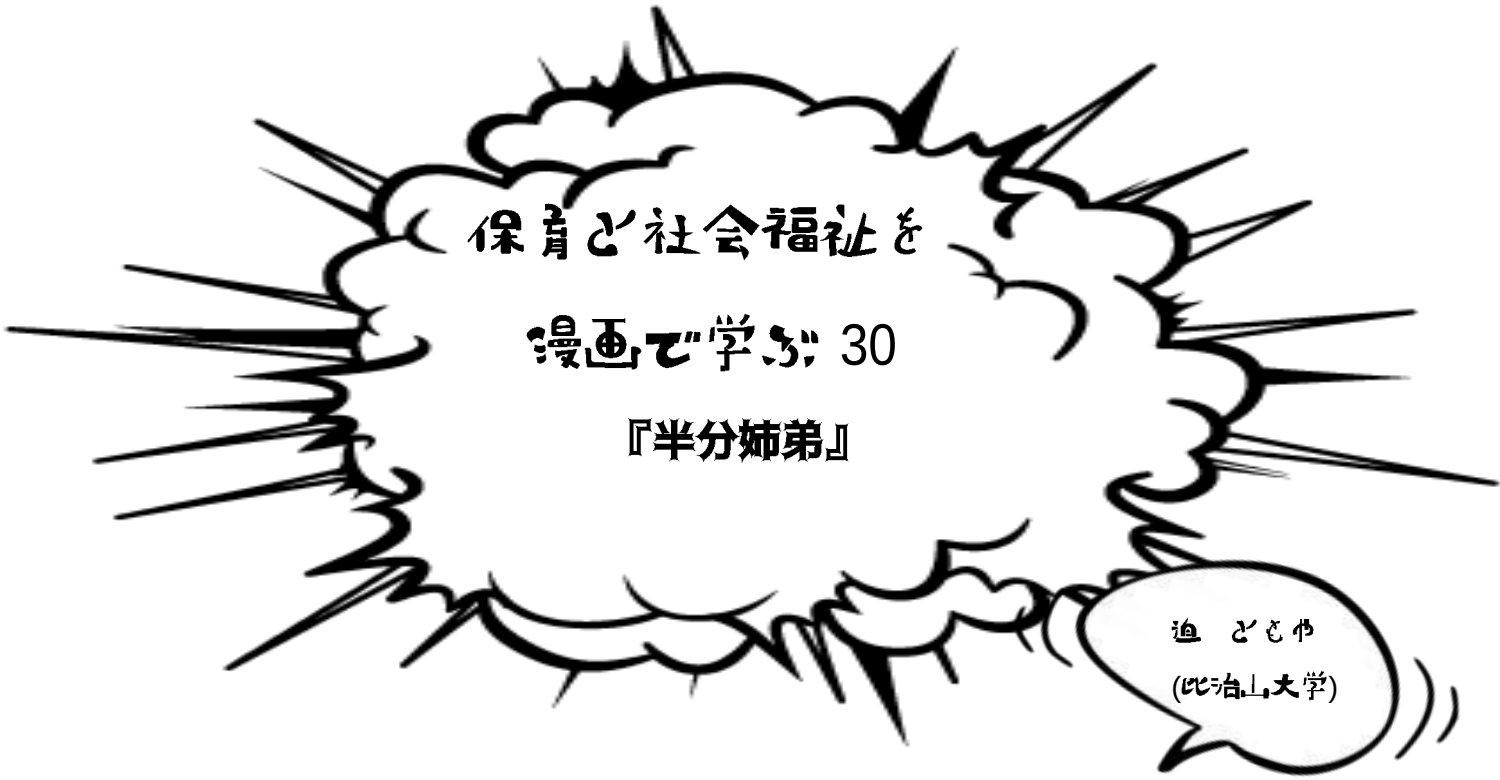
参考

映画「どうすればよかったか」
書籍「どうすればよかったか」(藤野知明)

これまでの連載

30 号:連載 1:更生保護制度とは何か
31 号:連載 2:更生保護を支える人々
32 号:連載 3:つながる・つなげる ～現代社会とボランティアについて～
33 号:連載 4:「共同体」における「排除」と「包摂」という関係性 「遠野物語」から考える (前)
34 号:連載 5:「共同体」における「排除」と「包摂」という関係性 「遠野物語」から考える (後)

35 号:連載 6:介護は誰が担うべきか～家族・親族・地域社会の関係性を踏まえた一考察～
36 号:連載 7:対人援助の場面における「専門家」と当事者等との関係性について
～家族・親族・地域社会の関係性を踏まえた一考察～
37 号:連鎖 8:「地域」を支える縁のかたち　血縁・地縁，そして「新たな縁」
38 号:連載 9:「29 人と 19 人」～この数字が示すもの
39 号:連載 10:血縁あるいは家族について
40 号:連載 11:対人援助職が家族のケアを担うとき(1)
41 号:連載 12:対人援助職が家族のケアを担うとき(2)
42 号:連載 13:「開く」ことと「閉じる」こと
43 号:連載 14:『「開く」ことと「閉じる」こと』
44 号:連載 15:『つながりが支えるこころ』
45 号:連載 16:『「見える」ことと「見えない」こと』。
46 号:連載 17:「地域社会」との「関わり方」を考える
47 号:連載 18:「地域社会」で生きるということ
48 号:連載 19:「自分は誰かとつながっている」という感覚があるかということ
49 号:連載 20:『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽について
50 号:連載 21:Society から Home へ矮小化していく社会
51号:連載 22:「自助、共助、公助」の他に、制度が既存のものとして含んでいる「家族助」について
52 号:連載 23:自分が「知っている」だけの世界で生きることの危うさ
53 号:連載 24:「知らないことが不安や排除につながる」ということ
54 号:連載 26:「今の社会」に対する若者の不安に、大人としてどう向き合うのか
55 号:連載 27:「理想とされる家族は今や『描かれるもの』の中にあるものなのか」
56 号:連載 28「自分には支えてくれる人がいる」「まだできることがある」と誰もが感じることができる社会へ（連載 29 と記載していますが 28）
57 号:連載 29「選べない日々」を過ごす人々への「まなざし」
58 号:連載 30 改めて「介護は誰が担うべきか 家族・親族・地域社会の関係性を踏まえた一考察」
59 号:連載 31:非行とは行うものなのか巻き込まれるものなのか」
60 号:連載 32:家族における「ケア」の在り方 映画「どうすればよかったか」から考える
61 号:連載 33:みまもり「みまもる」ということば
62 号:連載 34:「若者と薬物依存」について、地域社会でどう向き合うのかと
63 号:連載 35:薬物依存症当事者の方の経験と人生に触れる
64 号:連足 36:家族のなかの「秘密」や「嘘」 続・ 映画「どうすればよかったか」から考える



私は日本国籍を持つミックスルーツだけど、ほんの数年前に生まれていたら「日本人」にはなれなかったんです、父方が外国人なので。（日本の国籍法は 84 年まで父親が日本人でないと日本国籍を付与できない“父系血統主義“というレイシズムと家父長制が悪魔合体した激キショルールを採用していたのだ！！） https://x.com/fujimiyoico/status/1844348613813731423?s=20
（最終確認：2026/02/18）

これは漫画家、藤見よいこさんの X に書かれた投稿です。『この漫画がすごい！2026』オンナ編 1 位を獲得した『半分姉弟』の作者、藤見さんは自身がミックスルーツの当事者です。ミックスルーツとは複数の国、地域、人種または文化的な背景をルーツに持つ人のこと。日本国内には約 50 人に 1 人の当事者がいます。『半分姉弟』の冒頭には次の言葉が掲げられています。

この作品には、人種や民族に基づく偏見や差別の描写があります。
また、「ハーフ」という呼称に関しては、その意味合いに傷ついてきた当事者の方も多くおり、議論が存在します。
本作品では、このような事実を踏まえた上で、今もなお多くの人が「ハーフ」という呼称を利用している実態を反映させ、また、呼称のもつ「半分」という意味合いを改めて問い直す意図から、あえて使用しています。
ご自身の気持ちと相談して読んでいただくよう、お願いします。
（第 1 話「米山和美マンダンダ」p.6）

日本語として流通する「ハーフ」という言葉には不思議なニュアンスが込められています。「混血」「あいのこ」といった言葉は、純粋な日本人である自分を価値づけ、そうでない相手を蔑む視線が感じられるのですが、「ハーフ」には何やら憧れのような気持ちが含まれていないでしょうか。

西洋人とのミックスルーツの子どもが可愛らしい外見をしていたり、英語が日常的に話される環境が想像されたりして、一般的な日本人である自分たちよりも、なにか価値が高い存在のように見える、そのような気持ちです。

もちろん「ハーフ」の人たちはそのような人ばかりではありません。一般的な可愛さの基準から外れる外見をもっていたり、日本語しか話せない人、日本語も親のルーツの言語も充分に身についていない人も実際にはたくさん存在します。ふたつの言語を自在に活用できる人をバイリンガルというのに対して、この状態にある人をセミリンガルやダブルリミテッドといいます。

『半分姉弟』は、日本で生活するミックスルーツの若者たちの物語です。一話ごとに主人公が変わりますが、タイトルにもなっている姉弟のエピソードが強烈です。

「姉ちゃん、俺、改名したけん。俺、『米山優太』になりました」。喫茶店で免許証を見せる浅黒い肌の弟。同じく浅黒い肌の姉は驚きと怒りで立ち上がり、声をあげる。「はぁ!? かいめい…あ、ああああんたマンダンダ取ったとー？？」　わたしたち姉弟は母が日本人、父がフランス人──。

（第１話「米山和美マンダンダ」p.7-8）

日本の戸籍にはミドルネームの記載欄がないため、この姉弟の両親は父親の姓を名前の後につけることにしました。地元の福岡で事務員をしている弟は、「米山優太マンダンダ」から「米山優太」に改名したと話します。改名それ自体は、家庭裁判所に「名の変更許可」を申し立て、「正当な事由」が認められれば可能です。「正当な事由」とは例えば、性別を連想されやすい名前だが性同一性障害の診断を受けて、反対の性別での社会生活を望んでいる場合や、凶悪犯罪者と同姓同名であるといった生活上の不都合、さらには難解な名前や奇妙な名前であること、通称名の使用歴が長いことなどが含まれます。

ミックスルーツを売りにWebライターをしている姉は「うち、別に今の名前で困ったこととかなかった」と言いますが、弟は小学校の教科書に載っていた「スイミー」の話を姉にします。

「赤い魚の群れに１匹だけ黒い魚がおって、でも黒い魚が自分を活かして、みんなで力を合わせて悪いやつを追い払ってめでたしめでたし…とか」「俺、ガキの頃、あれすっげえ正しい話やっち思っとって。黒い魚は誰よりも賢くて誰よりも泳ぐのが早かった。やけん群れの一員として認めてもらえた。めっちゃスポーツできるとか、めっちゃ容姿整っとうとか、めっちゃいいやつ、面白いやつ、嫌な気分に、不安にさせんやつ。俺らはなんか特別、群れにとって有用やないと一員にしてもらえんのやと思う」「姉ちゃんは黒い魚やけん、わからん。俺はね、普通になりたいだけなんよ」

（第１話「米山和美マンダンダ」p.11-15）

彼のいう「普通」とは何でしょうか。日本に生まれ、日本人として普通に生活をしているだけでは、その重みを感じることは難しいと思われます。本エッセイの筆者である私にも、正確には分かりません。日本社会は同調圧力が強く、「日本人は単一民族」という誤った認識も根強く存在しています。

「普通」の日本人から異物と扱われることがあっても「普通」の日本人として社会に適応したいという彼の気持ちを、簡単に分かることはできません。分かったつもりになるのではなく、分からないことを大切にして、相手を傷つけてしまうかもしれないことを自覚する必要があるのだと考えます。

意識していない悪意を指す言葉として「マイクロアグレッション（微細な攻撃）」があります。これは人種、性別、国籍、性的指向などに関する特定の属性を持つ人に対して、悪意なく無自覚に、日常的な会話や態度で偏見を伝え、相手の尊厳を傷つける言動のこと。悪意がないため、加害者側は自覚しにくく、受け手にとってはストレスや疎外感が蓄積される「小さな」そして「日常的な」差別行為です。

「差別」という言葉は強い印象をもたらすので、多くの人が「自分は差別なんてしない」と言います。もちろんのこと、自覚的に差別的な言動をする人は多くありません。しかし差別とは、実は誰もが「してしまう」行為なのだと考えられます。

見た目が外国人に見える人に対して、「日本語、お上手ですね」と言うことがあります。言う側は特に相手を傷つける意図はなく、むしろ親しみの気持ちがあるかもしれません。しかしもし、日本生まれ日本育ちで日本語しか話せないのに外見のせいでよくこう言われるとしたら、自分の外見のせいで周りから常に「あなたは日本人ではない」と突き付けられ続けることになってしまいます。

言う側に悪意がなくても、言われた側はそのたびに傷つき、自分のことを疑わしく感じることにならないでしょうか。また、仮に言われた側が問題を指摘しても、「へぇーそんな風に受け取るんだね」「過剰反応だよ」「気にしすぎじゃない？」といった反応をされると、違和感を指摘しようとする意欲をそがれ、結果的に「マイクロアグレッション」は温存されてしまいます。

一般人の日常的な感覚の中にこそ、レイシズム（人種主義）や家父長制、つまり一家の最年長男性が家長として決定権をもち、女性や子どもに対する支配権をもつとする考えを維持する源泉があります。

例えば、地域の自治会で「最近外国人が増えて治安が心配だ」という発言がなされ、誰も止めようとしないことがあります。「批判を言う人だと見られると角が立つ」と黙ってしまう人もいるかもしれません。とりわけ年長の男性の発言を批判することが、難しく感じられないでしょうか。

しかし個別の事例を問題にするのではなく、人の「属性」を「危険」と考える感覚が共有されると、「ある属性を持つ人たちは排除してもよい」という感覚が正当化されてしまいます。また「年長の男性を批判することはいけないこと」といった感覚は、慣習の積み重ねで作られた価値観や態度なので、それ自体に明確な根拠はありません。

こうした場面では、直接的な当事者は指摘しづらい状態におかれます。その場に居あわせた第三者が例えば「先ほどの発言には少し引っかかりを感じました」と表明できれば、少しでも改善されていくと考えます。その場面が終わった後からでも、何もしないよりはいいでしょう。私たち一人ひとりが社会を作っているからです。悪意なく他者を傷つけてしまう可能性を自覚することから、『半分姉弟』たちの状況は少しずつ改善に向かうのではないでしょうか。

紹介作品：藤見よいこ（2025）『半分姉弟 1』リイド社

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。

※ご感想・ご意見などは筆者のメールアドレスまでお寄せください。⇒ sakotomoya@gmail.com

『余地』 ～相談業務を楽しむ方法 33～

＜食事＞

杉江　太朗

～食べるということ～

人は食べなきゃ生きていけない。当然である。とは言っても、生きるためだけに、ただ機械的に食べているのかと言えばそうではない。良くも悪くも食べるということには、何かしらのエピソードが伴う。この仕事をしていて、子どもの様々な食に触れ、様々な物語を感じている。そのことをテーマに書いていきたい。

～一杯のうどん～

とある社会的養護にいた思春期の子ども。生活場所から飛び出しては大人が探しに行くということが続いていた。大人が用意した食事を食べようとせず、身体的にも心配がされた。ちょっと走ってくると言ってはどこかに行ってしまい、しばらくするとフラフラの状態で戻ってきていた。冬の寒い日のこと、その日の泊まりは、それほど勘が良いとは思えない男性の職員。日が変わるかどうかの頃に、いつものようにフラフラの状態で戻ってきた。いつもなら、そのまま部屋に戻るところだが、ちょうどその職員が、自分の夜食（うどん）をリビングで調理していたからか、たまたまリビングに居座り、その職員も、１玉も２玉も調理時間は変わらないと思ったのか、何も言わずにその子の前にもうどんを出した。お互い言葉はほとんど交わさず、取り敢えず熱い一杯のうどんを食べたらしい。

その後、面接に行ったとき、その子から〇〇さんがうどんを作ってくれたと話してくれた。普段、施設では夜中に何かを食べることはほとんどない。その子にとっては、フラフラの状態で戻ってきて、出汁の匂いがしたから、リビングに居座り、気付いたらうどんが出てきたらから食べたということであった。その話の流れで、昔冷蔵庫にはうどんしかなかった。うどんだけはあったから生き延びられた、うどんを食べながらそんなことを思い出していたなどと語る。その後、フラフラ出ていくことは少し減ったように見えた。食事に関しても少しずつ口にするようになっていった。その職員が意図してうどんを出したのか、たまたまあったから出したのかはわからない。ただ、少なくともその子の胃には染みて、過去を回想させるきっかけにはなったようである。そ

の話を聞きながら、その職員が最適なタイミングで何も言わずにうどんを提供していた姿を想像して、こちらの心も動かされた。

～骨のない魚～

とにかく魚が嫌いな子ども。食事や給食で魚が出ると、とたんに食欲がなくなり、ほとんど手をつけなかった。魚に何か良くない思いであるのだろうとは想像ができたが、多くは過去のことを語らなかった。何も食べないよりかは、アレルギー対応のように魚介類を一切、提供しないという方法もあったのかもしれないが、集団生活であったり、将来の事を考えたりしたときに常に出さないという選択が出来ず、対応する大人も苦慮していた。

そんなとき、ホームの行事で回転寿司に行くことがあったらしい。そもそも行った経験が少なかったのかもしれないが、周りがお寿司を食べているのを見て、お寿司を食べてみようと思ったらしく、職員もとりあえず白身の魚でも食べてみたら程度に勧めてみたら、同じ魚でも骨がないという理由でお寿司は食べられたらしい。施設にいると、衛生上の問題で、刺身やお寿司などの生魚が食卓に並ぶことはほとんどない。この子は、お寿司を食べて以降、少しずつ食卓に出る魚に興味を示しはじめ、食べるようになっていった。どうせ食べるなら綺麗に骨を取れるようにと職員も魚の骨の取り方を丁寧に教えた。その経過の中で、焼き魚を食べることを強要されていたこと、骨を取ることさえも許されず、硬い骨まで食べさせられていたことなど語り、そんなときに魚の骨のないお寿司を食べ、魚の美味しさを知り、魚に罪はなく、食べさせ方、提供の方法が間違っていたのだと親から受けた自身の体験を整理し始めた。

今まで自身の体験を多くは語ってこなかった。魚嫌いという評価ではあったが、魚嫌いではなく、魚に秘められた過去の物語があったのである。魚を食べることを無理強いさせず、かといって、魚から一切離れた生活を送らせるわけでもなく、本人のペースを尊重した結果、物語が紡がれるようになった。食事と物語の親和性を大きく感じたエピソードであった。

～物語を紡ぐきっかけ～

上記したうどんを作った職員にしても、一緒にお寿司を食べに行った職員にしても、何かを意図して食べさせたというわけではなく、たまたま帰ってきたからとか、たまたまホームで回転寿司に行ったからとかいうように偶然食べることになっただけである。後者の職員については、回転寿司に行けば、うどんやラーメンなどお寿司以外の食べ物もあるからという理由でその店を選んでいたのかもしれない。ただ、食べさせたのは偶然かもしれないが、結果として本人らの過去の物語

を紡ぐことが出来たのである。

「虐待」という言葉には、物語を押し込める作用が働くと思っている。虐待という言葉を聞いて、知ったような気持ちになっている人もいるが、実際に子どもが目の前にして、虐待という言葉だけで、その子どもの過去の体験や出来事をどれだけ知ることが出来るのだろうか。当然、その言葉だけでは、過去の体験を知ることは出来ない。ただ、物語として本人が語り始めたとき、ようやくその体験を共有することができる。そのきっかけが今回の場合、「一杯のうどん」であり、「骨のない魚」だったのである。

物語に直接アクセスしようとしても、過去のしがらみを抜けて、たどり着くことは難しい。また一方的な聞き方では、子どものタイミングで語ることを否定してしまうことに繋がり、負担が大きくなる。子どものタイミングで物語を語れるようになるのには、やはりきっかけが必要である。

～食というきっかけ～

今、生きているということは、それまでに何かしら食事を取ってきたということである。その量や質、方法、食べた種類、栄養量、そのバランスなどはそれぞれによって異なる。ただ、「食べる」という行為を続けていた以上、そのことをきっかけに語られる物語があるのではないだろうか。例えば、お正月のお雑煮の具材を聞くだけでも、その子どもの育ってきた文化を知ることが出来て面白い。この前、雑煮に餡子餅を入れる、入れないで喧嘩になる父母がいたと聞いたことがある。どちらかが四国の出身であったらしい。（四国の人は雑煮に餡餅を入れるらしい。実際に年末に香川のスーパーに行ったら、餡餅がたくさん売っていた。）

過去の体験は、必要以上に聞き出そうとしても語られるものではない。その子どもが、どのような環境で育ってきたとしても、今の生活では、キチンと大人に胃袋を掴んでもらい、子どもにもキチンと胃袋を差し出してもらえる関係性を構築したい。好きなものを好きなだけではなく、栄養のバランスだけに気を付けるわけでもなく、疲れたときには優しい物を、お腹が空いたときには少し大盛りの物を、そんな何気ない配慮が子どもの物語を紡ぐきっかけになるのではないかと考えている。

♪♪♪♪♪♪♪♪

統合失調症を患う母とともに生きる子ども

― 名前のなかった役割 ① ―

♪♪♪

松岡園子

名前のなかった役割が、大人の私に残したもの

世の中で語られる「親子逆転」は、多くの場合、大人になってから始まる。
親が年を取り、体や判断力が衰え、成人した子どもが支える側に回る。
それは人生の時間軸の中で、ある程度、想定されている出来事だ。
社会には言葉があり、説明のための枠も用意されている。

けれど私の時間は、ずっと前に、ずれて始まっていた。

12 歳のとき、母と二人で暮らすことになった。
母は統合失調症で、幻聴や幻覚が見えることがあった。
そこでは、現実がいつも同じ重さでそこにあるとは限らなかった。
聞こえていない声に返事をし、見えていないものを前提に話が進む日がある。
けれど生活は、どんな状態でも止まらない。

食べること。
買い物をすること。
今日を終わらせ、
明日につなぐこと。

それらを現実として保つ役割に、立てる人は 1 人しかいなかった。
だから私は、子どもである前に、判断する人になった。

感情よりも段取りを。
怖さよりも現実確認を。

泣くより先に、今日が回るかどうかを考えた。

周囲の大人たちは、私を見て「しっかりしている」と言った。
「親子逆転だね」とも言われた。
それはきっと、褒め言葉として使われていたのだと思う。
けれど私にとってそれは、性格の話でも、成長の早さでもなかった。
生きていくために、自分がするしかなかった。

それだけだった。
この役割には、名前がなかった。
介護でもない。
支援でもない。
責任の所在を示す言葉もない。

ただ家庭が崩れないように、そこに立ち続ける役割。
名前がないということは、終わりも用意されないということだ。
だから大人になった今も、私は無意識に「止めない人」でいようとする。

回す人。
最後まで残る人。
いなくなったら困る人。
それは能力ではなく、長いあいだ身についた姿勢のようなものだった。

私はこの役割のおかげで、現実に強くなった。
判断は早く、責任から逃げにくい。
でも同時に、休むことや引き受けない選択に、理由を必要とするようになった。

最近になって、ようやく気づいた。
私は、大人になってから親を支え始めたのではない。
子どもであるうちに、その役割を始めてしまったのだ。
今しているのは、過去を責めることではない。

あの頃の役割に、
ちゃんと名前を与え、
役目を終わらせようとしている。
それは、ずれて始まった時間を、少しずつ本来の位置に戻す作業でもある。

ファイナル

私の頭の中のまだエンピツ⑥

そだちと臨床研究会　川畑　隆

リスクを背負っている

第一場面

私は、対人援助職に就いたばかりの若手の人たちの研修会でこういう場面を体験しました。事例の資料を各自で読んでもらった後で、五、六人ずつのグループに分かれその事例について話し合ってもらおうとしたのですが、どのグループでもなかなか話し合いが始まりません。そのうち始まるだろうと思いだいぶ待ったのですが、待つのはここまでが限度だと思えたタイミングでグループを解消し、全体会で一人ひとりに自分の意見を述べてもらう形に改めました。すると、つまり講師の私との一対一の形を作ると、そこからはスムーズに各自が十分な意見を言えたのです。

グループでの話し合いでは進行役が指名されていませんでしたし、グループ員間の親密度も高くありませんでした。そういうことの影響もあったかもしれませんが、そのことだけでは説明できないくらい私にとっては思いがけない事態でした。自分の考えを回答として発表することと、その自分の考えを提出しながら横並びのコミュニケーションをとっていくこととの間には、少し距離があるのかもしれないと漠然と思いました。

第二場面

児童相談所の児童福祉司（ソーシャルワーカー）を対象とした研修会の講師を引き受けた時のことです。子どもの保護者役のロールプレイヤーと面接する場面を設定し、参加者の数名に交代でワーカーを演じてもらいました。そこでは、ワーカーから保護者への質問は繰り出されたものの、保護者の発言への返し、つまり「それはどういうことですか？」、「それはなぜ？」、「そこをもっと詳しく教えてください」というような「ツッコミ」が誰からもなかなか聴かれませんでした。

面接が保護者から事情を聴き取るような調査的なものだったこともあるのですが、まさにその調査項目にそって回答をただ収集していくような印象が強く、やりとりが深まっていかない物足りなさを感じました。

第三場面

第二場面を経験したこともあり、その後の児童福祉司研修（研修生は第二場面とは入れ替わっています）の機会に、次のような策をとりました。まず、児童虐待で通告された保護者への指導・支援的な面接を児童福祉司として行い、そこに質問や介入を多用してみるというロールプレイです。そしてその次に児童福祉司としてではなくその保護者と親しい友人として話し、同じように質問や介入をしてみるロールプレイをお願いしました。そしてこの二つの面接のロールプレイを比較して、どこがどう違ったかを検討してもらうことにしました。

第二場面でのツッコミの乏しさについては、ワーカーとしての業務上の制約というか配慮が行き過ぎているのではないかと思いました。つまり、述べたように「調査だ」という枠の捉えが強すぎたり、ツッコミによって個人情報を更に詳しく聴き取ることに慎重になっている可能性をイメージしたのです。それで、第三場面では業務ではない「友だち関係」との比較をしてみることにしました。友だち関係のほうがツッコミやすければ、私の仮説に近づくように思ったのです。

ところがアテが大きく外れました。ほんどの人が「友だち関係のほうがツッコミにくかった」と述べたのです。私はそのアテの外れを告白しました。参加者は「友だちだからこそ気を遣って明らかにツッコミにくかった」らしく、私が先ほど述べたワーカーとしての業務上の気遣いについて尋ねると、あまりピンとはきていないようでした。

気遣いは友だちに対してのほうが強かったのです。それは第一場面の現象にも通じます。述べたようにワーカーとしてのツッコミは第二場面では乏しく、ツッコミを入れるようにと指示のあった第三場面では友だち関係よりは容易にしたがえていたようです。

もしかして、第二場面ではツッコミを入れようと思えば入れることができたけれど、そうは思わなかったというだけで、第三場面では「友だち」に対してほどには気遣いという人間関係的要素を差し挟まず、業務のノルマを果たせたということかもしれません。だとして、そこからワーカーにとってのテーマを抽出するとしたら、「ラポール（親和関係）や気遣いという人間関係的要素を伴いながら相手に踏み込むパワー」が必要だということになるでしょうか。そしてそのテーマが友だち関係のことにも通じるとしたら、人としてのパワーと言い替えてよいかもしれません。ただ私が

見たのは実際の面談ではなくロールプレイ場面でのことですから、その要因などが作用している可能性もありますが、私にとっては捨てておくにはもったいない現象でした。

リスクを背負っている

「話し合い」の必要性がどんな場面でも強調されますが、話し合いはある意味で危険な要素を含んでいます。相手と意見が異なった場合を例にとると、その時に相手と対立するか、相手に同調するか…どのように人間関係を維持するかというテーマです。いや、対立するかしないかの相手軸の〇か一〇〇かの選択ではなく、本来は自分はどう思うかの自分軸が問われるのだと思います。しかしその解を自分の中に探すときに相手軸がかなり邪魔をしてきて、相手軸にとっても好ましい解を見つけないといけないかのように迫られる…つまり「リスクを背負う」ことになります。

対人援助職はこのリスクを背負う職業です。業務マニュアルさえあれば遂行できるというものではありませんし、無難な人間関係ばかりに頼っていては支援にたどり着けません。ラポールがとりにくい事例が増える中でもラポールに支えられた共感・理解は重要ですが、相手と対立する場合もある介入・対決も含めた実のある交流を作り上げていく必要があります。

「実のある」とは（少し大層な物言いになってしまうかもしれませんが）、介入する側とされる側の分断ではなく、その介入が立場は違っても同じ時代を生きる者同士の交流となることを願っていることを指しています。

ただ、時代は「個人の保護と権利擁護」をとても強く求めていて、「個人情報の開示や個人への介入」になるようなことは些細なことでも劣勢を

強いられています。そのような社会状況の中で、述べたような個人間交流場面の微妙なリスクよりもさらに大きな社会的リスク（不適切な対応やハラスメントなどの指摘）をも背負いながら、支援者は対象者のために必要な対応を行っていかなければなりません。

質問の意見性

質問は本来そのことについてわからないからするものだと思うのですが、国会質問のように質問を通して意見を述べるという側面があります。ある知事選候補者が相手からの質問に真正面からは応えず、逆に質問者に質問し返したり質問自体を批判したりしていることが「〇〇構文」として話題になりました。私はその候補者の態度が最初は快くありませんでしたが、私も「川畑さんはどう思いますか？」という質問に対して「あなたはどう思います？」と業務上の面接で対応していたことを思い出しました。それは質問者に自分で考えてもらうという支援的意図があってのことでしたが、相手はどう感じていたでしょうか。

たしかに質問には「愚問」もありますし、質問のための質問にすぎないものもあります。そして質問への回答もありきたりで、質疑応答のやりとり自体がその場をしのぐ以外の何物でもなかったりもします。そんなやりとりではなく、「そこで問題にしなければならない本質は何なのか」という問題提起を含む質問は、対人援助業務の中では重要な役割を持つように思います。

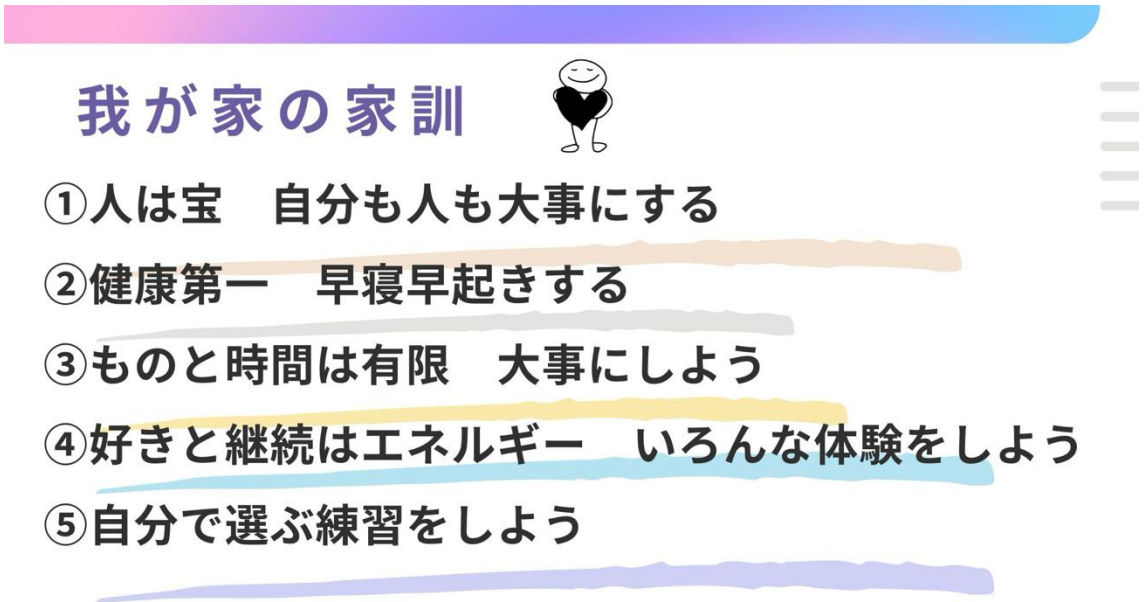
（了）

応援、母ちゃん！24

～　母として個人として自分を生き直す　～

たまむら　ふみ

玉村　文



1.　何気ない一言が奪っていった「選んだ感覚」

「帝王切開で産むと、免疫が弱いよね」

その何気ない一言が、私の胸に深く刺さりました。
誰かを責めるような言い方ではなく、ただ共感してくれただけ、同情されたような声かけだったからこそ、その言葉は静かに、しかし確実に私の中に入り込んできたのだと思います。

子どもの喘鳴を聞くたびに、私は考えました。
「私の体質のせいだ」
「私が帝王切開で産んだからだ」

理由を外ではなく、自分の内側に探し続け、何度も何度も自分を責めていました。
第一子の育児期の私は、24 時間子育てをしている感覚の中にいました。眠っているときでさえ、完全には休めていない。どこか常に「待機中」で、緊張が抜けない状態だったのです。

夫に任せることもできませんでした。「私がやらなくては」「私が判断しなくては」という思いが強く、頼ることよりも抱え込むことを選んでいました。その結果、パートナーとの間に信頼関係を育てる余裕もなく、関係性はどこか脆いものだったように思います。

幸いなことに、子どもの成長とともに体質は少しずつ改善し、健康状態も安定していきました。今では、人に経過を説明できるほどに落ち着いています。
それでも、私自身の幸福度は決して高くありませんでした。

子どもは元気になった。生活も回っている。
それなのに、なぜか満たされない。
その違和感を抱えたまま、日々を過ごしていました。

2.　「自分の人生をコントロールしていい」と知った出会い

転機となったのは、第 3 子の出産後に参加した育休コミュニティでした。
そこには、子育ての正解を教える場ではなく、「自己コントロール感を取り戻す」ための学びと、同じ問いを持つ仲間がいました。

自分の弱さや欠けている部分ではなく、「強み」に目を向ける視点。
不安はなくすものではなく、「扱うことができるもの」だという考え方。
そして、幸福度の高い状態でいることが、結果的に子育てや人間関係、仕事にも良い影響をもたらすという知見と実感。

私はそこで初めて、
「自分の人生やキャリアを、自分でコントロールしていい」
という感覚を、少しずつ取り戻していきました。

それは、急に自信が湧いたというよりも、「選んでもいい」「選び直してもいい」と自分に許可を出せるようになった感覚に近いものでした。

3.　学びを“実装”するために必要だったもの

それまでの私は、育児本をよく読んでいました。
離乳食、寝かしつけ、発達――具体的なケアの方法を求めての読書です。
一方で、第 3 子の育休期間は、学びの方向性を大きく変えました。

自分の強みを知ること。
価値観や人生の指針を言語化すること。
ウェルビーイングを高めるポジティブ心理学。
将来不安なく生活するためのお金の学び。

自分を「エンパワメントする」学びに、意識的に振り切りました。

そこで実感したのは、本を読むことは好きでも、実践を伴う学びには仲間やコミュニティの力が不可欠だということです。

例えば、ポジティブ心理学で知られる「3 グッドシングス」というワークがあります。毎日、良かったことを 3 つ書き出すというシンプルな実践ですが、一人ではなかなか続きませんでした。そこで、子どもたちと毎晩寝る前に「今日の良かったこと」を話す時間をつくりました。

すると、子どもたちの方が驚くほど上手に良いことを見つけてきます。「給食がおいしかった」とか「外で遊んだ」、「ゲームできた」など 3 つどころか、次々と出てくるのです。もっと聞きたくなります。
「誰かと一緒にやるから続く」
その実感は、今も私の中に残っています。

4.　満たされていない自分に気づくという視点

コミュニティの中で、こんな悩みを打ち明けたことがあります。
「夫の良いところが全く見えません」

すると返ってきたのは、
「まず、あなた自身が満たされていないんじゃない？」
という問いでした。

その言葉は衝撃的でしたが、腑に落ちるものでした。
自分を満たすことを後回しにし、家族や周囲を優先し続けてストレスが溜まっていた私。
まずは自分を満たすことを意識してみると、不思議と関係性も安定していきました。

家族の良いところが見えなくなったとき、
それは「相手が悪いサイン」ではなく、
「自分が満たされていないサイン」なのかもしれない。

そう捉えられるようになったことは、私にとって大きな変化でした。

5. 会いに行くことで動き出すエネルギー

オンラインコミュニティは、距離も時間も節約できます。
それでも、「実際に会いたい」という気持ちが芽生えてきました。
2025 年には、3 回ほどリアル会に参加しました。そのうちの 1 回は、母子旅を兼ねた参加でした。
前回のマガジンにまとめています。

直接会うことで得られるエネルギーがあります。
会うために準備をし、目的を持って日常を過ごすプロセス自体も楽しいものでした。

本で学んでいたポジティブ心理学の著者が、京都の書店でトークイベントを行うと知り、「影響を受けた人にも会いに行こう」と思い立ちました。子どもたちを連れて、1 時間のトークに参加しました。

会場で子どもを連れていたのは私一人。気兼ねしながらも参加していたところ、「先に写真を撮りましょう」と声をかけていただき、順番を配慮してもらえました。
直接会う場では、こうした親切に触れることが多く、そのたびに感謝の気持ちが湧いてきます。

6. 多様な人生に触れることで、選択は軽くなる

エネルギーをもらったのは、学びの場だけではありません。
地元の友人たちとの同窓会も、私にとって大切な時間でした。

40 歳を迎え、子育て真っ最中の人、子育てが一段落した人、未婚、離婚、再婚――さまざまな人生があります。
その中で印象的だった話題が「バケットリスト」でした。
これからの人生で叶えたいことをバケットリストに書いているのですが、それを旧友たちと共有した時間は、とても豊かなものでした。

「マラソン完走」「再婚したい」
どれも正解・不正解ではなく、ただの選択肢の一つ。
比較ではなく、多様性として受け取れたとき、私自身の選択もその中の一つなのだと感じられました。

7. 振り返りと、これからの自己コントロール

1 年を振り返り、喜びを感じた出来事を書き出してみると、ある共通点が浮かび上がりました。
それは、「うまくできたこと」ではなく、「自分で選んだこと」でした。

自分で選ぶには、自分への信頼が必要です。
第一子の育休時代、私はほぼすべての判断を一人で背負っていました。帝王切開もそうです。その選択によって子どもが不利益を被るのではないかと感じ、自分の選択に自信が持てませんでした。

今振り返ると、自分の価値観を見つめ直し、「自分を満たす基準」を明確にしていったことが、選択への安定感につながっていると感じます。迷ったときに立ち返る軸ができたのです。

夫と一緒に家訓を作成したことも、子育ての指針になっています。夫とは子育てで大事にしたいことを何度か話し合い、それを家訓としてまとめてみました。「我が家の家訓」としてポスターを作成してリビングに張り出しています。冒頭の画像と同じものです。
また、自分のできる範囲と、そうでない範囲を意識的に分けることも有効でした。
「夫に変わってほしい」「上司の物言いを変えたい」そんな気持ちがありました。でも相手を変えるこ

とは自己コントロール外。
自分の裁量の範囲に集中することで、気持ちは落ち着き、行動が変わります。

他責思考や被害的な捉え方を、この 1、2 年で大きく手放せたこと。
それはまさに、自己コントロール感を取り戻した 1 年だったと言えるのではないでしょうか。

うまくいかないことも、これからきっと起こります。
そのたびに、自分と向き合い、脱皮のチャンスとして受け取りながら、少しずつバージョンアップしていく。
そんな生き方を、これからも続けていきたいと思っています。

HITOKOMART No.23

篠原ユキオ

1948年　東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
（公社）日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長



ラテアート

老いは愛

高齢者の会話内容に幾つかのタイプがある。子どもの頃の想い出話はかわいいものだが現役時代の自慢話を繰り返す人にはうんざりする。今飲んでいる薬の話や治療や大手術の自慢話には心が沈む。趣味や旅行の話は場が華やぐが筋肉自慢や下半身の話題でＴＰＯの見極めが出来ない人は迷惑だ。未来の話題となると終活や墓じまいしかないというのも悲しい。介護の話はするほうからされる立ち場に移っていく。

今回のメインタイトルをどうするかと色々ダジャレを考えてみた。老いと誠　老い燦　燦　老いは勝つ　老いの讃歌　老いの奇蹟。眺めてみるともみんな『昭和』だった。どう抗ってみても団塊世代の匂いが満ちあふれる老い臭列車の中にいる。

年　輪



若い頃から老人をモチーフにした一コマ漫画をいくつも描いてきた。
この作品は１９９８年にさいたまの国際漫画フェスティバルに出品し買い上げとなった懐かしい作品である。
湯船に浮かぶ波紋を年輪に見立てたものだが、温泉には必ずと言って良いほど高齢者の常連さんが何人もいて、熱い湯に平気な顔して浸かっているのを見かける。
そして彼らには若者はなかなか敵わない。

自転車婆さん



わが家のあるエリアは昭和四〇年代に開発された奈良市内でも落ち着いた一戸建てばかりの住宅街だ。坂道が多いので自転車で走るのは結構つらい。その坂道を毎晩自転車を押して歩くお婆さんがいる。
その姿は遠くから見ると自転車だけが動いてくるように見えるのだ。
実は腰が直角近く曲がっていて、その為上半身が自転車に隠れているのだ。
下り坂もその姿勢で自転車を押していたのでこれは彼女の健康維持のためのウオーキングなのかなとも思うが、深夜に腰をかがめ自転車を押して歩くお婆さんの姿はやはり異様である。
ただ徘徊老人か健康婆さんか、ホントのところは定かではない。
今夜も町内のどこかを歩いている。

沿線地図



刺青

昔、桂文珍さんの新作落語に『ふりむけば老い』というのがあった。振り向く度に老いてゆくというシュールな話だが『振り向けば愛』と言う当時の映画タイトルに語呂合わせをしたモノだった。

当来るべき高齢化社会は当時の私にとってまだ遠い先の物語だったのだが喜寿を過ぎた今はリアルな実感がある。

若い人たちがよく使う「お若く見えますね」も老人すべてに使う常套句と感じるようになった。

電車の優先座席に座らない若者も増えたので私は躊躇せずに座ることにしている。

しかしヘルプマークをつけた人だけには反射的に席を譲る。

まだどこかで自分はそれほど老人ではないという勘違いが残っているんだろうな。

夜空を飛ぶ



夢は見ないという人もいるが信じられない。起きた時には覚えていないというのが本当の所だろう

私は毎日数本の夢をみる。真夜中に2~3回目が覚めるので頻尿なのかもしれないが外出している時は6時間以上トイレに行く事はないからそこんところはハッキリしない。

二度寝、三度寝はするので次はどんなストーリーだろうと楽しみになる。

バイオレンスやラブストーリー、家族の物語など多様だが最近とんと見ることがなくなったのが『空を飛ぶ夢』である。

昔、山田太一さんのシナリオ小説にそんなのがあったが、夢判断で調べると自由への願望や理想の自分への接近などというのに加えて性的な願望というのが出てきた。

あらためて自分の歳を確認しながら少し寂しくなった。

長老の想い



村に大きな問題が起こると村人たちは解決策を出すために村の長老に指示を仰ぐ。長老は「ワシが若い頃にもこんな事があってナア…」と昔の記憶や経験をもとに答えを出す。

古い映画でよく見かけたシーンだが今はどうだろう。

時代に乗り切れない経営者や政治家は老害として扱われるし地域の高齢者たちは頼られるよりも見守られる立場となった。

『亀の甲より年の功』は昔からよく使われてきた言葉だが、高齢者が持っている熟練した技術や知識、多くの経験は時代遅れのものとして見捨てられる事が多い。わからないことは何でもＡＩが丁寧に教えてくれる。

『最近の若いもんは…』はいつの時代も使われてきた言葉だったが、今は『最近の年寄りは…』と言われる事のも多いのである。

川下の風景⑳
～人生は川の流れのように～

米津　達也

【子の思い、親の願い】

この冬、東京で暮らす娘がインフルA型に罹患し寝込んだ。40度近くの高熱が二日続き、一人暮らしの身には、さぞ不便も多かっただろうが、それよりも不安と心細さが募っただろうと、私にも経験があるから想像ができる。

私も息子や娘と同じで、18歳で実家を出た。進学の為に大阪に下宿したのだ。風呂、トイレ共同。昼間でも薄暗く、年中小便臭いトイレの匂いが廊下に立ち込める男のみの安下宿だった。家賃は月3万程度だったろうか。奨学金を借り、親から家賃分は仕送りをしてもらい、意気揚々と人生初の一人暮らしを始めた。風邪を引いたのはその年だった。まだ学生生活も始まって間もない頃、訪ねてくれる友人も彼女もいない部屋で、一人唸りながら寝ているしかない時間。きっと娘も同じように病床の部屋の天井を見たはずだ。実家の安心と、親の有難さに涙を浮かべる夜を。

しかし、これはある意味、人生の儀式だろう。いつの時代もそんな場面があったはずだ。遠い昔には10歳に満たない子どもが奉公に出て、早々に親元を離れて暮らす光景など当たり前で、戦中戦後の貧しい時代は集団就職で故郷を遠く離れて都会で暮らす。昨日まで知らなかった相手と恋愛感情抜きで見合いをして、そのまま家族を形成したり、田舎ではいきなり義父母や義兄弟の面倒をみる羽目になるなんてことも多かった。やはり、同じように薄暗い天井を見つめながら、枕を濡らす夜がそこにもあっただろう。

親はいつまでも子どもの面倒を見てやれない。それは皆わかっているはずだ。しかし、その自立のタイミングを逃すと、いつしか老いた親は子どもに将来の面倒をみてもらおうと期待してしまう。8050問題とは、そんな親子の駆け引きが招いた結果でもある。

娘が病床で考えたことは、親の有難さと一人暮らしの心細さであったに違いないが、さらには「ひとりでは生きていけない」という当たり前の感覚であり、「他人と共に暮らすメリット」について考えただろう。

早く結婚して欲しいと無責任なことは思わないが、子どもがちゃんと人生で賢い選択をして、自ら生きる道を切り開いてくれればよいなと思いながら、親は熱を出して苦しんでいる我が子を思い、出来れば変わってあげたいと切に願っているのだ。

【視点】

年末、25年使っているバリカンで散髪をした。別に年末だから、という感慨があるわけではなく、毎月のルーティーンとして髪を切るに過ぎない。何より25年丸刈りで通してきたわけだから、自分の毛量がある一定の許容範囲を越えると刈らずにはいられなくなる。庭の芝生が不揃いに伸びてきて、それが鬱陶しく感じる感覚だ。

私の丸刈りには、25年変えない決まりがある。夏だろうが、雪の降る冬だろうが、真っ裸で風呂場に入り、シャワーで髪を濡らす。まずは裾から。

9mm のアタッチメントを使って刈り上げる。後頭部がどう刈られていくのか見えないが、これは長年の勘というか、まぁ適当にこんなものだろうという感覚でやる。そして、頭頂部は 12mm で少し長めを意識して仕上げる。時間にして 5 分〜10 分。これですっきり、また一か月を快適に過ごせる。何せ 25 年使っているバリカンだ。先日、メーカー名を何気に見たら、ナショナル製だった。年代を感じる。
そんな 25 年決めごとのようにやってきた散髪を、この年末は少し変えてみた。裾を 3mm にしてみたのだ。裾は短いほうが、伸びた時の鬱陶しさがなくていい。感触は悪くなかった。側面は鏡で見えるし、後頭部の仕上がりも手触りで感触を確かめた。視えないが、感触で納得している。
しかし、後で後頭部を自撮りしてみると、見事にガタガタになっていた。まじまじと、自分の後頭部を視るなんてどれぐらいぶりだろう。その仕上がり振りを笑って眺めていたが、家族は別にそんなもんだろうと見ている。いつもこんなガタガタなのか、と初めて気付く機会を得たわけだ。

昔、所ジョージが TV で言っていたが、「たまには風呂に入るとき、いつもと逆向きに入ってみろよ。いつもと違う景色が見えるから」と話していた。いつもと違う浴室の壁、いつもあるはずのシャワーヘッドが、そこにない風景。
こんなものだろうと手触りで想像している自らの後頭部と、写真という客観像を眺める自分の視点。世の中、視ているようで視ていないことなどたくさんある。意図的なのか、非意図的なのか、いずれにしても私たち援助職は自らの「理解のフレーム」を知らずに持ち続け、そのフレーム外のものは視えていない。しかし、クライエントの生活像はそのフレームに収まるものだろうか。脱フレーム化するために理論がある。変化がある。

【家族性】
そのジェノグラムで家族構成を視たとき、私は「おや？」と思った。違和感というのではない。私が推測で思い描いていた家族像と大きく違っていたからだ。そこに正解、不正解はない。あるのは、家族の選択だ。
再びジェノグラムを見つめる。この家族の選択の背景には何があっただろうと思いめぐらす。家族の選択で顕著に現れるのは、どこで、誰と、どのように暮らすかだ。どちらかの親世代と同居なのか、結婚後、新たに住まいを構えるのか。誰と、どこで暮らすかは、家族成員の選択による。これは新たな家族システムの構築に関わるから、誰がどのように決めるのかがポイントになる。次に必要な選択は新たな家族計画だろう。昔のように子供を労働力として加算していく時代ではない。むしろ、生まれてからの養育費、特に学費のことや住まいのことを考えれば、ある程度夫婦間での話し合いをもとに選択していかなければならない。

先ほどのジェノグラムの家族は、実際に自宅を訪れて得心がいった。家は家族の住まいである。それは目に見える境界線でもある。境界線は、外と内を分けて、外の環境から内の家族を物理的に守るし、家族システムを安定的に稼働させる。守られているからこそ、家族は安心してコミュニケーションを作動させることができる。家族だけの秘密、家族だから言えること、見せられる、共有できる風景。
だからこそ、家には家族の家族性が宿っている。それが第三者に見えやすい家族性と、そうでない場合もある。暮らしぶり、匂い、むしろ私が注目するのは地域性との調和、不調和だ。
これはその地域を歩いてみないと比較できない

2026.2.25　米津達也

こころ日記「ぼちぼち」④

不登校の学力保障

学校に来ない、来られない子どもたちが増え続けている。子どもが少なくなっていくのにおかしいではないかと思うが、これが現実だ。

今色々な学校に出向くことが多い。どの学校もクラスに入ると、３つ～５つくらいの空席がある。ごく当たり前の風景になっているのが、何とも言えない気持ちになる。

現役のころ、自分のクラスだけは不登校を出さないぞと心に決めていた。しかし人の行動は、望み通りにはゆかない。朝教室に入り、今日も来てないのを確認すると、気が重くなることがあった。

小学校１年生から不登校だった生徒を、中学１年から担任をしたことがある。もちろん、入学式も出席できなかった。毎週金曜日には、家庭訪問をし、家での様子や趣味のことなどとりとめのない話をして帰る。結局私はこの生徒を３年間担任した。ほぼ欠かさず毎週一回の家庭訪問を続けたことは、自分でもよくやったなと思う。家庭訪問がその子にとってどうだったかわからないが、中学卒業後の進路を自分で決め、高校に進学できたときは、本当に嬉しかった。

不登校の学力保障が問題になっている。正直今の日本の学校システムでは、保障されているとは言い難い状況だ。学校では毎年度末に、欠席日数 30 日以上の不登校の「進級査定会議」なるものを開く。まずは担任が、保護者と面談し進級するかどうかを尋ねる。中学生であれば本人も交えての懇談をする。ほとんど、いやほぼ 100%の不登校生徒は、進級を望む。そこには学力があるなしは考慮されない。

会議では、担任が「本人が進級を望んでいと報告すると、誰も反対はせず進級、卒業となる。

長い教員生活で、不登校の成績をつけるのにずっと疑問を抱いてきた。中学校であれば定期テストがある。テストの点数だけでなく、提出物や学習態度などを加味して総合的に成績をつける。今は絶対評価なので、相対評価とは違い一人ひとりの頑張りをつけられるのがいいと思うが。

学校に来ない不登校生のテスト記録は皆無だ。しかも提出物ゼロ、学習態度も見ることができない。どうやって成績をつけろというのか。



中学校では、たいていは５段階評価だ。例えば、毎日元気に学校に登校している子がいるとしよう。しかしテストの点が取れない、提出物が出せない、でも学習態度は良い子がいたとしたら、それは「１」の成績の範疇に入る。では不登校はどうかというと、昔は学籍簿には「不可」とつけていた。いわゆる「評定不可」、成績がつけられないということだった。しかし、あるとき不登校にも成績をつけるようにという通達があり、「１」をつけるようになった。では、毎日登校し真面目に学習参加している子の「１」と、不登校生の「１」との違いは何なんだろう。その疑問を尋ねても、ちゃんとした答えは返ってこなかった。

教員を辞して行政の不登校支援の教室に勤務していたとき、不登校にも定期テストを受けさせていた。それは担任からの要望で、定

期テストのたびに教室まで問題が届けられ、私たち支援員が試験監督をするのだ。採点結果によっては、成績が「２」や「3」が付くことがあり、毎日学校に行っている子の「２」との違いはなんだろうと、またまた疑問に思うことがあった。

不登校の中学生が一番気にするのは、進路に影響する出席日数だ。適応教室に通うとカウントされるので、頑張って通室する子がいる。内申点が低いと進路も限られてくるので、成績もとても気にする子が多い。

子どもの気持ちは理解できるが、ちゃんとした学力もつけずに、成績をつけることに、私は今でも納得できない思いを持っている。

現在文科省は、「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策」（COCOLO プラン）を提案している。不登校児童生徒が学びたいと思った時に学べる環境の整備として、校内教育支援センター（スペシャルサポートルーム等）の設置をすることを行政に勧めている。支援スタッフ等の活用や学校ボランティア 等の協力も得ながら、空き教室や空いているスペースを利用し、まずはそこに不登校の児童生徒が通えるようにというねらいだ。

しかしそこには、一人ひとりの学習計画があるのだろうか。将来を見据えた学力保障があるのだろうか。

私は生徒たちに、もう一度学び直しをしたいのなら留年もありだよと、よく言っていた。子どもたちは皆、留年ができないと思い込んでいて、保護者もそう思っていることが多い。もし留年すれば、異年齢の子どもと一緒に学ぶことになる。しかしそれには抵抗感があり、比較されることを恐れるのも現実だ。病気での留年はあったが、不登校生の留年は、私の記憶ではなかった。在籍期間の経過とともに、ところてん式に卒業させてしまうことに、後ろめたい気持ちを持っていた教師はいなかったのだろうか。

義務教育が終わると、学力がついていない子どもたちは進路選択が狭められる。学校という枠組みから離れると、誰に頼るのか。

ほとんどの親は、子どもの進路に奔走することになる。フリースクールも教育課程として認める動きがあるが、どの子もそこには行けるわけではない。支援が途切れたときに、子どもたちは社会から断絶されてしまうことになるのだ。

先日、フランスの不登校について知る機会があった。

学校に行かなくなった早い段階で介入し、学校や家庭任せではなく、行政、医療とも繋がり、包括的アプローチをする。そして誰が何をするのかを明確化する。義務教育の中では留年や飛び級制度があり、卒業式もないのでスティグマが生じにくい環境だそうだ。学校も転校でき、子どもがプレッシャーのない環境で学ぶことができる。一人一人の学習進度に応じた支援を行い、子どもは中学校卒業資格に向けて頑張る。こういった支援はすべて無料。学び直しのできるシステムがあり、学習に遅れがない支援を誰かが途切れずに行う。子どもが学び続けられる、あるいは学力保障するのは国の責任であり、親に責任を押し付けない。

日本との違いに、考えさせられた。

不登校の人数を数えるより以前に、子どもの学ぶ権利について、もっと真面目に国の責任として考え直す必要があると強く思う。

つづく



miho Hatanaka,

死について考えることはあまり日常的なことではないかもしれない。看護師や介護福祉士になるために学んでいる学生であっても、死、特に自分の死について関連したワークを行うと「そんなこと、考えたこともなかった！」と新鮮な感じを持つようである。
今回は性教育のなかで扱う死についての短い文章と、看護学生による“詩”を。

【第21話　いのちのうた　6　：　大人のコトバ　】

死の話はタブーであろうか。樹木葬や海洋散骨など死に関係のある話が少しずつ語られるようになってきてはいるものの、まだ一般的ではないかもしれない。海外ではデス・エデュケーションとしてプログラム化して行われることもあるというが、小学校や中学校での性教育のなかで内容に採り入れるかどうかは私も多少、考える。助産師という職業柄、誕生の話を期待されるが、それだけではバランスが取れていないと授業を始めた当初から思ってきた。その両方を常に意識しておくこと。実際、子どもたちは「性」だけではなく「生」について、ひいては「死」についてもとても関心が高いのだ。

私が授業で死について話をしようとする場合、同じ子どもたちに対して複数回の授業を受け持つことができる場合や、管理職や担任の先生との関係がきちんと築けているとフォローしやすい。何回か顔を合わせている子どもたちとの間では性に関する話もすでに充分時間をかけてきているので、流れがとても自然なのだ。「人は産まれてきて、どこにゆくのか？」というシンプルな問い。自ずと私自身の死生観が反映されるが、それを豊かにしてくれるのが近しい者たちの死であり、また、子どもたちから返ってくる反応や言葉である。人が「産まれる」場に在るところからスタートした私の仕事は、思いもかけず「死」を視野にいれることまで広がってゆき、問い続けることになっている。

死とは

作った人：M 看護学校のみなさん

「あ、
　死ぬって――

　もう会えないんだ、泣いても頭なでてくれないし、
　抱っこもしてくれないんだ、
　もうお話することもできないし遊びにも行けないんだ」

「昨日までは一緒に日向ぼっこをしていたのに」。
　死は一瞬で訪れるんだな――

死は
必ず来るもの

いつおとずれるのかわからないもの
生きている以上、避けられないもの
一生離れることの出来ない身近なもの

死とはもう会えなくなること
今まで当たり前の存在が急になくなってしまうこと
当たり前のことが当たり前じゃなくなること
この世界から本当にいなくなってしまったということ

でも…

体は消えて無くなってしまうが、魂は存在し続ける、
　　実際には会えなくなったけど、どこかで見守ってくれている。

身体が死ぬことだけが死ではなくて忘れ去られることも本当の死だと思います、
　　人が死んでも身近な人などの心の中では生きているから。

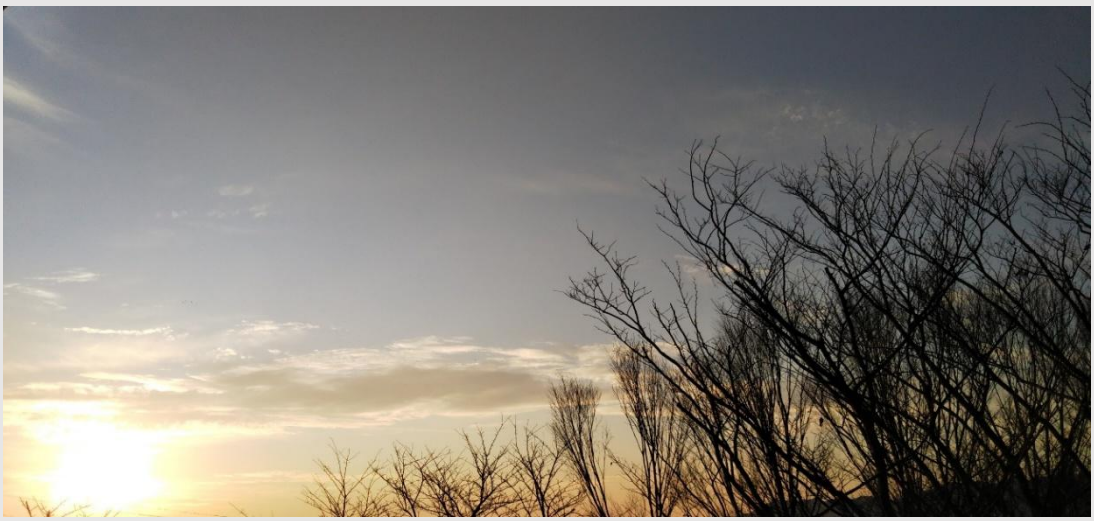
死というのは生きることの経験を教えてくれるのかなと思う
ただ別れではなく試練だと考える
だから死とは、残った人には勇気を与えたり、力になるものなのかなと思います。

死とは
その人が人生をまっとうしてきたことの象徴
これまでの集大成
ものすごく辛いもの　――でも、
　葬儀の時はみんなで思い出話をして穏やかな気持ちになるのは今でもすごく
　不思議です。
本当に疲れを癒すところ　――事故や病気でまだ死にたくないと思っている人も神様が
　もう休んでいいよって言ってくれてるんかなと思います。

死は、花と同じで人生の変化の一部
最終的に自分自身の死を体験しないといけないもの、
　1 番怖くて不思議な体験を人生の最後に取っているものだと思う

死はひとつの区切り
一生自分の心に存在するもの。
大切な人との別れ。全てから開放される時
そして

死は
未来への第 1 歩



dawn

タイトル名「対人援助実践をリブートするこの一冊」

第 35 回：第 4 章-その 7-

対人援助領域における虫瞰と鳥瞰，あるいは，仰望と俯瞰

著　：渡辺修宏
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

「外の世界」から「今の世界」を知る

前回述べた通り（第 33 回：第 4 章-その 5-　車椅子の少女が命を懸けた物語に教えられたこと，対人援助学マガジン第 63 号，238 ページ～　https://humanservices.jp/wp-content/uploads/magazine/vol63/38.pdf），私は息子とのかかわりを契機に，野球の本ないし，野球選手らの本を手に取るようになった。

前回の記事において，40 冊弱の野球関連本を軽く紹介させていただいたが，…その手の本の読書は，今も続いている。野村克也著作は相変わらずだが，それを含めて他にも，以下の文献を手に取っている。

野村　克也　「そなえ　35 歳までに学んでおくべきこと」
「野村克也野球論集成」
「野村の DNA　頭脳野球とは何か」
「ありがとうを言えなくて」
「野村の真髄　「本当の才能」の引き出し方」
「野村の実践「論語」」
「弱い男」
「人生を勝利に導く金言」
「私が野球から学んだ人生で最も大切な 101 のこと」
「なにもできない夫が，妻を亡くしたら」
栗山　秀樹　「栗山英樹の思考」
「信じ切る力　生き方で運をコントロールする 50 の心がけ」
「伝える。言葉より強い武器はない」

仁志　敏久　「仁志敏久の超守備論」
工藤　公康　「折れない心を支える言葉」
松井　秀喜　「告白」
「エキストラ・イニングス　僕の野球論」
井口　資仁　「もう下剋上とは言わせない　～勝利へ導くチーム改革～」
張本　勲　「イチロー論　一流とはなにかプロフェッショナルとはなにか」
工藤　公康　「折れない心を支える言葉」
王　貞治　「チャレンジが道をひらく　野球この素晴らしきもの」
鶴岡　慎也　「超一流の思考術　侍ジャパンはなぜ世界一になれたのか？」
大塚　光二　「基本と実践で差がつく！外野手最強バイブル」
長谷川滋利　「適者生存　メジャーへの挑戦」
「メジャーリーグで覚えた僕の英語勉強法」
「私が見た大谷翔平とメジャー新時代」
和田　毅　「だから僕は練習する　天才たちに近づく挑戦」
高津　臣吾　「理想の職場マネージメント　一軍監督の仕事」
桑田　真澄　「スポーツの品格」
白井　一幸　「北海道日本ハムファイターズ流　一流の組織であり続ける 3 つの原則」
児玉　光雄　「イチロー流「最善主義」で夢を叶える」
白鳥　早奈英「野球で勝つ食事！」
小倉　全由　「一生懸命の教え方」
桑原　晃弥　「大谷翔平は，こう考える　不可能を現実に変える 90 の言葉」
ディラン・ヘルナンデス，サム・ブラム，志村朋哉
「米番記者が見た大谷翔平　メジャー史上最高選手の実像」
中島　大輔　「山本由伸　常識を変える投球術」
お股ニキ　「セイバーメトリクスの落とし穴　マネー・ボールを超える野球論」
「なぜ日本人メジャーリーガーにはパ出身者が多いのか」
加藤　弘士　「砂まみれの名将　野村克也の 1140 日」
「慶應高校野球部「まかせる力」が人を育てる」
木場　克己　「続ける技術，続けさせる技術」
鈴木　忠平　「嫌われた監督　落合博満は中日をどう変えたのか」
木村　由美子「一生懸命　木村拓哉　決してあなたを忘れない」

その他，タイムリー編集部の「甲子園を目指せ！進学校野球部の奮闘の軌跡」，ベースボールマガジン社編集の「左バッターを科学する」と「松井秀喜の言葉力」，鉄人研究会の「アニキの名言」，水谷隼の「打ち返す力　最強のメンタルを手に入れろ」，新潟リハビリテーション病院の「16 歳までの野球教本」，ルイス・ミゲル・ペレイラ，ファン・イグ

ナシオ・ガジャルドの「クリスティアーノ・ロナウドの 心と体をどう磨く？」など読了している。

繰り返しになるが，野球部出身でもない，まして，野球ファンでもない（？）私が，このように野球関連の本を読むようになったのは，学童野球，中学硬式野球に挑戦した息子の応援のためである。

野球のルールを知って，息子の野球技術のレベルアップをちょっとだけ手伝っていかねばならない，という，一種の責務感があったからだ。もしかしたらそれは，焦りや強迫観念に近かったかもしれない。

なにしろ，（小学生の学童野球はともかく）中学硬式野球が明確な競争社会であったからだ。これは後から，つまり息子が硬式野球チームに入った後に知ったことなのだが，部活ではないクラブチームにはある種の教育的配慮はなく，極端にいえば，勝つために選手が起用されるだけでなのである。

もっとも，これは考えてみれば，至極当然なことだろう。義務教育機関である中学の部活動としての野球を犠牲にして（学外のクラブチームと同時参加ができないので），入会に伴う初期費用，毎月の会費，父母会費，リーグ登録費，保険料，遠征費などを負担し，かつ，学区外の練習場に毎回車で送り迎えし，県内外遠征になれば場合によっては宿泊が伴うのが，硬式野球クラブチームなのである。ほとんどの選手やその保護者らが，野球に対し，いわゆる「本気モード」で参加しているのである。目指すは全国大会出場，いつかは「全国制覇」，…それが指導者や選手たちの頭のどこかに，いつも秘められているのである。

こういった，クラブチームでの活躍次第によって，高校からスカウトを受けて進学するケースも少なくないし，また，甲子園出場選手，大学野球選手，社会人野球選手，そしてプロ野球選手の多くは，こういった硬式野球クラブチーム出身者である。ご多忙にもれず，息子の同級生たちの何名もが，県内外の有名高校からスカウトされて，進学先を決めていた。息子の先輩たちの何名かはすでに，甲子園に出場し，若干名は，有名大学野球部，社会人野球部，そしてプロ野球の世界に巣立っている。…本当に，すごい世界である。ただただ，そう感じる。

ええ，そんな，「野球界では極めて常識的なこと」を，まったく知らなかったのが，ど素人の私であった。私と家内と息子は，そんな当たり前にことを，まったく知らずして，クラブチームに入ってしまったのである。それがゆえ，「ああ，野球好きなんですね」の一言で済まないくらい，周りの方々が「野球ファースト」でいることにひどくびっくりしたのが，息子が入団した頃の，私の正直な想いであった。

野球に必要とあれば，（あまり）お金に糸目をつけず，時間も割いて，家族総出で，御子息ご令嬢のサポートに勤しむ。尊敬も込めて，「ドン引き」するに近いくらい，とにかくすごいと感じたのであった。

失笑を買う覚悟で告白するが，子どもに野球をさせるとなれば，「それなりの車が 1 台買えちゃうくらい」の予算を必要とすることを，私はまったく知らかったのである。グローブ 1 つに 5 万円ぐらいかかったぐらいで，「なかなかの費用だなぁ」と思っていたら，周囲の保護者の多くは，「10 万ぐらいかけなきゃいいグローブとはいえない」とか，「外野用，内野用，一塁手用，投手用，捕手用グローブ。…指導者がそのポジションを子どもにやらせてくれるなら，すべてのグローブを用意させなきゃ。ま，普通，20 万ぐらいは覚悟しないとね」と語っていた。「野球の用具なんてバットとグローブでしょ」なんて発想しかなかった私は，完全に無知蒙昧である。専用バックとか，専用パーカーとか，専用ウィンドブレーカーとか，専用 T シャツだとか、何種類かの帽子だとか，ストッキングとか，アップシューズとか，スパイクとか，バッティンググローブとか，メンテナスグッズだとか，とにかく覚えきれないくらいの用具が必要なのである。この時点でもうすでに安い車が買えるぐらいだが，さらに遠征費だとか，オリジナルグッズだとか，際限なく延々に必要経費が降り掛かってくるのである。大会に出場すれば記念クッキーって…そんなものまであるなんて，本当に予想だにしていなかった。

…最初に知りたかった（笑)。

子どものために，自宅を改修して「練習場」を用意する家庭が，きわめて普通なコミュニティの中で，私と息子は浮いていた。頻繁にバッティングセンターに通うから，回数券とか，サブスクリプションを利用するのが日常という世界が，そこにはあったのだ。まさに，野球音痴の私とは，住む世界が違う。そんなわけで私は，心の奥そこで感じた，「なんでそんなに野球が大事なんだ・・？」という疑問を，聞きたくても口に出せずに，今日までやってきたのであった。

さて，私といえば，息子に対して別に「野球で身を立てよ」と願っていたわけではないし，また，息子も早々に，「…自分には，プロ野球選手は無理だなぁ」と気づいたので，あきらかに周囲の勢いにはついていけない，ついていかない親子となってしまっていた。そして実際，息子は同期の中で，一番下，あるいはその辺りをウロウロするような野球レベルであった。つまり，明らかな補欠候補。いや，誰がどうみても，ベンチ要員確定であった。

ベンチ要員を否定する気は毛頭ない。チームの一員として，やるべきことはいくらでもあるし，掛け替えない役割を果たす立場である。しかし，だからといって，わりきって野球をやればいい，と，達観したわけではなかった。

息子が野球をやると決めたからには，やっぱり意味のある経験を積んでほしい。人間的に成長してほしい，中途半端にやめてほしくないと願うのが，私の本心であった。そしてそのためには，息子の野球スキルの成長を後押しすることが不可避になるのであった。よって，先に述べた通り，「野球を学んで，息子の野球技術のレベルアップを手伝わねばならない」と，ある種の戦慄を抱いたのであった。そう，それが野球関連本をむさぼるようになったきっかけだったのである。

幸い，息子は，そこそこ試合にださせてもらえるプレーヤーとなった。

上達したから，というより，チーム事情によるところが大きい。

と，いうのも，ケガや病気でチームを退団する者，他のスポーツ競技に鞍替えする者が続いたからである。そして，試合にださせてもらえれば，それなりに指導者に目をかけてもらえて，それなりに育ててもらえたのである。

そしておかげさまで，先日無事，息子は中学硬式野球をやり終えた。3 年間にわたる期間において，茨城，千葉，栃木，群馬，東京，埼玉，福島，神奈川，兵庫，岡山など多くの地域で，延べ 100 試合以上の経験値をつむことができた。ありがたい限りである。

ちなみ私は，チームの記録係として，延べ 300 試合ほどの試合記録をまとめた。おかげでなんとか，スコアがそこそこ読めるようになったのである。1700 を超える野球ルールを覚えきることはなかったが，「インフィールドフライ」や「フィルダースチョイス」，そして，「インターフェア」という概念を理解したのである。そして，「塁審」と「主審」もできるまでとなった。我ながらびっくりである。

まもなく息子は高校に進学し，今度は高校野球に挑むようだが，さすがにある程度野球を学んだためか（そして，身の程，身の丈を知ったためか），プロ野球，社会人野球，大学野球には興味を示さず，「高校野球が最後の野球」と明言している。

そんなわけで，正直なところ，もう私は，野球関連本を読むべき当初の目的を失ってしまった。しかしまだ，私はこの手の本を手に取るのである。なぜならば，それ相応に読んでいくうちに，気づいたからである。野球関連本から多くの学びを得れるということを。

野球は時に，野球道とか球道と呼称される。

その名が意味する通り，技術の上達を通して心身を鍛錬させ，人間形成を目指すのが野球なのである。己と向き合って，かつ，己以外とかかわって，真摯に己を掘り下げるのである。

このように野球をとらえると，人とはなにか，人生とはなにか，なぜ人は生きるのか，なぜ人は野球をするのか，という問いに対する答えを見出すため，ひたすら精神世界と現実世界を行き来することとなる。その時，野球を通じて，いろいろな学びを得れるのである。

そのことに気付くと，ヒューマンサービスの世界に身を置いて，ヒューマンサービスにかかわる専門書ばかり手に取っていてはなかなか気づけないことを，野球関連本は教えてくれたりするのである。そしてその時私は，「今いる世界」を，「外の世界」からみることの大事さに気付くのである。まるで，虫瞰（ちゅうかん）から鳥俯（ちょうかん）に切り替わったような感覚といっていいだろう。

本原稿のタイトルで用いた虫瞰とは，「虫の視点から，近くの局部的な物事をみること」である。同義語とである仰望（ぎょうぼう）とは，「下から上を仰ぎ見ること」である。そして，それらの対義語となる鳥瞰，または俯瞰（ふかん）は「高い所から見おろし

眺めること。転じて，全体を大きく眺め渡すこと」を意味する。

これらは，（ひとによっては）あまり日常では使わない，使われない言葉かもしれない。少なくても私は，「俯瞰」以外，日常生活でほぼ使ったことがない。だが今回，野球関連本を積み上げて予想もしなかった気づきを得た時，これらの言葉を想起した。いうならば，自身の専門領域ばかり深めるな中で行き詰まり，そこで陥った視野狭窄を打破するために，他領域に活路を見出すように，といったら，わかりやすいかもしれない。

例えば，オリックス（NPB）やエンジェルズ（MLB）などで活躍した長谷川滋利氏が著書「適者生存」で述べているのだが，彼は現役野球選手の頃から，そしてシーズン中でも（！），ゴルフを嗜んでいたらしい。それは，ゴルフを通して，野球のために学ぶことが多かったからしい。ゴルフでコースをまわる際，序盤でスコアが崩れても，「途中で放り投げだすわけにはいかない。どうやって集中力を保つのか・・・」という局面から，「野球も同じように，登板して打たれた後も，自分で交代するわけにはいかないから，いかに自分の気持ちをコントロールできるのかが大事」と，重要な気づきを得ているという。

この例が示すこともまた，「自分の専門領域以外から，自分の専門領域にかかわる大事な智慧を学ぶこと，学べること」と言っていいのではないだろうか。

そういえば，この長谷川滋利氏，漫画が好きと公言している（詳しくは彼が著した「メジャーリーグで覚えた僕の英語勉強法」の 35 ページをご参照あれ）。そして，本稿第 4 章のテーマは漫画である。そこで，先の話を踏まえて，今回私は，「漫画の神様」といわれた手塚治虫の「火の鳥」をご紹介したい。

主人公からみた世界と，その主人公をみる火の鳥がみる世界

世界的に名高い手塚治虫氏の説明は省くが，正直なところ，「火の鳥」も同様に，世界的に高名である。多くの読者はよくよくご存知な方も少なくないだろうが，少しだけ，作品について触れていきたい。

「火の鳥」は，漫画のみならず，アニメ，ゲーム，映画，演劇などにマルチに取り扱われた高名な作品である。詳しいことはわからないが，昭和 29 年（1954 年）にまず「黎明編」が発表され，以降，「エジプト編」「ギリシャ編」「ローマ編」，「黎明編（新構成）」，「未来編」「ヤマト編」「宇宙編」「鳳凰編」「復活編」「羽衣編」「望郷編」「乱世編」，「望郷編」「乱世編」「生命編」「異形編」「太陽編」と，30 年以上続く大作である。

各作品において，それぞれ独立した主役が登場し，まったく別世界，別時代，別次元，別惑星のストーリーとして展開される。主役，つまり主人公は主に人間だが，時に非人間となることもある。そして，どの作品にも「火の鳥」という超生命体が現れ，直接的間接的に主人公たちとかかわるのである。

主人公たちは，名誉，愛情，野心，絶望，喜び，希望，平和，肉欲，貪欲，献身といっ

た，だれもがもつ何らかの感情や本能に基づく悩みや苦しみと向き合い，よくも悪くも必死に生きて，よいとも悪いといえない結末を迎える。

この作品を主人公視点で見つめると，とにかく，悲しいとか，つらいとか，むごいとか，報われないとか，あまり楽しくない感情が感じるかもしれない。しかし，そんな主人公とかかわる「火の鳥」視点で捉えると，実はまったく異なる感想を抱くことが少なくないだろう。そして読者は，どちらの視点もまた，重要であって，どちらの視点も自分のこととして初めて，この作品から得れる学びを最大化できる。少なくて私はそう感じるのである。

先に，野球オンチの私が野球関連本を通して，普段気づけない学びを得たと語った。この感覚は，「火の鳥」の読み方と似ているような気がする。ぜひ，本稿の読者が「火の鳥」を手に取った際，どのような捉え方，感じ方をされるか，お聞かせ願いたいものである。

漫画を読む者の視点と，読まない者の視点もまた

もう立派な「おっさん」となった私は，子どものころと異なり，ほとんど漫画を読まない。しかしそれでも，過去の経験という財産から，漫画から学ぶことは少なくない。

そうそう，二階堂先生もまた，私とは異なる意味で，漫画をあまり読まないらしい。そんな二階堂先生に無理やりペンをとってもらえて，ありがたいやら，申し訳ないやらである。ぜひ，ご無理のない範囲で，二階堂先生のご経験なりお知恵をお借りしたい。きっとその時，漫画を読む者の視点と，（あまり）読まない者の視点の交差から生まれる，また新しい智慧があるような気がする。

－つづく－

タイトル名「対人援助実践をリブートするこの一冊」

第 36 回：第 4 章-その 8-

サステイナビリティ

著　：二階堂哲
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

漫画はネタ切れ…

正直に言うと，本当に困っている。このシリーズが続くとは思わず，軽い気持ちで引き受けてしまった。もう紹介できる漫画がない。

前回は，加藤伸吉『バカとゴッホ』を取り上げた（第 30 回：第 4 章-その 2-　対人援助学マガジン第 61 号，231 ページ～　https://humanservices.jp/wp-content/uploads/magazine/vol61/40.pdf）。

これ以外に夢中になって読んだ漫画は，『風の谷のナウシカ』くらいである。

宮崎駿の『風の谷のナウシカ』は，1984 年に劇場版が公開された。私たちの世代であれば，テレビ放映などで何回も目にしているであろう。私はたぶん小学校 6 年生くらいのときに劇場版を観て強い衝撃を受けた。我が家には漫画禁止というルールがあったにもかかわらず，親に懇願して漫画を買ってもらった記憶がある。

風の谷のナウシカの主要なテーマは，人と自然の共生，そして戦争や人間の愚かさである。

持続不可能な社会

私は毎日，片道 20km の距離にある職場まで車で通勤している。1 日に使うガソリンの量はおおよそ２L だ。石油がどのような過程で生成されるのか，私にはまったく分からない。けれど，私が往復 1 時間の通勤で使ったガソリンは，何千年，数万年もかけて海底に沈殿した生物が作り出したものなのだろうと思う。そう考えると，これほど貴重な資源を，日々あまりにも当たり前のように消費してよいのだろうか，という疑問が湧いてくる。どう考えても，生命や地球にとって持続可能なあり方とは言えない。

食事も同じだ。いま飲んでいるコーヒーの容器は，石油から作られているのだろうし，中身のコーヒーも，中南米のどこかで生産されたコーヒー豆を，遠く日本まで船で運んできたものかもしれない。

ウルリッヒ・ブラントとマークス・ヴィッセンは，このような「普通の暮らし」を「帝国型生活様式」と名付けて，資源の収奪や文化や生態系の破壊の温床だとしている。そう，この暮らしは，どう考えても持続可能ではない。私が日常の些細な場面でこうしたことを考えてしまうのは，『風の谷のナウシカ』の影響が少なからずあるのだと思っている。

対人援助職の持続可能性

持続可能性という視点は，対人援助職にとっても重要なテーマでもある。

労働には，３種類あるらしい。肉体労働，頭脳労働，感情労働だ。対人援助職は，とくに感情労働の面で困難を伴う。人と人とが関わる現場では，感情的な摩擦が避けられない。その摩擦が蓄積し，限界を超えたとき，援助者はバーンアウトし，現場を去ることになる。

感情と感情がぶつかり合う対人援助の現場で，いかにして持続可能に働くか。正解は，無限にあると思うけれど，一つを，私はナウシカの生き方に見ている。

象徴的なのが，ナウシカとキツネリスのテトが出会うシーンだ。野生のテトは，凶暴でナウシカの指に噛み付く。ナウシカは，痛みを感じながらも，優しく「こわくない，こわくない」と語りかける。するとテトは逆立てた毛をゆるめ，傷口を舐めはじめる。そこでナウシカは，「怯えていただけなんだよね」と母親のような母性で受け入れてしまうのである。ここには，直情的に反応せずに全てのことを平静に受け入れるマインドフルネスと，相手を慈しむコンパッションがある。

対人援助において，この二つは支援される側のためだけでなく，援助者自身を守るためにも欠かせないスキルだと感じている

ナウシカは噛まれたけど…。

－つづく－

タイトル名「対人援助実践をリブートするこの一冊」

第 37 回：第 4 章-その 9-

これからの一歩

著：小幡知史
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

作中のセリフ

私はこれまで，本企画の中で「家栽の人」と「ブラックジャックによろしく」の２作品を紹介した。

前者の「家栽の人」は，「答えがないという答え」という発想を私にもたらし，対人援助の実践において常に悩み続けるという，私自身のある種の価値観や思想のリブートに寄与している。また後者の「ブラックジャックによろしく」は「僕がやらなきゃ，誰がやるんですか？」という作中のセリフが，私自身が常に対人援助の最前線に現在もなお居続ける強い動機に関わるリブートに寄与している。

ところで，これまでの連載を振り返っていると，作品を紹介しているようで，実は影響を強く受けているのは作品自体というよりも登場人物の言葉であることに気付かされた。実際，今回ご紹介する漫画も，作品全体というより，作中のある人物の，ある言葉が私の対人援助実践のリブートに大きく影響している。

努力した者が全て報われるとは限らん。

ということで今回ご紹介する漫画は，「はじめの一歩」である。

すでに累計 100 巻を超える大長編スポーツ漫画であり，ご存知の読者も多いかと思われる。物語全体は，主人公でいじめられっ子だった「幕之内一歩」が，ボクシングと出会って大きく変化していくサクセスストーリーと言えるだろう（近年は主人公が引退してコーチにまわるなど，迷走？している感もあるが…）。

この漫画には，魅力的なキャラクターが数え切れないほど登場する。主人公のライバル的な存在である「宮田一郎」，同じボクシングジムの先輩で世界チャンピオンである「鷹村守」，さらに良き先輩ポジションの「青木勝」や「木村達也」…。

すべてのキャラクターが生き生きとして，さらにその性格を裏打ちするバックボーンも

あり，それぞれの人となりを見るだけで大いに感銘を受ける。そんな中で，私の対人援助をリブートするきっかけとも言えるキャラクターは，主人公…ではなく，指導者として登場である「鴨川源次」（以下，会長）である。

すでに老齢のキャラクターであるが，名伯楽として名高い設定だ。会長は主人公の才能にいち早く気付き，独自の指導法で主人公にボクシングを教えるだけでなく，ボクシングという競技に対するマインド，精神性についても教示する。さらに会長は主人公を競技者としてだけでなく，人としてどのように生きるか，ある意味で生きる道についても指導する。

そんな会長が作中で放った言葉。それは「努力した者が全て報われるとは限らん。しかし，成功した者は皆すべからく努力しておる」というものである。

成功した者は皆すべからく努力しておる

自身の対人援助をリブートする言葉…と言っておきながら，実はこの言葉が発せられた詳しい文脈は失念してしまっている。ただ，私がこの言葉に触れたタイミングは，おぼろけながら覚えている。

たしか大学院１年生の頃，大学院には入ったものの，学ぶことは多いし，さらに将来の進路は不確かで，常に不安に苛まれていた。心理職として成功はおろか，そもそも生計を立てていけるのか…。そんな時で，上述の会長の言葉に出会ったのだ。

現実世界では，今までしてきた努力が必ず報われるとは限らない。ただ反面，成功した人はすべからく努力していることも事実であろう。この当たり前ともいえる言葉が，当時の社会経験のない学生だった自分にとっては，いたく刺さったことを記憶している（また，会長の人物像が当時の恩師と似ていたことも，大きいかもしれない）。

その後，私自身は障害者支援の現場に入職するのだが，その現場の中でも学会発表を含めた研究活動を続けていられるのは，会長の言葉がやはり大きかった。実は現在進行形で，自身の研究活動といった自己満足の側面も強い活動を続けていられるのは，努力という最低条件がなければ成功，私の現在の文脈で言えば利用者の最善の福祉に寄与しないだろうという想いが強い。

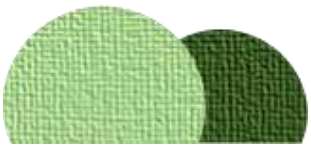
前回の連載にも関連するが，自身の研究活動をする動機づけは常に揺らいでいる。しかし，揺らぐたびに会長の言葉が「これからの一歩」を踏み出すための，自身の原動力をリブートする一手になっていることは間違いない。

―つづく―

新・島根の中山間地から Work as Life

第７回
「自分らしさの物語」

野中 浩一





1. 貧しさと、動く力

私は貧乏や貧しさに関する話に関心が高い。子どもの頃にまんが日本昔話をたくさん見てきたからかもしれないし、同じく子どもの頃に戦中・戦後の語りを聞いたためかもしれない。そうした話を読むにつけ、他人事とは思えず、明日はわが身と思えるのである。

これまでいくつかの貧乏話を読んできたが、中でも衝撃を受けたのが水木しげるの「ドブ川に死す」である。おそらく実話であろうこの話、あまりの突然さと無常さに息を飲んだのを覚えている。

話は変わるが、私が好きな本の中に『貧乏人の経済学　もういちど貧困問題を根っこから考える』がある。たまたま書店で見かけて一目ぼれして買って帰った本である。その本にはこのような記述がある。

「リスクに直面すると（所得リスクだけでなく、死や病気のリスクも含みます)、人は不安になり、不安になると緊張して憂鬱になります。鬱の症状は貧乏人のあいだにはずっとたくさん見られます。緊張していると集中できず、これは生産性を下げます。特に、貧困と身体の分泌するコーチゾルの水準には強い相関があり、コーチゾルはストレスの指標です。そして逆に、コーチゾル水準はその世帯が支援を受けると低下します。（中略）これは重要なことです。コーチゾル水準は、実は直接的に知覚力と意思決定力を阻害するからです。」

日本には江戸時代から「貧すれば鈍する」という言葉がある（※1)。この記述はそれを裏づけるものであり、同時に、人は支えがあることで貧しさからくる「鈍さ（動けなさ)」を緩和することができるという希望を添えてくれるものでもある。

例えになるが、「水がなみなみと注がれたコップ」を持って動くと簡単に水がこぼれてしまうため身動き

がとりにくいものだが、別の誰かのコップにその水を少し移し替えさせてもらえると、その人はがぜん動きやすくなる（その人のもつ力に信頼をおく対等な方向性）。

しかし実際に（貧困に限らず）支援の現場を見ていると、問題を抱えているとされる人が持つ「なみなみと水が入っているコップ」に、支援するという役割のもとで、さらに水を加えようと頑張る支援者の姿を見ることの方が多い（その人に現状以上の何かをさせようとする不信の構えであり対等ではない関係性）。

支え合いとは、前者のようにありたいものである。

2. 乳幼児期のアドボカシー（権利擁護）

20 年間、不登校や発達神経症（発達障害）といったレッテルを貼られた子どもたちと一緒に遊び・学び・ケアし合う現場にいた者として、思うことがある。

小学校や中学校で学校に行けなくなる（または行かなくなる）子どもたちの多くは、強くサインを出すことができる。頭痛や腹痛を訴えたり、吐き気や発熱があったり、起きられなくなったり、行きたくないと動かなかったり、無理やり連れていかれたら泣いて叫んで暴れたり、そうしたサインがあるから周囲の大人は異変に気づくことができるし、反面、そうしたサインがあるから手を焼くことになる。

誤解を恐れず私流に解釈するなら、その子がお腹の中に長らくため込んできた「不安や緊張」の溜まりがあり、それが器からこぼれるほど溢れていて、日々の集団生活や学習の連続の刺激に耐えられないという状態である。意欲が湧かず、勉強や運動に空白（ブランク）ができ、様子を見ながらできそうなことだけを細々と行うことになる。

ここで親としては勉強をさせなければと塾や家庭教師をつけることもあるが、多くの場合それは期待外れな結果になる。なぜかといえば、学校に行けない根本には不安や緊張の蓄積があり、それに伴う自律神経やホルモンバランスの失調があり、その結果としての著しい意欲の減退・停滞があるからである。そのため、そうした不安定で不栄養な土壌にいくら種を撒こうとしてもなかなか芽は出ない。

こうした子たちの多くは、不登校になる手前、学校に通えていた時期の集団生活の中で、関係面または学習面においてなにかしらの支障が出ていることが多い。また、そのどちらも支障はないけれど、普段の会話や行動の端々から独自性の高さや敏感さ・繊細さが垣間見える子であることもある（こうした状況は人それぞれで、独立していたり複合していたりする）。

こうした様々な形で現れる不適応に繋がる兆候―それは関係の築きにくさやトラブルの多さ、極端な学習の苦手さや身につかなさ、言動における独自性の高さだったりする―は、近年は先天的な発達神経症

（発達障害）もしくは特性として捉えられていた。しかし、最近ではそれだけでは説明がつかないことも多いと考えられ、後天的な成育との複合要因についても言及されるようになってきた。（※2）

以上の観点から、もし日本社会が、不登校になるほどの不安や緊張、ひいては自律神経やホルモンバランスの失調により、ものごとや関係の「続かなさ（中途断絶）」を抱える子を減らしたいと考えるのであれば、乳幼児期の子どもの意志や感覚を尊重することが最も有効であろうと私は考えている（乳幼児期のアドボカシーの視点）。

なぜなら、0 歳から 5 歳の乳幼児期は、感情制御やストレス耐性を司る脳の神経基盤が構築される決定的な時期だからである。とりわけ 0〜2 歳は、応答的な関わりを通じて HPA 軸（ストレスに対応する脳のシステム）が調整され、2〜5 歳にかけては前頭前野の発達に伴い、気持ちや行動の自己制御力の土台が形成される。

しかし、小・中学生の子どもたちが身体症状や明確な拒絶によって過剰な負荷へのサインを発信できるのに対し、乳幼児期の赤ちゃんや子どもたちは、言語や行動による自己決定の手段を持たない。誰と、どのように過ごすのかは、ほぼ大人の裁量や社会・経済の都合によって一方的に決められてしまい、環境への過剰な適応を「理由のわからないぐずり」や「ただ黙って耐える」として表現するしかなく、そのサインは見過ごされたり、単なる手のかかる行動として処理されたりしやすい。

したがって、不登校の小・中学生に行うのと同様に、乳幼児の非言語的なサインを周囲がすくい上げ、日々の関わりや環境に反映させていくことを提案したい。この「乳幼児期のアドボカシー」を、個々の家庭や一部の保育者の自己責任に帰するのではなく、社会全体で子どもの感性を尊重することができる環境として担保できれば、脳の土台が作られる最も脆弱な時期に、人知れず不安や緊張にさいなまれ過剰なストレスに晒される子を減らすことができる。（※3）

結果として、学童期や思春期を迎えたときに、器からこぼれ落ちるほどの「不安や緊張」を溜め込んだ末の不登校や、行き場のない生きづらさを抱える子どもたちが、多少減っていくのではないだろうか。

3. 世界を好きになる理由

「キミのことを好きになる、だから世界をいま好きになる yeah,yeah」。このフレーズは「めざましテレビ」でも流れていた、いきものがかり（歌手）の楽曲『NEW WORLD MUSIC』の歌詞の一部である（※4）。この歌詞は男女のことを描いているのか、もっと広く人と人とのことを描いているのかは知らないが、私はこの歌を、シンプルながらも核心をついた歌詞だなと感じながら聴いている。

誰かが自分に対して興味をもってくれること、関心を寄せてくれること、そのことがどれだけ人生にお

いて気持ちを温かく勇気づけてくれるか。「身近な誰かが、私のことを理解しようとしてくれている」そして「私が身近な誰かを理解しようとする」。人と人とはそれぞれ違う中で、それでも誰かが誰かを理解しようとする営みこそが、関係性そのものであるように思われる。

人生の中で、自分が生きている価値を強く感じさせてもらった出来事がある。私が 30 歳くらいの頃、妻と娘を島根に置いて、3 泊 4 日のあいだ用事で岐阜に出たことがあった。そしてすべての日程を終えて、車で家まで戻ってきて玄関のドアを開けた時、当時 3 歳だった娘が「パパが帰ってきた！パパが帰ってきた！」と満面の笑顔で家の玄関をぐるぐると跳ね回って、私を出迎えてくれた。娘の心からの喜びが全身で表現されたその姿に、私はそれまで味わったことがないような心の奥底からの感動が湧き上がり、「ああ、今日のこの時間だけで、これから先の一生分の喜びをもらったな」と感じたことを覚えている。

現代はいろいろな人と繋がれる世の中であるけれども、身近にいる人を理解しようとして、その中から生まれる関係性は特別な実りがあるように思われる。そしてこの「誰かを好きになる、だから世界を好きになる」という、身近な相手に対する愛情をきっかけとして、人生や人に対する寛容性が前向きに拓けていく感覚を大切にしていきたいと感じている。

4. 自分らしさの断片

「自分らしさ」は他者との関係の中に生じる。そして、「自分らしさ」は時と場所と人と状況により変化する。「自分らしさ」とは何か？と考えたときに、そんな言葉が私の中に浮かんできた。

榎本は著書『〈自分らしさ〉って何だろう』の中で、「やってみることで発見する自己」（行動）、「他者の目という鏡に映し出される自己」（比較）、「日本らしい繋がりや共感性に基づく関係性としての自己」（文化）など、様々なアプローチからの自己像を提示している。

同書の中で特に興味深かったのは、日本人は「恥の意識」によって「名誉ある行動」が導かれるとみなす感覚をもっており、「人の目を意識する心をもつことで、法的裁きを厳しくしなくても社会の秩序が保たれてきた」という点である。しかし、現代はその前提が崩れつつあるのかもしれない。ここ数年は特殊詐欺や押し込み強盗など日本社会の劣化を表すような事件が多発しているが、家や地域が形骸化する中で生じた、日本人の「人の目」に対する意識の弱化と、これら事件とは無関係ではないのだろう。

荒川は著書『「居場所がない」人たち』の中で、未婚化、少母化、高齢者の多死化が進む日本社会でも「ソリッド（固体）社会」から「リキッド（液体）社会」への変化が起きているとして、旧来型の家族・地域・学校など「所属するコミュニティ」から、趣味や仕事やイベントなどを通じた弱い紐帯による「接続するコミュニティ」への移行を促している。

この著書の中でなるほどと感じた言葉がある。「「仕合わせ」とは、さらに語源を辿れば「為し合わす」である。（中略）つまり、「誰かと何か行動を一緒にする」こと自体が「しあわせ」ということであり、（中略）「しあわせ」とは状態ではなく「しあわせる」という行動そのものだった」とする説である。結婚も就職もその状態になることが「しあわせ」なのではなく、そこで誰かと何かをすることが「しあわせ」だと言うのである。

さてここで、AI（Gemini）にも「自分らしさ」について聞いてみた。すると、自分らしさとは「自分らしさ（確固たる本当の自分）」という実体があるわけではなく、人間の認知と社会関係が生み出した「極めて機能的で、必要不可欠なフィクション」であるという解釈が提示された。

詳しくは、①自己の納得のために「編集された物語」であり、②他者や環境など関係性のネットワークの「結び目」に立ち現れるものであり、③「自分の人生には意味がある」「自分の選択はよかった」と思いたい、人間ならではの「切実な祈り」であるという。

今も昔も、社会には常に様々な制約があり、多様な理不尽が横たわっていることがある。そんな中でも誰かと何かを為し合わせながら、その時々の関係性の結び目において「これでいいのだ」と言えることは、自分らしさのひとつの形なのかもしれない。

5. 反発する力

農家に生まれた人が、自らの家庭での経験を経て、農家になりたくないと反発して都会のサラリーマンを目指す。教師の家庭に生まれた子どもが、家庭がまるで学校のように教育と徳育の場になっていることに嫌気がさして、教師にはなりたくないと別の道を目指す。そんな話を聞いたことがある。

もちろんその逆で、一時期は反発していても、やはり家系の流れを引き継ぎたいと考えを変える場合もあるだろう。また、家庭の体験がその子にとってポジティブなものであれば、親のように農家や教師になりたいと思う場合もあるかもしれない。昭和という時代には、こうした家系の流れに反発する形での自己形成がよく見られたように思う。

かく言う私自身の若い頃の反発も、サラリーマン管理職である父の全国転勤で連れまわされた経験が発端であり、一人っ子の自分が引っ越し・転校を繰り返し、様々な社宅で住むことを余儀なくされたことへの抵抗であった。その反動によって、私はまだ子どもだった頃から「引っ越しがない仕事に就き、一軒家の持ち家で暮らし、子どもは一人っ子にしない」と決めており、これらのことは 27 歳〜30 歳の間に成就した。

一方で最近の子どもたちからは、そうした強い反発の話をあまり聞かないように思う。それは、「家業」

が一般的でなくなったことや、「職」と「住まい」との分離が進んだことで、昭和と比べて家族と一緒に過ごす時間が減少したためであろう。加えて、親の仕事ぶりを日常の中で深く知る機会を持たない若者が増えたという背景もあるのかもしれない。

親の生き方や家庭環境に対する「こうはなりたくない」という強烈な反発心は、皮肉なことに、自分が進むべき道を明確に示す「強固な羅針盤」として機能する。そのため、反発すべき「壁」がないということは一見平和で自由に見えるが、同時に「自分とは何か」の軸をゼロから探さなければならないという別の困難を生み出していると言えるのではないだろうか。

6. お互いの「自由」を認め合う

苫野一徳は著書『はじめての哲学的思考』の中で、ヘーゲルや竹田青嗣の言葉を引用して、私たちが本当に自由になりたいのなら、「お互いがお互いに、相手が対等に『自由』な存在であることを認め合うこと。そのようなルールによって、社会を作っていくこと」といった「自由の相互承認」の「原理」に基づくしかないと述べている。

さて、ここで私が生きてきた昭和から平成という時代を振り返ってみると、戦争という苦難を共有してきた世代を中心に、経済成長や生活の充足が進み、次第に社会の自由度が高まっていった時期であったと感じている。それはモータリゼーションによる移動の自由や、職業選択の自由、インターネットや携帯電話の普及による通信や発信・受信の自由など、様々な「手段」としての選択肢を私たちに生み出してきた時代でもあった。

そして令和へと時は過ぎ、こうした豊かさのための手段は次第に「個人の能力格差＝機会や収入の格差」として現れ、金融資産を持つ者と持たざる者との格差を広げ、それが学歴や職歴となって世代間で引き継がれていく構造を生み出してきた。また、数年にわたるコロナ禍や、昨今のコメ不足とコメ高騰のような社会的混乱が生じたときに、解決や解消に向かう装置として、またときに混乱を助長する装置としても機能してきた。

こうした様々な状況を近代においてジャッジしてきたのが「科学」であり「科学から導きだされた数々のデータ群」である。

しかしここで、同じく苫野の著書にある「事実から当為（あるべき姿や為すべきこと）は直接導けない」という言葉を拾いたい。

確かに科学的な知見やそこから得られた数値やデータ（事実）は貴重なものではあるけれど、多くの場合、それは限定された条件下で導き出されたものである。それを制度や政策に応用した際にはほとんど

の場合、拡大解釈なり、使う側に都合がいい部分的な切り取りのようなことが生じる。(※5)

科学的であることやエビデンスがあることが、中世でいうところの国教の教義のように絶対視されるのを目の当たりにすることが多いと感じることがある。反対に、経験的であることやエビデンスがないことは、不確実なものとして問題視や異端視されるようになってきたとも。

実際にその分野に関わる研究者や科学者は研究における限界を設定しており、そのエビデンスは論文などの一次資料にあるような精緻な条件と手続きのもとで限定的に成立するものである。一方でそれを社会実装しようとするときには、使う側が都合のいいように切り取りや拡大解釈をしている場合がほとんどであろう(論文やデータを導き出した人と、それを社会実装する人は、大概別人であることで構造的あるいは意図的な行き違いが生じさせられる)。

つまり、科学的根拠はあるのか？エビデンスはあるのか？と簡単に口にする人について、研究を知らず、限界を知らない、たいへんに非科学的な人である可能性を疑わざるをえないともいえる。そうした意味においても、そして私が人の育ちに関わる対人援助職者であることも含めて、「科学」と対等な位置付けとして、お互いがお互いに自由な存在であると認め合いながら社会を作っていく、「対話」によって相互理解を促す文化的風土が大切だと思うのである。(※6)

7. 自分らしさのその前に

相互承認されない（相互承認できない）社会は、常に危機と隣り合わせになる。
今この原稿を書いているまさにその日、ある国がある国を攻撃する軍事作戦が行われているとのニュースが入ってきた。私の頭の中に、有名なマルティン・ニーメラーの詩が思い浮かぶ。

「ナチスが最初共産主義者を攻撃したとき、私は声をあげなかった 私は共産主義者ではなかったから

社会民主主義者が牢獄に入れられたとき、私は声をあげなかった 私は社会民主主義者ではなかったから

彼らが労働組合員たちを攻撃したとき、私は声をあげなかった 私は労働組合員ではなかったから

そして、彼らが私を攻撃したとき、私のために声をあげる者は、誰一人残っていなかった」

声なき声に耳を澄まし、目の前の他者と対話し続けること。私たちが「自分らしさ」を語り合える社会を守るための防波堤は、日々のそんな小さな相互承認の営みの中にあるのではないだろうか。

****

＜語句注釈＞

※1　貧すれば鈍する：江戸時代から広く使われる俗諺（ぞくげん）であり、特定の出典を明記できないため、正確な出典は不明。

※2　発達障害と発達障害様の要因：詳しくは第 2 回「区分けと介入」を参照。

※3　こうした「不安や緊張」の蓄積リスクについては個人差があるように思われる。特に気質として、もともとの不安傾向が強い子、反対に自己主張が強い子、独特な感性で集団への馴染まなさをもつ子などが、乳幼児期であれ、集団の中でのストレスや緊張に晒されやすく、将来的な不適応や、発達障害”様”の症状を呈する元となる「不安や緊張」の蓄積をしやすいと推測する。

※4　いきものがかり「NEW WORLD MUSIC」（作詞・作曲：水野良樹,2011 年）

※5　この点は統計調査にも言えることが多い。人間を対象とした質問紙による統計調査の場合、ヨーロッパ系の学者が作成した質問に対して、アフリカ、アラブ、アジア、など別の文化圏でも行ったときには数値どおりの結果が事実であるとは言えないのではないだろうか。その理由は、国や民族の文化が違えば、質問（言葉）の捉え方、そのものごとが良いか悪いかなどの倫理感が違うためである。例えば、日本人が統計上低くなりがちな幸福度や自己肯定感や慈善活動の調査において、日本人特有のあまり主張せず協調や共感を重んじる気質や、もともと自治会や学校など日常で慈善活動が盛り込まれていることなど、数値には表れない基本的な素地があるという要素（質的要素）を加味せずに国際比較をすることは難しいと考えている。

※6　ただし、安全でない対話の場や作為的な思惑は、相互理解と反対の結果をもたらすことに注意深くなる必要もある。

＜引用・参考文献＞

水木しげる（2010）『ビビビの貧乏時代 いつもお腹をすかせてた!』ホーム社
アビジット・V・バナジー／エスター・デュフロ著・山形浩生訳（2012）『貧乏人の経済学　もういちど貧困問題を根っこから考える』みすず書房
榎本博明（2015）『〈自分らしさ〉って何だろう？　自分と向き合う心理学』筑摩書房
荒川和久（2023）『「居場所がない」人たち　超ソロ社会における幸福のコミュニティ論』小学館
苫野一徳（2017）『はじめての哲学的思考』筑摩書房
日田市人権コラム（2021）『広報ひた』よりマルティン・ニーメラーの詩

備忘録～理事長の独り言④～

鳴海　明敏

タイトルを「理事長の独り言」としてみたものの、法人における理事長の仕事は予算関係や諸規定の改正など皆無ではないのですが、こどもたちに関わるようなことでは児童心理治療施設の方からも児童発達センターの方からもさっぱりお呼びがかかりません。それは、どちらも園長や管理者によって順調に運営されているからなのですが、私としてはいかにも手持無沙汰で、独り言のネタも見つかりません。

ということで方向を少し変えて、学生時代に始り現在もなお関り続けている『カウンセリング』に関連して、父のことや青森カウンセリング研究会のこと、「ロジャーズと友田不二男」や「カウンセリングとフォーカシング」などのテーマで、私のこれまでの歩みを振り返りつつ、思いつくままに書いてみたいと思います。

私は、大学で心理学を学ぼうと思って国立一期校と地元の国立二期校を受験し、結果的に地元の弘前大学に入学したのですが、心理学を学ぼうと思ったのは、戦前の早稲田大学の哲学科で心理学を専攻した父の影響です。いまこのように書き始めてみて、何故、父が心理学を専攻したのか聞いたことがなかったことに気が付きました。

父は、弘前市内で紙類全般を扱う商店の、男兄弟の三番目として生まれました。長男は学業優秀で帝大に進み家業は次兄が継ぐことになっていたので、父は自由に進路を決めることが出来たのでしょう、大学を卒業後、岡山市内の出版社に就職して少年向けの科学雑誌の編集に携わっていたそうです。戦後は高校の教員をしていた父なので、この職業選択の経緯は謎なのですが、これもとうとう聞かずじまいでした。父との関係を思い返すと、特にわだかまりがあったわけではないのですが、私の方から踏み込んで、フランクに胸の内を尋ねることを躊躇させるような何かがあったような気がします。

戦争が始まり、招集されることになった父は、故郷に帰り急遽母との婚姻を済ませ、出征しました。父が配属された部隊は、満州の北部でソ連軍と対峙し、国境を守ることが任務だったそうです。具体的な戦闘がないままに、戦況の悪化にともない、本土防衛のために部隊の一部が配置換えとなり、それで父は内地に戻り福岡県内で陣地の構築をしていて終戦を迎えたそうです。内地で終戦を迎えたので、シベリアにおくられることもなく、故郷に戻ることが出来たそうです。

戦後は市立女子高の社会科の教員をしていましたが、やがて、指導主事として市教委・県教委へと異動しました。直接父に確かめてはいないのですが、おそらく教育相談担当の指導主事として、学校現場に教育相談を導入するための仕事だったのだろうと思っています。

私は、戦後に長男として生まれ育ちました。私の下に、弟と妹が生まれましたが、子育ての中心は母親で、父親が子育てに口をだすことはほとんどなかったような気がしています。父に叱られて、叩かれたという記憶もありません。母親は、子どもを育てるうえで、どのように育てたらいいのかと質問したら、「叱らないようにしてくれ・・」とだけ言われた、と話していたことがあります。

大学進学の際に、心理学を学ぼうと思ったのですが、その決定に対して父からの指示もありませんでした。でも、地元の大学の心理学科に合格が決まった時に、嬉しそうに自分の本棚から心理学関係の本を持ち出してきた父の姿を見て、浪人して一期校にチャレンジしようという意欲が消えたことは、今でも記憶にあります。

大学紛争の余波で、周回遅れの本部封鎖や機動隊の導入、内ゲバなどもありましたが、学年が進むに連れて、授業よりも部活動に精を出し、酒も煙草もという私の生活にたいしても、ほとんど口を出したことのない父でした。しかし一度だけ、青森市で「カウンセリング・ワークショップ」という研修会が開催され、そこに、日本のカウンセリング界の第一人者友田不二男という人が来るので、お前も参加してみたらどうか、と勧めてくれたことがありました。4 年生になる春休みのことでしたが、父の勧めに応じてこのワークショップへ参加したことが、私と「カウンセリング」の関りの始まりでした。

青森県教育センター（青森市桜川）の主催で、1971 年（昭和 46 年）2 月 13 日～14 日の一泊二日の日程で開催されたこの「カウンセリング・ワークショップ」は、日本カウンセリング・センターで 2 年間学んだ後、青森市で中学校教員をしていた工藤和仁が、県教育センターの主導主事になって企画・実現したもので、県内では、最初のカウンセリング・ワークショップでした。研修の世話人として、県外から友田不二男、斎藤多喜子、梅津洋作の 3 人が、県内からの山鹿素、小宅大典、徳差敬哉、藤原保、工藤和仁の 5 人は、県内のカウンセリング研究会のメンバーでした。参加者は、県内の小・中・高の教員で、約１２０名でした。今思うと、県内の教員対象の研修会に学生の私が参加出来たということは、父が後ろで手を廻してくれていたのでしょう。

青森カウンセリング研究会は、このワークショップを第 1 回として、工藤和仁が中心となり県内でワークショップを開催するようになり、中断もありますが、現在も年一回開催されています。今年も、6 月に第５２回目の開催を予定しています。また、県内で「カウンセリン

グ」ということで学習する仲間の塊は、弘前市周辺や八戸市周辺にも広がり、それぞれ現在も活動を続けています。

父が、私にこのワークショップへの参加を勧めてくれたのは、自分が北海道の定山渓で開催された、日本カウンセリング・センター主催の９泊１０日のワークショップに出張ということで参加した経験があったからでした。その時の体験を、私に次のように語ってくれました。「いつ、何について、どうするのかというような研修プログラムはないということ。各自が、それぞれの問題意識に応じて研修するのだということ。初めのうちは長い沈黙が続いて、面食らったということ。終わってみたら何冊も持参したノートが空白のままであったということ」などでした。

父からの予備知識があったので、ワークショップの会場で戸惑うことはありませんでした。最初の長い長い沈黙も、「これが、あの沈黙なのだな・・」と冷静に会場を眺めていました。やがて、グループが分かれるような展開になったのですが、私はさっさと大会場を後にして、少人数のグループと行動を共にしました。そのグループには、お目当ての友田不二男は含まれていませんでした。友田不二男を見に来たのに、これでは困るなあと思っていると、事務局から、「夕食後の食堂に友田先生が出向くので、先生と話したい人はどうぞ・・」と案内がありました。私は勇んで早めに食堂に出向き、友田不二男が座るであろう椅子の真ん前に陣取りました。やがて、友田不二男が現れ、私の目の前に座りました。食堂には私のあとから続々と参加者が集まり、押すな押すなの盛況でした。

私はそこで、友田不二男から二つの衝撃を受けたのです。一つは、友田不二男の「存在感」でした。それほど広くないスペースに密集して、何か役にたつことを話してくれるのではないかと期待して、じっと息を殺して見つめ続ける多くの参加者の視線にさらされながら、一言も発せず悠然と煙草を吹かし続ける、その「存在感」に二十歳を過ぎたばかりの私は圧倒されてしまいました。

もう一つは、誰も何も発言しないので我慢できずに私が発した質問への回答でした。私は、聞きかじりの知識で、「受容ということはわかるような気がするが・・全面的な受容なんてあり得ないのではないかと思うが、その辺について教えてください！」と質問したのです。すると、友田不二男は、平然と少しも動じる様子もなく「分かりませんなあ・・」と言ったのです。私は、当然分かってここに居るのだろうと思って質問していたので、あまりにも平然と「分かりません」と言い切る友田不二男の姿に、唖然として、驚くとともに畏敬の念のようなものが湧き上がってきたのでした。「知らないからこそ、求め続ける」という姿勢で生きている人に出会った、初めての体験でした。

（文中、敬称は省略しています）

（了）



はじめに

夏のエデュケーター研修の出会いから、ついにこの1月にフランス視察が実現した。行く前に異常な緊張感が訪れ、「何者でもないわたしが行く意味はなんだ」と揺れた。が、だからこそかなりの感受性のまま訪れることができたことは今でも幸いだと思う。

フランスを訪れ、教育や福祉の現場を見てまわるなかで、私は制度や支援技法の違い以上に、もっと根底にある「人の在り方」の違いを感じていた。それは明確な言葉として把握できるものではなく、むしろ身体感覚として残る静かな違和感であった。帰国後もしばらくその感覚は消えず、思考よりも先に身体の内側で反響し続けていた。 私はこの状態を「未整理の風景」と呼び、帰国後すぐの個展では、その感覚を無理に意味づけることなく、そのまま場に置くことを試みた。フランスで体験した関係のあり方と、展示空間で立ち上がっていた現象には、深い連続性があるように感じている。

支援が「特別」でないという文化

フランスの現場で印象的だったのは、「支援している」という構えが前面に出ていないことである。しかしそれは関心が薄いということではなく、むしろ理念が深く内面化されているがゆえに、自然な振る舞いとして現れているように感じられた。 あるエデュケーターが語った言葉が強く印象に残っている。

「私たちは炎を燃やし続けるのです。理念を伝え続ける。それが仕事です。」

その語り口は決して熱く激しいものではなく、むしろ当然のことを確認するかのような静かな確信に満ちていた。 支援とは技術の提供ではなく、理念を持続的に体現する営みであるという感覚が、そこにはあった。

大人たちは過剰に介入することなく、しかし関係の場に確かに存在している。子どもたちは守られている安心感のなかで、自分のリズムを保ったまま過ごしている。 そこには「正しく導く」という規範的態度よりも、「共に存在する」という関係的態度が基調としてある。 この差異は制度の違いというよりも、人間の尊厳（dignité）を前提とする文化的基盤の違いであると感じた。 尊厳は理念として掲げられる以前に、身体の振る舞いとして現れている。つまりそれは倫理というよりも、存在論的態度として共有されているのである。

「途中であること」を受け入れる社会

もうひとつ特徴的だったのは、人も関係も常に生成の途中にあるものとして扱われていることである。 **結論を急がない。 評価を急がない。 意味づけを急がない。** この態度は、現象学におけるエポケー（判断停止）の社会的実践とも言える。 判断をいったん保留し、現れている現象そのものに注意を向ける姿勢は、人間理解を固定化された枠組みから解放する。 未整理であることが欠如としてではなく、生成のプロセスとして尊重されている点に、この文化の成熟を感じた。

展示空間における間主観的現象

帰国後に行った個展、「未整理の風景～Paysage non classé」では、作品そのものよりも、場における関係の生成過程を重視した。 作品の前に立ち止まり、言葉にならない時間を過ごす人々の姿があった。 そこでは理解や解釈が主目的ではなく、知覚と感情が静かに往還する時間が流れていた。 観る者と作品、さらには場にいる他者とのあいだで意味が生成されるプロセスは、まさに間主観性（intersubjectivity）の現場であったといえる。作品は固定された対象として存在するのではなく、関係のなかで生成し続ける現象として立ち上がっていた。

また、即興書と音楽の時間では、身体の運動感覚と場に集う人々の生の時間が共感覚的に交差し、その場に立ち上がる志向性に応答するかたちで音が生成されていった。表現は主体を越え、身体と世界のあいだに生起する関係的現象として現れていた。

未整理という存在様式と援助の現象学

フランスでの体験と展示空間での経験は、援助という行為の意味を改めて問い直す契機となった。 援助とは、相手を変化させることではなく、その人が世界との関係を回復する過程を支えることではないだろうか。

・未整理の状態に耐えること。
・即時的な意味づけを行わないこと。
・相手の時間性を尊重すること。

これらは技法というよりも存在論的態度である。人が安心して未整理の状態にいられるとき、関係のなかで自然な変容が生じる。その生成過程こそが援助の核心であると考えられる。 私たちは世界を理解可能なものとして整理しようとする。しかし現実の経験は本来的に曖昧であり、完全に把握することはできない。未整理のままにとどまることは不安を伴うが、その不確定性こそが関係生成の余白を生む。フランスの文化に感じた確信に満ちた落ち着きも、展示空間で生まれていた関係性も、この余白を許容する態度によって支えられているように思われる。

未整理であることは未完成であることではなく、むしろ経験が生成し続けている状態である。すみあそびの実践、展示空間、そしてフランスでの経験は、いずれも同じ問いへと収束していく。人はどのようにして、自分のままで世界と関わることができるのか。 この問いに明確な答えは存在しない。しかし未整理のままに立つことが、その問いに開かれ続ける態度であるといえるだろう。 今後も私は、その風景のなかに身を置きながら、関係が生まれる瞬間に立ち会い続けたいと思う。（また不思議なご縁から、3/21~4/1はすみあそびをしにフランスに行くことになった。新たな機会に恵まれたこと、人生とは本当に何が起こるか分からない）

朱紅icco (櫻井育子）｜生涯発達支援塾TANE・はみだすラボ代表
宮城県在住，1979年生まれ。水瓶座。書家・美術家。認知発達の視点からアートと生き方を統合し、既存の枠を外し続ける「フリーランス教育者」のオンラインサークル「はみだすラボ」を現在拡張中。
Art Play Worker養成講座BASIC、第2期は5月開始（募集中）

コソダテノシンリ（12)

中谷陽輔

連載第12回です。前回に引き続き、コソダテにおける「余裕」について書き進めます。前回は「親の余裕＝子どもを守るインフラである」というところまで述べましたが、「でも、そのインフラ（余裕）をどのように増やすことができるのか？」という大事なところで終わっていました。

今回は、その続きとして、余裕は「自然に湧く」のを待つだけではなく、「意図的に作りだす」というのが可能であること、そしてそのための具体的方法についても、できるだけ整理してみます。

「余裕」は“意図的に作りだす”ことができる

前回、「余裕」は、“子育てでかかる負担＝要求（demands）”と“それを支える心・時間・お金・サポートなど＝資源（resources）”のバランスとしてとらえられることを書きました。

そして、親のバーンアウト研究では、「要求 ≫ 資源」の状態が慢性的に続くと、極度の疲弊、子どもからの情緒的距離、親としての有能感の喪失が生じてくることが示されてきています。また、暴力やネグレクトの可能性が高まったり、子どもの情緒的混乱のリスクが上がったりすることにも繋がります。さらに、親の「余裕」のなさが、時間をかけて子どもの行動・感情にもじわじわ波及していってしまい、そのことで親の余裕がさらに失われてしまう・・という、「双方向の悪循環」が生じてしまうことになります。

つまり、「余裕」が削れる → 親のかかわりが硬くなる・怒りやすくなる → 子どもが不安定になり、行動が荒れやすくなる → それを受けて、さらに親の余裕が減る…という負のスパイラルが発動しやすい、というのがコソダテノシンリとしてかなり重要な視点です。

子どもは自然に成長・発達していく存在ですが、日々削がれていく親の「余裕」については、自然回復では間に合わない、という状況があちこちのご家庭で生じていることが容易に想像されるからです。

スマホのバッテリーは、使えば減っていきます。バッテリー残量が減るのをただ眺めているだけでも、試しにスマホを手で振ってみたりしても、バッテリーの残量は決して増えません。バッテリーが切れそうなスマホには、シンプルに、充電によるエネルギー回復が必要なのです。

次節では、実際に何をどういじると余裕が増えやすいのか、について、前回と同じく、①時間

的・身体的な余裕、②心理的・情緒的な余裕、③「対人関係・つながりの余裕」の3つの視点で整理してみます。

どのように余裕を「意図的に作る」のか① ： 時間・身体の余裕

コソダテ中の親にとって、一番分かりやすく、一番失われやすいのが「時間と身体」の余裕でしょう。コソダテだけでなく仕事や家事に追われ、まとまった休みをとって充電・回復することがなかなかできない、という親御さんはかなり多いと想像します。

もちろん、まとまった休みを定期的に取れてリフレッシュできるのが理想ですが、そういった方々は「要求 ≪ 資源」の状態にあるといえますし、余裕を意図的に作る必要性はそこまで高くないと言えます。

では、そうでない親御さんには希望がないのか・・というと、決してそんなことはありません。時間・身体の余裕は、「ちょっとした余白」をスケジュールすることで意図的に作り出せます。

仕事領域の研究では、数分程度のマイクロ・ブレイク（ちょっと席を立つ、ぼーっと窓の外を見る、お茶を飲むなど）でも、疲労の軽減、活力の回復、パフォーマンスの維持に有効であることが複数の研究で示されています（Albulescu et al., 2022）。つまり、数時間～数日単位の“まとまった休み”でなくとも、日常の中で、数分単位の“すき間の余白”を意図的に挟みこむことで、じわじわ回復は促せる、ということです。

たとえば、3分間だけ座ってコーヒーを飲む、5 分間ボーっとする、1 分間トイレに一人で入って深呼吸する、みたいな短時間のマイクロ・ブレイクが疲労軽減や活力回復に意味をもちうるのです。さらにいうと、完璧な夕食や、常に整理整頓されたリビングよりも、「親が 10 分間、静かに座っていられること」のほうが、その日の子どもの安全基地としては重要な場合もあるでしょう。

コソダテは仕事でいうと、かなりのハードワークです。そして仕事領域の知見をそのままコソダテに応用するには工夫がいるかもしれません。とはいえ、「数分の余白にも意味がある」というのは、意図的に余裕を作ろうとする側には、心強い知見です。

数分あればできるマイクロ・ブレイクは、意外といろいろとあります。単純に、目をつぶってみたり、遠くの景色や空を眺めてみたりする時間があってもいいでしょう。ちょっとしたことで構いませんし、むしろイベントのような盛大なものほど続きません。「点」を打つように余白を作るイメージです。

ただ一点、現代っぽい落とし穴なのですが、マイクロ・ブレイクの方略として、スマホを代表格とするデジタル機器に頼ることは避けるべき、だと言っておきます。

親のデジタル機器使用が親子相互作用を中断する現象は、「テクノフェランス

（technoference）」として研究されています。デジタル機器による日常的な親子の相互作用の阻害（テクノフェランス）が、子どもの行動問題（かんしゃく、攻撃性、多動など）の増加と関連しており、、それに加えて、そういった子どもの行動問題にストレスを感じた親が、さらなる逃避としてスマホを手に取る、という負のループが生じてしまうことが明らかになっています（McDaniel & Radesky, 2018a,2018b）。

また、スマホをはじめとする「画面を見る休憩（Screen-based break）」を作業の合間にとる場合、他の方法で休憩をとるよりも休憩後の作業スピードが最も遅く、正確性も低くなる、ということも示されています（Kang & Kurtzberg, 2019）。つまり、スマホを見ても休憩にならないどころか、マラソンに例えるなら、給水所で休憩せず他のコースを走っているような状態になってしまうのです。

このように、親としては回復・充電をしようと思っての行動であっても、親子関係の悪化や分断、さらなる余裕の喪失につながってしまうため、スマホなどデジタル機器による休憩は避けて、他の方法を見いだしてほしいと思います。

くり返しますが、大切なのは、その時間を「意図的に作り出す」ことです。

コソダテにおいて、“やったほうがよさげ”なことは数多あります。そのような中で忙殺されそうになったら、いったん立ち止まってみることが必要です。そして、親の「余裕」をインフラ化するために、「何かを足す」より先に、「何を引くか・減らすか」を決めておく。さらに、そうやって空いた「余白」について、すべて埋める前に、マイクロ・ブレイクをスケジュールに入れておく。

・・・このような「ちょっとした余白」を、ほんの少しでも、「意図的に」日常に取り入れてみることは、本来の自分を取り戻すためにも、大切なことなのです。

どのように余裕を「意図的に作る」のか② ： 心の余裕

「余白時間はどうしても増やしにくい…」というときに効いてくるのが、心の持ち方のコツ・スキルになります。

ここでは、前回も少し触れた（1）セルフ・コンパッション（Neff, 2003）と、あともう一つ、（2）マインドフルな子育て（Duncan et al., 2009）を参考に考えてみます。

セルフ・コンパッション（self-compassion）とは、次の3つからなる「自分への思いやり」です（Neff, 2003）

- 自分への優しさ（Self-kindness）
- 「誰でも“詰む”日があるよ」といった共通性の感覚（Common humanity）、
- 感情に押し流されず、ありのままを気づき、観察する力（Mindfulness）

セルフ・コンパッションが高いほど、子育てストレスや抑うつが低く、主観的幸福感が高く、子

どもの行動・情緒問題に対しても、支持的な反応をしやすいという関連が報告されています。また、親を対象にした、セルフ・コンパッションを重視した介入プログラムは、親のセルフ・コンパッション能力を向上させるだけでなく、親の抑うつ・不安・ストレスを減少させたり、マインドフルネスを高めることが示されています（Jefferson et al., 2020）。

コソダテにおいて、セルフ・コンパッションは、回復を早める内的インフラとして機能します。たとえば、親が「やっちゃった・・」という自己反省会を始めると、エネルギーがさらに失われていってしまうことは想像に難くありません。

その代わりに、「今日はなんだか余裕なくてイライラしちゃったな・・（気づき）。そっか、今日は“資源”が十分じゃなかったのかも。やっちゃったことは仕方ない。むしろ、我ながらよくやっているよ（自分への優しさ）。こういう日は、親ならきっと誰でもある（共通性を思い出す）。明日は“要求”を一つ減らしてみよう」と切り替えたほうが、エネルギーは回復しやすくなります。

自分を責め倒したとしても、余裕は増えません。セルフ・コンパッションは、「もっとがんばれ」というムチではなく、「今の条件のなかで、よくやっているよ」という、人間としての妥当な評価を、自分自身に返すスキルです。そうやって、「がんばりすぎない勇気」と「自分への思いやり」をセットにして、余裕を意図的に作る試みともいえます。

もう一つ、マインドフルな子育て（mindful parenting）については、親が「いま起きている親子のやりとり」に意図的に注意を向け、子どものサインと自分の内的な反応・反射に気づき、評価より先に受けとめるプロセスが中核になります（Duncan et al., 2009）。自分の反射（怒り・焦り・不安など）に気づいて１テンポ遅らせられる力、とも考えられます。

日本でも、次の5つの要素からなるマインドフルな子育てを測る尺度（水崎他, 2018）が作成され、研究が発展してきています。

- 観察（音や匂い, 身体感覚など, 外的・内的な様々な刺激に注意を払い観察すること）
- 気づきの伴う行為（その瞬間に起こっていることや自分のしていることに気づき, 注意を持続すること）
- 判断しないこと（そのように考えるべきでないなど, 自分の体験に批判的・評価的に接しないこと）
- 描写（自分の体験を適切な言葉で表現すること）,
- 反応しないこと（自分の思考や感情にとらわれて過剰に反応するのではなく, 距離を置いてそれらを受け止めること）

このような、マインドフルな子育て（「今ここ」に注意を向ける育児スタイル）の度合いが高いほど、親自身が自己批判的であっても養育ストレスが低減すること（Moreira & Canavarro, 2018）や、支持的な養育（反応的でない、穏やかな関わり）が生じることを通じて子どもの情緒・行動問題が低減すること（Parent et al., 2016）などが示されています。

このように、マインドフルな子育ては、子どもとの関わりの「今ここ」に注意を向けること、自分と子どもの感情を評価せずに観察すること、反射的ではなく選択的に反応すること、といった要素からなる育児スタイルです。

とはいえ、正直な実感覚として「24 時間マインドフルに」なんてなかなかの無理ゲーとも感じられます。専門のマインドフルな子育てプログラムを受けることでマインドフルネスな状態にはなりやすくなることは明らかになっていますが（Shorey & Ng, 2021）、現実的には、もう少し具体的な行動から始めてみてもいいように思います。

たとえば、“ながら”を少し減らしてみるというのも一つかもしれません。マイクロ・ブレイクと似たような発想ですが、数分程度の短い時間でも、意図的に手を止めて、子どもの話を聞いてみる。スマホを置き、子どもの顔を見て、途中で評価を入れずに聞いてみる。・・・どうでしょう。日々の生活の流れの中では、意図的に行わないとなかなかできなかったりしないでしょうか。

もしくは、自分の状態について、「あ、いま自分は怒りの波が来てるな・・」「焦りが主導権を握ってきているな・・」と、心の中で自分の心の動きを実況中継してみるのもマインドフルな子育てに繋がります。

セルフ・コンパッション、マインドフルな子育ての考え方それぞれ、「親の心の使い方」が、「余裕」のクッションとして機能しうることを教えてくれています。

意図的に、自分に優しい声かけをしてみたり（セルフ・コンパッション）、“ながら”を減らす時間を少しだけ減らして今ここに目を向ける時間を作ってみる（マインドフルな子育て）。

まずはそういったレベルで十分・・と考えて、試しにやってみる。そういったことを通じて、新たな気づきを得ること、それが心の余裕を生み出す第一歩となりえます。

どのように余裕を「意図的に作る」のか③ ： つながりの余裕

ここまで読むと、「これ、個人に求めること多くない？」という感覚も出てきても不思議ではありません。ここまで述べてきたことは、あくまで「要求 ≪ 資源」にしていくための工夫の一つであり、“しなければならない”と考えるものではないと、ここで再確認しておきます。

そもそも、親の「余裕」は、親だけの努力や工夫で何とかするには限界があるテーマです。

そこで、「対人関係・つながりの余裕」について考えることが役立ちます。

古典的なストレス研究では、社会的サポートがストレスの悪影響を緩衝する（バッファーになる）という枠組みが示されています（Cohen & Wills, 1985）。しかも重要なのは、「実際にどれだけ手伝ってもらっているか」よりも、「いざとなったら、あの人に相談できる」という主観的な安心感のほうが、ストレス緩衝効果は大きいという点です。

つまり、ここでいう「つながりの余裕」とは、困ったときに頼れる人・場所がある感覚のことでなのです。言い換えれば、支援の量というより、日々のコソダテでいろいろ生じる困りごとについて、外部の資源を使える・使えそう、というルート（回路）が複線的にイメージできるかどうかです。

第6回で、子ども 1 人を育てるには 1 つの村が必要（It takes a village to raise a child）というアフリカのことわざを紹介しました。

集団養育が当たり前ではなくなってしまった現代日本。それはコソダテとしては異常な事態ですが、そんな現代日本において、「一人でがんばらない」「一人で悩みを抱えない」という文言は、コソダテの標語やスローガンのようによく耳にします。

とはいえ実際には、「どこに・どう頼るとよいのか」が分からないケースも多いものです。そういう意味で、つながりの余裕づくりは、具体的な“ルートを可視化する”作業だといえます。

まずは「本音で話せる人」「しんどいと言える人」を、家族以外で、最低一人は思い浮かべられるようにしておく、というのも一つです。それは友人でも、支援者・専門職でも、何らかの親のコミュニティでも構いません。

また、そういった話し相手・相談先が複数存在するのであれば、悩みごとや困りごとに応じて使い分けられるとさらにベターだと考えられます。たとえば、愚痴 OK の相手（情緒的サポート）、具体策を一緒に考えてくれる相手（情報・道具的サポート）、実務的に手伝ってくれる相手（実際的サポート）などなど。子育てを村単位で行っていた時代のことを考えると、いろんな役割をもつ資源を使い分けながら頼っても、全くもってバチはあたりません。

支援者の立場であれば、面接や会話のなかで、「この親御さんの“外付けインフラ”はどこか」「どこを太くできそうか」といった視点で一緒に棚卸してみることも有効です。

外的な支援・資源の回路を可視化し、太くしていく作業は、親の孤立をほどくだけでなく、慢性的な資源不足が続くときのバーンアウト（燃え尽き症候群）を下げる意味でも重要です（Cohen & Wills, 1985; Mikolajczak et al., 2018）。

そして人間は往々にして、ストレスが高い状況だと、自分の状況を冷静に俯瞰してとらえることが難しくなります。

自分だけでつながりを考えるのではなく、今ある対人関係やつながりを確認するだけだとしても、誰かに相談する、話してみる。長文で正確に話せなくても構わない。まずは立ち話でも、5分だけでもいい。そこから始めることが、つながりの余裕を回復する一助になりえるのです

最後にちょっとした注意点：「親だけの余裕」にならないために

ここまで読むと、「よし、もっと自分のために休もう」「自分に優しくしよう」「もっと人に頼ろ

う」と思ってくださる方もいるかもしれません。それはそれで、とても大事な方向ですし、とても有難く、喜ばしいことです。

実際、海外ではすでに、「親の慢性的なストレスや孤立は、子どものメンタルヘルス危機ともつながる“公共の健康問題”だ」という認識が広がりつつあります。日本でも、少子化、虐待、不登校、ヤングケアラーなどなど、子どもをめぐる多くの課題の裏側には、親の慢性的なストレスと資源不足が横たわっています。

そのような状況下で、そもそも、親の「余裕」を守ることは、子どもの権利を守ることと表裏一体であるという視点を、政策・職場・地域コミュニティレベルで共有していく必要があると考えます。

一方で、だからこそ同時に、ひとつだけちょっと添えておきたい視点があります。

そうやって生み出された余裕が、「親だけの世界への逃避」になってしまっていないか？という問いです。

時間・身体の余裕の箇所で述べた「テクノフェランス」が例としてわかりやすいかもしれません。つい空いた時間にスマホばかり触ってしまい、子どもとの関わりがどんどん減っていく、といったことはコソダテ界隈ではよくありうることです。

もちろん、常にそうせざるを得ない状況であれば、それはすでに親子関係が黄信号を飛び越えて赤信号になっているサインだといえます。

ただそもそも、余裕を意図的に作りだしたとして、それは何のためなのか、時折思い返すことも重要です。人間は得てして、楽をしたい生き物ですし、現実的でない理想に憧れてしまったりもする、厄介な特徴があります。

コソダテにおける「余裕」を意図的に作っていく先にあるのは、「常に家族みんなニコニコ」「家庭内ははいつも穏やか」といった到達不可能な理想像ではありません。

めざしたいのは、親がそこそこ満たされていて、子どもも自分なりに安心して甘えたり反抗したりできて、家族全体としてなんとかやっていける状態、くらいです。

自分の「要求」と「資源」のバランスが崩れているならば、いったん立ち止まり、「余裕」を取り戻すために、これまでとは違う何らかの工夫が必要です。

一方で、そもそも余裕は、「ある／ない」の二択で語り切れるものではありません。状況に応じて、太くしたり、細くしたり、向きを変えたり、足したり、外付けしたり・・いろんな形の工夫がありえます。

コソダテは「要求」が高い仕事なので、放っておくと余裕は削られやすい。そして親のストレスは、時間をかけて子どもの情緒・行動や親子関係にも波及し、悪循環が生じてしまう。

だからこそ、今回述べたようなマイクロな休息やセルフ・コンパッション、マインドフルな関わ

り、社会的サポート、さらにその他のもろもろの「資源」を活用し、その悪循環を和らげる「クッション」として機能させていく。

そういった行動を冷静にとることができるのは、往々にして、子どもではなく親・大人側です。親・大人から「ちょっとした工夫」を加えることでこそ、親子関係・家族関係の中に良循環が生み出される。だからこそ、余裕は「自然に増えるのを待つ」のではなく、「意図的に作りだす」必要がある、というのが本稿の立場です。

・・・ここまで読んでいただいた皆さんやその周囲の方々のうち誰かにとって、本稿で紹介したような工夫が、日常の良循環を見いだし・生みだすきっかけとなれば、これ以上の喜びはありません。

【引用・参考文献】

Albulescu, P., Macsinga, I., Rusu, A., Sulea, C., Bodnaru, A., & Tulbure, B. T. (2022). “Give me a break!” A systematic review and meta-analysis on the efficacy of micro-breaks for increasing well-being and performance. *PLOS ONE, 17*(8), e0272460. https://doi.org/10.1371/journal.pone.0272460

Cohen, S., & Wills, T. A. (1985). Stress, social support, and the buffering hypothesis. Psychological Bulletin, 98(2), 310–357. https://doi.org/10.1037/0033-2909.98.2.310

Duncan, L. G., Coatsworth, J. D., & Greenberg, M. T. (2009). A Model of Mindful Parenting: Implications for Parent–Child Relationships and Prevention Research. *Clinical Child and Family Psychology Review*, 12, 255-270. https://doi.org/10.1007/s10567-009-0046-3

Jefferson, F. A., Shires, A., & McAloon, J. (2020). Parenting self-compassion: A systematic review and meta-analysis. *Mindfulness*, *11*(9), 2067–2088. https://doi.org/10.1007/s12671-020-01401-x

Kang, S., & Kurtzberg, T. R. (2019). Reach for your cell phone at your own risk: The cognitive costs of media choice for breaks. *Journal of Behavioral Addictions*, 8(3), 395-403. https://doi.org/10.1556/2006.8.2019.21

McDaniel, B. T., & Radesky, J. S. (2018a). Technoference: Parent distraction with technology and associations with child behavior problems. *Child Development*, *89*(1), 100–109. https://doi.org/10.1111/cdev.12822

McDaniel, B. T., & Radesky, J. S. (2018b). Technoference: Longitudinal associations between parent technology use, parenting stress, and child behavior problems over time. *Pediatric Research*, *84*(2), 210–218. https://doi.org/10.1038/s41390-018-0052-6

Mikolajczak, M., Brianda, M.-E., Avalosse, H., & Roskam, I. (2018). Consequences of parental burnout: Its specific effect on child neglect and violence. *Child Abuse & Neglect, 80*, 134–145. https://doi.org/10.1016/j.chiabu.2018.03.025

水﨑優希・仲嶺実甫子・佐藤 寛・尾形 明子 (2018). マインドフルな子育て尺度の作成と信頼性・妥当性の検討, マインドフルネス研究, 3(1), 1-14. https://doi.org/10.51061/jjm.31 1

Moreira, H., & Canavarro, M. C. (2018). The association between self-critical rumination and parenting stress: The mediating role of mindful parenting. *Journal of Child and Family Studies*, 27(7), 2265-2275. https://doi.org/10.1007/s10826-018-1072-x

Neff, K. D. (2003). Self-compassion: An alternative conceptualization of a healthy attitude toward oneself. Self and Identity, 2(2), 85–101. https://doi.org/10.1080/15298860309032

Parent, J., McKee, L. G., Rough, J. N., & Forehand, R. (2016). The association between parent mindfulness and child outcomes: A indirect effects model of self-regulation and parenting. *Journal of Abnormal Child Psychology,* 44(1), 191–202. https://doi.org/10.1007/s10802-015-9978-x

Shorey, S., & Ng, E. D. (2021). The efficacy of mindful parenting inte

rventions: A systematic review and meta-analysis. *International Journal of Nursing Studies,* 121, 103996. https://doi.org/10.1016/j.ijnurstu.2021.103996

＜プロフィール＞
児童福祉施設の相談員。資格は、公認心理師、社会福祉士、臨床発達心理士など。
大学院に進学後、研究者の道から方針転換して子ども福祉臨床の現場に飛び込み、
早 10 年強。現在、仕事でもプライベートでも、子育て＆子育て支援まみれの日々を送っている。プライベートでの子育てやらをめぐる由無し事を、ブログに月数回、不定期投稿中。
（https://childcare-support.hatenablog.jp/）

社会科の授業を対人援助学の視点から⑫

2026 年 2 月　内田一樹

0.はじめに

今回は 2025 年度の高校選択講座「東北と復興」の 11 月福島県浜通りスタディツアーでの内容と生徒たちの学びの様子を振り返りたい。

1.2025 年度の福島県浜通りスタディツアー

（1）今年度の浜通りスタディツアーの目的

戦後 80 年という節目の年であることから、戦後 80 年の歴史と福島第一原子力発電所事故がどのようにつながっているのかについて考えることを目的におこなった。

第二次世界大戦の終戦は広島・長崎の原子力爆弾という核兵器の投下で終わる。戦後冷戦の中でアメリカのアイゼンハワー大統領の「核の平和利用」演説により、原子力発電所への道（民間の核利用）への道が開かれる。とりわけ被爆国日本に原子力発電所ができることは、アメリカの原子力ビジネスの観点からも求められていた。戦後復興のエネルギー需要の高まりから、日本においても原子力発電の研究が進み、ついに福島第一原子力発電所がつくられる。その後も全国につくられて行く原子力発電所は、高度経済成長期とその後の日本の経済を支えるエネルギー源であった。

原子力発電の歴史についても学ぶため、今回の福島県浜通りスタディツアーにおいては、まず茨城県東海村から始めることとした。そして福島県に移動し、福島第一原子力発電所事故をめぐる行政の言葉、企業の言葉、科学者の言葉、住民の言葉を広く聴き、改めて福島第一原子力発電所事故の本質をみんなで考えることを目的とした。

（2）事前学習、スタディツアー、事後学習の流れ

10 月 4 日；市村高志さん講演/映画「生きて、生きて、生きろ」上映鑑賞
10 月 14 日；「核」の技術の歴史
10 月 21 日；長崎スタディツアー報告会
11 月 4 日；水俣スタディツアー報告会
11 月 11 日；第五福竜丸事件と核の平和利用
11 月 14 日；第五福竜丸展示館・アーティゾン美術館（校外学習）
11 月 18 日；近代における「科学」と「技術」とは何かを考える。
11 月 23 日から 11 月 26 日；福島県浜通りスタディツアー
12 月 2 日；浜通りスタディツアー感想交流会
12 月 9 日；「復興」とは何か考える①
12 月 16 日；「復興」とは何か考える②

事前学習①市村高志さん講演/映画「生きて、生きて、生きろ」上映鑑賞

この日は 7 月に実施した宮城県石巻市スタディツアー報告会を 10 時から行い、その後市村高志さん講演、昼食をはさんで午後に映画の自主上映会、鑑賞を行った。講座受講生徒以外にも講座受講生以外の生徒や受講生の保護者などが参加した。

市村高志さんには学園にお越しいただいて「原発避難当事者の視点から東日本大震災を振り返る」と題して講演していただいた。震災当時、福島県双葉郡富岡町に住まれており避難当事者である。共著として『被災者発の復興論』や『人間なき復興』などがある。

市村さんからは富岡町のこと、震災時どのようなことが起こったのか、広域避難がどのように行われたのか、そして現在「復興」の中でどのようなことが避難当事者たちに起こっているのかについて、当時の写真なども用いながら講演していただいた。避難をめぐる本質的な課題についても講演いただき、生徒たちにとっては福島第一原子力発電所事故がもたらした避難と帰還をめぐる行政の政策と、当事者のみの選択として迫る意思決定について考えるところからのスタートとなった。

以下は参加した生徒の感想からの抜粋である。

・自分自身、「福島」というものについて、知らないことが多くあるということを実感した。また、福島に行ったことがないからこそ、分かったこと、分からなかったことがあるとも感じた。どちらにせよ、後期福島スタディツアーへの気持ちがより一層深まっていったように思う。市村さんの講演では実際に市村さんの実体験を基に、東日本大震災というものを振り返った。だからか、専門社会調査士である市村さんではなく、一人の富岡町の住民である市村さんのお話を受け止めるというような感覚でもあった。だけど、だからこそ、原発というものに対して「怒り」を持っているということを感じたし、それほど原発というものは、本当に、地域住民にとっては不条理なものだったのだということを今回初めて本質的な理解を少しできたような気がした。富岡町は震災後イノベーションコースト構想として、メガソーラー発電所事業が実施されているという話が市村さんからあったが、自分はどうしても、その政策が、過去の記憶の忘却というものも、また促進させる何かしらの危険性があるのではないか、と感じてしまっている。

・ここまでくわしく話を聞けたことが良かったなと思う。市村さんと母だけが外へ出てたと言っていて、自分がその状況の中にいたら、外に出ないほうが良いだろうとかの判断ができなかっただろうなと思った。

午後には映画「生きて、生きて、生きろ」の自主上映会を行い、鑑賞した。こちらは映画にも出演されている精神科医の蟻塚亮二医師、及び相馬広域こころのケアセンターなごみの米倉一磨さんから福島県浜通りスタディツアーの中で講演いただく予定であったため、上映した。合わせて 2025 年が戦後 80 年という節目の年であったこと、心のケアをテーマに今年度は学んでいることから上映会を行った。

以下生徒の感想の抜粋である。

・言葉にはできないが、何か「すごいものを観た」という感覚だけが強く残っている。映像に映る全ての風景や言葉が自分の知らないものすぎて、終始圧倒されてしまっていた。映画の中で、双葉町の姿だけが残って人がまったくいない映像が流れてきた時、双葉町だけが、世界の時間に取りこぼされているような感覚に陥った。それなのに、国としては、「復興は進んでいる」という言葉を発した時にすごく違和感を覚えた。そんな映像を通して、「復興」というものとは一体何なのか、という問いが生まれた。「東北と復興」を受講していながらも、そんな問いは正直生まれたことがなかった。地域社会を元に戻すということは不可能かもしれないが、それでも災後地域の復興を考えていく上でどのようなアプローチが必要なのか、ということを考えた。今も考えているが。

・「なごみ」みたいな地域で助けを必要としている人をすくってあげられるような団体がいることで、ギリギリの所ですくわれているんだろうなと感じた。どこまで行政が受け持つべきだろう。

・みんな生きたくて生きているのか、死にたいのか、何故生きているのかなど生きていく上での「目的」や「目標」がある、支えがあるのか否かによって変わってくるように感じた。改めて優しい方だなと、映画内にいた人をみて思った。生きるって大変なのかも。

事前学習②他講座のスタディツアー報告会

本講座以外の別の選択講座で長崎スタディツアーと水俣スタディツアーが今年度実施されていた。そこでそのそれぞれから授業の中でスタディツアーの報告会をしてもらった。人類と核の利用の歴史という観点からも長崎のことを、戦後復興としての高度経済成長と公害という観点から水俣のことを事前学習の中で扱いたかったからである。その授業を授業者ではなく、実際にツアーとして訪れた講座受講生にしてもらうようにした。

事前学習③第五福竜丸展示館とアーティゾン美術館企画展ジャム・セッション「山城千佳子×志賀理江子|漂着」鑑賞

第五福竜丸展示館では学芸員の市田真理さんに案内していただいた。アメリカの水爆実験のこと、1954 年の第五福竜丸事件のことや、これをきっかけに改めて広島、長崎での原子力爆弾投下のことも合わせて日本で反核運動が始まったことや世界の反核運動の歴史について学ぶ機会となった。

その後アーティゾン美術館に移動してジャム・セッションを鑑賞した。沖縄についての山城千佳子の映像作品と、志賀理江子の石巻や福島についての作品群は、生徒たちに刺激を与えたようだった。行ったことがある場所についての作品から、読み解こうとしていくようだった。





福島県浜通りスタディツアー（11 月 23 日から 11 月 26 日）

今回もスタディツアー前に、「スタディツアー前のわたし」というテーマで生徒たちには 400 字程度の文章を書いてもらった。ちょうど学園のイベントである公開教育研究会の時期とも重なり、休みなくスタディツアーに突入したため、みんなベストコンディションではない状態でもあった。

11 月 23 日（日）

スタディツアーはさいたまスーパーアリーナでの集合から始まった。このさいたまスーパーアリーナは、東日本大震災当時、福島県双葉町を中心とした広域井避難者を受け入れた場所である。このスーパーアリーナの近くから福島へ向けてバスで出発することに意味があると感じていた。

1 日目の最初に訪れた場所は、茨城県東海村。東海原子力館テラパーク、東海原子力科学館である。東海原子力館テラパークは、日本原子力発電株式会社の施設であり、第二発電所の敷地内にある。原子力発電の歴史や原子力発電所の安全対策などを講義していただき、発電所も外から案内していただいた。丁寧な対応や説明であった。その後昼食を経て午後には東海原子力科学館を見学した。こちらは公益社団法人茨城原子力協議会が運営している博物館であり、別館には東海 JCO 臨界事故についての展示もあった。科学的な見地から分かりやすい展示が多く、基礎的なことから放射線や放射能、核分裂などの科学技術を知ることが出来る場所だった。

その後東海村を後にし、1 日目の宿泊地福島県いわき市湯本温泉にある古滝屋旅館へ向かった。古滝屋旅館には夕方についたが、そこから 1 日目最後のプログラム、大熊未来塾の木村紀夫さんからの講演と古滝屋館主である里見さんに原子力災害考証館を案内してもらった。

テラパークでは AI の発展で電力が 10 倍必要になるからこそ、原子力発電の再稼働などで電力を賄っていく必要があるという説明があったのに対して、木村さんからは AI の発展で電力が 10 倍必要になるということがどこまで人類が豊かになれば気がすむのか、という話があった。同じ現象に対して全く異なる意見であり、このことは生徒たちの間で深く考えさせたようだった。

以下、生徒の福島県浜通りスタディツアーの感想から 1 日目の内容についてのものを抜粋する。

・福島スタディツアーを終えて、自分は 1 日目の夜に古滝屋で木村さんが言っていた、贅沢の価値観について考え直すべき、というような言葉が印象に残っている。日常生活の中で大量に消費している電力に対して、無限に湧いてくるのだと、どこかで錯覚してしまっていた自分、生活で使用する電力を見直さなければならない。また、ありふれる情報、どんどん進歩していく AI、それに対して木村さんが言った「今の人間は家畜化されている」という言葉も強く印象に残っている。日常生活の中で必要な電力について「考える」ことをせず、便利に囚われ、無限に電力が湧いてくると錯覚している人があまりに多いのではないかと思う。自分もその一員である。AI の進歩によりこれから更に電力需要が大幅に高まる中で、火力発電に頼っている今の日本、これからも火力発電に頼りきりで CO2 を排出し続けるのは、地球温暖化の問題も一刻を争う状況であるため、厳しい。かといって再エネで賄うというのは少し現実的ではない。福島スタディツアー中のバス移動の際にたびたび見かけた大量に見かけたソーラーパネル。日本各地で発生しているソーラーパネルの影響で起きている様々な問題、そしてパネルの廃棄によって CO2 を排出してしまうという現実。その他の再エネも生み出せる電力が少なく、コストも高くなってしまう、なかなか厳しい状況。そうなってくると運転中に CO2 を排出することもなく、コスパがとても良い、原子力発電に頼るしかないのでは、と感じる。しかし、その原子力発電は、六ヶ所村の再処理工場、最終処分地の問題、そしてテロの標的になる危険性、など様々な問題を抱えている。六ヶ所村の再処理工場については、27 回ほどの延期が行われ、現在も完成の兆しは見えず、総事業費も増大している。そんな破綻しかけ、破綻している、日本政府が掲げる、核燃料サイクル。また、中間貯蔵施設のプールも日本各地で埋まってきてしまっていて、あと数年しか持たないというような状況であるという問題も抱えている。そうして中間貯蔵施設が埋まったら、声を上げることができない立場の地域に核のゴミを押し付け、最終処分地とし、そこに住んでいる人々に、自分は知らないうちに搾取をしてしまっていることになるかもしれないリスクもある。原発の稼働に賛成することは、その搾取を容認することになってしまう恐ろしさがある。

福島スタディツアーのバス移動中に、海外の原子力発電の政策を調べていく中で、フィンランドの核のゴミの最終処分地に対する政策にとても驚いた。地盤が硬い場所の地中 400 メートルに、核のゴミを埋めてしまうという大胆な政策。また、原子力発電によって栄えた、発展した地域にその最終処分地をつくるとなった時に、その地域に住む住民の方々は反発せずに、原子力発電で栄えた、発展した、安定した暮らしが出来たから、自分たちはその施設を受け入れる、という姿勢をとったということを聞き、声を上げられず搾取されていないことに安心した。それを知り、これなら核燃料サイクルなどという破綻した、実現できない政策などやらずに、済むのではないかと考えた。日本政府も核燃料サイクルという夢をいつまでも引きずってないで、大胆な政策に切り替えなければならないと感じた。

木村さんが言っていた、家畜化された人間、これが進歩しすぎた、発達しすぎた人類の現状であると感じる。行き過ぎた社会の発展、科学技術の発展による便利すぎる生活、発達しすぎた AI、自分はその発展が人類を幸福にしているようにあまり感じない、人と人との繋がりが薄く、弱くなってしまったことによる、孤独感を強く感じる人も増えている。

「便利」に囚われた生活、少しづつ歪んでいっている「贅沢」の価値観、浴びるように使っている電力と、たくさんの資源、加速する地球温暖化、声を上げられない生き物を殺していく、こんな悲惨な現実を受け止めなければならないと責任を感じた。理想論ではあるが、生活水準を世界全体で少しずつ下げていって、エネルギー消費量を減らしていって、再エネと蓄電技術だけで世界が回るようになって、原子力発電や火力発電などをしなくても良くなったらいいと思った。









・事前学習として訪れた第五福竜丸展示会で学芸員さんが語っていた「第五福竜丸事件や「ビキニ環礁水爆実験」という呼び名によって、ほかの事象が抽象化されてしまっている。という言葉を聞き私は出来事に対して名前を付けることによって、理解し共有しようとするしかしそれと同時にその名の枠に入らない人々を視界の外に追いやる力を持つ。一つの固有名詞が持つ代表性それらの言葉は理解を助ける一方で理解したという自分の中で錯覚を生んでしまう。しかし実際は被爆の影響やそこに住んでいる人々のあたりまえの生活が変わってしまい、それらの影響は今もなお残り続けている。言葉として出来事にすることによって現在部分が忘れられてしまう。

自分は学芸員さんの話を聞き「核」という巨大な主語に注目した、核という言葉は放射能、エネルギー、化学兵器そして差別や多様な要素を生み出す、こうした多数の意味を持つ言葉は話し合いの場などで効率化されていくが、一つ一つの小さいものごとが抽象化されていきそれに対し「仕方ない」や「リターン的に」などと無碍にされてしまう。

この抽象化されていくプロセスが福島でも起きているのではないか、被害は数値化されていきその数値に政府は管理可能な問題としていき、そこにいる人々の意見などは隔離されっていっているのではないかと考え福島スタディツアーに向かった。

　最初に訪れた東海原子力発電所では、「比較することによって根本的な問題が抽象化されていく」という構造を強く感じた。 火力発電や再生可能エネルギーと対照されることで、原子力発電の効率性や安定供給といった「良さ」が前面に押し出されており、自分自身も知らず知らずのうちにその利点に引き付けられていることに気づいた。

そのときの自分は、あくまで「中央」にいる立場の人間だった。　自分の生活がより便利で、より豊かになるかどうかという視点から原子力を見ており、その電力がどこで、誰の負担の上に成り立っているのかという問いは、意識の外に置かれていた。比較という手法は選択を分かりやすくする一方で、事故や被ばく、地域に押し付けられてきたリスクといった根本的な問題を背景へと退けてしまう。原子力発電の是非が「他より優れているか」「合理的か」という枠組みで語られるとき、そこからこぼれ落ちるのは、周囲に置かれてきた人々の生活や声である。その構造自体が、私がこれまで無自覚に受け入れてきた「抽象化」の一例なのだと感じた。そしてそのとき私が抱いたのは、原子力という問題以前に、そうした見方を無自覚に選び取っていた自分自身への失望だった。比較によって納得し、効率や利便性に安心し、気づかぬうちに「自分は関係ない側にいる」と線を引いていた。その線引きをしていたのは、制度でも説明でもなく、ほかならぬ自分自身だった。被害を受けるかもしれない人々の生活を想像する前に、「自分の生活がどうなるか」を基準に考えてしまう。その感覚の軽さ、そしてそれを当たり前のように受け入れていた自分の立ち位置に、自分は強い違和感と恥ずかしさを覚えた。

・ 竈門さんの話の中に、震災後下がっていた電気の需要が今 AI のデータセンターやそれに伴う工場の運営のために増えていて、社会がエネルギーを必要としている。そのための原子力発電である。というようなものがあった。ここで私が思うのは、そうやって今必要だからと過去も未来も見据えなかった結果が原発事故なのではないかということだ。ものは変わるが原発を減らし代わりに進めてきた太陽光発電。これも現在メガソーラー問題として大規模森林伐採や湿原の埋め立てによる環境破壊や、パネルのゴミ問題などとしておこっている。福島の街も自然も一度なくしてしまったものはそう簡単に還ってこないのに今の豊かさを優先してしまう。あんなにも大きな事故が起こっても方法は違えど同じような構造が生まれている。陽の当たらない影を作り見向きもしない、そして見なければ何も考えず豊かさを追い求められるような。そんな構造を

今でも作り続けてしまっているということ。事前学習の水俣ツアー報告の最後にあった話ともつながった。そう考えると歴史や過去、夢や未来を、丁寧になぞって描いて、今の社会や自分の生活を作ることの重要性を感じた。

・11 月 24 日（月）

2 日目は古滝屋旅館をあとにして、楢葉町の宝鏡寺へと向かう。宝鏡寺の伝言館では立命館大学名誉教授の安斎育郎さんが来られているタイミングと重なったため、事務局の丹治杉江さんの進行のもと安斎先生の講演と伝言館、未来館の見学を行った。ここでの安斎先生の講演については「学問研究とは何なのか？」という観点から印象に残った生徒も多かったようだ。原子力発電が日本に導入されてきた歴史について学ぶ。2 時間半ほど講演と見学をしたのち、東日本大震災・原子力災害伝承館へ向かう。

昼食後 1 時間半ほど東日本大震災・原子力災害伝承館をこちらは自由見学という形で行う。色々な展示物を介して、福島第一原子力発電所事故についての概要を学ぶ。その後、2 日目最後のプログラム、相馬町のおれたちの伝承館へと移動する。おれたちの伝承館を見学したのち、近くの双葉屋旅館でおれたちの伝承館館長の中筋さんから講演をしていただく。双葉屋旅館は 24 日と 25 日の 2 泊をした。

宝鏡寺（伝言館・未来館）、東日本大震災・原子力災害伝承館、おれたちの伝承館。それぞれ違った展示物や視点、表現方法で福島第一原子力発電所事故について説明をしてある。生徒たちはその比較からも学びを得ていたようだった。

以下生徒のスタディツアー感想から 2 日目のものを抜粋する。

・宝鏡寺伝言館で安斎さんから東京大学助手時代にアカデミックハラスメントを受けたことや、東京電力に対する訴えの経緯を聞いたとき、自分は「学ぶ」という行為が軽視されているのかを痛感した。憲法上は「教育を受ける権利」が保障されているはずなのに、その学びで得た知識や経験が、当事者が不当な扱いを受けたときに自分を守る力として十分に機能していない現実がある。「学ぶこと」は大切だと学校では言われ続けてきたが、実際には得た学びが構造的な不正義に立ち向かう力として担保されていないのではないか、そんな疑問が出てきた。

制度や歴史をどれだけ知識として覚えても、それだけでは社会の深層にある構造的な部分揺るがすことはできない。中央と地方の非対称性、国の論理が優先され生活者の声が後回しにされる仕組み、さらに負担が地域側へと押しつけられ続ける構造は、教科書的な理解ではびくともしないほど強固に社会へ組み込まれている。知識として「知る」ことはできても、それを支えている価値観や権力関係、そしてその構造に苦しめられている人たちの部分までは見えてこない。だからこそ、学ぶことを単なるインプットで終わらせず、「そこから何を疑い、どのように変えていこうとするのか」という視点を持つことが不可欠なのだと実感した。

これまでの自分は、知識として理解できたらそれで満足し、どこか安全な場所から社会を眺めていた気がする。しかし今回、被災地に足を運び、地域で実際に起きてきた不平等や葛藤に触れたとき、自分が見えていなかった現実の重さを突きつけられた。頭で理解したつもりになっても、現場の声の切実さ、人々の選択に伴う苦悩、そして国との立場性は、直接その場に行き、目で見て耳で聞かなければ決して実感できないものだった。

そのとき初めて、感じた違和感や怒りを自分の言葉として語り直すことの意味がわかった。単に「知っている」だけでは構造は変わらないが、それを言語化し、他者に伝え、対話を重ねることで、初めて社会の強固な枠組みに小さな裂け目を入れることができるのではないかと思ったのである。社会は一人の力で急激に変わるものではない。しかし、構造を「変えようとする視点」を持ち続けることは、自分自身の生き方を変え、周囲の人との議論の在り方を変え、そして時間はかかっても社会全体の空気や価値観を少しずつ動かしていく力を持っている。

学びとは、教科書の知識を積み重ねる行為ではない。むしろ、既存の枠組みに疑問を投げかけ続け、見過ごされてきた声や経験を可視化し、社会の「当たり前」を問い直すことなのだと思った。知ることを出発点に、そこで生じた違和感を放置せず、それを言葉にし、自分の立場性を丁寧に問い続けるその積み重ねこそが、深く根を張った社会構造に亀裂を入れていく唯一の方法なのではないかと強く感じた。













・たしかに原発で聞いたりその資料を見ると、科学的には安全に見える。反対派が言ってるのは構造的な格差とか、過去に原子力によって被害を受けた人の話だったりする。そりゃ噛み合わないよな、と思う。それを感じたのは、安西さんの話を聞いた後質問で「今の原発に科学的な穴はあるんですか」と言おうとした時。タイミング掴めず聞けなかったけど、安斎さんの話では昔の科学的安全性についての話しかなかったから、今は安全については調べてないのか?と思った。けど安斎さんの言っている「科学的な穴」というのは本来の問題じゃなくて、それを聞き入れなかった原発開発側と、その構造が根本の問題である。それを安斎さんは言ってるんじゃないか。そう考えると、原発で聞いた安全性の話とは少し論点が違う。かまどさんの話を聞いて、安斎さんの話を聞いて、この二人が話してる姿がちっとも想像できなかった。でも本来は互いにこそ説得をするべきだ。安斎さんは原発側に、かまどさんは反原発派の人に議論しに行くのが一番必要なことなのになぜそれをしないんだろう。ふたりとも自分の話を聞きに来た人に話をしているけど、基本的に話を聞きに来る人は同じような考え方の人が多いんじゃないかと思う。

そしてそれは互いを説得することを諦めたからじゃないか、と思う。科学と人道っていう「互いの論点の違い」は原発推進派からすれば「反対派の論点のズレ」だし反対派からすれば「推進派の論点のズレ」にもなる。互いに自分のフィールドが前提だから「話が通じない」ってなってる。安斎さんは、かつて原発を説得してた時に全く聞き入れられなかったという過去があるからそういう言い方になるのかも知れない。

ここで一つ、感想交流のことについて言いたいことがあって、俺が「推進派は科学的で反対派は…」って言ったのは全く持って「反対派は科学のことを見れないバカだ」って意味じゃないんです。少しその後の話の流れがそういうふうに向かっていってしまったのは悔しい。東北と復興メンバーの中にも原発は必要って考えの人がいて、その人の感想で俺の言葉から

つなげて「原発派は現在、反対派は過去の話をしてる」と言ってた。そうするとまるで反原発は冷静に話ができないバカみたいじゃないか、と思った。けどよく考えてみると俺も本心では「互いの論点が違う」ことを「反原発派の論点がズレている」って思っていた事に気づいた。そうするとどうして俺は原発に反対なのかって根拠がわからなくなる。どうしても俺の頭の中には「科学は正しい」というのがあって、それが科学と関係ない人道的な話やそんな話をする人を見下しバカにする原因になってるんだと思う。確かに東海や廃炉資料館で風評被害について職員さんに話を聞いたとき、勝手にニュアンスだけど彼らの話し方には「科学的に説明してるのに納得してくれない」「話が通じない人」って感じの言葉遣いがあった。

原発派も、反原発派も、互いの説得をやめて中立の人たちの票集めばっかりしてる、って印象を持った。伝言館にあった「エネルギー・アレルギー」のポスターとか、婦人の甲子園の話とか、それは反対派を説得するための言葉じゃなく、原発に対して意見を持ってない人を引き入れたり、味方の士気を上げるための言葉だった。それは小さい頃に見た反原発の集会でのパンフレットもそうで「東電側にこんな不祥事がありました」とか「東電は話が通じません」とか、意見を持ってないひとに自分の無害と相手の害を訴えかける言葉。（中略）原発派には科学を前提に「安全」があって、反原発派には社会の仕組みを前提に「危険」がある。でもそれぞれの意見の背景は知らないままに俺達は「原子力は安全です」「危険です」のアピール合戦を見せられるだけでしか無い。それではいつまでも、原発の必要性について話して決める機会はやってこないと思う。それでも自分が知ったこと学んだことを元に考えを持っていなければ、どちらかにただ便乗するだけになってしまう。

・福島に行く前にアーティゾン美術館にいった。私自身芸術作品には疎くよくわからないで終わることが多い。そんな中、おれ伝の見学や中筋さんの話で考えたことは、表現についてだ。私は結局、東北と復興の学びは自分に返ってくると思っている。自分が何をしなければいけないのかどうあればいいのか、どうありたいのか、自分の今後を考えるときの一つの視点にする。そうした時、おれ伝の作品や中筋さんの生き方というのは、その人それぞれが自分はどうありたいのかということの表現をしているということなのだと思った。表現というと絵や写真、言葉といった相手に伝える手段をうまく使える人の特権のように思えてしまうし、絶対にそっちの方が人の目に留まり、思考が生まれる機会は多い。けれど私もこんな理由があるから自分はどうありたい、ここはこだわっている、というものを自分の生活や自分自身の言動によって表現できるのだと思う。表現することの意義は自分の周りに影響を及ぼせる可能性があるというところだ。知っている人が少ないことに対して自分は何ができるかということは毎度考えるが、自分にできることなんて良くも悪くも自分なりに表現することぐらいなんだろう。これはこのツアーでの新たな気づきの一つだった。

11 月 25 日（火）

この日は朝から東京電力の廃炉資料館を訪れて説明を受けた。東京電力の廃炉資料館ではあるが、説明をしてくださったのは東京電力から業務委託を受けている廃炉資料館の方からであった。前日が、地元の方、行政、芸術の分野からの説明であったのに対して、廃炉資料館は企業の分野からの説明であり、その点でも生徒たちにとっては刺激を受けた様子だった。その後道の駅なみえで昼食を済ませると、双葉屋旅館に戻り、双葉屋旅館女将の小林さん、そしてこころのケアセンターなごみの米倉さんからお話を伺った。ここで蟻塚医師の講演もお願いする予定であったが、今回は体調不良ということで講演はキャンセルになった。その分米倉さんからワークショップも交えてじっくりと講演していただき、心のケアについても考える時間となった。

この日の夜に双葉屋旅館女将の小林さんから、ウクライナの子どもたちにクリスマスメッセージカードを作ってほしいと、高校生たちはお願いされた。ウクライナからのメッセージを受け取り、返事を書くような形だ。応答するということを大事にしている講座であったが、自然な形でウクライナに応答する形となった。ある生徒は苦笑いしながら「この手紙を受け取っちゃったら、ウクライナの戦争を見て見ぬふりできなくなるよ」と言っていた。知った責任、かかわった責任。応答責任を果たすというと重く感じるが、しかしメッセージカードを作るみんなは明るい表情で楽しそうにかいていた。ここから少しでもウクライナのことにも目を向けるようになるかもしれない。

以下スタディツアーの生徒の感想から、3 日目の感想を抜粋する。

・原発事故により避難指示が出された 30 キロ圏内には当時自力では避難が難しいような要支援者が 10 万人はいたと言います。その中には寝たきりで移動するのが極めて困難な方もいるのにも関わらず避難せざるを得ない。

職員の方々は自分の命を守るために避難していて支援者を介助してくれる人が不在のまま避難所へ連れていかれる。そして適切なケアを受けれるはずもなくそのまま亡くなってしまう。

本来であれば地震や津波の被害さえ乗り越えられれば助かることがとても多かったのにも関わらず、そこに原発事故という状況が重なってしまった結果助からなくなってしまう。そんな方がとても多かったという話を聞いた時は本当に言葉に出来ないような感情が頭を埋めつくしました。

・復興が「お金をかけること」や「目に見える成果」だけで測られてしまうと、人の感情や生活のリズムは後回しにされがちだと感じます。心のケアセンターなごみの米倉さんの話から、支援には段階があり、まず信頼関係を築くことが欠かせないということを学びました。SOS を出せる人は支援につながる可能性がありますが、出せない人、ためらう人ほど深刻な状況に陥りやすい現実があります。避難所の環境や仕事、役割を失ったことによるストレスは、数値では測れませんが、確実に人の生きる意欲を奪っていくと感じました。こうした部分に目を向けない復興は、形だけ整っても人を救えないのではないかと考えます。

・ 三つ目の実行することの意味は、双葉屋旅館でクリスマスカードを書いた時間から感じた。書く前はモヤモヤを感じていたはずなのに、書き終えた後にはそれが収まっていた。その理由を考えると、ウクライナの子どもを自分と同じ存在として捉えられたこと、そして小さくても「実行できた」という実感を持てたことが大きかったのだと思う。これまで石巻や福島の人々を個人として見ようとはしていたものの、「被災者」「被爆者」といった枠やフィルターを完全には外せていなかった。そのため、「分からないことがある」という前提で話を聞き、考えていた。しかしクリスマスカードを書いているときは、「どうしたら喜んでくれるだろう」「自分だったら開けたときに嬉しいだろうか」と、純粋に相手のことを考えていた。等身大という言葉が適切かは分からないが、相手を自分と同じ大きさの存在として考えられていたと思う。また、カードという形でも「実行できた」こと自体も大きかった。石巻でも福島でも、知れば知るほど何もできないという無力感を強く感じ、学ぶ意味すら見いだせなくなることがあった。しかし、たとえ自己満足であっても、何か一つ形にできたことで、「自分にもできることがある」と思えた。その感覚は、自分自身への慰めになったのだと思う。





11 月 26 日（水）

最終日は大熊町立学び舎ゆめの森学園にうかがった。地域の方との芋煮会のイベント日であったが、その前に学園長であり、本学園の卒業生でもある南郷さんからお話を伺う。「復興」と「教育」の一つの形を生徒たちは聴き、見学してこの 4 日間の学びを締めくくった。学び舎ゆめの森学園での見学を終えたのち、ほっと大熊で昼食をとって、帰埼した。こうした 3 泊 4 日間の福島県浜通りスタディツアーは終了した。子ども達はこの 4 日間、様々な立場の人たちから福島第一原子力発電所事故やその後の「復興」について伺った。

スタディツアーの生徒の感想から、最終日を含めてスタディツアー全体にかかわる感想を抜粋する。

・ゆめの森では、新しくて綺麗な設備が整っていたりと、先進的な学校だなと思いました。しかし同時に世間からは復興の成功例に見えてしまうのではないかと思いました。確かに、「未来型の学校」「新しい教育」などメディアにも取り上げられて、震災はあったけど、結果的に良い学校ができました。しかし、そもそも論が抜け落ちています。なぜ、こんなにも新しい学校が必要だったのか。なぜ統合されたのか。など「なぜ」を消すと「綺麗な学校ができた」「子供たちは元気に学んでいる」「復興は進んでいる」という文面を社会が目にすると「元の学校」「地域の繋がり」「それまでの日常」などが語られなくなってしまいます。これは、復興ではなく上書きしてしまっているなと思いました。語り手の話を領有せずに、そのままの言葉を後世に語り継ぐことが大切だと思いました。





・街って存在自身が抱える問題と街があるからこそコミュニケーションの輪が生まれるという事実。その矛盾が震災を通して浮かび上がる。街に若者が移住するのはもちろんいいことだけど、大熊の街は「真っ白のキャンパス」ではないのだ。シャッターだらけの商店街をまた活気づかせることが町おこしじゃないか、と思った。

かつての住人にとってふるさとの「大熊のまち」があるように、これからゆめの森で育った子のふるさとは今の「大熊のまち」になるって思うと、それもまたいいのかな、昔にこだわりすぎるのも違うのかなとも思ってしまう。けど、「大熊じゃなくてもいいこと」を大熊でやるのは、町おこしって言えるんだろうか。それは原発を誘致しているのと一緒で、結局ゆめの森を卒業したら大熊を離れてしまうかもしれないんじゃあ勿体無いんじゃないかと思う。キャンパスに新しい色が塗られ、商店街がなくなってってすると、いったいどこまでが大熊なんだろう、となる。

ゆめの森の周りの住宅街を見て、このまちで庄司さんや M さんは生きていけるのだろうか。実際見てもいないし子供たちとも庄司さん達とも会ったことのない俺が言うのも無責任だけど、ある意味で庄司さん達はいきなりあの街から置いていかれてしまう。過去として上からラッピングされてしまう。

なんで復興を美しく「終わらせたがる」んだろうか。中筋さんは復興とか震災をアートで美味しそうに包んでしまう、と言ってた。おれ伝には、花は咲くに対する詩もあった。震災と復興には終わりがない、けどやっぱり包まれてしまうのはそれが行政の仕事になってしまっているからだと思う。復興というのは本来行政がメインではないはずだ、その場所に住んでいる人、その周りに住んでいる人が当事者なのに、現代では被害が金に置き換えられるがゆえに、責任を持つのが国や行政ということになる。役人の仕事ってどうしても数字にしなきゃいけないから、数字のある「復興」にはどうしても終わりがなければならない。それは関東大震災の時も同じで、数字や被害的な終わりが「災害の終わり・復興の同じ」と同じカウントになってしまう。復興は行政の仕事ってだけじゃないことをおれじしんがわかっとかなきゃダメだな。と思った。

・今回福島へ行って、話をしてくれた方々と、行政や東京電力側の話のかみ合わない風景を見て、なんでお互いの視点で、話していけないのだろうと思った。反対している人はこんな事件があったんだからもう信用できない。だとか、私たちの故郷を返してくれ、のような感情で訴えているのに対し、東京電力側は東日本大震災を上回る大災害が起こったとしても、大丈夫な設計をしています。だとか、福島第一原発のニの舞にはなりませんそのためにこういう装置を付けて、何度もシュミレーションをして、と非感情的な、倫理的な話をする。これは合理的に、正解を見つけようとする人たちには、ふくしまの人たちは

感情的になりすぎている。もう原発は安全なのだから気にしなくても良いのではないか。それよりもエネルギー不足の今、原発を動かさずにどうするんだ。と、東京電力側の主張が正しいと、認められるべきだと考えることもあるだろう。

でもそうじゃなくて、ふくしまの人たちはそれを全部分かったうえで、こんな社会をあなたは許容しますか？このまま進めていきますか？と問われているように感じた。現代人らしく損得で考えるなら、若者の流失が止まらない田舎に原発ができて、地域の中での雇用が生まれ、人口が増える。中央の人たちは電気が安くなってうれしい。企業もお金儲けができてうれしい。政治家も脱炭素社会を目指していたからかなう一歩手前まで来れてうれしい。みんな幸せ。でも震災が起きて住めなくなってしまった。けど、街が戻って、もっと最新型の公共施設が増えて、家も新しく立てて、そのお金も国から出て、一安心。企業は復興のために地域の人たちと手を組んで、今度はロボット開発。みんな得を得ているじゃないか。と思えたならきっとこんなに考えてないよなあ。絶対に誰か透明化された見えない人が抑圧を受けていて、でも声を上げられなくて、かき消されていく。それってどうなんだろう。良い社会なのかな。というかそもそも人口流出が止まらない場所に外からの人たちが栄えさせることは良いことなのかな。原発の次はロボット開発って国の利益になるからって負担を背負わせることは良いことなのかな。国民全員から集めたお金を人の少ない地域に最新の公共施設を立てることに使うのは良いことなのかな。とか。

そういう社会にとってのいいことだとかより良い社会ってどんなものなんだろうと考えた。例えば木村さんの講演にあったように原始的な生活に戻る。そんな馬鹿なと思う気持ちもあるけれど、それは人口流出を止めるだとか中央と周辺の関係とかそういうものをかなぐり捨てることができる。それも良い社会かもしれない。でもいまさら文明を捨てられる人は少ないだろう。もっと身近な、できそうなものでいえば原発を稼働させない社会とか？抽象的にいうなら誰も抑圧されることのない社会？自分が何を目指したくて、何をしたらいいんだろう。

帰ってから考えて、考えて、もう行き詰ったなあと思った時に気分転換もかねて、本を読んだ。その本は、トラウマインフォームドケアについて書いてあった。それは、トラウマを根本的に治療することではなくて、社会がトラウマについて正しく理解していて、トラウマなのかな？と思えるような、声を上げやすい社会を目指すもので、なんだか自分が作りたい社会の基盤ってこういうものなのかなあと漠然と思った。誰かが透明化することなく、抑圧されず、声が届くような物にできたなら。環状島理論で言う水位が下がって、みんなが島へ登れるような。すっごく難しいし、自分が何をしたらそんな社会になるのかわからない。それがたとえば社会主義とか資本主義みたいな分かりやすい物ならわかりやすい形にできるけれど、なかなか形にならない。

スタディツアーが終わってから 12 月には小グループに分かれて「復興とは？」ということをあらためて考えた。年が明けて 1 月には、改めて「復興が目指す社会を考える」ことも行った。昨年度から福島県浜通りスタディツアーを実施するようになって、より「復興」について多角的に考えられるようになったと思う。しかし目指していくのは、「復興」を分析したり、評価したり、安易にこれが「復興」だというゴールを設定するということではなく、「復興」を問い直して、「わたし」たちの社会を問い直して、そして「わたし」自身に問いかけて、より学びや考えを深めていくことであると私は思っている。高校生たちにとって何をこれから学びたいか、どのように行動したいか、どのような社会をめざしていくかの主体の一員として考え始めるきっかけになって欲しいと願っている。

ある看護科教員のアタマの中

12

～実習後のお手紙～

山岸　若菜

はじめに

看護学生はとにかく実習が多いです。

3年生ともなれば一年を通して2～3週間の実習を色んな領域で経験するので大変ですが、1年生の一番初めの実習というのはたった数日ですがとても緊張して初々しいものです。

だってナースステーションにいるだけでも邪魔にならないところの位置もわからないですもんね。

今回1年生の初実習を引率してきました。私が担当したグループではなかったのですが、3日間受け持った患者さんにお手紙を書いた学生がいました。

結果的にはその手紙は渡さないことになったのですが、印象深い出来事だったので今回書きたいと思います。

1年生の基礎実習

今回の実習は1年生の基礎実習と言われるもので3日間でした。

初めて病院の病棟の中に入って患者さんを受け持ち、患者さんというのはどんな環境で入院生活を送っているのか、患者さんとはどんな人なのかを知るというのが実習の大きな目的です。

この実習ではビッグイベントがいくつかあります。

まずは初めて学生ではない人に熱や血圧を測るバイタル測定と、普段の練習部屋ではない病室のベッドのシーツを交換です。学生は大緊張なのでそれぞれ20分ぐらいかかります。

そして家族や友達ではない人とのコミュニケーションです。ただの雑談ではなく、患者さんのこれまでの生活や病気のことなど聞かないといけないことがあるので初めはメモ帳片手に事情聴取のようです。

それでも日を追うごとに慣れていき、患者さんと関係ができてくると学生はだんだん患者さんと話をするのが楽しくなってくるし、患者さんも学生がかわいく頼もしく思えてくるようです。

最終日の手紙

私が担当したグループではありませんでしたが、最終日患者さんに手紙を書いてきた学生がいました。

内容は3日間の感謝とリハビリへの励ましでした。

私が学生だった頃はそういう手紙を渡したり逆にもらったりすることもよくあったのですが、最近は基本的に受け取らないし、渡さない方針です。

理由は個人情報保護と本来感謝の気持ちは看護の中身で返すべきという考え方のようです。

個人的には「別に渡したらええやん」派ですが、確かにコミュニケーションが良好にとれた人だけ学生から手紙をもらっていたら他の人はどうなの？とも思うので、渡さない方が良いと思います。

でもこれが2週間続くような領域の実習ならどうなのでしょう？

学生からではなく、患者さんからのお手紙だったらどうなのでしょう？

私には自分が領域実習に行ったときのことを思い出しました。

学生の頃の思い出

私が看護学生の時、消化器外科の実習に行きました。

実習先は怖い実習指導者さんがいる、消化器外科は処置がたくさんあって大変だという噂が飛び交っていたので実習前から緊張して事前の勉強も一生懸命やったことを覚えています。

外科の術式も覚えたし、どんな術後の人が担当になって指導者さんに突っ込まれても大丈夫と気合を入れていったところ、私の担当は試験開腹の患者さんでした。

胃がんで手術をしたけれども手の施しようがなく、何もせずに閉じただけの人だったのです。正直とてもがっかりしました、あんなに勉強したのにとりあえず勉強した内容はあまり役に立たず、しかも本人に手術結果について詳しいことは言わないという方針だったのです。

実習は２週間もあるのに処置もなく、とにかく患者さんとしゃべるだけの毎日でした。患者さんは手術をして良くなったと思い込んでいる様子で、案外気づかないもんなんだなと思いつつ毎日他愛のない話をして他の実習メンバーが大変そうな処置や指導者さんから突っ込まれているのを少し羨ましく感じていました。

そして実習最終日前、いつものように担当の患者さんのところに話に行くと「こんな話、看護師さんにも誰にも言えへんけどちょっと聞いてくれるか？」と患者さんが言い出しました。

もちろんいいですよ。という私に患者さんは、自分は胃がんの手術を受けたはずなのに、何も良くなっていない気がする、お医者さんもあまり話をしてくれないし、本当に良くなってるのかわからないのだと話してくれました。

私は普段穏やかな患者さんの初めてみる勢い込んだ話し方と、患者さんが何も気づいてないと思い込んでいた自分の鈍さに驚きました。

試験開腹だったことは言えないので、ただうんうんと聞いているだけでしたが、この話をだれかに聞いてほしかったのだろうと思います。

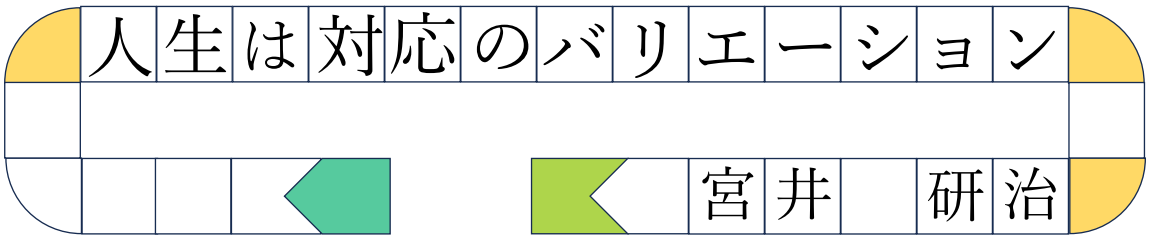
一通り話し終えるとまたいつもの穏やかな患者さんに戻り「ごめんな。こんな話して。聞いてくれてありがとうな。」と言ってくれました。

そして次の日お別れの挨拶に行くと、これ内緒なと言ってテレホンカードと一言のメッセージカードをくれました。

今の時代は本人の健康情報を本人に内緒ということはまずありえないし、検査技術も上がっているので開腹してから手の施しようがないということもまずないでしょう。

でも人と人とが接する実習期間でお互い何かの形で感謝の気持ちを表したいと思うことは今後もあるんじゃないかなと思います。

そういうことが起こった場合、教員としてはどう対処したら良いのかは私はまだまだ迷いそうです。



-第１２話　スクールカウンセラーを始めた頃-

「対応のバリエーション」は、私たちが仕事で出会う様々な「対応」場面をロールプレイで再現し、いろんな対応の仕方を試してみて、感じたことを自由に話し合おうというワークショップ式体験学習です。ゲームみたいな感覚でみんなで楽しみながら、実は、その中から何か日常の業務に役に立つものを持って帰っていただけたらと思っています。　（「そだちと臨床」研究会主催　対応のバリエーション勉強会のお知らせより）

さて、自分が記事を書き始めて、１２回目です。毎回、何回目だ、よくやってきたなどと自分で自分を褒める書き出しで申し訳ない。そうでもしないと、書き始められないのです。書くこと自体は、楽しいのだけど、やはりテーマが底をついてくる。テーマさえあれば、どこまでも書けるなどとは言いませんが、書くべきテーマさえ見つかれば、出てくる言葉を紡いで最後まで到達は可能なぐらいの内容は担保できてるかと思います、自分の場合は。

少し横道に逸れます。文章作法についてです。先程も書いたように、文章を書くこと自体は、本来好きな作業のようです。遡れば、小学校の夏休みの宿題で、読書感想文の時代のことになりますが、この頃書いたものが、自分の基本になっているような気がします。うちの父親は、小学校の教師をしておりまして、仕事柄、私の宿題にも口を出してきました。母親によれば、自分の教え子には丁寧、親切、熱心な人だということでしたが、自分の子どもには、いらちの面が出てしまい、教え子に対してほどの懇切丁寧さがなかったと、ぼやいていたように思います。だから、読書感想文にも、口は出してくるのですが、自分の思うような趣旨の感想文に導いていく感じでした。確かに父親が一緒に考えてくれる文章は、その通りだと思うのですが、後から、これは僕の感想？僕ってこんな感想持ってたっけ？と思うこともありました。そこは、父親も教師なので、うまく自分の息子をそこにはめ込むスキルには長けていたのかもしれません。最終、納得してしまうのですが、父親の掌の上で、書かされた感想文と言えなくはないかと今思い返したりします。父親の本棚にあった夏目漱石や、宮澤賢治が、コドモゴコロに良きもの、尊きものであるという刷り込みは、確実にこの頃からスタートしたものだと思っています。文学や文章が好きなことも、父親譲りなのだと今更ながらに思いますし、うん十年後かに対人援助マガジンの執筆者の一

人となっていることを思うと、やはりまんまと父親に嵌められたのかもしれません。早いもので、その父親も亡くなって９年目となります。

1.スクールカウンセラーとして、出会う子どもたち

大学の教員をしながら、スクールカウンセラーをしています。一応、臨床心理学の特任教授となってますので、その臨床現場としてスクールカウンセラーをやらせてもらっていると人には説明しています。もう、１０年になるので、スクールカウンセリングの現場のことはあまり分かってませんなんていう言い訳は通用しません。でも、今だにスクールカウンセラーの仕事を明確にお伝えすることは下手です。本日は、学校臨床とは何かとか、スクールカウンセラーは如何にあるべきかなどといった話は、一切しません。カウンセラーであろうと、臨床心理士であろうと、公認心理師であろうと、はたまた街角の占い師であろうと、出会うのは、人であります。その人が、大人であろうと、子どもであろうと、母であろうと、父であろうと、息子であろうと、娘であろうと、悩み事にあまり差異はないなと思います。これは、人の悩みなんて、所詮は十把一絡げであるなんてことを言いたいわけではありません。でも、事柄からすると同じような悩みに見えるという事です。「人間関係」にどうしても集約される、そんな感じです。逆にカウンセラーから見ると、同じような困り事も、ご本人にすると唯一無二なんだなと思います。困り事なので、当の本人は、そんなものは早くどっかへ行ってしまえってなものでしょうが、早くうっちゃろうとすると、逆にまとわりついてくる。良い方に向いてきた生徒さんや、お母さん、たまにお父さんの話なんかでは、「相変わらず困ってますけど、いい事もありまして」とか、「あんまり変わんないけど、最近ちょっとマシですかね」とか、こんな話が出てくると、カウンセラーも、おっとなります。潮目が変わるというのでしょうか。そういう会話に出くわすと、こちらのスイッチも押される気がします。解決の具体的な形は、以上のような会話に含まれて現れるというのが実感としてあります。もちろん「あの悩みより、もっとたいへんな事が起きまして」という変化もありですよね。

① 新米スクールカウンセラーがクライエント（子ども）に助けられた話

うまくいったケースの話も良いのですが、くれぐれも自慢話にならないようにしないといけないと、常日頃から思っています。でも、うまくいったことを褒めてもらいたい、また、うまくいった要因をシェアする、そうした動機がカウンセラーを成長させることは、もちろんです。でも、今回は、自慢話ではなく、失敗談でもない、助けられた話を書こうと思います。

30 数年も児童相談所を始めとする福祉現場で働いていたら、いやが上でもベテランです。ベテランで良いこともあります。良いとは相談において武器になるということです。たとえば、不登校の子どもさんを抱える親御さんに対して、「長年、いろんなタイプの子どもや親御さんの悩みを聞いてきました。その中には、不登校のお子さんも沢山おられました。」というアナウンスは、ずい

ぶんと安心感を与えるように思います。このアナウンスには、私がクライアントにお会いしてうまくいったかどうかや、そもそもうまくいくとはどういう事なのかの話は含まれておりません。つまり話に嘘はありません。私はベテランであるという事実だけ述べてます。でも、ベテランというだけで、安心される側面はあります。安心は、希望を形作る一要素だと考えます。何かしらの希望、漠然としたものであっても、それがあるかなしかによって、ケース運びは違ってきます。「希望なきところに解決はなし」これは、フィンランドの解決志向の精神科医ベン・ファーマンが言ってました。言ってたような、たぶん。（因みにベンさんのワークショップには、彼が来日されただいぶ昔に参加したことがあります。面白かった。）

これは、心理士としてはベテランである私が、スクールカウンセラーとして働き始めた初年度の話です。先程はベテランである事のメリットを話しましたが、新しい場所では、それが脚を引っ張ることもあります。ベテランであろうと、誰であろうと、初めての現場は初めてのものなのです。分からないことだらけです。「長年、心理士をしてきましたが、スクールカウンセラーは初めてでわからないことだらけです」これは、正直で良い反面、あんまり言い過ぎると、ベテランなのに使いにくい人になってしまう危険性もはらんでいます。それでも学校サイドは、まあ、そんなものでしょうと思ってくれたりするのでしょう（校長や先生方にインタビューしたわけでは、ありませんのでホントのことはわかりません）しかし、実際のクライアントである子どもたちや、親御さんには、そういう説明は通りにくい。「ベテランなのに新人？大丈夫この人」なんて、親御さんに余計な不安を与える可能性もある。子どもたちにとっては、ベテランの意味を伝えても、「ああ、お年寄り」ぐらいの理解かもしれません。

最初は、小学校勤務でした。スクールカウンセラーとしては初めての勤務です。緊張と不安、それと同等のワクワク感を持ちながらの通勤開始です。児童相談所であれば、基本チームで動きます。また、療育手帳判定などは、何ヶ月も前から予約が入ります。児童相談所で管理職となったキャリア終盤の仕事運びも、一応、会議だ、協議だ、ご挨拶だという感じで１日のスケジュールが事前に決まっていました。ところが、とにかく予定が立たない。引き継ぎのケースは伝えてられていましたが、これは予定であって確定ではありません。前任のスクールカウンセラーから継続の意向を伝えられていたケースも、新学年になり、親が様子を見たいと言い出したり、一旦カウンセリングは終わりにしたいと申し出られたりのケースばかりとなりました。とにかく、待つ、待つ、待つの １ ヶ月です。その間、私はと言えば、学校という環境が物珍しく、頼まれもしないのに、一人授業参観をして過ごしておりました。

さすがに、焦りを感じ始めました。公務員を少しだけ早く退職し、基本大学に席を置きながらの臨床現場としてのスクールカウンセラーです。本務の大学教員という環境も２年目を迎えていました。新しいことだらけの環境で、大学教員と新しく始めたスクールカウンセラーという業務のトータル

とした疲れが出始めた頃です。今思うと、軽い五月病だったのでしょう。「これから、どうする、いや、どうなる」なんてぼおっと考えながら、プレイルームのソファに腰掛けておりました。そこに現れたのが、A ちゃんでした。空き教室を利用したお世辞にもきちんとしたプレイルームとは言えない部屋の戸口から女の子がのぞいてます。私が「どうしたの？」と声をかけると、「ここで遊んでたん」と言います。最初は何のことかわからずにいましたが、彼女のたどたどしい説明をつなぎ合わせると、どうやら前任のカウンセラーのケースだということがわかりました。彼女のことは、引継ぎのリストにはあがっていましたが、担任の先生とは新年度になって様子を見てから声をかけるという事になっておりました。自分からカウンセラーに声をかけてくる子は皆無でしたので、私としてはちょっとビックリでした。A ちゃんは懐かしそうに部屋に入ってきて、棚の玩具などに手を伸ばします。「これ、面白いで」と手に取りながらカウンセラーである私に説明してくれます。A ちゃんの第１印象は、ちびまる子とじゃりン子チエを足して２で割ったようなこてこて感を漂わせた子どもでした。ほんとに楽しそうだったので、思わず「そうか。じゃあ、また来る？」と誘ってしまいました。「ええで」と了承してくれ、プレイセラピー再開の運びとなりました。担任とカウンセラーである私が話し合い、正式にＡちゃんは私のクライエントとして面接に来ることになりました。詳細は省きますが、以前家庭での ＡちゃんとＡちゃんの兄の養育に問題がありました。児童相談所も入って保護者と話し合い、一応落ち着きました。その際、スクールカウンセラーとの面接が見守りの一部となったようです。児相によれば、問題となっていた養育者である祖母と兄の関係は随分落ち着いているようで、A ちゃんもとばっちりを受けることはないところまで来ているとのこと。でも、小学校が把握しているのはそこまでで、A ちゃんの家の細かい背景や、出ていったＡちゃんの実母のその後などはわかっていないようでした。祖母も仕事をしており多忙を理由に学校との面談も渋りがちな様子でした。

そして 2 回目の面接に A ちゃんがやってきたときのことです。A ちゃんと私が定期的に面接する理由など、私なりに、かみ砕いて話しました。A ちゃんに問題があってという事ではないことを伝えたい気持ちが強くありました。複雑かもしれないけれどもＡちゃんの口から家族の紹介をしてもらおうと思い、黒板に一緒にジェノグラムを描くことを提案しますと、「ええで」とすんなり了承。て言うか、非常に積極的に説明してくれたのです。

「うちには、お母さんは居てるけど、ほんとのお母さんじゃなくて、お祖母ちゃんやねん。お母さん言うけどな。ほんとのお母さんは、ママ言うて、時々、弟連れて帰るよ。ほんでな...。」

クリアに自分の家庭状況を述べるＡちゃんと、見た目幼く、鼻さえたらし気味の Ａちゃんのギャップに暫し唖然となったのを今でもはっきり記憶しています。Ａちゃんにすれば、それは日常であり、Ａちゃんの家族のリアルなのですが、自分の家族の複雑さを客観的に淡々と語る小学校２年女子に、

健気さ、強さを感じました。そして正直、この子に比べれば、自身の五月病の軽いのなんて、たいしたことないよなと、得心したのでした。興味深いのは、Aちゃんが家族について雄弁に語ったのは、その１回こっきりでした。それから以降は聞いてもあまり話したがらなかったように思います。

　スクールカウンセラーをやり始める以前のケースとして出会った人たち、またスクールカウンセラーとして今も出会い続けている人たちから、勇気づけられることは多々あります。しかし、あの日のあの時のAちゃんから受けたインパクトと「助けられた」という感覚は、今も別物です。

※文中の事例については、プライバシー保護のため、事実関係は大きく改変しております。

けふばあちゃんからの手紙（7）

― まこちゃんへ ―

（じゃりんこ文庫　乾　京子）



比良山に雪、真っ白い伊吹のお山も、お天気の良い冬の日には大津からも琵琶湖の奥に見ることが出来ます。この風景が一年のうち一番好きな風景です。この前、守山の美崎公園近くの菜の花畑を見に行きました。風は冷たいのに、黄色の菜の花を見ていると、（ああ、春も近いなぁ）と思えます。

お元気ですか？先週の文庫の日、5年生の子に「おばちゃん、何歳？」って聞かれました。

「何歳だと思う？」

「う～ん、28歳？」

「そりゃ、サバの読みすぎじゃない？700歳？かも？」

うっ、これもサバの読みすぎ？・・・・本当のところ、今年は70代最後の年になってしまいました。つい、うっかり…という事も増えてきて、なんと参加申込していた講演会も当日忘れていて、夜になってから思い出すという失態もやってしまいました。まこちゃんの成人式の着物姿の年賀状をいただいてから、もう何年も経つのですから、けふばあちゃんがどんどんおばあさんになっていくのも無理はないですね。

まこちゃんは、おかあさんのお腹にいる頃からの常連さんで、「じゃりんこ文庫」のアイドル的存在でした。（ええ～っ、そんなぁ。）って思うかもしれませんね。でも、今回、「じゃりんこ文庫日誌」を読み返していたら、赤ちゃんの時のまこちゃんから、1 年に 300 冊以上の本を借りだしていき、おすすめの本を教えてくれるようになるまで、日誌を読み返していると、その時その時のまこちゃんが目に浮かんできます。ちょっと、日誌から拾ってみることにしましょう。

1998年1月29日

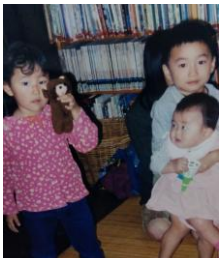
春木さんのところのまこちゃん、先週は抱っこしてもどうもなかったのに、今日は、人見知りをするようになって、おかあさんでないとダメ。だっこすると、真っ赤な顔をして怒る。日々成長してるんだなぁ。

1999年1月21日

「ネコの大王のトムテルドラムって知ってるかい？」今日ようやく意味が分かった。何度も聞いているのに、そうか、トム、いっしょだったんだ。K さんより、蒸しパンケーキの差し入れ。お話の後で、みんなでお茶にする。まこちゃんが、♪あか　しろ　きいろ♪とか、♪ぞ～うさん、ぞうさん♪とか歌を歌っている。早いなぁ、子どもって大きくなるの早いなぁ！・・・

2000年4月6日

まこちゃんが“おばちゃん、読んで！”と『バアババパパ』ｱﾈｯﾄ･ﾁｿﾞﾝ/ﾀﾗｽ･ﾃｨﾗｰと『アンパンマン』やなせたかし作の本を持ってくる。その後、『ぞうのババール』ｼﾞｬﾝ･ﾄﾞ･ﾌﾞｼﾞｭﾉﾌ作がテレビで放映されているというので、ババールを読んでいるうちに、まこちゃん、スウスウと眠ってしまう。おかあさん曰く“今日は、文庫の日だからお昼寝しておこうね”って、何冊も読んだんですけど、「けふばあちゃんのお家に行く日だ。」って興奮して寝ないんですよ。安心して眠っちゃったんですね。“



2000年貸し出し冊数、329冊。翌2001年386冊、2002年313冊。
（因みに、「じゃりんこ文庫」で1年間に3桁の貸し出し冊数の子は、
まこちゃんと樹くん―100冊から200冊―のみ）

2004年3月18日

まこちゃん、『スズナ姫』富安陽子さく・飯野和好え読了。“おもしろかった！おばちゃん次は？”と、『魔女の宅急便』角野栄子さく福音館と『大おばさんの不思議なレシピ』柏葉幸子さく・偕成社を持って帰る。樹くんも、『冒険者たち』『ガンバシリーズ』『グリックの冒険』斎藤敦夫さく・岩波書店みんな読んじゃって、頭の中は、ネズミたちでいっぱいだそう。

2004年7月15日

樹くん、2時過ぎからやってくる。宿題の百人一首をやって、文庫の準備を手伝ってくれる。
“ああ、暇すぎ、たいくつ！おばちゃん、なんか作ろう！”
で、仮説のペットボトルで噴水づくり（ヘロンの噴水）、でも少々空気が漏れ、よって、水が漏れる。が、噴水は成功。見ていた M ちゃんの“ふん、そんなのおもしろくない！”の反応に気をそがれる。まこちゃんは、そんな M ちゃんに本を次々紹介している。しかし、M ちゃんの反応はいまひとつ。
“そんなのおもしろくな～い。”
《すなおに楽しむ喜び》それがそがれてしまう事への反応。まこちゃんのしんどさは、そんなところからくるのだろうか？ご近所故にそれを見ていたおかあさんも少しつらそう。一生懸命さが余計につらくなるのだろう。少し、気を抜かないといけないのかなぁ。しかし、《いい加減》《ほどほどに》これが意外と難しい。

《うつくしい》まこちゃんとＭちゃんの会話にでてきて、“うつくしいってどういうこと？”と聞いてみる。
“うつくしいってな、きれいってことやで。知らんの？”
“かわいいってこともあるで。”
私は、『よあけ』ユリ・シュルヴィッツさく・え福音館書店をこの時読んであげたらよかった！と、後で思ったのでした。

2005年1月20日
…新しく来られた牟田みかちゃんに、まこちゃんと Ｍ ちゃんが文庫の本の分類色分けやカードの書き方を説明したり、本を選ぶ手伝いをしたりしている。よく考えたら、私は何も説明していなかった。学校に友だちができたんだなぁ。そして、その人を連れてくる。ここでは、まこちゃんは少し先輩であること。まこちゃんが自信をもって話ができる場であること。読み聞かせも上手、“さすが！！”と思ってしまう。表現力も豊か、やっと、学校にも広がりができたんだね。よかったね。“今まで読んだ本の中で『やまんば山のモッコたち』富安陽子さく・福音館書店が一番好き！”と話してくれる。

2005年5月26日
・・・あきちゃんのおにいちゃん、ふゆとくんは双六が大好き。今日は、自分で考えて作って、遊びだす。みかほちゃん、樹くん、まこちゃんがやってきて、“あそびにきたよ～”とみんなで遊びだす。
“おばちゃん、おかあさんがいない時は、ババァ！！って言っていい？と、まこちゃん。
“それはいやだ！やまんばならいいけど。”
“ええっ！”



2005年6月30日
お湿りの雨でラッキー！まこちゃんがふゆとくん、あきちゃん兄妹に紙芝居をしてくれる。
『いないいないばあ』『さぎとり』『おどるドラゴン』と読んでくれる。Ｎさんが、
“おねえちゃん、何年生？”と、聞く。
“2年生！”
“ええっ！2年生！！もっと大きいと思ってた。4年生か5年生かと思っていたよ。上手だねぇ。すごいねぇ”
と感激。まこちゃんは、にこにこ・・・。それを眺めている私もにこにこ。

2005年7月14日
まこちゃん、紙芝居を読んでくれるつもりだったのに、今日はけふばあちゃんが読んでいたから、少しおへそを曲げてしまう。”読まない！“と帰っていくが、ドアを開けて、覗いている。みかちゃんも紙芝居読みたかったのに、まこちゃんに遠慮していたんだって。この次は頼もうかなぁ。Ｎさん兄妹が、幼稚園で教わった「おはなしのはじまりの歌」を歌ってくれる。子どもたちなりに自ら自分でできることで参加しようとしている。《自分が何かをしたい》と思うこと。いいなぁ。うふふ・・・と眺めている。みんな、育て！！育て！！

2005年7月28日
みんなより少し早く来たまこちゃんとちこちゃん、お姫さまゴッコを始める。
“おばちゃんは召使になって。ちこちゃんがお姫さまでまこがペットのチーターのミント。おばちゃんがエサをやっ



たりお散歩させたりするの。いい？”
すっかりチーターのまこちゃん。ちこちゃんも言葉遣いが
すっかりお姫さまに変身。子どもの遊びは、どんどん広がる。
やがて、お茶の時間。いつものおままごとセットでティタイム。

2006年2月23日

まこちゃんが『こそあどの森』岡田淳作・理論社8巻の感想をいっぱい話していってくれる。
“おもしろかったよ。『ぬまばあさんの話』、わたし、知らない人に声をかけるの苦手だもん”
といいつつ、おかあさんの手づくりクッキーをもって、
“あの～、これ、好きなのとってください。！”と小さな声で何度も何度も言っている。苦手だと言いながら、本当は、挑戦したいんだ。・・・でも、他のおとなの声が大きいから…でも大丈夫。ちゃんと聞いている人いるよ。

2006年5月18日

Ｋくん、樹くん、まこちゃんに団体貸し出しの図書館の本のチェックを手伝ってもらう。おかげで助かった。
まこちゃん、犬を飼いたいんだって。
“お兄ちゃんたちも部活でいないし、おかあさんもお仕事にいっちゃうので、まこちゃん一人になるからね。だから、犬を買ってもらうの。夏休みにするか、その前になるか？マコはね、夏休みの前がいいんだけど、・・・・最後はね、お父さんが決めはるの。”
“おばちゃん、まこちゃん好きだっていう人、何人いると思う？”
“さあ、10人くらいかなぁ？”
“4人だよ。男の子。”
“その中のだれか、まこちゃんも好きな人いるの？”
“一人だけ。あとはふざけん坊だもん”
今日は、ゆっくりまこちゃんとの会話をたのしんでしまった。

2006年6月29日

・・・・まこちゃん、犬を飼うことになったんだって！よかったね。チャメだったかな？チョコ？いや、チャコだったかな？ミニチュアダックスフントのクリームと黒の毛が混ざったんだって。よかったね。まこちゃんの願いがかなったね。

何だかね、読み返していて愛おしくなってきてしまいました。もう、まこちゃんは覚えていないでしょう。何気ない日常の中に、小さな小さなドラマを作りながら、みんな大きくなっていくんだなぁって、日誌から、今回まこちゃんの記事を拾い上げるだけでも思いました。20 年という歳月を経て振り返ると、友だちとの関係もだんだんに変わって行ったり、当座はしんどいと思ったようなことも（ああ、こんなことで悩んでいたんだなぁ）と思えたり、ファンタジーの世界にスッと入っていくことが出来たりと、幼い子どもの日々は宝物のようですね。
もう、関東での暮らしにもすっかり慣れてお元気でご活躍のことと思います。帰省の折、また、ふらっと寄ってみてくださいね。それでは、またね。お元気で！



心理臨床における多重関係を考える

地方のありふれた心理士の日常から

本林 友梨

1. 10 年目の決心

こころに携わる仕事を始めて 10 年目，私は一大決心をした。職場で使用する姓を変える，すなわち旧姓を使用することを。

現在の職場は結婚後に入職した職場であり，結婚後の姓で仕事をしている。しかし，地域での生活や心理臨床家としての活動が積み重なってきた今，現在の姓では臨床のやりにくさ，つまり様々な形の多重関係を経験するようになった。それには，私の現在の姓がこの地域で珍しいものであること，夫の職業が私の職業と近接領域であることが大きく影響していると考える。旧姓を使用していくことにより，事前に周知したとしても職場に混乱が生じることが予測でき，また外部関係機関にもご迷惑をかける可能性もある。私としても，これまで積み上げてきた人との繋がりに影響が出たり，プライベート面についての憶測が生じるのだろうと容易に想像でき，不安な気持ちになる。

しかし，そうはいっていられない。私が最も懸念していることは，「私はクライエント（以下 Cl）との多重関係について全く気づいていないが，Cl が私との多重関係について気づいている，疑っている」ことが生じる場合である。この場合，もちろん私は何も負担はない（多重関係が判明するまでは・・・判明した後は，相当の罪悪感やその心理臨床に対する迷いなどを抱くだろう）。しかし，Cl にとっては「もしかして○○さん（夫の姓）の奥さんではないか？」「もしかして，○○さん（夫の姓）ところのお嫁さんではないか？」など想像することとなり，あれこれ考え負担に感じることになるかもしれない。治療（病院への受診自体）を滞らすことになるかもしれない。私が気づかずにいる間に，大切な Cl が傷ついているかもしれない。これは非常に耐え難い。

姓がここまで私の臨床のやりにくさに繋がってくることは，入職した当時の私には考えられなかった。地域の狭さによる息苦しさに圧倒されるなんて今一つ想像できなかった。一方で，この地域に腰を据えて生活していくことで，こんなにも多くの人が私や私の家族に関わってくれ支えてくれると

いう未来も想像していなかった。多重関係が生じること，はたまた仕事の姓を変えざるを得ない状況になっていることは，私や家族が地域社会の中でなんとか生きることができているという喜ばしいことの副産物なのではないのだろうか。それならそれを受け入れ，向きあっていかなくてはならない。

2. 私と心理臨床における多重関係

私の臨床における多重関係を持つことに伴う苦しみはいつから生じたのだろうか？ライフラインチャートを作成し大まかな整理をおこなった。横軸は院卒業後～現在の時間，つまり『心に携わる仕事を行ってきた時間』とし，縦軸は『臨床で多重関係を経験することのしんどさの程度（悩みの程度）』とした。

最初の 2 年間は臨床の多重関係が連れてくるしんどさを感じなかった。というか，こういうしんどさがあるとも思っていなかった時期である。院卒後は大学近くの医療機関で働いた。出身大学がある地域はそれなりの都市であったこと，出身地とも違う地域であったこともあり，多重関係を伴うことはなかった。またデイケアでの勤務で，デイケアという場の中でメンバーさん達と関わることが仕事であった。よって，心理臨床の文脈における Cl との関わり方について大きく注目することはなかった。むしろ，学生時代に習ってきた心理臨床家としての Cl に対する在り方と異なる視点でのあり方があることを知り，そのあり方について注目し，デイケアという場で心理職としての私はどのようにして在ることができるのか，在るべきなのかと考える日々であった。臨床心理士 1 年目には出身県に戻ったが，出身地域である田舎の方ではなく，県庁所在地である比較的都会の地域で生活し，大学病院に勤務した。同時にスクールカウンセラーとしても勤務した。配属校は比較的田舎地域にある学校であったが，出身地域ではなかったので対象者との多重関係は経験しなかった。臨床心理臨床家 2 年目は 1 年目と同様の働き方をしたが，SC 先が 1 つ変更になり，出身地域からの通学が可能な範囲にある学校となった。そこで，はじめて多重関係を経験した。その多重関係が生じた要因は家族と対象者の繋がりであった。臨床心理臨床家 3 年目，待ち焦がれていた医療領域の常勤職の求人があり，入職が叶った。それが現在も勤務している，私の出身地域の医療圏域にあって，現在そしてこれからもずっと生活していくだろう地域にある病院である。当然，応募する際には「ちょっと近くないか・・・」と懸念はしたが，当時その県では医療領域の正職員の求人は非常に珍しく（公認心理師制度開始以降は散見されるようになった），「これを逃したら次はない！」という気持ちが勝った。また，結婚して病院に近い地域に引っ越ししてきたという時期でもあった。今後の現実的な生活を考えたうえで応募を決めた。多重関係の発生を意識しながらの，自身のキャリアとプライベートを両立させていくための決断だった。ここからあれよあれよと，様々な質の多重関係を経験することとなった。特に子が生まれてからは一気に人との関係が広がり，毎日が鮮やかになる感覚を持つ反面，臨床ではしんどさが増えた。これでいいのかと悩み，相談する勇気も出ず，心理臨床

家としてはどんどん縮こまっていく感覚を持った。

自身のライフラインチャートから，心理臨床における多重関係についての苦しさは「出身地域に近づくほど生じやすくなる」，「心理臨床家であっても業務内容によるかもしれない」という当然なことをはじめ，「パートナーや子など，家族が増えると多重関係はますます不可避となり，私も含めそれぞれ社会で活躍すればするほどますます多重関係が頻発する」ということが確認できた。私として，母として，妻として，心理臨床家として，それぞれの役割を一生懸命すればするほど，多重関係は避けられなくなり，しんどさも強くなる。

3. 私の心理臨床におけるかかわり ―関係学の視点から―

心理臨床での多重関係を考える中で，松村康平により提案された関係学が連想されることを以前にも述べた。関係学は「かかわり（関係）構造の分析をすすめて，人間の根源的な自己・人・物の接在共存関係状況を究明し，複雑な人間諸現象をその状況の顕在化の過程においてとらえ，関係発展の実践活動を促進する理論的枠組みを提供する」（松村, 1980）ものである。臨床における多重関係はまさに，私，Cl，地域，夫，子など様々なものの“関係”であり，私はその“関係”について深く捉えたいと願っている。よって関係学は私の願いを叶えてくれるだろう理論であるが，いかんせん私にとっては難解だ。そこで，現在の私の理解を整理したい。以下の理解は佐藤啓子氏の『家庭における人間形成』を参考とした。

関係学では人間を関係的存在，つまり，私たちは関係の中で生きているとし，その関係は自己・人・物から規定されるとする。例えば今，私は家の一部屋でひとり机に座り，パソコンに向かっている。「締め切り間に合う？！」「なんでいつもギリギリなんやろ」「関係学，難しい・・・！」など頭の中で叫びながらこの対人援助学マガジンの原稿を書いている。私は一人であるので，この場面は「自己（私）」だけで成立すると考えてしまうが，違う。机や椅子，ＰＣは「物」であり，それらが私の家に来るまでには様々な人の手が必要であっただろう。また，「締め切り間に合う？！」などの「自己」に問うてる言葉も「物」である。佐藤は言葉について，「コトバという「物」と使って「自己」の思考を進めているのであり，そのコトバは，私個人という自己が作り出したコトバ（物）ではなく，日本人という「人」の間で長い間使われながら，現代風のコトバとして培われてきた「物」なのであって，私は，その「人」と「物」との関係を「自己」にとり入れながら思考を進めている」と説明する。

このように，今この状況の私は，様々な「人」が関係してからこそこの部屋にあることができる「物（机など）」，獲得した「物（言葉）」によって成立している。人・物の関係があるからこそ私は原稿を書けているのだ。

関係学ではこのように自己・人・物を捉えるが，それぞれがどのように関係をしているのかを示す「かかわりの原理」がある。自己・人・物を○で表し，「かかわりの原理」に即し配置し構造化する。かかわりの原理には，内在・内接・接在・外接・外在という5つのかかわりがある（図1）。

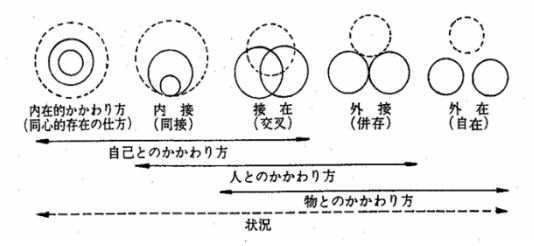


図 1.　5 つの関係の機能（佐藤, 1994）

内在的なかかわりとは，その状況に存在する自己・人・物が一体化している状態である。内接的なかかわりとは，その状況に存在する自己・人・物それぞれで接点を持ち，それらが生じさせる環境に少しも逆らわずに即しながらいる状態である。接在的なかかわりとは，例えば，自己が人・物に働きかけ，自己を含めた人や物やその時の状況が快的な事態になるように工夫してかかわる状態のことである。外接的なかかわりとは，自己・人・物がそれぞれ接しているもののそれをきっかけとしてそれぞれが変化しない状態である。例えば自己においてはいえば，その接している人・物がきっかけとした自己の内的世界の展開が認められないかかわりである。外在的なかかわりとは，自己・人・物それぞれの間に交流が生じていない状態のことである。また，自己・人・物と状況とのかかわりは切れておらず共有している状態であるため，その繋がりからかかわりを作っていける可能性がある状態でもあるといえる。これらの 5 つのかかわりの中で，特に接在的な関わり方，つまり自己・人・物が共に活かされあって共存する状況（接在共存状況）が発展に繋がっていくと考える。

例として，私がスーパーで Cl と出遭った場面とその後の心理面接での場面について（匿名性を守る理由から一部を変更，再構成している），かかわりの原理を考えてみる。私は言うことを聞かない子に対し，無事に買い物を終えられるように，怖い顔でありながらも必要なメッセージを伝えていた（周囲から見るとただ怒っていただけであるだろう）。その場面を少し離れたところから Cl が見ていたようである。この場合は，私（自己）と子（人）が接在し，私（自己）と子（人）に対して Cl（人）が外在している状況だと捉えられる。この直後の面接で，Cl からスーパーで私の姿を見たことが語られたため，私もそれを認めた。そこで Cl にどのような気持ちになったかを尋ね，心理面接における面接室の外で出遭うことの意味について伝え，心理臨床家としての私の気持ちも伝えた。この場合，外在的なかかわり状況であった私（自己）と Cl（人）が，多重関係の経験（物）を媒介とすることで心理臨床家と Cl としてなんとか有効な関係継続を志向した状況であり，接在的なかかわりで状況であると考えられる。

私は面接室外で出遭ってしまった際，直後の心理面接で必ずその話題を取り上げるようにしている。出遭ってしまったことについて Cl はどう感じたのか，心理面接において面接室外で出遭うことの意味，そして心理臨床家としての私の率直な気持ちや考えをお伝えした上で，今後また経験する可能性のある偶然の出遭いについてどのように対応していくことができるのか相談する。私の臨床では面接室外で出遭ってしまうことは日常茶飯事であり，多くのケースがあてはまる。しかし，上述したように多重関係の経験（物）に逃げずにしっかりと向き合い，心理臨床家である私（自己）と Cl（人）の接在的な関係を志向し対話することで，今のところではあるが面接室外で出遭って

しまうことに伴う問題（例えばClにとって遭遇が非常に苦しいものとして経験されたと伝えられたり感じられたりすること）は経験せずに済んでいると感じる（当然なんらかの影響はある）。多重関係を経験した後でも，心理臨床家とClの関係を継続することができている。このように自身の臨床から考えても，接在的なかかわりを志向していくことは心理面接においても非常に重要なものであると理解する。

4.「私」に求められるもの

本稿では関係学理論について整理しつつ，自身の臨床を関係学視点から捉えなおした。スーパーでClと出遭ってしまった私（自己）におけるClへのかかわり状況は外在的なものであった。心理面接内で共に経験した多重関係について取り上げる場面においては，心理臨床家である私（自己）とClは接在的なかかわり状況であると考えたが，その他の心理面接場面でのかかわり状況はどのようなものであろうか。心理面接とは，いったいどのようなかかわり状況が展開されるものなのだろうか。これは今後の学びの中で明らかにしていくべきことであろう。しかし，スーパーで出遭ってしまった場面のような外在的なかかわりは認められないのではないかと推察する。そうであれば，関係学的視点から心理臨床における多重関係を理解すると，心理臨床家やClが心理面接内でのかかわり状況のみにはとどまれず，心理面接内では認められないかかわり（外在的なかかわり？）を経験する状況であるとイメージする。

多重関係の頻発を経験する私は，心理臨床家として様々なかかわりを接在的なかかわりとして成立させていく技量が必要とされる。それを得るためには，心理臨床家としてだけではなく一人の人間として豊かになっていく，つまり物事について多くの視点から考え悩みながらもやっていく，“倫理的に生きる”ということが求められるであろう。

冒頭で，仕事で使用する姓を変更すると述べた。この選択は状況発展に向かうものとなるのだろうか。心理臨床家として居る状況では，心理臨床家である私(自己)が強調し続けられることが重要であり，理想である。しかし，私の臨床ではそれが実現しにくく，そのような中でもなんとかやっていくには様々な自己を，人を，物を，接在共存関係にすることが求められる。しかし，私は姓を変えようとしている。これは妻である私，生活者である私という自己を抑えることになる。つまり，実現しにくいことを理解しているのに心理臨床家としての私を強調しようとしており，いろんな私にとって発展していく可能性を阻んでいることにならないか・・・！！冒頭であんなに力強く明言したのに迷いが出てきてしまった。しかし，旧姓を用いるという考えは，小規模コミュニティにおいて臨床を行う者として，自らの位置を問い続けるための実践であると捉えている。現実に対し向き合い，誠実に考え，悩みながら実践し続けられる心理臨床家でありたい。

……

本稿において関係学についての理解を記述することを通して，私の中の関係学の輪郭が少し見え始めた。しかし，その輪郭はあくまで仮のものである。この記述を通

してさらに深く考え，また諸先生方からご指摘等いただくことが叶えば，より明確な輪郭を見ることができると考える。私が関係学と接在していくためには，時には間違った理解をしながらも深い理解を目指して，関係学と関わり続けていくことが必要なのである。

……

松村康平（1980）. 人間科学としての心理学――２つの著書の書評を中心として. 応用心理学研究, **3・4**,45-65

佐藤啓子(1986). 家庭における人間形成 高文堂出版社

佐藤啓子(1994). 関係原理とその展開 ２)関係とは． 関係学会(編)． 関係学ハンドブック.



森で出会えば…

～野山で感じるつながり記録～

田中　千晶

これ、持って帰りたい！

自然散策をしていると、どの季節、どの年齢の子どもからも聞こえるこの言葉。なじみのある園庭や散歩道、遠足に出かけた公園や野山、どこにでも心惹かれる宝物が落ちているようです。帽子つきのどんぐり、小さなお花、木の実や小石、時には抱えないと持てないほど大きな木片まで。その時感じたよろこびや感動をそのままおうちに持ち帰りたい、家族に見せたいという気持ちが伝わります。園で３歳児を担任していた時、お散歩に行くときはビニール袋やデザートのカップをマストで用意していました。

たくさん雪の積もった２月、どの子も雪合戦や雪だるまつくりで遊ぶ中、３歳児の女の子が「ちあき先生、わたし、袋ほしいの。」と声をかけてくれました。お散歩用のおなじみのビニール袋を渡しましたが「うーん、これは小さい…。」と今日は納得してくれません。最終的に彼女は自分のお着換えをストックしてあるカゴの中から、汚れた衣服を持ち帰る用の大きなビニール袋を見つけ意気揚々と園庭に戻っていきました。

『そろそろ給食だよ～』と声をかけ、彼女のところにも顔を出しにいくと、テラスの前に座り込み、せっせとビニール袋の中に雪を詰め込んでいました。私が見ていることに気が付くと袋の口を大きく開けて「これ、こども園の雪！お母さんに見せてあげる！今日持って帰る！」と満面の笑みで教えてくれました。

忘れていた自然へのウキウキ

北国の冬、大人にとって積雪は全くといっていいほどうれしくないもの。天気予報で雪マークがついた前後数日はどのくらい積もるのか、何時に家を出たら予定に間に合うのかと心はソワソワ、連日続く雪解けで体はバキバキ。しかし、大人にとってはうんざりの雪も子どもにとっては宝物。とくに彼女の目には【おうちのまわりの雪】と【こども園の雪】は別物に見えて、特別な雪だったのかも。

その日は比較的暖かい日だったので、お迎えに来られた時には雪はぜーんぶ水になっていました。まだまだ生まれて３年、そんな先のことは予測できていなかったみたい。『ショックで泣けてしまうかな？どうかな？』と様子をうかがっていましたが、溶けた雪でタプタプするビニール袋を見つめて「あれ？なんかなくなっちゃった！」と案外ケロっとキョトン顔。お迎えにきたお母さんの顔を見るや否や「お母さんにこども園の雪を見せたかった。」という思いを、時系列も言葉の順序もめちゃくちゃになりながら伝える彼女の姿にお母さんは大笑い。「雪なんて、毎日どこでも見れるやん（笑）」と突っ込んでおられたけど、彼女にとっては何か特別光って見えたことで

しょう。未だに某薬局の緑色のビニール袋を見ると情景が鮮明に思い浮かぶエピソードです。

雪の日の活動モチベ

こんな雪の日のかわいらしいエピソードが五万とあるのが園勤務時代の財産です。遊びのエピソードだけでなく大人との体験も豊富でした。保護者の方が子どもを預けに来られるずっと前に出勤し、朝５時起きの大人がおつまりせっせと雪解けをしていたのも今となればいい思い出。よくよく考えると園の先生なんてほとんどが女性。男手を借りずに老いも若きも協力してなんとかやってこれたんだなぁ。雪解けや凍結対策をしながらクラスの子ども達のかわいい雪遊びエピソードの自慢大会をする日々が寒い中、大変な中出勤した疲れを吹っ飛ばすエネルギー源でした。

そんな現場をはなれて２年目の冬。特に早起きして雪解けをがんばるモチベーションもなく、大雪の時期に完全にふさぎ込んでしまいました。気持ちが沈むと体もだんだんしんどくなり、夜だけ発熱する謎の体調不良にも悩まされました。

私は「森のようちえん」大好き人間なので、北欧の暮らしについてよく調べていた時期がありました。フィンランドなど北欧諸国は冬になると日照時間が極端に減り、雪国うつ（ウインター・ブルーともいうらしい。）になる方が多いという情報を思い出しました。思えば、雪の時期って基本が５時起き。冬の５時って驚くほど暗いんですね。加えて雪が降る前の風の音や、雪が降った後の静けさってなんだか独特の不安を連れてくる…。「うわぁ…これか、これで苦しむ人がいるのか…。」と痛感した瞬間でした。

しんどい冬をどう過ごすか

この冬は後期の授業も終わり、登校日が減ったことや「やらねばならない」ことから一気に解放された脱力感もあり、ふさぎ込みに加えて昼夜逆転になりかけていました。そんな時、柄にもなく本を読みたい気持ちになりました。自分の学外 SV 竹村洋子先生の著者を手に取り、SV に行き始めた頃、朗読されていた冬の詩を探したくなったのです。【冬枯れの山肌は、厳しい寒さに息絶えた静寂を漂わせる。そうして春を待ち、山肌はほんのりと色づく。】【人の「私」を行かすいのちの芽も、どのような境遇にあろうとも育とうとして、その時を待っているように思う。】（ｐ86 より）
初回 SV の際、先生が読んだのはこのページだったことを思い出し、雪が溶けだすと木々や花々の新芽が顔を出すこと、雪で折れていたと思っていた枝もしなりがあることで折れずに堪え、春に向けてしっかり準備ができているとわかるとじーんと胸が熱くなることなど感じたことを語りあった記憶もよみがえりました。

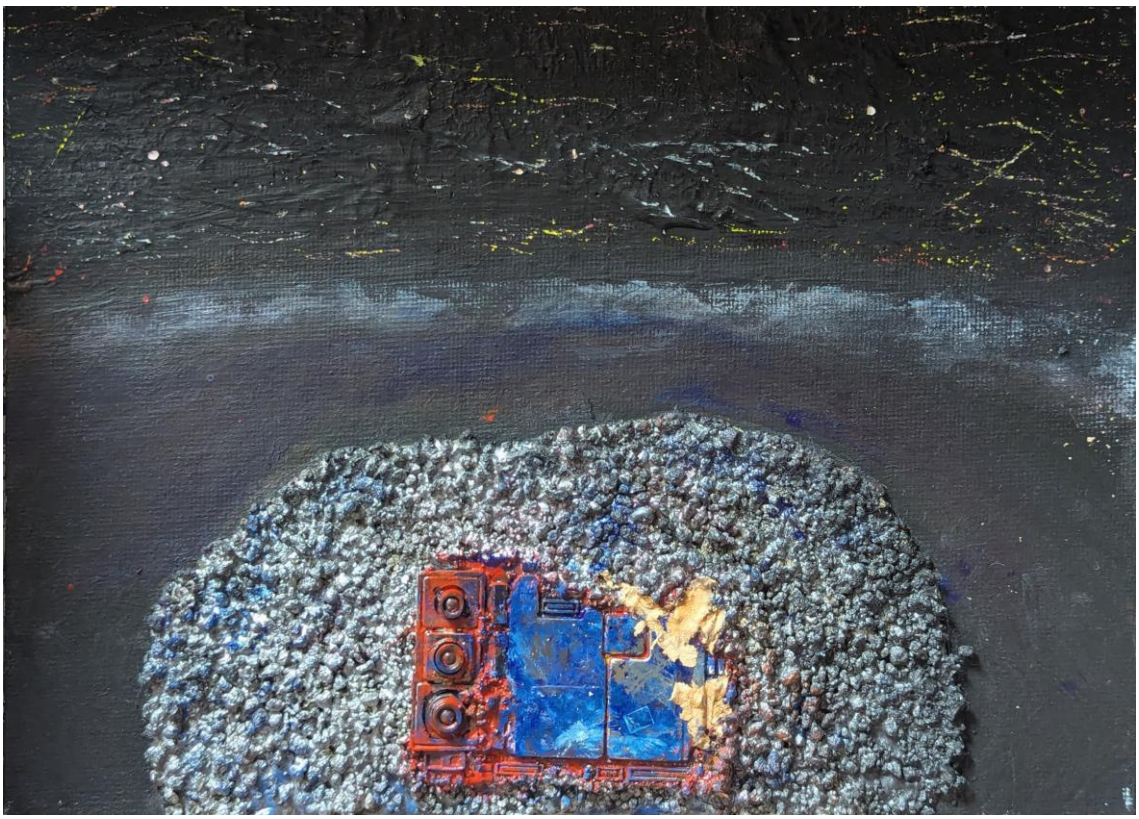
あぁ、今しんどいと感じている自分は春に向けて耐える冬のいのちみたいなものなのかもしれない…と感じ、少しずつ起きる時間を整えたり、ちょっと台所に立ったり、寒く暗い冬でも、家の中でできるご自愛タイムを作ろうと心に決め２週間ほど、こうして原稿を書けるまで立ち直りました。すっかりため込んでいたタスクが山盛りだったので、休載しようとしていたのですが、思えば去年の２月から始めた連載、１年続けられて２年目に突入するのにお休みなんてもったいない気もして。自分の中にある自然のリズムを整えながらこれからもぼちぼち連載を継続していこうと思います。

参考文献
竹村洋子（2021）『いのちの営みに沿う心理臨床』創元社　ｐ86

地球と宇宙の文化心理学

第 4 回　解題：「第二の皮膚」(2)

土元哲平



日常の散文的時間のなかに無数のミクロな事件のかたちで偏在している記号の生成体験によってその基盤を与えられながら、しかしその等し並の偏在性のなかへと溶解されてしまうことを飽くまで拒み、突出した特権的瞬間にふさわしい燦然たる輝きを主張してやまない際立った記号の現在としての、詩。詩がもし存在するとしたら、それはこの、言葉のわけのわからなさに対して過剰に研ぎ澄まされた倫理的感受性によってのみ現実化されうるべきものというべきだろう。（松浦, 1984; p.255-256）

「私＝風景」の倫理

「第二の皮膚」の詩の中で私が描こうとしたのは、月という「皮膚」あるいはその表面としての「肌理」が侵食されるという〈事件性〉であった。これを「事件」とあえて呼んでいるのは、月が、世界各国の人びとに同時的にまなざされる、審美的で神聖な風景であるにも関わらず、主要宇宙開発国という権威的な主体がその風景を改変し、そこに「人が滞在する」という破壊性が潜んでいるからだ。連載第 1 回で述べたように、特定の「場所」や「風景」は、深い存在論的次元において自己を形作っている。その最たるもの、そして地球で生きる人類ともっとも切り離せない風景こそ、月なのである。

この詩では、「風景」のその先にある自己の存在の輪郭——すなわち、風景とともにある私という存在——についても思考している。私が地球から月という風景を眺めているとき、その先に広がるものは「無」なのだろうか。それとも、そこにも「私」がいるのだろうか。「私」というものが自己と世界が相互浸透しあうことで成立しているのだとすれば、月はもっとも離れた「風景＝私」であり、その外部に広がるものは、私にとっては「無」ではないだろうか。これが詩の中で描かれた暫定的な答えであった。

というのも、私はどうあがいても地球に生きており、月のさらに先にある天体を、実感を伴う存在として経験することはできない。太陽系のいくつかの惑星は確かに存在している。しかし、それらが失われたとしても、私はそれを喪失として感じることができるだろうか。太陽や火星、あるいは冬の到来を告げるオリオン座の星々が失われるという事態は想像を絶する危機であるが、それらは、改変されることさえ思考の射程に入らない。一方の月は、その表面の肌理（きめ）を風景の一部としてみなすことができるほどに、改変可能な脆さを持つからこそ、私の風景となり得る。風景の喪失の危機が現実化されたとき、月は「私」になったのかもしれない。だとすれば、私にとって現に立ち現れている風景とは、倫理的想像力の届く範囲なのではないだろうか。

この詩において描かれる「金属の影」は、月を探査・開拓しようとする諸技術を象徴している。また、「アリのように群がる」という表現は、それらの技術が月に存在するとされる水資源へと直線的に向かっていく様を喩えたものである。月の南極域に位置する永久影クレーターには水氷の存在が確認されており、水は人類の生存に不可欠であるだけでなく、電気分解によって水素および酸素を生成できることから、将来的な宇宙探査、とりわけ火星探査を支える戦略的資源でもある。しかしながら、月面開発においては人類の生存確保が第一義的課題として前景化される一方で、「地球からみた風景」に対する倫理的態度については、ほとんど顧みられていない。

人類が再び月へ向かうという事実は、必ずや多様な領域におけるインスピレーションの源泉となるだろう。しかし同時に、その活動が、風景に対する特権的、あるいは機械的な外部からの介入、さらには暴力ともなり得る可能性を孕んでいるということを自覚する必要がある。月は単なる物理的天体ではなく、私たちの身体感覚や精神と深く結びついてきた。そうであるならば、宇宙開発という人類の生存域の拡張を志向する営みは、他方で、

私たち自身の存在の輪郭や境界を揺るがす行為でもあるためだ。月という風景が非可逆的に改変されることを想像することは、私たちが自明視してきた「地球らしさ」――月なしには成立しえない文化化された自然――を問い直す契機となる。

二重性と詩的運動

「第二の皮膚」の詩の主要な特徴の一つは、その二重性にある。そこでは、月と地球という遠く隔たった場所を同時に経験する空間的二重性、「未来の風景が今の私を懐かしむ」と同時に「未来の私が今の風景を懐かしむ」という自己と風景の二重性、さらには時間の二重性が交錯している。「未来の風景が今の私を懐かしむ」とは、詩を詠んでいる現在の「私＝風景」が、すでに改変された未来の「私＝風景」を想像し、その未来の視点から現在を生きる「風景＝私」へと郷愁を向けるという、反転的な動きを指している。この想像は、月に対してのみ向けられたものではない。私が小学生の頃、湯船に浸かりながら「十年後には、今という時間も一瞬に感じられるのだろうか」とふと疑問を抱いた経験に由来している。当時の私は、その時間への問いからタイムマシンを作りたいという夢を抱き、やがて宇宙を研究したいと願うようになった。未来から現在をまなざすというこの動きが、月の未来から現在を眺める姿勢へと結びついたのは、偶然ではない。「不可能」なものを重ね合わせる現実の矛盾を引き受け、結びつけようとするところにこそ、人間の詩的な意味は生まれるのであり、その「不可能性」を抱え続けることこそが、詩として現実を生成し続ける動きなのである。

Bruner(2003)は、「二重の景観（dual landscape）」という概念を提示し、人が出来事を理解する際には「行為の景観（landscape of action）」と「意識の景観（landscape of consciousness）」という二つの層が同時に働いていることを指摘した。すなわち、地球・今・自己としての現実としての「行為の景観」を生きると同時に、月・未来・風景としての想像による「意識の景観」を生きているのである。このとき、現実と想像はいずれも主体にとっては、実際に生きられた出来事としてのアクチュアルな経験なのである。詩の一つの特徴として、現実と想像のあいだを主体がどのように生きているのかをラディカルに示すことがある。現実に存在するもの（A）と、想像上の別のもの（B）とを結びつける行為――すなわち「A としての B」あるいは「B である A」を生み出すメタファー的な運動――が、身体を前進させる感覚（carry forward；Gendlin, 1995）を生み出すとき、それは「詩的運動」と呼びうる。詩的運動とは、主体によって感じられる複数の経験の断片を意図的に引き出し、それらを重ね合わせることによって、新たな意味感覚を生成する総合の行為であるといえる。

ここで重要なのは、現実の「この経験（A）」と想像の「あの経験（B）」とのあいだに生じるギャップである。現実と想像は本来的に異質であり、いかに想像を現実に近づけようとしても、そのリアリティを完全に再現することはできない。たとえば、月に立つ自分自身を、地球上で経験することは不可能であり、未来と現在も同時に経験できない。しかし、この異質性こそが、「今・ここにないもの」へと向かい続けようとする「あがき」を生む。その到達不可能性を引き受け、それでもなお近づこうとする運動のうちに、詩の創造性がある。

おわりに

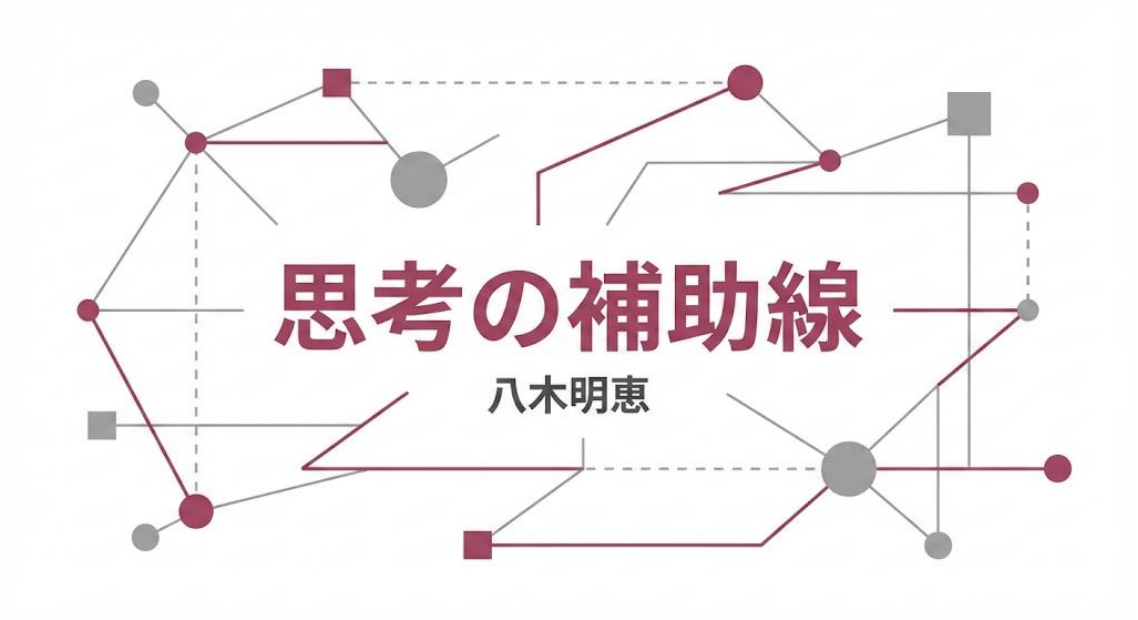
本稿では、前回に引き続き、連載第 2 回の詩「第二の皮膚」の解題を行った。詩を解説することは、本来、鑑賞を読み手に委ねるという詩のあり方と緊張関係にある行為でもある。しかし本稿では、詩的創造／想像の過程をあえて言語化し、辿り直すことによって、当時私の内に立ち現れていた「詩的な世界」の輪郭を描き出すことを試みた。冒頭の作品は、同じ詩を題材として制作したものである。素材としては、スマートフォンの基盤部分（かつて私の「手」とともにあったもの)、月の象徴としての革の銀面（表面）を漉いたもの、そして手元にあった溶岩（アクアリウム用）などをブリコラージュしている。「地球、月という日常性」の感覚を少しでも喚起できれば幸いである。

引用文献

Bruner, J. S. (2003). *Making stories: Law, literature, life*. Harvard University Press. (邦訳『ストーリーの心理学：法・文学・生をむすぶ』)

Gendlin, E. T. (1995) Crossing and dipping: Some terms for approaching the interface between natural understanding and logical formulation. *Minds and Machines*, 5, 547-560.

松浦寿輝. (1984) 無音の声の物語（3 詩はいかにして可能か）,現代思想 1984 年 12 月号, p.255-265.



第１回：年末の灯油と、思考の補助線

私は二十年以上、福祉の現場に関わってきた。
振り返れば、「楽しかった」という記憶よりも、「苦しかった」「しんどかった」と感じた場面の方が多いかもしれない。
現場では常に判断が求められる。
新人であっても、肩書きを持って現場に立つ以上、一定の方向づけを迫られる。アセスメントを行い、持ち帰り、上席者に報告し、次の方針を確認する――そのような体制が整っている職場もある。しかし、必ずしもすべての現場がそうとは限らない。私自身、相談相手が十分にいない状況の中で、孤独な判断をせざるを得ない時期があった。

振り返れば、私の仕事は決断の場面の連続だった。
それは職務上の場面に限らない。生活のさまざまな局面でも、最終的に決めることの重さは常につきまとっていた。福祉の職場では「見立てをし、判断を重ねる」ことを徹底して教え込まれる。記録一つをとっても、そこには判断の跡が残る。適切な判断ができる人は信頼を集める。その環境の中で、私はどこかで「迷いなくスマートに判断できる人間になりたい」と願っていたのだと思う。

やがて年齢を重ね、今度は部下の決断を支える立場になった。主体は部下にありながら、最終的な責任は自分が負う。その構造の中で、私は改めて思うようになった。職業人としての成長とは、無数の判断の場面を一つひとつ引き受けていくことなのだと。
そうした積み重ねの先に、ある出来事があった。

ある年の年末、一本の相談が寄せられた。
余命宣告を受けたという男性のことだった。
相談者は本人ではなく、同じボランティア活動に参加していた方である。

主訴は「灯油を運べない」という、ごく日常的で切実な困りごとだった。離婚後ひとりで暮らしており、頼れる家族も近隣との深い付き合いもない。大きな支援を求めているわけではない。ただ、寒い時期を越えるために限定的に助けてほしいという、控えめなＳＯＳだった。
制度を使う道はあった。介護保険の申請、暫定的なサービス導入。しかし、その日は仕事納めの夕方で、地域包括支援センターも翌日から休みに入る。動き出すには時間が足りなかった。
私は当時、個別支援の担当ではなく、地域づくりやボランティアセンターの立場にあった。職務としてどこまで関わるのか。直接支援に踏み込むことはできない。しかし、何もしないという選択も現実的ではない。
関係機関に相談をしても、年末という時間的制約の中では動きようがない。中途半端に私が動けば、年明けにかえって混乱を生む可能性もある。
判断は、どこにも預けられなかった。
最終的に私は、ボランティアの方々の意向を確認しながら、困ったときには連絡を受ける受け皿になるという立場をとった。できる範囲での見守りを続けていただき、急変時には救急要請を躊躇しないことを共有する。年末年始を何とか乗り切り、年明けに公的機関が再び動き始めてから制度的な手続きを進めた。
結果として大きな混乱は起こらなかった。
しかし、あのとき私が抱えていたのは、「何が正しいか」という問い以上に、立場・制度・時間・人間関係を同時に引き受ける重さだった。

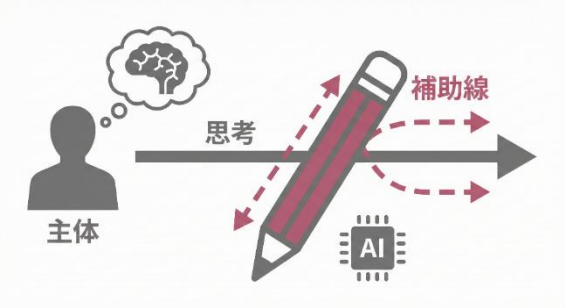
あの出来事は、特別に劇的なケースだったわけではない。制度を越えた大きな社会問題でもない。
しかし、私にとっては「判断の置き場」がどこにもない時間だった。
福祉の仕事は、制度の内側で完結することばかりではない。制度に乗る前の相談、制度からこぼれ落ちる状況、時間的制約の中で判断を迫られる場面。
そうした局面では、最終的に個人の判断に委ねられる部分が少なくない。会議を開けば解決するわけでもない。関係機関に相談しても、常に判断を共有できるとは限らない。
ときに判断は、形式的な合議の背後で、個人の内側に落ちてくる。
マネジメントの立場にあればなおさらである。

主体は部下にあっても、責任は自分が負う。
相談を受けても、最終的な方向づけは自分が引き受ける。そうした構造の中で、私たちは日々判断を重ねている。
それは、常に何かを背負い続ける構造でもある。背負っていることに気づかないまま、背負い続けることもある。

あの年末の出来事を振り返ると、私が求めていたのは「正解」ではなかったのだと思う。
何が正しいかを即座に示してくれる存在ではなく、立場、制度、時間、人間関係といった複数の要素を一度並べ直し、自分の思考の輪郭をはっきりさせる時間だった。
判断は最終的に自分が引き受ける。その構造は変わらない。

しかし、そこに至るまでの思考の過程を、誰かと対話しながら整理できたなら、あの重さは少し違ったものになっていたかもしれない。

近年、生成 AI という技術が急速に広がっている。
私は現在、その活用を伝える立場にもいる。
とはいえ、AI が関係機関との調整を担うわけではないし、責任を引き受けてくれるわけでもない。
けれども、思考を可視化し、自分の中で混線している論点を整理する「補助線」としてなら、
一定の役割を果たし得るのではないかと考えるようになった。
それは判断を委ねることではない。最終的に自分が背負うための準備を整えることに近い。



判断を背負う構造は、これからも変わらないだろう。
けれども、思考の過程まで孤立させる必要はないのではないか。
自分の考えを保ちながら、外に一度並べ直す方法はあるのか。
次回は、その可能性について、もう少し具体的に考えてみたい。

編集後記

編集長（ダン　シロウ）

世界中がこんなにやりたい放題になるなんて想像できなかった。「ミッション・インポッシブル」みたいなことは映画だからやっているとどこかで思いたがっていた。なのにもっと酷いことを得意げに吹聴したり、遂行する人間が世の中にこんなにいっぱい居るなんて。そしてそれをまともに反論する覚悟も持たない、世渡り政治家達。

幸せな時代に吹き込まれた世界への基本的な信頼がベースの脳天気爺（私です）は、嫌な不安を抱えながら、それでも何とかなっていって欲しいと希望をつぶやき、自分にできることがある業界で、許される間頑張ろうと思う。

人類が終わってしまわなければ、歴史は大波小波の巾を様々なヴァリエーションで展開しながら続く。ということは、まさかこんな・・・と思うような事が、これからも繰り広げられてゆくのだろう。

己の歳を考えると、もう長期の観察者にはなれないのかもしれない。心残りはあるがお先にと旅立つ事になるのも承知しながら、久米宏さんや筑紫哲也さんは、昨今のトランプ・ニュースを語りたかっただろうかなんて思った。

第64号とは発刊16年目が完了したことになる。新しい執筆者も登場。もうお一方も次号からとエントリーされている。マガジン原稿は査読や検閲のようなことはしない。執筆者の自由を旨に続いている。

しかし何でも書きたい放題なのではない。昨今のyoutubeを見ながら思うのだが、小市民の軽率な「発信し放題」が世間に溢れている。それを十分浸透させておいて、金も手間もかけた大規模な自画自賛が目的的に侵入してきている。

批判的な発言は誰かが不快だと言ったら、即炎上、バッシングの対象にされる。そこでは事実関係の吟味など重視されない。

昔、「声の大きい奴が勝つのはけしからん」と批判していた状況が、そんな言い方も許さず、多数派を形成し、選挙結果にまで届く。

繰り返しになるが、こんな世の中が来るとは思わなかった。そんな時だから、出来ることをしておこうと思う。

編集員（チバ　アキオ）

対人援助マガジン執筆者の岡崎正明さんをゲストに『自分史・家族史づくりがもたらす、相互理解とケアのかたち～援助職がムスコとして味わった物語～』と題して、対人援助学会第35回（通算59回）研究会 研究会の予定 ｜ 対人援助学会 ヒューマンサービスを科学するを2026年1月23日（金）にオンラインで行いました。対人援助学マガジンで長年連載をしている岡崎さんは、2025年2月『なにくそ！ライゾウさん ～僕のオヤジの負けない物語～』（ぞうさん出版）なにくそ!ライゾウさん: 僕のオヤジの負けない物語 - ZOUSAN BOOKS ぞうさん出版を父親の磊造さんと共著で出版されました。対人援助職として長年臨床に関わってきた岡崎さんは、この本の執筆と出版を通して、経験したこと、そしてその影響等について対人援助職の視点からも話してくださいました。その中で、印象的だったのは、出版社さんとの出会いや著者としての動きです。出版社さんは、本が豊かになるようアイディアをくださって、なおかつその出版社さんの代表のキャラクターもクッキリ。その姿で、著者と一緒に様々なところで表に出てくれていました。また、書いた人が直接書店に出向き、書店に目立つように並べてもらった工夫、その並んだ事実がマスコミにまた取り上げられる…。こうして、本の魅力が伝わり、広がっていく様子もわかりました。それとともに、家族と一緒に自分たちの歩みを題材に共同作業をする価値も改めて感じました。

対人援助学マガジンについて、私もあちこちで話題にして話すようにしています。誰でも読めるし、学会員は連載もできる。そして、連載仲間もできる。先日、講師として会場に行くと、対人援助学マガジンをプリントアウトして準備してくれていることもありました。マガジンの連載が単著の出版につながったり、入試問題に使われたり、授業の資料として用いられたりとたくさんの前例もすでにあり、今後の可能性も尽きませ

ん。対人援助学マガジンをみなさまも楽しんでくださいね。そして、対人援助学会研究会でもお待ちしています。

編集員(オオタニ　タカシ)

私の PC で「対人援助学マガジン」と検索すると、なぜか毎回 2022 年の 51 号が一番上に表示されます。その 51 号の編集後記は、編集長の『突然のウクライナ侵攻からずいぶん時間が経ってしまった…』という書き出しから始まります。あれからもう 4 年。状況は落ち着くどころか、世界はますます「まさか」が通じない混沌の中にあります。権力者が本音を隠さなくなり、それで開き直ってしまえば、最低限の議論も成り立たなくなります。交渉の手札になり得るのは武力なり、財力なり、ともかくシンプルに「パワー」ということなのでしょうか。AI によるフェイク画像や動画の氾濫もあり、何が真実なのかもわからなくなり、真実かどうかさえも重要ではなくなってしまったように感じます。そんな中で、日々の営みを続け、ことばを紡いでいくことに、何か徒労感に似た感覚を覚えそうになる時もあります。私たち一市民には、政治や国際紛争に直接介入するような力はありません。ですが、少なくとも自分が何をするかだけは、まだ決めることができます。そんなことを考えながら原稿を書いていると、執筆者の皆さんからの原稿がいつも通りに届きます。同じように日々の営みを続ける人がいる。そのことに励まされながら、今回も編集作業を進めています。

対人援助学マガジン

通巻64号

第16巻　第4号

２０２６年３月１５日発行

http://humanservices.jp/

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

第65号は2026年06月15日

発刊の予定です。

原稿締切2026年05月25日！

執筆希望者、常に募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

ページ制限なしの連載誌です。必要な回数、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。執筆資格は学会員であること。　現在非会員で書いていただく事になった方には、本誌は学会ニュースレターの位置づけですので、対人援助学会への入会をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&fAX学会専用　06-6910-0103

表紙の言葉

前号に続いて、「木陰の物語」に登場する、様々な男性が一堂に会した大判のポスターの原画です。こんな登場人物達の物語を月刊誌に描き続けて第 313 回、27 年目に突入しました。生きてる間は描いているのでしょうね、多分。

２０２６／３／１５